

「黒社会」の巨頭杜月笙の総合的研究

—— 1920～50年代 ——

水町誠司

目次 (1)

序章	(3)
第1節 先行研究の整理と史料の説明	(3)
第2節 各章の構成と内容	(7)
第3節 1900年代から20年代前半における上海の状況	(12)
第1章 杜月笙と上海四・一二クーデター	(17)
はじめに	(17)
第1節 杜月笙と四・一二クーデターに至るまでの状況	(18)
第2節 杜月笙と四・一二クーデターの実態	(21)
第3節 『申報』記事から見る杜月笙の動向	(22)
第4節 杜月笙が入手した各種利権	(27)
おわりに	(28)
第2章 杜月笙と祖廟—落成式を巡って—	(30)
はじめに	(30)
第1節 祖廟の建設と杜月笙の目的	(31)
第2節 落成式の事前準備	(32)
第3節 落成式の推移とその参列者	(34)
第4節 落成式とその後の影響	(39)
おわりに	(41)
第3章 杜月笙と高級社交クラブ恒社の実態—人脈の形成—	(44)
はじめに	(44)
第1節 恒社の成立とその目的	(45)
第2節 恒社の発展とその特色	(52)
第3節 恒社の衰退とその影響	(56)
おわりに	(59)
第4章 杜月笙の慈善活動とその特色—黄金榮、張嘯林らとの関係—	(62)

はじめに	(6 2)
第1節 平時における慈善活動	(6 3)
第2節 災害時における慈善活動	(6 6)
第3節 戦災における慈善活動	(7 1)
おわりに	(7 4)
第5章 杜月笙の「表」と「裏」の経済活動—中滙銀行、三鑫公司など—	(7 9)
はじめに	(7 9)
第1節 杜月笙の経済活動の特徴	(8 0)
第2節 杜月笙の要職とその権限	(8 2)
第3節 杜月笙の「黒社会」における活動	(8 4)
第4節 杜月笙と労働紛争	(8 9)
おわりに	(9 1)
第6章 杜月笙及び「上海黒社会」と日中戦争	(9 2)
はじめに	(9 2)
第1節 日中戦争時期における杜月笙の軍事取引	(9 6)
1. 上海での軍事取引—蒋介石率いる国民党との関連—	(9 6)
2. 香港での軍事取引—重慶国民政府と日本傀儡政権との関連—	(9 9)
3. 重慶での軍事取引—重慶国民政府、日本軍、汪精衛政権との関連—	(1 0 2)
第2節 日中戦争時期における黄金栄	(1 0 5)
第3節 日中戦争時期における張嘯林	(1 0 7)
1. 張嘯林の日中戦争時期の行動	(1 0 7)
2. 『申報』に見る張嘯林の暗殺事件報道と暗殺事件の影響	(1 0 8)
おわりに	(1 1 2)
第7章 杜月笙と日中戦争後における動向	(1 1 6)
はじめに	(1 1 6)
第1節 日中戦争勝利後における杜月笙の活動	(1 1 7)
第2節 国共内戦における杜月笙・黄金栄の活動	(1 1 9)
第3節 中華人民共和国成立後における杜月笙・黄金栄の活動	(1 2 2)
おわりに	(1 2 7)
終章	(1 2 7)
注	(1 3 1)
史料・研究書・論文・その他参考文献	(1 6 3)

序章

第1節 先行研究の整理と史料の説明

杜月笙¹に関する著述は中国にて論文や伝記類などが数多く存在しており、その数は同じく「上海三大亨」である黄金榮²、張嘯林³のものよりも多い。また、杜月笙と関係の深い蔣介石⁴や戴笠⁵に関する著述も多数存在しており、杜月笙の周辺人物の先行研究も豊富に存在している。ただし、日本においては青幫や秘密結社に付随して研究されることはあるが、杜月笙自身を中心とした研究は管見の限り存在しない。そのため、第1節では中国側の研究にて、特に重要だと考えたものを複数挙げる。①章君毅著『杜月笙傳』（中国大百科全書出版社、2011年、原本は1967-1969年刊）は、杜月笙の生涯について、非常に細かく記された伝記である。目次から内容を把握することが難しく、該当する年代の記述を探ることが難しいが、杜月笙の動向に関しては詳しい。また、黄金榮や張嘯林の記述も決して分量は多くないものの存在する。四・一二クーデターにおける活動の詳細や、杜月笙の祖廟の落成式など、事件や大きな出来事に関しては特に詳しい。一方で日中戦争時期に関しては、杜月笙の活躍が大きく扱っているが、蔣介石や戴笠、孔祥熙といった政治勢力との関係の記述が少なく、その存在も希薄なものとなっている。ただし、張嘯林の活動や暗殺については、杜月笙と直接関係のある部分についてはある程度の内容が存在する。しかし、『杜月笙傳』は研究というよりは伝記としての側面が非常に強く、引用も記載していないため、その部分は割引く必要がある。本論文で使用した『杜月笙傳』は再発行された復刊本である。原本は1967年から1969年にかけて出版された傳記文學出版社の『杜月笙傳』（全4冊）であるが、原本が入手できなかったため今回は復刊本の方を使用した。原本は杜月笙に関する伝記において、劉洪『杜月笙論』（出版社不明、発行年も1942年頃と曖昧）などの豆本を除けば最も古いものの1つであると考えられる。

②徐鏞成著『杜月笙正伝』（浙江人民出版社、1982年）は章君毅著『杜月笙傳』と同じく杜月笙の生涯を綴った伝記である。『杜月笙傳』に比べ『杜月笙正伝』の方が分量は少ないものの、杜月笙を語る視点や、扱う角度などが大きく異なっている箇所が見受けられる。例として、杜月笙と日本軍との関係性が『杜月笙傳』では取引の推移やその内容を淡々と書いた印象である。一方で『杜月笙正伝』では杜月笙と日本軍との関係を1章分に渡って扱っており、その内容の大半は杜月笙の動向ではなく、道路整備などで間接的に取引に携わった著者の体験談である。体験談の内容は、杜月笙が当時日本軍と取引を何度も行うため、著者は道路の整備を行い交通の便を改善する業務を行っていた。そして、杜月笙が日本軍とパイプを持ち、それを活用して戦局を動かそうとしていることや、取引によって大きな利益を上げていることを、当時から知っていたとしている。つまり、杜月笙と日本軍の取引及びその目的や実態について、一般にもある程度知れ渡っていたことが理解できる。ただし、最も肝心であろう杜月笙そのものに関する記述はやや少ない。こちらも伝記類であり、引用は記載していないため、そこは割引いて考える必要がある。

③中国人民政治協商會議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』（上海人民出版社、1986年）は上海黒社会にて杜月笙、黄金荣、張嘯林、張仁奎などに関する回顧録を中心に扱った史料集である。呉正芳「在革命工作中運用幫会關係的片段資料」程錫文口述、楊展成整理「我当黄金荣管家的見聞」黄振世口述、何国涛整理「我所知道的黄金荣」范紹增口述、沈醉整理、「関于杜月笙」郭蘭馨「杜月笙与恒社」などの回顧録を収録している。その他、恒社の社章や、1934年当時の恒社の社員一覧を付録として掲載している。これらの回顧録は、どのようにして杜月笙や黄金荣らと知り合ったのか、使用人の活動はどのようなものであったのかなど、当事者でなければ知りえない情報が数多く含まれており、重要な史料となっている。ただし、記憶から当時のことを思い出して口述しているためか、回顧録ごとに一部内容が食い違う部分が出てきていた。一例としては、黄金荣がいつフランス租界の警官になった時期についてであるが、郷波『黄金荣事略』では1892年、程錫文口述、楊展成整理「我当黄金荣管家的見聞」では1900年となっている。回顧録としての限界は残るものの、貴重な史料となっている。

④郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』（河南人民出版社、1991年）では、主に上海租界における黒社会の出来事を数多く網羅している。その中に、杜月笙の祖廟の落成式に関する記述として、祖廟の構造、贈られてきた贈答品、落成式の実行委員会の人員、落成式開催中の儀式内容などが存在している。実行委員会の人員は総理が虞洽卿、王曉籟、黄金荣の3人で、協理が張嘯林、金廷蓀、郭祖純、蔡琴蓀、胡詠菜、兪葉封、李応生の7人であったとしている。ただし、贈答品の箇所などは章君毅著『杜月笙傳』と一字一句同じであり盗用が認められる。これは盗用自体の問題に加え、『杜月笙傳』を無批判に受け入れたという事でもある。著者自身が何も検証していない部分が存在することも含め、この部分は非常に残念である。また上海租界において、1930年代に黒社会の人物が相次いで伝統にとらわれず、自身がトップとなる組織を成立させた。その中でも、特に大きな勢力を持った組織として恒社を取り挙げている。恒社は名目上法人であり政治団体であったが、本質的には上海の名士による社交クラブであり、賭博や舞台、宴会などを行っていたとしている。また、日中戦争後の恒社について、社員数の増加など、勢力拡大を行ったとして肯定的な評価を下している。ただし、あくまで上海における黒社会を取り扱う内容の著作であるため、香港、重慶における恒社の活動については取り扱いが一切存在しておらず、杜月笙に関する記述はぶつ切りにされた感が否めない。

⑤Brian G.Martin「青幫和国民党政権：杜月笙对上海政治的作用（1927—1937）」（『歴史研究』1992年第5期、10月）では、青幫と国民党の關係性、特に杜月笙と国民党政権との關係性および取引を取り上げている。基本的に杜月笙は自身が黒社会の人物である、ということを念頭において行動したと指摘している。杜月笙が上海での政治に関わった事例が複数扱っており、その1つとして四・一二クーデター以前において、国共両党が青幫の勢力を重要視しており、自身の陣営に引き入れようとした事例がある。特に重要視していたのが杜月笙・黄金荣・張嘯林の3人であり、国共両党はそれぞれと面会していた。そして、杜月笙を含め青幫の勢力が国民党側についた大きな原因の1つとしては、杜月笙らは

アヘンの売買によって得られる利益を重要視しており、国民党の方がその利益をきちんと保証してくれると考えたという。ただし、肝心なアヘンの売買による利益を優先した、とされる根拠がやや乏しく、思想的な面は一切記述していないため、その後の杜月笙の政界進出の面などで疑問が残る。その他にも、杜月笙が政治に関わった事例として恒社の存在を挙げている。恒社とは、杜月笙が勢力を拡大するために作られた組織であり、杜月笙個人のために存在する組織であったとしている。そして、恒社によって杜月笙個人が手に入れた利益を中心に扱った一方、恒社がどれだけの政治的な影響力を持っていたのか、具体的な政治の関わり方やその内容などは、具体例に乏しくどうしても曖昧な部分が残る。

⑥邵雍「杜月笙与上海抗日救亡運動」(『抗日戦争研究』2000年第2期、6月)は、杜月笙の抗日活動を中心に研究した論文であり、第一次上海事変から終戦までの杜月笙の活動を記述している。杜月笙を熱心な抗日活動家として評価し、日中戦争期における杜月笙の行動について、上海から香港、重慶に滞在した期間の行動を取り上げている。第二次上海事変を中心に、戦災にあった難民、その中でも負傷した難民に対し臨時の病院を開いて受け入れる、といった記述も存在する。また、杜月笙が個人で1万元以上もの軍事物資を張發奎に輸送したことや、香港にて中国紅十字会の副会長に就任し、杜月笙の関わった組織名やその役職名などを記載している。一方で、戦時中の杜月笙の関係として重要である、汪精衛政権や日本軍との交渉や取引といった内容は1頁ほどに留まり、分量不足の面が否めない。また1945年に杜月笙を中心として行われた、重慶の金価格を大幅に引き上げてその差額で利益を得た金スキャンダルなど、抗日活動とは真逆に見える活動については言及しておらず、物事の見方が偏っている部分が存在する。

⑦顧建娣「杜月笙的救済行為淺議(1927—1936)——以《申報》為中心」『中国社会科学院近代史所青年學術論壇2004年卷』(社科文献出版社、2005年版、6月)は、1927年から1936年にかけての杜月笙の慈善活動を扱っており、杜月笙が行った最初の慈善活動は1922年後半に、浙江省の水害が発生した際の救済活動だとしている。この時に300元大洋を寄付したことをはじめ、具体的な寄付金額や綿の服の上下セット3000着といった支援物資、一部分ではあるが被災した人数などを記している。そして、多額の寄付金をどこから捻出したのかについて、賭博場の経営や娼館に対する「みかじめ料」で手に入れた、と述べている。しかし、史料の限界からかその部分の詳細がなく、具体的に乏しく不明瞭な部分が存在する。また、杜月笙の落成式についても『申報』を史料に記述しており、落成式後の杜月笙の慈善事業や就いた役職名について解説している。具体的には1931年の落成式後に、杜月笙の慈善事業が最も増えたため取り上げたというものであり、特に中国紅十字会時疫医院や上海孤児院などで慈善活動を行っていた、と指摘している。ただし、顧建娣自身も論文内で述べているが、これは基本的に『申報』のみから抜粋している上、広告宣伝として出された数字である。そのため、慈善活動の全容はやや不明瞭な部分が残る、寄付金額も広告以外からは読み取ることができない。

また、拙稿として、「上海における杜月笙と祖廟」『文研会紀要』第27号、2016年や、同「第二次上海事変における張嘯林暗殺事件——『申報』の報道からの分析——」(『文研会

紀要』第28号、2017年3月)、「上海黒社会と日中戦争——杜月笙・黄金栄・張嘯林との関係を巡って——」(『文研会紀要』第29号、2018年3月)、「杜月笙と上海四・一二クーデター——『申報』の記事からのアプローチ——」(『政治経済史學』第625号、2019年1月)、「杜月笙と恒社——杜月笙と「表社会」、政治との関係——」(『文研会紀要』第31号、2020年3月)、「一九二七年——一九四九年における杜月笙の軍事関係の取引——国民党・汪精衛政権・日本軍・共産党員との関係——」(『政治経済史學』第644号、2020年8月)、「杜月笙の慈善活動——無頼活動との対比と融合の考察——」(『文研会紀要』第32号、2021年3月)が挙げられる。これらによって、1920年代後半から50年代初頭までの杜月笙の動向、影響力、および彼の活動の意義と限界について明らかにする。

本論文の基本史料としては主に1892年から1949年まで刊行されていた上海最大手の新聞である『申報』を使用した。杜月笙が用意した提灯記事の側面があり、それは割引いて考える必要があるものの、当時報道された史料となっている。なお後述するが、杜月笙は文字の読み書きが苦手であり杜月笙自身の日記や直筆の史料が存在していない。また、補佐的に上海で刊行されていた大手の新聞である『時報』も使用している。こちらは杜月笙との関わりが薄く、杜月笙に関する記事が少ないため補佐的に使用した。それと並び重要視したものが、前述した回顧録である中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』である。当時報道されなかった裏側の事情が垣間見えるため、記憶違いや話の食い違いを除けば重要な史料である。その他、国立公文書館であるアジア歴史資料センターにて公開されている、戦前戦中の日本における外務省や陸軍の史料を使用した。当時の日本も杜月笙の動向をある程度追っており、杜月笙と日本側の動向を探るうえで重要な史料となっている。

上記の先行研究、参考文献にて不足している部分で本論文が明らかにすることは、第1章では四・一二クーデターにおける『申報』の報道に関して、実行犯である杜月笙、黄金栄、張嘯林がどのように報道され、どのような関係性を持ち読者にどのような印象を与えようとしたか。第2章では杜月笙の祖廟の落成式について、『申報』がどのような報道をどれだけの頻度で行ったか、また参加者の具体的な隊列や演目、そして杜月笙が完成させた祖廟をどのように使用していたか。第3章では、恒社について成立から活動停止までの変遷や、その活動内容の実態、恒社社員の動向や影響力、恒社の規模はどのようなものか。第4章では、部分的な研究が中心であった杜月笙の慈善活動について、寄付金額などの具体的な数字や慈善活動の内容を具体的に網羅し、活動内容の詳細はどのようなものであったか。第5章では、杜月笙の経済活動にて表側の経済活動の特徴や、史料が乏しく研究が進んでいない裏側の黒社会における活動にて、その代表例となるアヘンと賭博関係の詳細はどのようなものか。第6章では、日中戦争時期における杜月笙、黄金栄、張嘯林の活動について、『申報』や回顧録、各種伝記類、日本側の史料を使用しできる限り具体的に迫り、杜月笙が本当に国民党的ナショナリストなのか、黄金栄が本当に灰色漢奸なのか、張嘯林が本当に漢奸であったのか。第7章では、杜月笙及び黄金栄の晩年について、そしてできる限りその詳細に迫り、晩年の政治的な動向について、国民党側だけでなく共産党側とも関係を持っていたことを

具体的に解明する。

第2節 各章の構成

本論文は全7章構成であり、その他に目次や序章、終章や参考文献が含まれる。序章では先行研究や参考文献の動向整理、史料の説明、各章の構成、杜月笙が活躍する以前の上海の状況について、主に1900年代から1920年代半ばにかけて取り上げる。青幫の解説や黄金栄、張嘯林の動向を扱う。

第1章の「杜月笙と四・一二クーデター」では1927年4月12日に発生した上海クーデター（四・一二クーデターともいわれる。以下、本論文では四・一二クーデターと記載する）に関して、実行犯である杜月笙の視点から取り扱う。特に、杜月笙らが国民党側について理由や計画などの事前準備、四・一二クーデターの実行、その後の推移や影響について述べる。1927年3月頃まで、杜月笙や黄金栄、張嘯林など青幫の勢力は国民党側、共産党側双方及び、上海で影響力を持つ直隸派の軍閥からもアプローチを受けていた。そして1927年3月22日、共産党はピケ隊を武装蜂起させ軍閥勢力を追放し、上海に自治政府を樹立して実効支配を行った。そして3月末から4月初めに杜月笙らは国民党の蔣介石、楊虎、陳群らと接触して関係を築くこととなった。その際に国民党側が共産党への不信感を持っていることを知らされ、また上海においても国民党の勢力が最も大きく将来も有望であり、アヘン取引などの利益も比較的容認しているという理由があったため、杜月笙ら青幫勢力は国民党側につくことにした。これは杜月笙だけでなく、黄金栄なども（張嘯林は軍閥を背後に付けていたこともあり最後まで迷っていたが）同様である。杜月笙らは武器供給など国民党の援助を受け、四・一二クーデターを実行し、上海から共産党を追い出し殲滅することを決定した。まずは四・一二クーデターの前日に、共産党員の若手のリーダー格であった汪寿華を暗殺した。計画は杜月笙、実行犯は張嘯林とされる。そして四・一二クーデター実行日に、杜月笙らは青幫の構成員を動員して、武装したピケ隊と化した共産党員に攻撃を行った。しかし、共産党員が籠城戦を行ったためこの攻撃は中々成果が上がらず、戦闘は膠着状態に陥った。その後、国民党の軍隊である国民革命軍が仲裁する体裁で介入し、青幫の構成員と共産党員双方から武器を回収した。共産党員は国民革命軍を味方だと思い武器を差し出したが、武器回収後に国民革命軍は改めて共産党員に対して鎮圧、弾圧を行った。その翌日に汪寿華の暗殺及び四・一二クーデターの実態解明を求め、共産党員や市民らが抗議デモを行った。そして、蔣介石はこの抗議デモも銃弾を使用して弾圧し、多数の死傷者が出ることとなった。上記の功績が認められ、杜月笙、黄金栄、張嘯林は蔣介石から陸軍少将などの地位を与えられた。その後数か月の間、杜月笙は度々寧波など他の地域で青幫の構成員を動員して、共産党員の弾圧に加担することになる。

第2章の「杜月笙と祖廟一落成式を巡って」では杜月笙が建設した自身の祖廟及び、完成記念として開催された落成式について取り扱う。この落成式を扱った理由として、杜月笙は祖廟の落成式を上海史上最大規模の祭典として開催しており、その結果杜月笙の名声が

全国区に広まったためである。例として、落成式開催後に各地域の黒社会の頭目が、各地域+の杜月笙（河北の杜月笙など）と呼ばれるようになっていく。そして、祖廟の落成式の成功により、杜月笙は影響力、各種利権、名声を大きく高め、上海において杜月笙は最も勢力のある存在の1人であると認知されるようになった。そのため、第2章の本題は祖廟そのものではなく、祖廟の落成式の方である。この落成式は、1931年6月9日から11日の3日間行われており、連日大盛況であったという。『申報』をはじめ、当時の各新聞が連日杜月笙の祖廟の落成式を記事にしており、日本など海外の新聞も記事を掲載したことから、メディアの注目度も高かったといえる。記念の扁額も多数送られており、上海の著名人に留まらず、中国各地の著名人や有力者、上海の総領事からも扁額が送られていた。また、祖廟のための祠堂記も中国各地から送られており、杜月笙の祖先が捏造された形で（夏王朝の貴族だった、老子を祖先に持つなど）記載している。演劇も落成式の開催時に多数行われており、中国各地から京劇の男優、女優が集まって演目を行っている。杜月笙はこれだけの大きな式典を開き人員を引きつけられる人物として、中国各地で注目される存在となったのである。ただし、杜月笙が1931年に故郷である浦東高橋鎮に祖廟を建設しようと考えた理由は定かではない。考えられる理由として、杜月笙は1930年頃よりその勢力が黄金栄、張嘯林を追い抜きつつあり、かつ黒社会以外の業界においても大きく活動し始めていた。そのため、このあたりで一度故郷に錦を飾ろうと考えた可能性がある。また、1929年から黄金栄の黄家花園の建設が開始されており、杜月笙も自らのための建造物が欲しくなった可能性もある。なお、祖廟は本来親類と共同で出資や建設を行うものであるが、杜月笙の祖廟の建設に関して親類は協力しておらず一切関わっていない。このことも、杜月笙の祖廟の特徴である。その理由として、杜月笙は親族と疎遠であったことが挙げられる。杜月笙の幼少期に父親が病死しており、同じく幼少期に母親と妹は行方不明、あるいは病死となっている（ただし、杜月笙の幼少期は諸説あり、不明確な部分が多い）。杜月笙は叔父に引き取られ養育されるがそりが合わず、14歳の頃上海租界の青果店に丁稚奉公へ行ったきり会っていなかった。そのため、杜月笙の祖廟の建設に親類は協力せず一切関わっていないのである。

第3章の「杜月笙と高級社交クラブ恒社の実態—一人脈の形成—」では杜月笙が自身の勢力を高めるための組織として「恒社」という表面上は政治団体、実際は高級社交クラブを設立したことを取り扱う。杜月笙は1932年後半に恒社の活動をスタートさせており、この段階では法人ではなくクラブ形式での集まりであった。1933年2月25日に杜月笙は恒社を正式に設立させ、フランス租界に政治団体として登記も行った。杜月笙は恒社のトップに収まり、黒社会以外の大物や名士と関係を次々と築き、自身の人脈や勢力を強めたのである。なお、恒社を名目上政治団体としたのは、杜月笙が政治の世界にも興味関心を抱いていたことと、杜月笙の門下である陸京士などの提案によるものである。そして、恒社を用いて政界にも杜月笙自身の影響力を拡大していくためである。また、杜月笙は青幫において最大の勢力を誇っていたものの、青幫の規則の関係上青幫のトップになることはできなかった。その一方で、杜月笙自身がトップとなる組織で物事を動かした方が、杜月笙個人の力だけで

物事を進めるよりも、より勢力や利益を伸ばせると考えていた。そこで杜月笙は、自身がトップになれる組織として恒社を設立することにしたのである。このような恒社の組織の方向性として、表面上は黒社会の秘密結社の系統ではなく、いわゆる「表社会」の上流階級が集う高級社交クラブとしての側面が強く存在した。そのため、活動内容としては政治的な会談も行っていったものの、一番の中心はアヘンの吸飲や京劇鑑賞、賭博行為が中心である。恒社の活動は仕事としてオンオフをわけたような形跡はあまり見られず、杜月笙個人の趣味趣向が強く反映されていた。さらに、恒社の設立により、杜月笙の名前や勢力、権益などに惹かれながらも青幫を敬遠していたような、表社会の有力者や名士を加入させ引き寄せることに成功している。そして、杜月笙は彼らと人脈を築くことにより、相互利益を得て政界や経済界など、上海各界により大きな影響力を有するようになった。恒社の活動の最盛期は1936年から1937年の第二次上海事変前までであった。ただし活動自体は、1949年に杜月笙が香港へ移動するまで行われていた。正式な解散は杜月笙の死後、1951年のことである。

第4章の「杜月笙の慈善活動とその特色—黄金栄、張嘯林らとの関係—」では、杜月笙が慈善活動に熱心であり、平時緊急時を問わず大金を寄付していたことを取り扱う。杜月笙が行った慈善活動に関して、どのようにして寄付金を集めたのか、慈善活動を熱心に行った理由、そのことによって得られた各種利権などについて述べる。杜月笙が慈善活動に熱心だった理由の1つは、清朝末期から中華民国期にかけて、黒社会の人物が表舞台に立つ際には慈善家を名乗ることが多かったためである。慈善家の肩書を得るためには、慈善活動を積極的に行う必要があったものの、それでも資本家や政治家、学者などに比べれば慈善家の肩書を得る難易度は低かった。そのため、杜月笙もそれにならい慈善活動を積極的に行っていた。ただし、杜月笙の場合は慈善活動に熱心だった理由がそれ以外にも存在した。杜月笙は黒社会の頭目だけに収まるつもりはなく、表側にも大々的に進出して成功を収め、各種利権や影響力を手に入れたい、と考えていた。また、慈善活動を積極的に行い、高額な大量の寄付を行うことで、上海の名士として名声を高めたいとも考えていた。さらに、杜月笙の故郷である浦東高橋鎮では医薬品や衣類の無償提供など、特に手厚い慈善活動を行っており、故郷へ錦を飾る思いもあったと考えられる。杜月笙の慈善活動における傾向であるが、平時の慈善活動では主に貧困救済に重点を置いていた。無償の病院や学校の設立や孤児院への寄付、医薬品や衣類の無償提供あるいは安価での販売、貧困者に対して毎月生活金の給付などを行っていた。これは、杜月笙の生活は黒社会で成功するまで貧困にあえいでいたため、貧困救済を中心に行っていたと考えられる。そして、災害時や戦時などの有事における慈善活動は、主に被災者の救済に重点を置いていた。この場合、杜月笙は個人での義捐金はもちろんのこと、チャリティーを主催して集まった金額や、街頭募金など集団で寄付を呼びかけて集まった金額も寄付している。また他の人物が立ち上げたチャリティーや慈善団体にも義捐金を送り、杜月笙自ら義捐金集めに協力するなどしている。これらの活動は杜月笙の義侠心から来るところも大きいですが、同時に上海の名士として地位や名声もより大きなものにしていった。

第5章の「杜月笙の「表」と「裏」の経済活動—中滙銀行、三鑫公司など—」では、杜月笙が行った経済活動に関して取り扱う。いわゆる「表社会」での経済活動だけに留まらず、杜月笙が頭目として活動している黒社会での経済活動も研究した。具体的に杜月笙がどのような経済活動を行っていたのか、経済活動によってどれだけの利益を得られたのかについて述べる。杜月笙は表側の経済活動において、黒社会で行っていたような荒事や法律的に問題がある行動は基本的には行っておらず、多くの場合まっとうな経済活動を行っていた。自身が設立した中滙銀行などではトップの役職である董事長となり、その他銀行や製粉、紡績、交通といった各種業界の企業に対しては、董事や理事などの重役となり問題発生時に解決する後ろ盾となっていた。また、上海にて労働紛争が発生した際に、杜月笙は積極的に仲介を買って出ており、労働紛争を多数解決した。しかし場合によっては、『申報』の董事長である史量才が蒋介石によって暗殺された後、蒋介石の意向によって杜月笙が『申報』の董事長として就任するなど、完全に清廉潔白であったわけではない。一方で、黒社会における経済活動については、頭角を現す前はスリなどの窃盗活動を行っていたが、黄金栄に重用されてからは三鑫公司などでアヘンの運搬や売買、181号にて賭博場の管理や経営といった活動を行っていた。杜月笙は黒社会において、基本的には闘争的な荒事よりも、アヘンの取引や賭博場での経営活動を積極的に行っていた。武闘派のような抗争にこだわる姿勢は存在せず、大きな利益が存在するならば法律やモラルを厭わず活動する、といったスタンスであった。時には四・一二クーデターのように青幫の構成員を大勢動員し、共産党員を弾圧することもあったが、杜月笙にとってはあくまで各種利権を手に入れるための一手段に過ぎなかった。これは、杜月笙が青幫の構成員であったことが大きな原因である。上海の黒社会にて、青幫と紅幫の二大勢力が存在していたが、青幫は上記の杜月笙のような裏側のビジネス活動を積極的に行い、紅幫は武力闘争のような荒事を積極的に行う傾向が存在していた。杜月笙は青幫に加入していたため、活動内容も青幫の流れに沿うものになったと考えられる。このような表裏両方の活動により、杜月笙は租界を含め上海全域に多大な影響力を行使できたのである。

第6章の「杜月笙及び「上海黒社会」と日中戦争」では、杜月笙をはじめ黄金栄、張嘯林ら「上海三大亨」が日中戦争時期にどのような活動を行っていたのかを取り扱う。日中戦争時期には蒋介石率いる国民党、共産党、汪精衛政権をはじめとした日本の傀儡政権が存在していたが、杜月笙、黄金栄、張嘯林がこれらの内どの勢力と関係を築き、どれだけの影響力を保持し、手に入れた各種利権の種類や規模について述べる。第6章は文面が長くなってしまったが、これは日中戦争時期における杜月笙、黄金栄、張嘯林の動向が極めて重要だと考えた結果である。杜月笙は基本的には蒋介石が率いる国民政府側についており、蒋介石の命を受けて暗殺指示を出す、密約を暴露するといったフィクサーの部分が存在した。ただし、完全に蒋介石側に付き従っていたわけではなく、ある程度の距離を保っており、1937年の上海陥落後は重慶には移動せずあえて香港に移動していた。そして、太平洋戦争が勃発し、香港が陥落する直前の1941年末まで香港に滞在しており、それから重慶へと移動した。

また、周仏海を通じて汪精衛側ともある程度連絡を取り合っており、杜月笙が汪精衛側に寝返るのではないかと周仏海に思わせるほどには関係を築いていた。また、杜月笙が重慶に滞在していた1943年頃に綿花など不足物資を入手するため、日本軍とも複数回にわたり物資交換の取引を行うといった関係を築いていた。黄金栄は日中戦争時期には既に高齢で隠居気味であり、上海に留まっていた。これに関して黄金栄は、政治的な物事に積極的に関わる気がなく、人生のほとんどを上海で過ごしており単純に上海を離れたくなかったことも、重慶に移動せず上海に留まった大きな要因である。黄金栄の活動としては、自身の部下を維新政府や汪精衛政権側の役職につけ、蒋介石側と日本傀儡政権側双方に入手した情報を裏流し、戦闘で負傷した共産党員を自宅に匿うといった活動は存在する。しかし、黄金栄自身がいずれかの勢力に付き従うことは最後までなかった。政治的な思想で動いた形跡はあまり見受けられず、バランス感覚を持ち勢力の温存を考えて行動していた。張嘯林は1930年代より蒋介石と不仲であったこと、日本側の方が自身に利益をもたらすと考え、傀儡政権側について上海で活動していた。実際に、傀儡政権側や日本軍は張嘯林を重用して取り立てており、例として1939年に張嘯林を浙江省の省長に任命している。また、杜月笙が上海を脱出した後、張嘯林がその後釜として杜月笙が就任していた役職に次々と就任したとされる。ただし、蒋介石や戴笠が張嘯林暗殺の指示を杜月笙に出し、杜月笙が張嘯林を暗殺するため部下を送り込んだ結果、張嘯林は1940年8月に暗殺された。張嘯林は部下を買収され、裏切られた形で暗殺されている。

第7章の「杜月笙と日中戦争後における動向」では、日中戦争以降の杜月笙と黄金栄が行っていた活動について具体的に取り扱う。日中戦争以降における杜月笙と黄金栄の勢力や影響力の大きさや、それらが時代の流れによってどのように変化していったのかについて述べる。また、国共内戦に対する関係性や、第二次上海解放後の中華人民共和国に対する関わり方、晩年の動向や生活状況についても多岐にわたり述べている。杜月笙は日中戦争が中国の勝利で終わった後上海へと戻ったが、その勢力や影響力は衰え始めていた。理由として蒋介石から冷遇され関係が悪化していたことと、1946年に門弟であった戴笠が飛行機事故で亡くなったことや、租界が消滅したため外国人の人数や勢力、影響力が大幅に少なくなっているなどが挙げられる。杜月笙がより勢力や影響力を手にするための後ろ盾がなくなった上に、日中戦争により8年近く上海から離れていた間に、上海における杜月笙の対抗勢力が勢力や影響力を手にしてきたことも、杜月笙の勢力が衰え始めた理由の1つである。黄金栄も高齢のためか先見の明や精彩を欠いており、勢力や影響力は杜月笙よりも早い時期、1920年代後半から1930年代にかけて徐々に落ち始めていた。日中戦争時期や日中戦争後も勢力や影響力の回復には至らず、共産党による上海解放後は財産の大部分を接収され、大世界などにおける役職や経営権も接収された。さらに、黒社会での利益追求活動も厳しく制限されたため、晩年の黄金栄は質素に暮らすこととなった。ただし、体調はさほど悪くなかったためか、共産党の指示でかつて所有していた大世界の前で掃き掃除をさせられる、長文の自白書を書かされ新聞に掲載されるといった活動を行っている。杜月笙は上

海解放直前に香港へと移住したものの、病気による体調悪化で活動が制限されあまり表舞台には姿を現さなくなった。また、上海の地盤が完全になくなったことで（上海における財産や各種利権は共産党に全て没収された）利益や権益が大幅に減少しており、毎月の収支は赤字となっていた。香港における青幫勢力が一時的に活発となるなど、影響力が消滅したわけではなかったが、1951年に杜月笙が亡くなると青幫の勢力も衰え、台湾を除き1950年代半ばには消滅したと考えられる。

そして終章では、本論文にて明らかになったことの総括を行う。杜月笙はどのような活動を行い、どのような権益や利益、勢力を得て、上海や中国、また日本軍に対してどのような影響を与えたのか、その総括を行う。また、杜月笙という人物やその活動の意義と限界及び今後の展望や課題、その歴史的な位置づけを述べる。

第3節 1900年代から20年代前半までの上海の状況

1900年代は中華民国期ではなく清朝末期であるが、この時期の上海では黄金栄が頭角を現していた。黄金栄は1892年にフランス租界が初の華人警官を募集しており、その際に巡捕（警官）として採用された⁶。また、1900年に行われた2回目の華人警官の募集に応募して警官になったという説も存在する⁷。共同租界においてはインド人警官、フランス租界においてはベトナム人警官を中心に雇われていたが、上海語を含めた中国語がわからない者が多く、租界の地理に不慣れなものも多かったことから取り締まりに手を焼いていた。その状況を打開するため、時期としては遅くなったものの、ようやく地元の上海人を募集して警官にしたのであった⁸。それと同時に青幫の構成員でもあり、黒社会の大物としてアヘン売買や運搬などに大いに関わっていた。当然、警察と青幫はある種の癒着関係にあった（警官の中にも青幫の構成員が複数在籍しており、公然の秘密であった）。黄金栄は青幫の部下（警官ではなく街中にある無頼の部下）にわざと事件を発生させ、それを取り締まることで手柄や実績を挙げていった。事件の具体的な内容や場所、日時、そして事件の取り締まり方や、取り締まった後の手続きや身柄の解放など、全て黄金栄が指示して活動を行っていたと考えられる⁹。

1910年代には、杜月笙が徐々に頭角を現し始め、張嘯林も上海へと移住して勢力を伸ばしていった。この時期の張嘯林の動向については諸説あるが、その中の一説としてやがて張嘯林はアヘンの運搬と販売の権利を巡り、杜月笙や黄金栄をバックに持つ金廷蓀と対立するも和解した、という説が存在する¹⁰。その他にも、張嘯林の友人である李雲卿の紹介により黄金栄と意気投合して関係を築いた説や¹¹、上海黒社会にて勢力を拡大していく中で杜月笙と知り合い、意気投合して関係を築いた説も存在する¹²。そうして勢力を拡大した張嘯林は、杜月笙、黄金栄と共に「上海三大亨」と呼ばれることとなる。1918年には、杜月笙が董事長を務める三鑫会社の総経理となり、後に副董事長に就任する。三鑫会社はフランス租界のアヘンの売買を行い、その運搬を独占する存在であった¹³。業務の比重としては、租界当局が関わり大きな利益を得ているアヘンの売買よりも、租界当局から求められたア

ヘンの運搬を引き受ける方の比重が大きかった。内容は、10%ほどの手数料でアヘンを安全に運搬できるというものであった。やがて、同業者である共同租界の沈杏山とアヘン運送の利権を巡り対立するも、これに勝利し上海全域のアヘン運送の利権を手にするようになった。この利益は租界当局や軍閥勢力などに還元されていた¹⁴。

また、黄金栄は自身の門下である徐福生の紹介により孫文と関係を築いていた。1920年6月に孫文は、黄金栄の勢力に革命の協力を要請するため黄金栄宅を訪れており、黄金栄も協力を約束している¹⁵。また1920年代には、黄金栄は経済的に苦境に陥った蒋介石の面倒を見ることもあった¹⁶。その他、黄金栄は1923年にフランス租界にてフランス人司教が誘拐された際にも、青幫の情報網を使い居場所と犯人を特定し、無事に解決するなどの活動を行っていた¹⁷。なお、黄金栄は元々正式に青幫に加入する儀式を行っておらず、師もいない「空子」であり自身は「天」の字輩を名乗っていた。しかし、後年に「大」の字輩を持つ張仁奎に2万銀貨を支払い特別に門下となったことにより、加入儀式は執り行えなかったものの「通」の字輩を手に入れることとなった。ただし黄金栄は張仁奎とはほぼ同期であり、黄金栄自身も「大」の字牌を正式な儀式を行ったうえで手に入れたかったのだが、青幫の長老に規則上それはできないと断られている¹⁸。

次に杜月笙の幼少期の概略を説明する。杜月笙の幼少期は貧困であった。理由は両親ともに幼少期に病気によって亡くなった、あるいは行方不明になったためである。杜月笙の幼少期は諸説存在し、どのようなものであったのか漠然とした部分が存在する¹⁹。杜月笙は叔父に預けられるも仲は悪く、祖母の計らいで14歳の頃に上海租界の青果店に行き働き始める。1900年代前半のことである²⁰。青果店を辞めた後、青幫へと加入していたが、生活は極貧であり、スリやかっぱらいといった街頭での窃盗を行い、生計を立てていたとされる。そのような生活をおそらく20代前半まで送っていたが、1910年代初頭に黄金栄に使用人として採用され信任を得たことから、黒社会で頭角を現すようになっていった²¹。例として、共同租界を地盤とした黒社会の頭目であった沈杏山に対抗したことが挙げられる。沈杏山配下の組織で、アヘン取引の集団である大八股党を妨害するため、杜月笙は小八股党を結成して大八股党に襲撃をかけるなどの活動を行っていた²²。また、黄金栄がフランス租界にて所有していた賭博場である公興倶楽部の管理を杜月笙に任せるなど、信頼も厚かったようである²³。

また、上記の生い立ちからか杜月笙は文字の読み書きが苦手であり、大人になってから再び勉強したとされる²⁴。一部の伝記では、幼少期に半年ほどしか学校へと通えていなかったとされ、読み書きが苦手であった²⁵。そのため、手紙や新聞などの文章は秘書に代読代筆させていたとされている（大人になってから文字の読み書きを勉強した場合、子供の時に読み書きを習得するのに比べ、脳の問題があり難易度は上がる。さらに、日本語や中国語などの漢字を使用する言語において、外国人が外国語として習得する際は、漢字の読み書きが難しく苦勞することが多い。杜月笙においても同様であったと考えられる）。

次に張嘯林であるが、前述の通り、杜月笙や黄金栄とは1910年代前半に関係を築いている。そして、1920年代から30年代にかけて、上海三大亨と呼ばれる1人であり、黒社会での活動を行っていた。前述のとおり、張嘯林は黒社会での活動を積極的に行っており、その行動も多岐にわたっているが『申報』など当時の新聞にそういった記事は管見の限り存在していない。これらの新聞記事には、上海の有力者、名士として活動したという記事が多くを占めている²⁶。その一方で、張嘯林や杜月笙の伝記では黒社会で活動しているという内容が非常に多く見受けられる²⁷。つまり、現役で活動していた時から現在に至るまで、中国をはじめ全国各地における張嘯林の評価はマフィアの大家で上海三大亨と呼ばれているが、当時の新聞記事など公の場でそのことを明言するのは憚られる、というものであった。

ただし、張嘯林は上海出身ではなく、浙江省出身であり、黒社会の人物として当初は浙江省で活動していた。上海には1912年に移住しており、諸説あるもののその後杜月笙や黄金栄らと関係を持ち始めた²⁸。そして、1921年に発生した黄金栄誘拐事件の際に、張嘯林は杜月笙と協力して黄金栄の釈放に奔走し、無事に解決した。その結果、黄金栄、張嘯林、杜月笙の3人は義兄弟の関係を持つこととなった²⁹。そのためか、第5章にて扱う三鑫公司の名前の由来に張嘯林は入っておらず（三鑫公司が設立されたのは1918年頃。黄金栄の金、杜月笙の号である杜鏞、金廷蓀の金の3つの金の名前の由来）、設立当初の段階において張嘯林はまだ、黄金栄や杜月笙とある程度距離を置いていた可能性があった。

次に、青幫の説明を行う。周知のごとく青幫とは元々、明代の正徳年間（1506－1521）に成立した船乗りの同業者団体である。しかし太平天国の乱により、大運河での活動がほぼ不可能となり、主に上海周辺へと上陸した。その際に大量の浮浪者、無頼が加わり、黒社会に存在する秘密結社へと生まれ変わる³⁰。上海における青幫は都市型の秘密結社であった。上海に出現した近代都市を中心に発展しており、血縁ではなく義兄弟関係や疑似親族関係を持って繋がりを持っていた³¹。青幫には字輩という、どの時代に青幫へと加入したのかを表す制度があり、黄金栄や張嘯林の字輩である「通」は上から数えて22代目の字輩であり、杜月笙の字輩である「悟」は23代目の字輩である³²。

時代が下り民国時代には、伝統的な字輩制度から実力のある個人が門下生を採る制度へと改められていった。青幫では、老頭子が複雑な手続きを取り徒弟を収める「開香堂」から、手続きを簡略化した「送帖子」の方式を取るようになった³³。ただし、あくまで手続きを簡略化しただけであり、やはり青幫の構成員の紹介が必要なことに変わりはない。そのため、杜月笙は自身が組織した「恒社」によって、国民党幹部や新興ブルジョワジー、文化人を取り込むことにした³⁴。また、黄金栄は1930年代に恒社の影響を受けて「忠信社」を設立しており、日中戦争後には「栄社」という組織を設立している。この栄社は、日中戦争時代に活動停止した忠信社を改名し改めて設立した組織である。忠信社、栄社共に、メンバーは黄金栄がヘッドハンティングして集めていた。なお、張嘯林にはこのような組織は見られなかった。その他、張仁奎も「仁社」という同様の組織を設立しており、その規模も杜月笙の恒社ほどではないものの200人以上の社員数を誇っていたという³⁵。

なお、青幫には「十大規則」という最も重要な規則があり、これを破ったものは斬殺してもよいことになっていた³⁶。しかし、1番目の規則である「師を欺かず祖を滅せず」や2番目の「先輩を軽蔑すべからず」、3番目の「幫規を攪乱すべからず」、6番目の「引水帯線すべからず」、7番目の「奸窃邪淫すべからず」については杜月笙や黄金榮、張嘯林やあるいは蔣介石が忠実に守っていたわけではない³⁷。清末以降は実力主義の傾向が強まり、自身より上の字輩や親分格に伺いを立てないことは珍しくない。その他、青幫の構成員が警察と深く関わることや、スリやかっぱらいなどの窃盗や娼館経営を行うこともよく見られる。前述したように、杜月笙も10代後半から20代前半まではスリやかっぱらいといった窃盗行為で生計を立てており、事実上、この規則は形骸化していた。したがって、杜月笙や黄金榮が、独自の組織を作ったことは自然の流れといえよう³⁸。その他、黒社会という名称であるが、これはアヘンを取り扱う組織に対してアヘンが黒いから、という理由で黒幫と呼ばれたことに由来している。つまり黒社会の黒はアヘンの色から来ている³⁹。

最後に、青幫全体としては特段政治的な思想や傾向は存在していなかった。杜月笙は陣営としては重慶国民政府側につき抗日活動を行う一方で、張嘯林は日本傀儡政権や日本側について活動を行っていた。また、天津にも青幫が存在していたが、上海の青幫とはある程度異なり基本的に日本側について協力している⁴⁰。青幫は政治的には投機的に動く傾向が存在し、「大」字輩の徐宝山は辛亥革命後に清朝側の招聘に応じ、袁世凱の実質的な配下として活動を行っていた。徐宝山は揚州の淮揚地区にある種の独立王国を築き、袁世凱から25万元を手に入れ、国民党の武器弾薬を強奪するなどの活動を行っている。最終的に1913年、国民党員で青幫の「大」字輩である陳其美の指示により、黄金榮や杜月笙が実行犯となり徐宝山は爆殺された⁴¹。

そして、民国時代の上海の状況、街の特色についても述べる。ただし、上海という街は多岐に渡って書くべきことが存在する街であるため、ここでは社会情勢と事件などの出来事、文化的な出来事を取り上げる。まずは上海及びその周辺の社会情勢であるが、支配する勢力が次々と変化していた。イギリス租界（1845年11月）及びフランス租界（1849年4月）、アメリカ租界（1848年11月）は1840年代より登場し、イギリス租界とアメリカ租界が1863年9月に統合し共同租界が誕生した。そして租界を支配していたのは租界当局、つまり公董局でありその支配は100年近く続いていた⁴²。

一方で、租界以外の上海、華界においては清朝末期では清朝の統治下にあった。1911年武昌蜂起により辛亥革命が発生し、上海においても革命派が台頭した。しかし1913年3月に国民党の宋教仁、1916年5月に元国民党員で中華革命党の陳其美、10月にはかつて中国同盟会に参加していた黄興といった指導層が上海で暗殺された。結果的に軍閥勢力（直隸派、奉天派、安徽派）が台頭し始める。1919年10月には孫文が中国国民党の党総部を上海に置いた。1924年に江浙戦争が発生し、齊燮元・孫傳芳軍が盧永祥・何豊林軍を撃破して上海に駐留。1925年7月には奉天派が上海に駐留するが、10月には孫傳芳が奉天派を追放して再び上海へと駐留した⁴³。

次に民国時代の上海で起こった社会的な出来事について述べる。1912年1月に上海を覆っていた呉城城壁の撤去が始まり、2年後に完了した。1920年10月に中国人納税人会議を結成し、共同租界に要求を出した結果、翌1921年5月には工部局に中国人諮問機関と華人顧問委員会が設立された。1925年5月には五・三〇事件が発生し、杜月笙や汪寿華、虞洽卿などが解決に乗り出している。共産党の影響が強い上海総工会も結成された⁴⁴。

最後に少々長くなるが、民国時代の上海における経済的、文化的な出来事について述べる。1912年に榮宗敬が近代中国最大の民間製粉工場である福新麵粉公司を設立した。同年、黄楚九と経潤三が新新舞台屋上に上海最初の娯楽施設である樓外樓を開業する。1913年11月の共同租界にて、上海最初のトロリーバスが開通する。1915年9月に陳独秀が『青年雑誌』を創刊し、第2号から『新青年』に改名する。同年、黄楚九と経潤三が総合娯楽施設である新世界を設立した。1917年に黄楚九単独で、フランス租界に当時中国最大の総合娯楽施設である大世界を設立した。同年、上海における四大デパートの1つである先施公司（シンシア・デパート）が開店される。また、上海にて内山完造が内山書店を開業する。1918年9月に永安百貨公司の上海分公司（四大デパートの1つである永安デパート）を設立。開店時に上海最初のファッションショーが開催された。その他、日本資本により上海最初の証券取引所も設立された⁴⁵。

1920年7月に孫文や虞洽卿により、上海最初の中国資本の証券取引所である上海証券物品交易所を設立する。同年、中国最初のプラスチック工場である勝徳織造廠の賽珠部が設立された。1921年、上海最初の污水处理場である北区污水处理廠が建設され、1923年に稼働開始。1922年3月、映画監督の張石川らにより、中国最初の映画会社である明星影片公司が共同租界に設立される。同年8月、公利汽車公司が設立され、上海最初のバス路線が運行された。同年、一品香旅社が中国人経営施設として初めて社交ダンスパーティーを行った。1923年頃、中国人女性の間にはショートカットが流行する。1924年秋、中国最初の全国サッカー大会が上海中華運動場で開催された⁴⁶。

これらのことからわかるように、上海は近代中国において文化や経済の中心地であり、一大拠点であった。そして中国と外国とが入り混じる場所であり、杜月笙が台頭して大きな勢力を築く下地があった。

第1章 杜月笙と上海四・一二クーデター

はじめに

第1章では杜月笙と上海四・一二クーデター（以下、四・一二クーデター）の關係に焦点をあてる。杜月笙は四・一二クーデターにて主導的な役割を果たしており、蔣介石のために大きく貢献することによってその後の地盤固めを有利に進めていこうと考えていた。蔣介石は黄金栄と師弟關係を結び義弟となったため、黄金栄に対し恭しい態度を取っていた。杜月笙にとっては、自身の背後に蔣介石という存在をつけられると考えていたのであろう。張嘯林が軍閥を背後につけ大きな勢力を築いていたこともあり、杜月笙も軍閥を味方すれば、大きな利益と勢力を手に入れられると理解していた。そのため、各地の軍閥を破竹の勢いで制圧していた蔣介石を軍閥とみなし味方につけたかった。また、杜月笙は国共合作が上手くいっているものと考えていたが、実際は国民党側が中国共産党（以下、共産党）を見限り弾圧する予定であった。そのことを知った杜月笙は、蔣介石の指示により四・一二クーデターを実行し、共産党の弾圧を行った。一方で、杜月笙は寄付により病院や学校を作る、被災者の救援を行う、そして慈善団体や病院の院長、董事長といった役職に就任していた。黒社会の大物であり、蔣介石の命令で弾圧や暗殺を行う存在でもあるが、上海の名士としてのプライドも持ち合わせている。このように、大きく乖離しているようにも見える多面性が存在している。

杜月笙を中心に扱った先行研究、参考文献は多数存在するが、四・一二クーデターにおける杜月笙の動向を平板に網羅するだけであり、かつ実証主義に基づいたものは少ない。先行研究として、四・一二クーデターに関するものでは①蘇智良「上海流氓勢力与“四一二”政変」（『近代史研究』1988年第2期、4月）では上海の無頼が四・一二クーデターにてどのような役割を果たしたかを記述しており、杜月笙も大きく関わっているとす。一方で流氓勢力の事前準備に文章の大半を割いており、肝心の四・一二クーデターに関する内容は少なく、概要のみとなっている。②顧建娣・林齊樸「杜月笙和上海工運」（『安慶師範學院學報』第21卷第1期、2002年1月）では、五・三〇事件および四・一二クーデターを二本柱で論じ、五・三〇事件で杜月笙の愛国人士としての活動に焦点を当てて、汪寿華との關係を重視して書いている。杜月笙は四・一二クーデター以前から、国共兩党にアプローチされておりその影響力の大きさが伺える。ただ、全体として文章が少なく、どのように汪寿華を殺害したか、どのように四・一二クーデターを実行していったかなどについて、あまり踏み込んではいない。③李長慶「論杜月笙在“四一二”政変前後的政治投机性」（『中外企業家』22号、2011年11月）では、杜月笙が四・一二クーデターにおける活動について、五・三〇事件にまで遡り取り扱っている。四・一二クーデターの際、杜月笙は蔣介石率いる国民党につき共産党の弾圧に乗り出したことに関して、杜月笙をはじめとした青幫そのものが結成当初の「義」よりも「利」を優先するようになっていたと強調する。しかしなぜ「義」よ

りも「利」を優先するようになったのか、その説明がなく結果論的であることは否めない⁴⁷。したがって、第1章では実証的に①なぜ杜月笙は国民党側につき四・一二クーデターを実行したのか、②杜月笙が四・一二クーデターにてどのような役割を果たしたか、③結果として杜月笙はどのような権益や利益を得たのか否か明らかにする。④その他、当時どのような報道がされていたのか、そこから窺い知る状況や雰囲気についても追及したい。

第1節 杜月笙と四・一二クーデターに至るまでの状況

四・一二クーデターが発生した1927年4月当時、上海は共産党が制圧していた。その共産党を、蒋介石の命により杜月笙たちが排除した。結果、上海における支配権は共産党から蒋介石側の国民党へと移ったため、クーデターと呼ばれている。四・一二クーデターが発生した当時、国民党と共産党は1924年より始まる第一次国共合作の最中であった。しかし、国民党右派では共産党を目の上の瘤だと考える者が多かった。国民党右派からすれば、共産党は国民党に協力する振りをしながら、実際には自身の勢力を拡大してばかりだと考えていたからである。また、共産党側が何かあるとすぐに労働者をかき集めてピケ隊を組織することにも不満が多かった。戦力不足からそうしている面もあるだろうが、不満を持つ労働者をあえて焚き付け国民党に反抗させようとしているのではないかとともに考えていた⁴⁸。そうしたわだかまりもあり、国民党は四・一二クーデターによって、上海から共産党の勢力を排除することにした。共産党は1926年10月と1927年2月にも上海で武装蜂起しており、1927年3月21日からの3度目の武装蜂起により、実際に軍閥を追い出すことに成功し、自治政府を設立して上海を占拠した。これを国民党が脅威に感じたことも、国共合作を解消しようとした遠因の1つであろう⁴⁹。

また、蒋介石は四・一二クーデター以前から黄金榮や虞洽卿⁵⁰と関係を築いており、このことが蒋介石率いる国民党が上海へと進出する足掛かりとなった。その関係のきっかけとして、蒋介石は辛亥革命後、孫文たちと同様不安定な立場となり経済面でも生活に困窮していた。上海交易所の職員を務めながら自らも投機を行っていたが、それほど得意ではなかった。1921年に発生した上海交易所の不景気により、投機に失敗し数千円の負債を負うことになる。そして虞洽卿の紹介によって黄金榮の元を訪れた蒋介石は、青幫の構成員である徐福生に取り次ぎ青幫に加入し、黄金榮の門下となって働いた。しかしその仕事ぶりは決して有能ではなく、最終的に孫文から召集が掛かったことを理由に孫文のもとに行くことにした。蒋介石は旅費にもこと欠いていたため、黄金榮は虞洽卿と共に旅費及び負債の肩代わり分を出している⁵¹。そして1926年の北伐開始後、蒋介石率いる北伐軍が各地の軍閥を傘下に収め、袁世凱の死後より続く、軍閥が割拠する時代に終止符を打った。1927年当時は軍閥割拠末期の状態であり、翌1928年に大体の軍閥を傘下に収めた。蒋介石は株式の投機や黒社会での活動は不得意であったが、中国の大部分をまとめ上げるなど軍人としては優秀であったことがわかる。

杜月笙は最終的に国民党側についたが、実は共産党とも関係を築いていた。その関係の始

まりとして、共産党員である汪寿華の名前が挙げられる⁵²。杜月笙と汪寿華は、1925年に発生した五・三〇事件の際に知り合い意気投合、問題解決で協力しあい仲の良い友人となった。汪寿華は五・三〇事件の際に指導者として活動した1人であり、その時関係を築いた杜月笙の門下となっている⁵³。汪寿華は共産党員として、主に上海を中心に活動しており、上海総工会の委員長や学生連合会の代表を務めていた。これらの組織の代表についての理由としては、学生連合会や上海総工会は共産党の影響が非常に強い組織であったことが挙げられる。

ただしデモ隊や労働者組織の活動はなくなったわけではない。前述の通り、1926年10月と1927年2月にも共産党が労働者などを組織して武装蜂起を起こし、1927年3月24日から3月末にかけては、80万もの労働者の武装ピケ隊が上海中を占拠した⁵⁴。この時虞洽卿が大きく動くことはなかったため、虞洽卿はデモ隊などを恐れる外国人に本気では味方をしておらず、あくまで自身の利益および利害を第一に考えていたといえよう。

なお『杜月笙正伝』には、3月21日に起こった周恩来による上海の占領は正しかった、という記述がある⁵⁵。杜月笙を主体に扱っているにも関わらず、杜月笙が協力した国民党側ではなく、弾圧された共産党側の方に立っている⁵⁶。それにも拘わらず、杜月笙らが四・一二クーデターで行った活動を批判する文章は見られない。中国本土にて発行された著作であるため、あまり国民党側に沿った文章だと無事に発行できなくなる、と考えた上でのバランス感覚であろう。このような事情があるためか、中国側で発行された杜月笙に関する書籍や論文は、基本的には多少の差はあるが弾圧された共産党側の立場に立っており、大きな批判こそないものの弾圧した杜月笙や国民党側に立つことはない。

この五・三〇事件以降、国民党、共産党は相次いで杜月笙・黄金榮・張嘯林を含む青幫の大御所と面会し、青幫側に自身の勢力につくよう要求していた。例えば杜月笙においては、国民党側からは蒋介石やその部下の陳群、楊虎が、共産党側からは汪寿華が相互に連絡を取り合い、協力を要請していた⁵⁷。杜月笙はしばらくの間、双方につかず離れずの対応を取っており、また地元の軍閥勢力も含めて秤にかけていた。杜月笙にとっては三つ巴の状況であり、事態が大きく変わることも予想されたため、自身の権益や利益が減らないよう振る舞う必要があった。そして熟考した後、国民党の勢力が一番強く、かつ自身の利益が一番かなうと考えた。はっきりと国民党側につくと決めたのは、陳群や楊虎から国共合作が上手くいっていないことを伝えられてからである⁵⁸。それまでは杜月笙も、国共両党は合作によって協力関係を築いていると信じており、国民党側についても共産党を見限ることまでは考えていなかった。また、青幫側は杜月笙らを含めアヘンの取引や売買を最も重要視しており、それがアヘンに対して厳しい姿勢を示す共産党ではなく、国民党側についての最大の理由の1つであったとされる⁵⁹。

四・一二クーデターにおける計画段階の出来事は、杜月笙関係の著作に多く見られる。杜月笙、黄金榮、張嘯林は実行犯の中心核であり、密接に計画を立てている場面が必要だからだ。流れとしては以下のようなになる。共産党による上海の占領の後、蒋介石は上海に入った。

そして黄金栄宅を訪れ、黄金栄に金の懐中時計を贈った。関係は親密なものであると互いに確認しあい、国民党側の味方になりそうだと確認した⁶⁰。後日蒋介石は杜月笙らの元に陳群、楊虎という軍人を派遣した。目的は国民党右派が考えている国共合作の実情を話し、杜月笙らに共産党を見限り国民党側につくよう促すことであった。その上で、共に四・一二クーデターの計画を練り、杜月笙らに実行犯として参加することを指示する目的があった⁶¹。この時黄金栄だけではなく、杜月笙らも引き込むことにした理由は①杜月笙は国共両党にパイプを持っており、かつ国共両方が上海の大物として杜月笙を味方に引き入れようとしていたこと、②国共合作は存在するが互いの勢力争いは既に起こっていたことが挙げられる。そのため、蒋介石と親密な黄金栄を味方に引き入れれば、その義弟で国共両党と関係を持つ杜月笙や、軍閥を背後につけている張嘯林も味方に引き入れられると考えた。国民党側も杜月笙の交友関係を理解していたため、共産党側の人員を寝返らせようと画策していた⁶²。そして、四・一二クーデターで国民党側につくことにした杜月笙らは、いくつかの指示を与えられる。①汪寿華ら共産党側の各種救援を断りつつ、②上海総工会の人員を可能な限り国民党側に引き抜いておくこと、③市民による武装化を急ぎ共産党側の武装ピケ隊に対抗することであり、そのための予算として50万円もの活動費が与えられた⁶³。そして、杜月笙は蒋介石に恩を売るため、友人である汪寿華を暗殺することに決めた⁶⁴。

ただし、このような状況にたどり着くまで一筋縄でいったわけではない。なぜならば、蒋介石率いる国民革命軍が上海へと進軍した際に、租界ではイギリスやフランスをはじめとした租界の連合軍が厳戒態勢を取っていたからである。国民革命軍が上海租界の中立を守るかどうかかわからず、軍事力を持って占領する可能性があるとして租界の外国人は考えていた⁶⁵。一方で、共産党側は国民党側に対して特に敵対行為を見せずに上海へと迎え入れた。4月に入ってから、蒋介石をはじめとした国民党の動きは怪しい部分もあったが、国共合作は維持されており自分たちを裏切ることはないだろうと周恩来はじめ共産党側は考えていた。そのため、国民革命軍は特に問題もなく上海へと進軍できたと考えられる。また、租界部分に進軍すると国際問題に発展する懸念があったため、進軍は行っていない。蒋介石や陳群、楊虎といった軍人が租界に入った程度に留まっており、租界側との対立は起きなかった⁶⁶。

国民革命軍を警戒し中立を守ろうとする一方で、租界の外国人は共産党には否定的な者が多かった。基本的に新興ブルジョワジーや下層の人間でも中国人を雇えるだけの余裕があるものが多く、こういった人々は思想的に共産党の躍進や勢力拡大を好ましく思っていなかった。一方で、白系ロシア人の多くは貧しい中国人と同程度かそれ以下の生活を送っていた。しかし、そもそもロシアの「赤化」を嫌って上海租界に流れ着いた者たちであったため、やはり共産党に対しては否定的である⁶⁷。共産党側が上海で勢力を伸ばした場合、租界における経済活動に支障が出ると考えていたためか、中国共産党に対する不信感が存在していた。このような外国人の思考は、外国人を後ろ盾の1つとしていた杜月笙などの人物に影響を与えていたと考えられる。このことも（国民革命軍もまた外国人に警戒されていたが）

青幫などの黒社会の秘密結社の多くが国民党側についた理由の1つであろう。

第2節 杜月笙と四・一二クーデターの実態

四・一二クーデターの実行の手始めとして、杜月笙は汪寿華の暗殺を行うことにした。まず初めに4月9日、杜月笙は部下である万墨林を汪寿華の所（当時上海総工会の所在地であった湖州会館）に行かせ、4月11日の夜8時に来てほしいと連絡をした⁶⁸。口上としては、杜月笙の邸宅で宴会を行い、その際に商談を行いたい、というもので、汪寿華も幫会との連携を希望していたことから、これを了承した。そして4月11日の夜に、汪寿華は杜月笙の邸宅へ自動車で向かったが、邸宅に車が着いたところで汪寿華は襲撃された⁶⁹。実行犯として汪寿華を殺害したのは、杜月笙の配下の数人である。実行犯たちは汪寿華を殴打した後袋詰めにし、自動車を走らせて上海郊外の雑木林の地中へと生き埋めにした⁷⁰。享年26歳であった。

四・一二クーデターはその名の通り、4月12日の夜に行われた。主に南市と閘北が中心となり、商務印書館を皮切りに、三山会館、東方図書館および印刷工場、潮州会館など各地で戦闘が発生した。なお、租界部分に軍隊を派兵すると国際的に反発を食う可能性が大きく、国共両党は租界にて軍事行為は行っていない。杜月笙たちは閘北、南市、滬西など各地に入り、共産党側の総指揮部となっていた商務印書館などを攻め落とした⁷¹。この戦闘では、当初共産党側が優位に進めていた。武装したピケ隊の労働者たちが建物にこもり、ライフルで相手を狙撃するといった籠城戦を行っている。対する国民党側は、国民革命軍を出撃させず、杜月笙たちが組織した中華共進会⁷²に任せきりであった。理由としては、国民革命軍の戦力を極力消耗させず、かつ国民党側が共産党側に対し「味方のふり」をして武装解除させるねらいがあった。杜月笙たち中華共進会は、どの場所においても正面突破で戦局を打開しようとしたが、被害が出るばかりで攻め落とせなかった。膠着状態に陥ったため、国民党側は頃合いを見計らって双方へ戦闘中止の指示を出した。共産党側は国民党側を味方だと思っていたため、指示に従い武装解除した。そして、国民党側が共産党側を一気に攻め立て制圧した。国民党側は、こうした謀略を取ったのである⁷³。結果、国共双方で100人以上の死傷者が出た⁷⁴。双方被害は大きかったが、四・一二クーデター自体は国民党側の勝利で終わった。

翌13日の正午に、四・一二クーデターにて国民革命軍がとった行動の責任追及及び実行犯の逮捕、逮捕された共産党員の即時釈放を要求する大規模な抗議デモが開かれた⁷⁵。そのデモ隊に対し、蒋介石は国民革命軍に発砲するよう命じ、銃撃された大勢の市民が犠牲となった。正確な死傷者数は不明であるが、100人以上が銃撃され殺害されたともいわれる⁷⁶。ここまでの強硬手段を取った理由としては、おそらく四・一二クーデター当日のように群衆が暴徒化すると考えたためであろう。

最終的に共産党は国民党による弾圧を逃れるために、4月中には大多数が上海を撤退することとなる。そして、蒋介石率いる国民党は『申報』などのメディアを用いて、プロパガ

ンダ活動により自身の正しさを強調し始めた。一方で、共産党に対する誹謗中傷も宣伝し始めた⁷⁷。ただし、少数の共産党員は国民党の権限が及ばない上海租界に留まり地下活動を続けていた。主に租界内に設立された各大学で活動を行っていたとされる⁷⁸。また、第5章で後述するが、四・一二クーデター後も1932年頃まで労働者に対して共産党は根強く影響力を持っていた。そして、1924年より続く第一次国共合作が正式に終了したのは1927年7月13日であるが、四・一二クーデターにてこの合作は事実上の崩壊を迎えた。

第3節 『申報』記事から見る杜月笙の動向

四・一二クーデターの実行後、『申報』⁷⁹より連日、4月16日から22日の間に、黄金栄が代表となり杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人が記事で扱われている。一見すると普通の記事のように見えるが、杜月笙は友人である史量才との関係を通じ、提灯記事を用意して新聞に掲載するよう依頼したと私は考えている。そのため『申報』においては杜月笙関係の記事が多数見受けられるも、『時報』などにおいては杜月笙関係の記事は少なくなっている。また『申報』は史量才がトップを務めていた時期は比較のリベラルな論調で知られ、国民党に関しては厳しい姿勢を示すことが多い。反面、共産党に関しても厳しい姿勢を示すことが多く、こと四・一二クーデターに関しての論調は非常に厳しいものがある。ただし詳しくは後述するが、酒井忠夫『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』においては、史量才は『申報』董事長就任時は比較的保守的な人物であり、満州事変以前、四・一二クーデターの頃は蔣介石を擁護することも多かったという。以下、記事の内容を抜粋する。

初めて黄金栄らの記事が掲載されたのは4月16日の『申報』である。「黄金栄等通電之応声」という記事であり、その内容は、淞滬小商民連合会・江浙電影院連合会・江蘇工党研究社・中華民治協進会・中国婦女同盟会・三民主義研究社などからの通電があった。国民党は蔣介石総理の三民主義を実行していたが、共産党は3月の戦勝に乗じて、国民党や蔣介石および三民主義を打倒しようとした。労働者名義で「ならず者」たちを集め、国際交渉を提起し、ストライキを起こし他人にも強要し、様々な職業がストライキやボイコットを起こした。しかし、これらの「反革命の共産分子」は、黄金栄・張嘯林・杜月笙の3人により打倒され、総工会も鎮圧し、各界が一致してこの3人を援助して共産党を肅清した。といった内容が書かれている⁸⁰。この記事に関しては御用新聞かのように、国民党側を持ち上げている。理由としては、杜月笙らが用意した提灯記事の類だからということもあるが、実はこの時期の『申報』はやや保守的ではあるものの確固たる政治的な思想は存在せず、風見鶏的な傾向や政治的な投機性が見られる、ということもあるだろう。史量才自身は保守的であったものの、四・一二クーデター以前まで『申報』の広告にて、共産党の影響が強い上海総工会の広告を連日掲載していたこともある。

4月17日には「黄金栄等警告工人書」と「黄金栄等真電応声之継起」という2つの記事が掲載された。「黄金栄等警告工人書」の方は、黄金栄・張嘯林・杜月笙の3人が労働者に広告を出した、という内容である。この3人が労働者の受難に心を痛め、社会の紛争を苦し

したため、損害を被った者に向けて「警告工人書」を10万部印刷して配った。この「警告工人書」の内容が記されており、そこには「我々の最も親愛なる男女の労働者、あなた方は現在政治的なペテンによる利害に遭遇しているが、これは共産党によるものである。共産党は国民党の裏で政治的な各種ペテン活動を行っており、既に幾千万もの金銭を我々からもらい受けて、かつ中国にて共産主義の宣伝を行っている。そしてあなた方を欺き騙して、かつ良好なる労働者を脅迫して、共産党に入党させて命令を聞かせている。共産党はあなた方の金銭と生命、あなた方の父母妻子を犠牲にして、一個人の代わりにあなた方の生活を養い、加えて給料を出した。ただし総工会の会費は除く。その上でいくらかの外貨をあなた方に出して、併せて工場が停止した日にち分よりも多く給料を出す。友人たちと喫茶、酒をたしなみ戯れる、小遣いよりも多く出し、そして労働者は生気を失っていき、好んで工場を停止させる事になる。このような状況に至ったのは、あなた方の生活から裏側から徐々に共産主義が忍び寄り、平民の生計を断とうとしているからである。これは「共産」ではなく「共死」であり、我々はことの仔細を想像する。我々の説話は、このことに気づいて集合した同志によるものであり、共産党に反対することに由来する。そして皆さんの被害を補償し、ある程度の生活の保障を行い、皆さんの工場の出力を引き出す。また、存在しない権利を想像せず、総工会の主任委員を立ててはならない。あなた方の努力によって手にするはずの賃金について、共産党の扇動により工場のストライキを起こした日数分を換算して、1日につき各人の給与銀元4角を出す。また、この一件で亡くなった者には各人をいつくしみ、銀元200元を出す。上海にて被害にあった人や地域は数知れず、犠牲になった労働者も少なくない。その被害は数千万もの銀元に換算され、あなた方労働者は1つ1つの仕事を手につかずパニックとなった。大きな欺きがこれにより近づいており、共産党が大きなペテンを裏側から徐々に仕掛けたことによるものであった。あなた方労働者がもし目覚めたのならば、共産党の欺瞞は一切不要として、我々側に立つことを希望するならば、各々の本分に按じて各々の業務を守るだろう。共産党による利用を不要とし、総工会ではなく「工会」の方こそ本当の労働者の組織であるとして、共産党による「暴徒」の指示を不要とするだろう。そうすれば現在の生活水準は高まっていき、あなた方の給料も自然に増えていき、資本人も増えていき、また良心を放り出さなくなる。あなた方の給料は自動的に増えて、雇用者側も労働者も両方が利益を手にして安泰である。そういった皆さんの幸福を我々は願う」というものであった⁸¹。この記事は、黄金榮らが発布した警告工人書の、宣伝用の記事であることが明確に理解できる。要するに工場の労働者に対して、状況に応じた金銭を出す、自分たちは労働者の敵ではなく味方である、という記事である。そして労働者に対し、共産党は我々の敵であり、こちら側につくように、という呼びかけも行われている。自身が上海の名士であり状況に心を痛めているというアピールをしつつも、共産党側の勢力を削り国民党側の勢力を増強しようという意図が垣間見える。

2つ目の記事である「黄金榮等真電応声之継起」には黄金榮・張嘯林・杜月笙の3人が各地で連絡を取り合っていた。看置できない事実である。1つ目は上海地滬同業会代表の張競

民、慈雨顧、馮牧淳、宋倬雲らに対し4月16日に電報を送ったという内容である。それによれば、この度の（黄金栄らの）活動は痛快である。共産党による流毒は、災いと惨劇を引き起こし、本当に耐えられない状況であった。迷惑な異端者は、力業を行ったことに懺悔し、革命者の配下となる。国民党や国家の前途によくない関係を築けば、その人は分担金も分け与えられず、敬われず同情されない、いう内容である⁸²。また、滬西三民主義研究社も4月16日に電報を送り、共産派はわが軍の戦勝時期を不意に利用し、「土匪流氓」を団結させ、秩序やルールを破壊した。むろん公私財産も没収して利用し、国民党の政治や軍を奪おうとしていた。共産党により、商人は破産して労働者は失業し、またデマを流すなどして社会を省みなかった。しかし俠士である黄金栄ら諸君が真っ先に相手を切り込み進んだ。彼らは三民主義を崇拝する信徒であり、全国各界の羨望を集めている、といった内容である⁸³。私見としては、清朝時代までの科挙官僚が好みそうな、大仰な物言いを意識した言葉の選び方である。四字熟語の乱発、文語的な単語が多く含まれるなど、前述の記事とは文体が大きく異なる。これが提灯記事であるならば、記事の執筆者は複数人いたことになるだろう。このような記事が連日掲載されており、杜月笙らが非常に『申報』を重視していたことが伺える。また、ここまでの記事を見てみると、国民党側を評価しながら自身を立派な人間だと評価をし、かつ共産党側に強い批判を行っていることが理解できる。

4月18日には「黄金栄等真電之応声」という記事が掲載された。黄金栄・張嘯林・杜月笙先生と始めの一文に書かれている。内容は、「赤化」の害に対し、血気が沸き上がり憤激し、必ず相手を撲殺せんと誓った。わが国民党や国家に対し、敬い称える電報を送った。我々は諸君の後ろ盾となり、剣を抜いて賊を殺し、火に湯をかけに行くほどの勢いで、退却することはない。その蹂躪が聞こえたならば共同で奮闘し、畏れない精神を持って悪党を滅する。謝雲飛、黄一儒、李葆福らが末文に名を連ねている⁸⁴。この記事は謝雲飛らが杜月笙らに対し注目して呼びかけを行っている。杜月笙らに対して、上海の大物が続々と関わっていることをアピールする目的があったと考えられる。そのようにアピールすることにより、杜月笙らは蒋介石や国民党に対して忠実に動く存在だとし、イメージの向上を図る狙いがあった。

4月20日にも18日と同じタイトルの記事が存在しているが、文末の人物名を除けば似た内容で反共的姿勢を明確にしている。その内容は、黄金栄・張嘯林・杜月笙の3人が、海応旅滬公民の張曾貽らの話を聞き入った。共産党が国に災いをもたらし、共産党は自身と異なる存在を排除し、政権に襲撃するために武器を略奪し、労働者を扇動し、国民のものを私物化している。社会の秩序をかく乱し、きわめて大きな惨禍を醸成した。すなわち我ら四億の同胞は、亡国奴の活動を恐れる。全国社団の協力を促し心と同じくして、一致して討論してほしい。「売国の共産分子」の陰謀を殲滅することに努め、これらの草を切り根を除くための働きをすれば、党国の前途は実利あるものとなる⁸⁵。また、南京蔣総司令中央執監委員会、各総指揮、各軍長、各師旅団營長、各政治部、各団体、各報館へ、国民革命軍蔣総司令の伝達を先ほど承った。後方には「共産分子」が政権転覆を企てており、秩序を乱し労働者を利用し、地方の治安を乱して四民は失業した。商売は成り立たず、人々は混沌に陥った。

亡国の危機が目前に迫った時、救国の義士である黄金栄・張嘯林・杜月笙らは毅然として通電し、情報を共有して、狂乱を打倒するため人民を水火から救い出した。黄金栄らは全国に響き応答し、多くの民衆が歓迎した。我らの苦勞は蔣総司令に報いるために行い、多くの熱血志士が犠牲となった。三民主義を実行し、建国の方向と大綱を持って総理の志を手伝う。海監旅滬公民の張曾貽らの名が文末に書かれている⁸⁶。この記事は黄金栄らを持ち上げるために書かれているが、それと同時に自分たちは蔣介石に報いるためにこのような行動を取った、決して訳のわからない黒社会の住人というわけでない、とアピールする目的もあった。ここまでの記事を見るに、杜月笙らが伝えたいこと、アピールしたいことは自分たちは国民党側の人間であること、また共産党側を敵としていること、そして自分たちのイメージの向上だということがわかる。

4月21日には、「□有黄金栄等通電之応声（□は不明字）」も同様な論調で書かれている。すなわち、上海共進会の黄金栄らは昨日陳丹夫と蔣逸士に会合した。黄金栄、張嘯林、杜月笙は優れた名声を承り、敬啓者である。昨日読先生らと電話し、共産党を討伐すべきで「赤化」に反対した。共産が災いをなし洪水のごとく赤化の害は遠くにおよび猛虎のごとく青年を誘惑する。労働者を脅迫し会社を乗っ取り、その営利を私的な目的に使用する。国民党に踏み入り、破壊かく乱の陰謀を行い行政や役人の拒絶にあい、地方機関の追放にあう。金銭を詐欺して集め、富豪たちを劣った存在と見なし、報復や怨恨を持ち革命に反対する。工場を扇動して主張に耳を傾けさせるも労働者の生活は顧みず、経済も弱体化する。といったことが書かれている⁸⁷。違いとしては、記事の大半は共産党に対する批判で占められており、国民党や蔣介石を評価した部分は存在していない。

4月22日の「黄金栄等真電応声之継起」という記事では、蘇州旅滬の商民である陳嘯九・呉松如・孫喜麟・李幼芳などから、21日に連名で黄金栄らの元に手紙が送られた。内容は、共産党と国民党の衝突は種々として苛烈である。商民たちは非常に活発になり、数日前に蘇州の工場で共産党の鼓動に立ち上がり、民衆の生活のよりどころがなくなった。この手紙の宣布は、この地域の官長が取り締まりを実行したのちに、この風潮が落ち着いたら邪なものを克服するという証拠にするため、この手紙を出して賛同を示した。といったものである⁸⁸。また、青浦旅滬協会からの手紙で、黄金栄、張嘯林、杜月笙諸先生に、よろこんで真電をだす。その名声を仰ぎ、多くの人々が志を持って城となして、盤石のようになって平安は作られる。感謝の意を申し上げる、青浦旅滬協会より。と掲載されている⁸⁹。共産党の「扇動」に踊らされた商工民が取り締まりの後に大人しくなった、私たちは努力をした立派な国民党側の人間だ、というアピールを行っている。記事自体は短いが、黄金栄らに対し非常に恭しく接する記事である。自分たちは上海の名士たちが恭しく接するほどの存在である、ということ伝えたかったのだと垣間見られる。

なお、これらの記事は『申報』では連日報道されていたが、『時報』など同時代の上海発行の新聞では、管見の限り同じ様な記事は見受けられない。杜月笙や黄金栄の名前が記された記事の題名は、四・一二クーデター時期には存在を確認できなかった。また、『申報』の

記事において、杜月笙らに対して中立的ではなく非常に好意的な文章であったことから、これらの記事はあくまで杜月笙側が用意した提灯記事という側面が強い、と考えられる。そのため、『申報』など史量才（杜月笙と個人的な関係が深く友人関係である）が経営する新聞には記事を掲載できたものの、『時報』など杜月笙とあまり関係がない新聞に対しては記事を掲載できなかった。つまり、杜月笙はこの時点では『時報』に対してそれほど影響力がなかったことが読み取れる。なお第2章で後述するが、1931年の杜月笙の祖廟落成式の記事において、『申報』と『時報』とで一字一句ほぼ同じ記事が掲載されており、このことから杜月笙側が提灯記事を用意していたと考えることができる。

これらの記事の傾向としては、①黄金栄らが上海各地の団体、人物から話を聞いて回っていた。②蒋介石や国民党を非常に持ち上げており、共産党を厳しく批判している。③杜月笙らが四・一二クーデターにて計画、実行したことの詳細は一切語られていない。④共産党に対する批判内容も抽象的なスローガンを繰り返しているようであり、具体的な例は一切出していない、といったことが挙げられる。また、細かいことではあるが、記事が異なっても、同一人物が行ったことに関しては記事の見出しが非常に似通っており、当然、記事の内容に関してもその多くが似通ったものである、ということが判明した。例えば、打倒共産主義、共産党が中国、国民党、蒋介石に災いをもたらす、共産党が農民や労働者を不幸にする、我々は三民主義の信奉者、といったことが強調されている。記事の内容は人物名以外似通ったものとなっており、黄金栄らの行動や記事の論調は変わらなかった。そのため、杜月笙たちの活躍は新聞記事では見落としがちとなり、杜月笙や黒社会を重点的に扱った研究でない限りは扱いが小さくなると思われる。その点は新聞史料の限界といえる。

また、『申報』の新聞記事において黄金栄等、あるいは黄金栄・張嘯林・杜月笙の名前の順番で並べられた理由だが、『杜月笙外傳』では、四・一二クーデター以前の杜月笙の勢力は黄金栄や張嘯林に次ぐ三番手の地位であった。しかし、それより後は積極的に国民党に取り入ることによってこの2人に並び立つ勢力を手にしたとある⁹⁰。つまり四・一二クーデターの段階では、势力的に黄金栄の方が杜月笙よりも大きかったため、新聞記事の題名が「黄金栄等」でくくられていたのである。それ以外にも、四・一二クーデターの記事に関して杜月笙が単独で動いた形跡がなく、常に黄金栄や張嘯林らが関わっていたことも（記事掲載そのものに関することは除く）、杜月笙の名前が記事の題名に存在しなかった原因であろう。

なお、『申報』の広告においては、杜月笙らの名前が出ているものは見受けられない。ただし、共産党側が打ったと思われる広告と、国民党側が打った広告の両方が掲載されていた。共産党による上海占領後、四・一二クーデター実行までは国民革命の反動派を打倒しようと呼びかける「打倒帝国主義 総政治部」や、「打倒 破壊国民革命的反動派 東路軍前敵総指揮部政治部」といった広告が大きく打たれていた。しかし、四・一二クーデター実行後は国民党を破壊する共産党の陰謀を打倒しようと呼びかける「擁護総理農工政策・打倒陰謀破壊国民党的共産党・上海工連総会」、「打倒 利用工会業財的共産党即為工人謀幸福 上海工会組織統一委員会佈」といった広告が大きく打たれることになる。国民党側は、共産党を批

判し自身を正当化する目的で広告を打っている。また、帝国主義打倒というスローガンは当時の列強諸国を刺激して関係悪化しかねない、と判断していた。さらには、『申報』に広告を出していた共産党が襲撃や弾圧をされ広告どころではなくなり、その際に国民党が大々的に広告を出し始めたことも、広告内容が大きく変わった要因であった⁹¹。杜月笙の名前が大々的に広告に出なかった理由についても、実態はともかくあくまで一番の中心は国民党であるとして、そこを差し置いて杜月笙の名前を前面に押し出すことは忖度して遠慮したのであろう。

そして、酒井忠夫『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』においては、『申報』及び史量才は政治的に保守的であり、政治批評も少なく、蒋介石南京国民政府の初期においては蒋介石擁護の立場を取っていたという。そして、満州事変以降は日本の帝国主義及び中国侵略に反発するようになり、第一次上海事変の際に巨額の義捐金を寄付した。しかし、上海市民地方維持会を設立した際杜月笙の推薦により、杜月笙の友人であり食客である黄炎培が秘書長に就任し、史量才の食客となった。そして、黄炎培は共産党員を『申報』などの事業に送り込み、『申報』における国民党の内外の政策に対し批判的な論調を強めさせた。同時に史量才にも影響を与えており、史量才は国民党や国民政府に対する批判を積極的に行うようになった。最終的に蒋介石の対日不抵抗政策、国民党による一党専制を批判しており、宋慶齡らが人権保障同盟を組織した際に活動を指示し蒋介石による政治の反対運動工作などを行った、とされる⁹²。つまり、『申報』が比較的反蒋介石で反日本帝国主義の傾向が強いのは、史量才や黄炎培の影響が大きいと考えられる。そのため、四・一二クーデターの時期は国民党批判や蒋介石批判を特段行っておらず、時の権力者に賛同し、友人である杜月笙の提灯記事を掲載する、といった活動を行っていたのである。

第4節 杜月笙が入手した各種利権

杜月笙は四・一二クーデターでの功績を認められ、6月10日、杜月笙は蒋介石から「陸海空軍総司令部顧問」「軍事委員会少将参議」「行政院参議」の肩書を与えられ、蒋介石の後ろ盾を得ることになった⁹³。これを契機に蒋介石と交友関係を深めていく。また、黄金栄、張嘯林にも同様の肩書を与えられており、四・一二クーデターにてこの3人が中心となり活動したことを表している。また、張嘯林は同年、上海フランス租界納税華人会会長にも就任した。1932年には上海華商紗布交易所監事に就任している⁹⁴。ただし、この肩書をもっとも有効活用したのは杜月笙であろう。その理由の1つとして、四・一二クーデターの功績によって手に入れた肩書や蒋介石という後ろ盾を足掛かりにして、杜月笙は政治の舞台にも進出していったことが挙げられる。そして杜月笙は1930年代に、上海黒社会にて最大の勢力を持つことになる。

このように、杜月笙にとって四・一二クーデターは黄金栄や張嘯林以上の勢力を築くきっかけとなる出来事であった。一方で黄金栄や張嘯林も、杜月笙と同様の地位と肩書を手に入れたため、杜月笙と同じように行動すればより大きな権益や勢力を手に入れられたはずで

ある。しかし、そうはならなかったことは興味深い。ここに杜月笙の特色が存在していよう。したがって、この四・一二クーデターは杜月笙にとって大きな権益を手に入れるための土台ともなった。ただし、これらの肩書は名目上のものであり、杜月笙らは実際に軍人として活動することはなかった。これは黄金栄、張嘯林も同様で軍人としては活動しておらず、あくまでも名誉としての肩書であった。四・一二クーデターから10年後に始まった日中戦争にて、杜月笙は蒋介石から情報提供、暗殺の指示を受けることはあったが、これは軍人として動いたのではない。あくまで黒社会のボスでありフィクサーとして、蒋介石の手先となって動いていた⁹⁵。杜月笙によるフィクサー活動がもっとも活発だったのは、杜月笙が香港へと移動していた時期である。その理由として、香港という地理やイギリスの租借地であったことから、維新政府や汪精衛政権⁹⁶の影響を逃れながらも、上海にある程度影響を及ぼせたことが大きな要因であろう。

また、四・一二クーデターはこの3人の行動を日中戦争時期に大きく分けたきっかけの1つでもあった。第6章で後述するが、杜月笙は国民党側、蒋介石側につき、黄金栄は老齢で上海に留まる必要もあってか国民党側とも汪精衛側ともつかず離れずの態度を貫き、張嘯林は蒋介石が自身に利益をもたらさないと考え大手を振って日本側、傀儡政権側につく、その要因の1つとなった出来事であった。さらには、この時共産党員に対して行った虐殺が遠因で中華人民共和国成立後、晩年の杜月笙と黄金栄の行動に大きく影を落とすこととなる。つまり、杜月笙は四・一二クーデターをきっかけとして大きな勢力を手にしたが、同時に共産党側に全面的に加担することはほぼ不可能となった。ただし第4章や第6章で後述するが、共産党本体とは別に、個別の共産党員とは四・一二クーデター後も関係を築くことはあり、場合によっては共産党員側を支援することはあった。互いに利用価値が完全に消失したわけではない、ということは認識していたのである。これは第7章で後述するが、最終的に杜月笙や黄金栄と、共産党との関係が改善されるのは、中華人民共和国が成立した以降であり、杜月笙や黄金栄の勢力が大きく衰えた晩年のことであった。

なお、国共両党は四・一二クーデターを機に再び敵対関係となった。これは両党に深く関わっている者だけではなく、日本に留学しており直接は党に関わり合いのない人間にも影響を及ぼしており、国民党か共産党かの二択を突きつけられたと感じる者もいたという。ただし、1927年当時ではまだ緩く連帯感を持っていた者も多くいたといわれている。特に、海外に留学している中国人留学生はその傾向が強かったとされる⁹⁷。この敵対関係が一時的に解消されるのは、1936年頃より再び国共合作を模索し始めた頃であった。

おわりに

第1章では、杜月笙の四・一二クーデターにおける活動を中心に見てきた。このことから以下の結論を導き出せる。第一に杜月笙が四・一二クーデターにて国民党側についた理由であるが、これは自身の利益に沿うかどうか、また蒋介石が黄金栄の義弟であり、黄金栄が積極的に蒋介石を支持したことが挙げられる。杜月笙は共産党の汪寿華ともつき合いがあ

り友人であったが、蔣介石率いる国民党が自身の利益に最も沿い、かつ将来最も有望だと考えていた。そのため杜月笙は四・一二クーデターにて国民党側についたのである。

第二に、杜月笙が四・一二クーデターにてどのような活動を行ったのか。これは国民党と共謀して計画段階から深く関わっており、かつ実行犯として青幫の構成員を集め中華共進会を組織したことが挙げられる。楊虎や陳群といった国民革命軍の軍人と計画に携わっており、国民党から軍資金を得て武器の購入、青幫からも人員を集めた。そして実行犯として四・一二クーデターを行い、多数の共産党員や武装した労働者を殺害した。杜月笙は四・一二クーデターにて中心的な役割を担っていたことは間違いない。

第三に、杜月笙が四・一二クーデターを行うことで手に入れた利益や権益は、蔣介石や国民党という後ろ盾を得たこと、肩書だけとはいえ軍人という表舞台の地位を得たことで成功した。そして、そのことを足掛かりとして、上海の表舞台や政治の舞台に進出できたことが挙げられる。そして、第3章及び第4章で後述するが、上海の名士として病院の董事長に就任し経済的な支援を行う、農民向けの学校を建設し運営するといった慈善活動を行うことや、恒社という政治団体を組織し、上海の表舞台で第一線の人物たちを集め、主に上海における政策や経済界の動向を密談していた。

第四に、杜月笙・黄金榮・張嘯林の3人が『申報』をはじめとしたメディアを使ってプロパガンダを行っていたことである。四・一二クーデターに関する新聞記事は、比較的蔣介石側にとって都合の良い内容であり、共産党には否定的である。四・一二クーデターで上海の実権を握ったのが蔣介石率いる国民党であったため、メディアを利用してでもイメージを向上させることを目指した。また、租界の外国人も共産党に対して否定的であった。共産党側が打倒帝国主義を大々的に唱え、資本主義に対しても否定的であったことが大きな要因である。そのため、蔣介石側が華界を統治している方が、多くの外国人にとって好都合であった。こうした趨勢の中で、杜月笙ら3人も蔣介石や国民党の言動をもち上げるプロパガンダの側面で、大きな力を発揮したことは間違いない。

第2章 杜月笙と祖廟—落成式を巡って—

はじめに

第2章では、第一に杜月笙が完成させた祖廟の構造、第二に完成した際に行った式典の事前準備及び式典当日の内容について明らかにし、第三にそれらが杜月笙にどのような影響を与えたのかを解明する。その理由として、この祖廟の式典である落成式を行い、さらに上海史上最大規模の式典となったため、杜月笙の名声は非常に高まり中国全土にその名前が知れ渡るようになったためである。当然、上海においても杜月笙の名声は高まり、飛ぶ鳥を落とす勢いであることを認識させることに成功した。そして、上海で発行された著名な新聞である『申報』に記事が豊富かつ詳細に掲載されており、これを中心に扱う。他には『申報』同様、上海で発行されていた新聞である『時報』も史料とする。

ここで、研究動向整理すると以下の通りとなる。①梅臻、韶菩『海上聞人杜月笙』（河南人民出版社、1987年）では落成式の内容については1930年に50畝の土地を買い1931年5月には祖廟を完成させたことや、儀仗遊行の編成などを書いている。他には蒋介石の祝いのメッセージも載せている。また『新聞報』から引用された「会場内に数千人もの人間が入り、凄い熱気に包まれている。そして人々が暑さから逃れようと扇子を探し、来賓も座り続けて息苦しく見え、帰るに帰れない状況である」とした皮肉めいた部分を引用したことも興味深い。なお管見の限り、杜月笙の祖廟及び落成式を中心に扱った論文は存在しない。②郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』（河南人民出版社、1991年）にも落成式に関するものとして、祖廟の構造、贈られてきた贈答品、落成式の実行委員会の人員、落成式開催中の儀式内容などが存在する。実行委員会の人員は総理が虞洽卿、王曉籟、黄金榮の3人で、協理が張嘯林、金廷蓀、郭祖純、蔡琴蓀、胡詠棻、兪葉封、李応生の7人とある。また、1931年6月12日の英字新聞『大陸晩報』を引用しており「杜月笙君の家祠落成記念が3日間大きく盛り上がり、参加者は政府の大物、現地の巨商などを含め8万人以上にも上った。まさに上海始まって以来空前の盛況であった！」とする。③顧建娣「杜月笙の救済行為淺議（1927—1936）——以《申報》為中心」『中国社会科学院近代史所青年學術論壇2004年卷』（社科文献出版社、2005年版、6月）の項目にて、『申報』を史料に書かれ、落成式後の杜月笙の慈善事業や就いた役職名について記載している。1931年の落成式後が、杜月笙の慈善事業が最も多かった時期であるとしており、中国紅十字会時疫医院や上海孤兒院などで寄付を行うといった慈善活動を行っていた。ただし、基本的に『申報』のみから抜粋しているため全体像はやや不明瞭であり、寄付金額も広告宣伝として出された数字のみを取り上げている⁹⁸。

以上のことから、杜月笙の祖廟の研究は以下のようなになる。①杜月笙の祖廟や落成式について、ある程度実態が解明されているが、祖廟や落成式を中心に扱った研究はなく、論文の一部分に留まっている。②杜月笙はこの時期に非常に多くの慈善活動を行っていた。③その

理由の1つとして、祖廟の落成式は上海史上最大規模の祭典であったことが挙げられる。にもかかわらず、杜月笙の祖廟の落成式について中心に扱った論文が存在しないのは、軽視されているといっても過言ではなく、このことは問題といえよう。^④また、章太炎や蔣介石をはじめ、中国各地の著名人や有力者から祝われており、杜月笙を重要視していたこと、そして杜月笙の影響力や勢力の大きさが伺える。

そのため第2章では、上海史上最大規模の祭典であり、中国各地の大物や国外の要人も祝っていた杜月笙の祖廟の落成式について、できる限り詳細に実態を解明する。具体的には、^①杜月笙の祖廟における建築の推移、及び祖廟の構造とその活用方法、^②祖廟の落成式が上海史上最大規模のものとなった理由、そしてそれを実現するための事前準備、^③祖廟の落成式の内容、パレードや演劇、どのくらいの盛況であったのか、^④落成式を行った後の杜月笙の評判を解明する。

第1節 祖廟の建設と杜月笙の目的

杜月笙の祖廟は文献によってその名が異なる。私自身が調べた結果、祖廟、家廟、宗廟、宗祠、祠堂、杜祠など様々な名称が見られるが、どれも同じものを指している。そして、落成式の名称も1つではなく、『申報』1931年6月8日の記事である「杜祠落成典禮」では、落成典禮と落成禮という2つの名称が使用されている⁹⁹。なお本論文における杜月笙の祖廟、及び落成式の名称は、基本的には祖廟で統一し、落成式の方は落成式で統一する。祖廟が設立された住所は、上海浦東新区外高橋保稅区楊高北路2856号であり、1949年の上海解放以降は人民解放軍が所有している。ただし、杜月笙の祖廟で現存している建築物は杜氏蔵書樓のみであり、祖廟本体など他の建築物は全て棄損が激しい¹⁰⁰。

杜月笙が祖廟を建設し、落成式を開催する目的は複数存在したと考えられる。その目的とは^①祖廟の落成式を大々的に開催し、今現在における自らの地位や実力、勢力の大きさを世間に示すこと。^②それにより、自らの地位や名声をさらに上げ、租界を含めた上海でトップクラスの地位を手に入れること。^③家系図を創作し祖先を「明確」にして、表面上は（祖先をたどり自身の始祖がはっきりしている）真つ当な家柄の人物となること。^④当然、祖廟は祖先を祭る物であることから、幼少期に亡くした両親の恩義に報いることと、故郷である浦東高橋鎮にも錦を飾ること。

その他、この時期に祖廟を設立しようと考えた遠因として、1929年に黄金栄が建設を始め、1931年から1932年にかけて完成した黄家花園の存在がある。黄家花園の目的として、黄金栄が老後の余生に落ち着いて過ごせる場所を作ることと、個人用に近場で夏場の避暑地が欲しかったことが挙げられる¹⁰¹。黄家花園の建設費用は約350万銀元掛かっており、この費用は杜月笙や張嘯林をはじめとした黄金栄門下や青幫の構成員の寄付によって賄っている¹⁰²。そのように、黄金栄が自らのために大規模な庭園の建設を始めたことに影響を受け、杜月笙も自らのための大規模な建造物を所有したくなった、ということも祖廟を建設しようと考えた遠因であろう。以上のような考えから、杜月笙は生まれ故郷である浦

東高橋鎮に自身の祖廟を作ることにした。

まず1930年初めに、50万元を用意して50畝以上（1928年の中華民国度量衡法によれば市制における1畝が6000平方フィートとなっているため、約168.619坪となる。つまり8430.95坪）の土地を買い、職人に祖廟の建設を依頼した。そして、杜氏祖廟や付属施設、周辺道路などが1931年5月頃に完成した¹⁰³。祖廟の構造は3進5開間であり、一番外には門があり、門の両端に石で作られた2メートル近い獅子が大きく口を開けて立っている。祖廟は前殿、中殿、奥殿の3つからなっている。前殿は轎馬庁と呼ばれる、仙人の乗る馬をつなぐ馬小屋である。中殿は大庁、いわゆる大広間である。奥殿が御霊舎であり、先祖の霊位を祀った神龕（しんがん）がある。奥殿が一番豪華絢爛であり、正面の柱や神龕、屏風には龍や鳳凰の彫刻が施され、壁や天井には極彩色の模様や絵で飾られている。福・祿・寿の三仙人の像が祀られ、その両側には3メートル近い雲南の大理石の屏風が飾られている。祖廟の他に2棟の建物があり、うち1棟は家塾であり、貧しい子供のための塾を開いている。もう1棟である杜氏蔵書楼に50万元にも及ぶ古書が寄贈され、そこも故郷の貧しい子供に使わせており、勉学の場とした。さらに、祖廟の土地内に巨大な小屋が存在し、各地からの贈呈品が飾られていた。また、200近いテーブルが置かれており、酒宴を行うこともあった。後述する簡易郵便局も、この小屋内に設置されている¹⁰⁴。この祖廟は、造営費を含めて合計で200万元を大きく超える費用が掛かっており、後述する祖廟の落成式を含めるとその費用はさらに大きなものとなる¹⁰⁵。第4章で取り上げる杜月笙の慈善活動でも述べるが、杜月笙は半年ほどしか学校に通えなかったとされる自身の生い立ちからか、子供の教育を重視した側面がある。特に故郷である浦東高橋鎮の人間に対しては、他の地域の人物よりも、教育も含めたより多くの慈善活動を行っていた。

つまり、杜月笙の祖廟は単に広大な土地に豪華な建築物を作り上げた、というのではなく、自分以外の人間も普段使いできるようにしていたことがわかる。故郷に錦を飾る際に、故郷の人間にも還元しようと考えており、実際に教育という形で還元していたのである。

第2節 落成式の事前準備

祖廟の落成式を行うための事前準備として、杜月笙は上海の大物で名士であることを示すため、前述したようにかつての名門貴族の出身である、ということを示す必要があった。そのため1930年初めより家譜を整えようと考え、家系資料の収集を始めた。また、『申報』を含めた各新聞に家系資料の収集を行うための広告を出している¹⁰⁶。また杜月笙は、国学者である章太炎¹⁰⁷から祠堂記が届けられていた。杜月笙と章太炎の付き合いは、杜月笙が章太炎の姪を告訴騒ぎから助けた1926年から始まる。その際、章太炎は杜月笙に対し、これまで「月生」という号を「月笙」と改めるよう（杜月笙の「月笙」部分は号である）勧めた。杜月笙は国学の大御所である章太炎に名前をつけて貰ったことを大変喜び、それ以来公の場では杜月笙の名義が数多く見られるようになった¹⁰⁸。そして、1000字以上の『高橋杜氏祠堂記』が届き、杜月笙の祖先から杜月笙までの家系図及び、杜月

笙が祖廟を建設するまでの経緯を記載していた。その内容は、杜月笙の祖先は帝堯であるとし、夏王朝の時代より大きな勢力を持ち、周王朝の時代に「杜」の苗字を授かり杜伯となった。なお、何時代に杜月笙の祖先が上海浦東高橋に移り住んだのかは不明である。しかし、杜氏の末代である孫鏞（杜月笙のことを指す）は低い身分の出だが、義侠心に溢れ悪を制して上海で名を上げ、上海浦東高橋に廟を建てた、といった内容である¹⁰⁹。また、章太炎だけでなく汪精衛や虞洽卿など様々な人物が祠堂記を書いている。その理由の1つとして、杜月笙に取り入り自身の勢力をより大きくするため、杜月笙と関係を築きより大きな利益や権益を生むために祠堂記を書いている側面は否めない。全体数は不明であるが、判明したものは表1にまとめた。

表1 杜月笙に対し書かれた祠堂記一覧（複数名の共著あり）

人名	祠堂記
章太炎	『高橋杜氏祠堂記』
胡漢民・劉芦隱	『高橋祠堂記』
汪精衛	『高橋杜氏家祠記』
鄭孝胥	『杜氏家祠記』
虞和徳（虞洽卿）	『杜氏宗祠記』
楊度	『杜氏家祠落成頌』
何成浚・谷正倫・賀燿祖・楊傑・葉開鑫等	『杜氏家祠記』
馮雲初・王西坤	『杜氏家祠頌並序』

「各界賀電」『申報』1931年6月10日。「各方之賀電」『申報』1931年6月11日。
「各方統至賀電」『申報』1931年6月12日。

表1によれば、祠堂記は多数の人物が杜月笙に対して送っている。杜月笙自身も最初に祠堂記を書いてもらう際、できるだけ有名人に書いてもらい箔を付けたいと考えており、国学の大家である章太炎に祠堂記を書いてもらうことは非常に光栄であると考えていた。また、杜月笙にとってあくまで建前である祠堂記の内容そのものより、どれだけ大物の人物が祠堂記を書いてくれるのか、その祠堂記の数がどれだけ集まるか、ということが重要であった。当然祠堂記を執筆し杜月笙に送った側の人物も、内容そのものより祠堂記を送り杜月笙と関係を築く、関係をより深いものとする、ということが大切となる。

その他にも祖廟の落成式の際に、高位高官や名士からは主に匾額、聯、屏風、書幅が贈られ、それ以外の人物からも骨董品や花籃、花輪などが数え切れないほど贈られている。贈物として多い順に並べた場合一番多いのは匾、続いて聯、屏、幅、骨董品、旗傘や花籃（新規オープンの時店頭などに飾られる花束のようなもの）、そして礼券や現金である¹¹⁰。扁額を送った人物について、判明した部分を表2にまとめてある。

表2 杜月笙に贈られた扁額一覧

肩書及び人名	扁額名
国民党委員長国民政府主席蔣介石	「考思不匱」
陸海空軍総司令張学良 ¹¹¹	「好義家風」
軍政部長何応欽	「世徳揚芬」
実業部長孔祥熙 ¹¹²	「慎終追遠」
司法院長王寵惠	「千国棟家」
警察総監呉鉄城	「光前裕後」
前大統領徐世昌	「敦仁尚徳」
前大統領曹錕	「俎豆千秋」
前臨時執政段祺瑞	「望出悪昌」
前北洋将軍呉佩孚	「武威世承」
国学大師章太炎	「武庫遺靈」
著名書道家国民党元老于右任	「源遠流長」
班禅額尔德尼（パンチェンエルデニ） ¹¹³	「慎終追遠」
法国駐滬領事ガガーリン	「東方望族」
日本駐在滬日軍司令坂西利太郎 ¹¹⁴	「明德之後」

陸鏡清「◎杜祠送主儀仗遊行紀盛」『申報』1931年6月11日。

表1と表2を見比べた場合、あくまで自身が調べた限りではあるが、祠堂記の数より扁額の数の方が多い。また祠堂記は何人かの共著の物が存在するのに対し、扁額は共同制作したものはなく、1人1つずつで作られている。理由として、祠堂記はある程度の長文となり、例えば章太炎の祠堂記は1000字以上の文字数である。その上、内容を考えなければならぬため、書き上げるためには当然時間も大きくとられることになる。一方で、扁額は杜月笙を褒め称える内容の四字熟語を制作すればよく、比較的短時間で製作が可能である。当然、政策にかかる労力も少なくなり、祠堂記に比べ扁額の方が作りやすい、といった事情があり、そのことが扁額の方が多く理由の1つであろう。そのため祠堂記と異なり、上海を基盤にして勢力を持つ人物だけでなく、上海以外の地域で勢力を持つ中国各地の人物が杜月笙に対し扁額を送っている。また、祠堂記を制作できるだけの中文が書けるかどうか、どうしても不明瞭な部分がある外国の領事も扁額を送っていたことから、扁額の方が制作しやすくハードルが相対的に低かったことがわかる。

第3節 落成式の推移とその参列者

5月29日の『申報』「杜祠紀盛」にて杜月笙の祖廟についての記事が存在し、内容は「杜月笙先生の祖廟が完成した、杜月笙先生は各地で被災が起こるたび大きな寄付を行っている」というものであった¹¹⁵。

次に6月4日の『申報』に「販委會贈送杜祠扁額」という見出しの記事があり、内容は上海の名士である杜月笙に祖廟完成祝いとして国民党政府の蔣主席をはじめ各機関の官僚や、中央販務委員會の許主席が扁額を送ったというものである¹¹⁶。ただし記事には扁額を送った人名の詳細や、扁額の名前についての記載はない。次に6月8日の『申報』に「預誌 杜祠落成典禮」という杜祠落成禮の案内記事があり、杜月笙の家祠が完成したため6月10日に落成禮が行われるとある。落成式の前日である9日には浦東に渡るための儀式が執り行われ、10日正午に祠へと入ると書かれている。その儀式にて盛大なパレードが行われ、今一番の大盛況になるだろうと予測を立てていた¹¹⁷。招待方法として、「招待之方法」には10日、11日、あるいは雨天時の場合に地元の浦東、あるいはフランス租界の外灘から来た人が祠、つまり落成式の会場に行く汽車の前の方に案内される。一般の来賓客は汽車、及び人力車で案内するとあり、来賓ではなく招待もされていない人は祠の入り口にある名簿に名前を書くことになっている¹¹⁸。また、落成式を行うにあたって職務分担が行われており、「職務之分任」の部分で黄金栄と虞洽卿は総務主任、張嘯林が劇務主任（落成式にて3日3晩の間大々的に劇が行われるため、そのための警備主任である）を行っている¹¹⁹。そしてパレードを行う道順も示されている。「儀式之路山」にて、フランス租界華格臬路通りにある杜月笙宅から出発し、南の李梅路を走り、次に東の豊自函路と公館馬路、南の老北門大街、東の民國路、小東門大街を通り金利源碼頭でパレードが終わるとある¹²⁰。また、軍警が警備を担当しており、「軍警之保護」という記事では、治安方面は軍警の保衛団が厳密に配置され、杜祠の四方を取り囲んでいるとして、さらに軍警以外の警備員も配置されている¹²¹。他には「外王之代表」で外長代表（この場合外交部長のことを指す）王正廷¹²²、特派秘書劉雲舫も落成式に参加するために上海に訪れたようである。王正廷は金聯を送っており、そこには「武庫經輪、富陽苗齊、黃閣甲第、萊園助名」の16字が書かれている¹²³。意味は武力も持っていれば富も持っており、この祖廟は立派であり、あなたは凄い存在である、という意味である。なお、8日よりも前には広告や宣伝記事の類は見られなかった。これは7月11日と12日に行われた虞洽卿の旅滬五十年紀年大会とは対照的である。旅滬五十年紀年大会の方は6月22日からほぼ毎日にわたり新聞1頁の6分の1から7分の1ほどの大型の広告が出され、22日から1か月間の間大々的に広告を出していた。これと比べると杜月笙の祖廟落成式はそこまでの宣伝を行っておらず、私としては意外である。

落成式開催1日目である6月9日では杜祠の儀式とパレードの様子について伝えている。6月9日の『申報』の「杜祠 儀仗今晨遊行」の大見出しによれば、9日の午前9時から浦東に行くため儀仗遊行するとある¹²⁴。「儀仗行列概況」では午前9時に杜月笙宅を出発し、6つの儀仗隊の行列に別れて進んでいたとある。第1行列は為國旗・自由車隊・法捕房巡捕で構成されており、金榮小學全体、錢業公會旗傘牌を飾っている。その次に警備部軍樂隊・警備部軍隊が蔣総司令扁亭、熊司令扁亭、何総監扁亭を飾っている。第2行列は鐵華學生、新江天、新甯紹輪船傘、公安局、軍樂隊、公安局保安隊員で構成されており、張副司令、張市長、王外長などの扁額を飾っている。第3行列は静安小學童子軍・施粥廠北董公所で構成

され、四明恵児院及び個人の旗、傘、牌などで、呉淞要塞司令部軍隊が于院長、王院長、楊院長などの扁亭を飾っている。第4行列は寧波旅滬小學童子軍・滬西及閩北慈善團・寧波孤児院・閩北救火會・上海保衛團・寧波仁清醫院・滬西時疫醫院・謙益醫院が壺、旗、傘、牌などで飾る。第5師軍樂隊・閩北及び南市保衛團團員で構成され、林康候、許世英、段祺瑞、呉佩孚などの扁亭が飾られている。第5行列は江灣救濟會西樂で構成されており、孔部長、王部長、及び各省主席陳調元、何成濬、劉峙、馬福祥、胡若愚、魏道明市長、及び班禪、呉鉄城、諸民誼、劉芦隱、高紀毅、徐源泉、夏斗寅、葉開鑫、賀耀組、王柏齡、法総領事、法総監などの扁亭、及び旗、傘などで飾っている。第6行列は海軍司令部軍樂で構成され、各公會學校団体などの旗、傘、花籃、来賓、蔣主席祝辞扁亭、及び神主轎亭で飾っている¹²⁵。これを新聞に載せるあたり、杜月笙は多くの著名人と関係を持っていることをアピールする目的もあったと考えられる。

また蔣介石が新聞にて祝辞を述べており、「蔣主席之祝辭」では6月8日の午後に発表されたとある（蔣介石自身は代理人を送り、直接は来ていない）¹²⁶。内容は「詩詠祀事、典備蒸嘗、水源木本、礼意綦祥。敬宗收族、徳在無忘、激彼秕乘、俗茲彝常。元凱之家、清芬世守、考孫有慶、服先食旧。任侠好義、声馳遐迩、濟衆博施、号為杜母。肯堂肯構、実大其宗、爰建新祠、輪奐有容。簋簠既飭、鏘濟攸従、式瞻枚実、介福弥隆。」とあり、巨大な扁額に書かれている。意味は祭事をするために大掛かりな礼をつくし、先祖を敬う徳は俗世でも忘れない。高い徳を持った清く正しい人物の家では、徳や清らかさを代々守り、祭主が祝う際には食事の前に服している。その心意気はよく声にも聞こえ大衆を呼ぶ。実に壮大な祖廟を作り立派である。これからも先祖を敬い繁栄するようにと思っている。このように、非常に立派で好ましく思い、これからの発展にも期待しているという内容である。扁額の内容であるためか、いささか表面的で社交辞令な感じを受ける。つまり、1931年当時の中国にて事実上のトップである蔣介石が、杜月笙の落成式記念に扁額を送ったという事実そのものが重要であり、内容はあくまで当たり障りのない表面的なものでも構わなかったのである。なお、この巨大な扁額は、内容からもわかるように、前述した蔣介石が杜月笙に送った扁額とはまた別物である。9日に杜祠で行われる劇のプログラムもあり、「九日堂會劇目」の見出しで劇の名目と出演者の名前が記載されている。ただし、後述する10日の劇のプログラムでは開始時刻が掲載しているのだが、9日のプログラムではまだ開始時刻の掲載がなかった¹²⁷。この演劇の公演プログラムは表3にまとめてある。

表3 落成式での舞台の公演プログラム

人名	演目
9日 午後3時開演	
張藻宸・尚小雲	「汾河湾」
肅長華・馬富祿・華慧麟	「打花鼓」
程硯秋・王少楼	「芦花湖」

李吉瑞・小桂之	「落馬湖」
梅蘭芳 ¹²⁸ ・楊小樓・馬連良・高慶奎・譚小培・龔雲甫・金少山・肖長華	「龍鳳呈祥」
10日 正午開演	
役者全員	「富貴長春」
王曉籟 ¹²⁹ ・袁履登	「八百八年」
郭繼雲	「空城計」
季小姐	「宇宙鋒」
孫化成	「群臣宴」
小楊月樓・王庚巖	「慶頂珠」
張藻宸・小桂元・金仲仁	「狀元譜」
高慶奎・張春彥・芒英・姜妙香	「玉堂春」
程硯秋・貫大元	「燭影記」
楊小樓・雪艷琴・高慶奎	「捉放埃」
梅蘭芳・程硯秋・苟慧生・尚小雲・馬連良・龔雲甫・雪艷琴・貫大元	「紅鬃烈馬」
11日、正午開演	
金碧玉・楊鼐儂・彭春珊・馬佩雲	「滿堂全紅」
小楊月樓・小奎官・蔣寶印	「岳家庄」
言菊朋	「瓊林安」
麒麟童・苟慧生・劉奎官・金仲仁	「戰宛城」
馬連良・金少山	「取萊阻」
高慶奎	「取帥印」
徐碧雲	「花木蘭」
尚小雲・龔雲甫・貫大元	「馬蹄金」
李万春・藍月春	「林冲夜奔」
梅蘭芳・譚小培・金少山	「二進宮」
李吉瑞	「臥虎溝」
雪艷琴・雪艷琴・雪艷芳	「弓硯緣」
程硯秋・譚富英・王少樓	「忠義帶」
楊小樓・馬連良・劉硯亭	「八大錘」
梅蘭芳・苟慧琴・金少山・程硯秋・尚小雲・高慶奎	「五花洞」
麒麟童・王英武・趙如泉・劉漢臣	「慶賞黃馬褂」

「九日堂會劇目」『申報』1931年6月9日。「今日劇目」『申報』1931年6月10日。

「今日之劇目」『申報』1931年6月11日。

表3によれば、落成式で行われた演劇は非常に数が多く32もの演目数に及んでおり、非常に盛大なものであった。演劇の上演時間の長さ、出演した役者の人数の多さ、何よりその役者の顔ぶれが非常に豪盛であり、杜月笙はこれだけの役者を集めて演劇を上演できる勢力を持っていたことが理解できる。この状況を周りに見せつけ、自身の勢力の大きさを知らしめることも、杜月笙の大きな狙いであった。その他、杜月笙個人の趣味趣向となるが、杜月笙は京劇鑑賞が趣味の1つであったことも、これだけ大々的に演劇を開催した理由の1つである。実際、杜月笙の第四夫人の姚玉蘭と第五夫人の孟小冬は京劇を通して杜月笙と関係を持った、京劇の女優であった。

開催2日目の6月10日では杜祠の観光記が「杜祠観光記」の大見出しで掲載されている。その後に小見出しが並び、10日に奉主である杜月笙が祠に入る日であり一番中心の日であるとしていた¹³⁰。最初の小見出しである「儀仗遊行」では9日の儀仗遊行が非常に盛況であると伝えられ、その時のパレードの写真を見る限り、パレードを一目見ようと人が溢れかえっている¹³¹。当然10日も盛況であり、「碼頭盛況」の記事によると、午前9時から来賓が大量に汽車によって浦東にやってきた。11時半には2日目の儀仗遊行が始まり、大量の爆竹と軍楽隊が大きな音を立て、女性来賓には専用の座席が用意されていた、とある¹³²。また、「高橋景象」の記事では自家用車で来る者、歩いて来る者が大勢いたとある¹³³。杜月笙の祠について、「杜祠一瞥」では5開間3進（開間とは部屋の意味、進は建物の数、とりわけ平行に並んだ建物の数の意味）であると書かれており、中の様子や建物の構造について触れている¹³⁴。主な来賓は「男女来賓」として楊嘯天、虞洽卿、王曉籟、袁履登、錢芥塵、俞子英、鄭傾秀、王亮啥夫人、楊愨煥夫人、俞子英夫人などであった。また「奉主入祠」の記事にて、9日に杜月笙が浦東に入ったことを書いており、記事が間に合わなかったもののおそらく午前5時に儀仗し始め数千人以上の来客が来るだろうと予測していた¹³⁵。「紀念郵戳」の記事では落成式を記念して、杜祠の中に臨時の郵便局を作り郵便などの受け渡しを行っていた。ここで記念のスタンプを押した記念便箋も配られている¹³⁶。「主席致賀」の記事には、国民政府秘書が落成式を祝って祝賀を持って10日に参加するというものである¹³⁷。その他、各方面からの祝電について「各界賀電」の記事には誰がどのような祝電を送ったのかについて記していた¹³⁸。人物名とその人物が書いた祠堂記が一部内容を含めて書かれているが、記事の書き方に問題があるのか、誰が何を書いたのか判明しない部分が残っている。この日の劇についてもプログラムが書かれており、「今日演目」では正午から始まったとある¹³⁹。

開催3日目、6月11日の『申報』にも各方面各界からの祝賀祝電が載せられている。「杜祠落成盛典」の大見出しから記事が始まり、「清晨之家祭」の記事では10日午後5時に「最清」の文字があり家祭を行ったとある。これが名目上落成式の一番の中心であると考えられる¹⁴⁰。また「各界之道賀」の記事では祝賀を送った人物が羅列されているが、肝心の内容には触れておらず、扁額を送った人物を記載している¹⁴¹。「各方之賀電」の記事では落成式を

祝う文章や、祠堂記を書いた人名およびその内容も記載されている¹⁴²。この日の劇もプログラムが記事にて掲載されており、「今日之演目」にて11日が最終日であると書かれている。だが、開始時刻がまた記述されておらず、結果として10日のみ時刻が記されている¹⁴³。陸鏡清「社説：杜祠送主儀仗遊行紀盛」にも落成式の盛り上がりが凄いとして、パレードの華々しさが印象に残っているとある。祝賀祝電を送った人物の名前も記されており、それぞれの扁額の名前も載せられている。杜月笙という人物は上海において飛ぶ鳥を落とす勢いの存在であり、上海史上、例を見ない大きな祭典を開き各著名人とも親しい仲であるという¹⁴⁴。

なお、『申報』以外に『時報』という新聞が当時の上海で発行されていたが、『時報』での落成式の記事は『申報』の記事とほぼ同じである。1931年6月8日から6月11日までの間、同じ日に発行された新聞にて記事名から記事の内容まで、『時報』側が一部分を省略していることを除けばほぼ一字一句同じ字が使われている¹⁴⁵。省略された部分は『申報』1931年6月8日の「外王之代表」など、比較的重要度が低い部分が紙面の都合上省略されている¹⁴⁶。このことから落成式に関する記事は、実は杜月笙側があらかじめ記事を用意して各新聞に提供されたものであり、各新聞も紙面の都合上一部分を削ったことを除けば、ほとんど手を加えることなく掲載したものだと考えられる。前述した第1章の四・一二クーデターにおいても、黄金栄などに関する新聞記事の掲載は、杜月笙側が記事を用意した可能性が高い。後に杜月笙は『申報』をはじめとした報道会社の董事長に就任することからも、報道界に非常に関心が高かったことが伺える。

第4節 落成式とその後の影響

開催後の様子として、6月12日の『申報』では「杜祠落成禮 最後一日盛況」という大見出しがある。記事は全て小見出しから始まり、「最後一日盛況」の記事は11日の盛況ぶりを伝える内容であり、何応欽、高紀毅、班禪、銭新之¹⁴⁷、宋子良をはじめとした軍政界の大物が参加した、というものである¹⁴⁸。「各方統至賀電」の記事には、前日の祝賀のように人物名と祝賀、祠堂記の内容が載せられている¹⁴⁹。「辦事処之結果」の記事では海陸軍、水陸警察、南北保衛團、緝私榮、偵緝隊、救火會、紅藍十字會などの警備に当たった団体に対し謝辞を述べており、参加しなかった組織はないと書かれるほどに次から次へと各団体が落成式に来ていた。また虞洽卿と結束を深めた、という記述がある¹⁵⁰。なお、『時報』では6月11日までしか杜月笙の落成式の記事は存在せず、その後は落成式の盛況について広告で謝辞を述べるに留まっている¹⁵¹。『時報』は『申報』に比べ杜月笙との関係が薄く、影響力も限定されることが原因であろう。また、広告内容は『申報』と全く同じであるが、『申報』より『時報』の方がなぜか広告が1日長く載せられている¹⁵²。

6月16日の『申報』にて「杜祠堂會写真」という社説が掲載されており、祖廟落成式の場所や日時、そしてその人気の白熱ぶりが記述されている。2日目の10日が一番精彩であったこと、中国各地から各界の大物がやってきたことや劇が非常に豪勢な顔ぶれであったとする¹⁵³。

また、開催後の宣伝として6月12日から16日にかけて杜月笙自身が祖廟落成式について広告を出しており、9日から11日までの盛況ぶりと来客に対して感謝の意を述べている。また12日の時点では杜月笙名義で広告を出しているのだが、13日からは杜鏞名義でまったく同じ広告を出した（ただし他人が杜月笙を呼ぶ際は、同時期に出された広告や記事なども全て杜月笙の名前である）¹⁵⁴。このことから、杜月笙は自身の勢力を誇示する狙いがあったが、単に自身の祖廟が完成しただけでは宣伝を出したところで、何のアピールにもならないと理解したのだろう。また浦東地区に住む人間に対し、宣伝記事での扱いが優遇されていたため、杜月笙が故郷に錦を飾るという意味合いもあったと考えられる（実際には浦東地区の人間も、数の多い一般人であるためそれほど特別待遇は受けなかったであろう）。

また顧建娣「杜月笙的救済行為淺議（1927—1936）——以《申報》為中心」では杜月笙の救済行為、つまり慈善活動についての記述があり、落成式後の慈善活動の具体的な内容が申報を元にして研究していた。この先行研究では、1931年が杜月笙の慈善活動における金額が最も多い年であり、7月だけでも2万6300元にも及んでいるとされる。ただし、執筆者である顧建娣も「これは杜月笙が『申報』を使って宣伝したものであり統計としては不完全なものである」と語っている¹⁵⁵。杜月笙の慈善活動の内容は表4にまとめてある。

表4 杜月笙の慈善活動一覧（1931年7月分）、合計金額26,300元

組織名	組織の責任者	金額	日付（申報）
中国紅十字会時疫医院	院長王曉籟・虞洽卿・王一亭 ¹⁵⁶ ・聞蘭亭・王培元・院董杜月笙	1,000元	1931年7月7日
普善山庄	総董王一亭・董事杜月笙	1,000元	1931年7月8日
上海中国済生会	不明	1,000元	1931年7月8日
中国救済婦孺總會	総董王一亭	1,200元	1931年7月9日
上海孤兒院	総董王一亭	500元	1931年7月17日
海門育嬰所	陸蘭甫（役職不明）	200元	1931年7月17日
上海籌募江西急賑会	主席杜月笙	13,000元	1931年7月17日
北西藏路開封路北急救時疫医院	院長杜月笙・王曉籟・葉山濤・姚慕蓮・金廷蓀等	2,000元	1931年7月17日
滬南神州医院	不明	500元	1931年7月18日
上海私立興中小学	校董杜月笙・主席校董褚民誼・王曉籟・校長吳静波	500元	1931年7月19日

上海保安養老所	不明	500元	1931年7月20日
上海閘北慈善團寄養所	董事杜月笙	500元	1931年7月21日
上海殘疾院	總董王一亭	1,000元	1931年7月22日
上海華隆中医医院	院董杜月笙	500元	1931年7月25日
寧波佛教孤兒院	董事長張申之	1,000元	1931年7月25日
四明孤兒院	不明	1,000元	1931年7月25日
上海市閘北区救火連合會	不明	900元	1931年7月28日

顧建娣「杜月笙的救濟行為淺議（1927—1936）——以《申報》為中心」『中国社会科学院近代史所青年學術論壇2004年卷』社科文献出版社、2005年版、6月。

表4によれば、この時期杜月笙は数多くの慈善活動を行っていることがわかる。これらの慈善活動と祖廟落成式との関係は無関係ではなく、落成式で人々の注目を集めた時こそ慈善活動を大に行い、人々のイメージを良いものにするチャンスだと杜月笙は考えていたことが推測される。当然『申報』をはじめとした新聞に、慈善活動を行ったという広告を多く出していたことからそのことが伺える。杜月笙が黒社会の人物であることは誰もが知っていたため、悪いイメージを払拭するために慈善活動を積極的に行う姿を見せたかったのである。慈善活動に関連する出来事として第4章で後述するが、落成式開催後の杜月笙の祖廟は、落成式までに全て完成したわけではなかったため引き続き建設が進められていた。そして浦東高橋鎮にある祖廟の敷地内に、10万元を投じて浦東杜氏蔵書楼と学校も設立した。この2つの施設は主に浦東高橋鎮在住の貧困層の子供たちのために設立されており、完全な免費、無償の施設であった。

おわりに

本論文にて明らかになったこととして、第一に杜月笙はこの式典に関して非常に意気込んで臨んでおり、そのための準備も非常に入念に行っていたことである。自身の絶大な権益や影響力、経済力を上海はもちろんのこと国内外に広く知らしめようと考え、上海史上最大規模の落成式を成功させることで上海のみならず中国全土で知名度、印象、好感度を大きく上げた。それによりこれからも自身の勢力を大きく発展させようと考えていた。

第二に、杜月笙の「笙」の名前は章太炎によって付けられたことが明らかになった。杜月笙の公の場で名乗っていた「杜鏞」という名前も章太炎が名づけており、落成式の広告においても6月13日にこの名前を使っていたことも明らかになった。使い分けた理由として、章太炎が付けた両方の名前を知ってもらいたい、ということがあったのだろう。杜月笙と国学者である章太炎と関係が存在したことは意外であるが、杜月笙の人脈の広さ、上海各界に影響力が存在することを改めて確認できた。

第三に、落成式を非常に意気込んで行ったことから想像できるように、杜月笙の祖廟は

非常に豪勢で大きなものであった。一方で、杜月笙の祖廟は中国における昔ながらの伝統に則った、親戚一同と協力して作ったものではない。祖廟の建設において、杜月笙の家族は表面上ですら関わりがなく、杜月笙とは血縁関係のない人間関係のみで作り上げた、あまり正統とはいえない祖廟であった。もちろんこれには理由がある。というのも、杜月笙の父親は既に亡くなっており、妹と義母は消息不明で生死もわからず連絡が取れる状況ではない。唯一の血縁は、勘当されて絶縁状態であった叔父1人のみという状態であったため、杜月笙は血縁関係のない人間関係のみで一から廟を作らざるを得なかった。

第四に、落成式は非常に盛況なものとなり、上海租界の中でも有数の大きな祭典となったことである。杜月笙が何か月にも渡って行った、入念な準備が成功したのである。また蒋介石、張学良、何応欽などの中国全土に及ぶ政界の重要人物（蒋介石や張学良は本人が出席せず、代理人を送った）や梅蘭芳、麒麟堂、馬連良などの京劇スター、虞洽卿など上海租界の財界の人物、及びフランス領事ガガーリン、日本駐在滬日軍司令坂西利太郎など、外国の領事まで参加した。大々的な祝賀の場となり、各界の名士がわざわざ参加したことにより、当時既に杜月笙を無視できないほどの勢力や影響力が存在していたことがわかる。

第五に、杜月笙は祖廟の落成式前後の時期に、慈善活動を大に行っていたことがわかった。これは後述する第4章で詳細を述べるが、杜月笙は慈善家としても名を売ることにしており、非常に積極的に慈善活動を行うことで名声を高めていたのである。これは同時に、黒社会以外の社会においても杜月笙の好感度が上昇し、経済界や政界にも進出しやすくなったことは見逃せない。

なお、一部の伝記では杜月笙の祖廟の落成式が開催された時、合計で8000両ものアヘンのサービスが提供されていたという。1933年の廢兩改元で定められた1両0、715元の交換レートで考えた場合、5720元分のアヘンとなり、第5章で後述するがアヘン1円で1オンスほどであったため、5720オンス、つまり162キログラム強のアヘンを用意していた。当時の紡績女工の賃金が1か月休日なし、1日10時間労働で5元から6元であるため、杜月笙は来客のため非常に大量のアヘンのサービスを準備していたことがわかる。事前に準備した数は銀兩換算で5000両（3575元、101キログラム強）にも及んでいた。ただし二日目の夕方には吸い尽くされてしまったため、素早く3000両（2145元、61キログラム弱）のアヘンを追加、合計で8000両分のアヘンを用意した。各方面から来る著名人専属の、アヘンのサービスを行う人員を10人、一般人にはアヘンのサービスを行う人員を14人配属させていた。このアヘンのサービスを行う人員の仕事内容は、アヘンの使用者の代わりにアヘンを持ってきた後、アヘンを使用者が加えた後に火をつける、というものであった。ただし、杜月笙門下がアヘンのサービスを利用する際はセルフサービスとなっており、特にアヘンの付き人は配属されていなかった。準備を担当したのは杜月笙の門下であったとされる郁咏馥である¹⁵⁷。この内容は西爾臬著、川添恵子訳『中国マフィア伝【上海のゴッドファザー】と呼ばれた男』（イースト・プレス、1999年）などの伝記にて存在する。しかし、当時の報道にはそのような記事はなく、落成式を扱った論文

においてもそのような内容は見られない。史料が残されていない以上詳細は不明であるが、杜月笙とアヘンの結びつきは非常に深いため、一部の伝記ではこのような記述がなされたと考えられる。

その他、杜月笙の祖廟とは直接の関係はないものの、張嘯林の60歳を記念した60大寿の式典も盛大に行われ、祝賀の参列者は各界から来ており合計で2万人を超えたという¹⁵⁸。この誕生日会を盛大に行った理由の1つに、杜月笙の祖廟の落成式が盛大なものであったため、間接的な影響を与えたと考えられる。

第3章 杜月笙と高級社交クラブ恒社の実態

一人脈の形成

はじめに

杜月笙は1927年に発生した四・一二クーデターにて、実行犯として大きな役割を果たし、蒋介石から「陸海空軍総司令部顧問」「軍事委員会少将参議」「行政院参議」などの肩書を与えられた。そして、杜月笙は「黒社会」の人物としては珍しく、自身の活動を上海の黒社会に限定せず、「表社会」にも実業家や慈善家として大々的に進出を考えていたため、これらの肩書は大いに役立つこととなった（本論文で述べる表社会とは黒社会に対応する言葉として、市民社会や経済界、政界など様々なものを含む）。これは杜月笙と同じく、上海三大亨と呼ばれた黄金栄・張嘯林も、蒋介石から杜月笙と同等の肩書を与えられた。しかし、この2人は杜月笙ほどには表社会へと進出せず、基本的には黒社会の活動に比重を置いていた。杜月笙は黒社会の首領としての地位だけでは満足せず、表社会にも進出して表裏両方において上海の首領になろうと行動したが、自身1人ではサッスーン商会やジャーディン・マセソン商会など、大きな組織を持つ人物には比肩できない、とも考えていた。そのため、表社会にて自身の勢力を拡大するためにも、1932年に「恒社」という政治団体を設立することにした。恒社の理事長は当然ながら杜月笙であり、ごく初期を除き法律上は政治団体の名義でフランス租界に登録されていた。恒社は社章（実際には社則であるが、原文では社章。以下社章とする）によると、内部で理事会選挙を行って物事を決める法人であった。しかし、実際には杜月笙やその周辺人物が物事を決める、秘密結社そのものではないが、れっきとした秘密結社の系譜の組織であり、かつ高級クラブとして賭博や宴会といった娯楽活動を行っていた。

杜月笙を中心に扱った論文は多数存在するものの、恒社を主題とした先行研究は管見の限りでは存在しない。元恒社社員による回顧録にて、恒社について語ったものがわずかに存在し、恒社について多少触れた論文が数本のみ存在しているような状況である。例えば、①郭蘭馨「杜月笙与恒社」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』（上海人民出版社、1986年）では、恒社の成立からその終焉までが、回顧録としての限界はあるが収録をしている。特に香港に実質的な本拠地が移動してから、恒社が終焉するまでに文面を多く割いており、全体として恒社の全盛期から後に重点を当てている部分の特徴である。他の研究にてこの時期を扱ったものはほとんどないため、貴重な情報となっている。②郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』（河南人民出版社、1991年）では、上海租界にて1930年代に黒社会の人物が相次いで組織を成立させたとあり、その中でも大きな勢力を持った組織として恒社を取り扱っている。恒社は名目上法人であり政治団体であったが、本質的には上海の名士による社交クラブであり、賭博や舞台、宴会などを行っ

ていたとしている。また、日中戦争後の恒社について勢力拡大の面から肯定的な評価を下している。ただ、その際杜月笙が香港に移動した際に突然恒社が活動を終了したことになり、辻褄が合わない部分が出てくる。③Brian G.Martin「青幫和国民党政権：杜月笙対上海政治的作用（1927—1937）」（『歴史研究』1992年第5期、10月）では、杜月笙が上海での政治に関わった事例を複数扱っており、その中の1つに恒社の存在を挙げている。恒社について、Brian G.Martinは杜月笙が勢力を拡大するために作られた、杜月笙個人のための組織としており、その内容も杜月笙個人が手に入れた利益を中心に扱っている。ただし、恒社の概要は取り扱っているが、恒社としてどれだけの政治的な影響力を持っていたのか、具体例に乏しくやや曖昧な部分が残る¹⁵⁹。

しかし、繰り返すがこれらは郭蘭馨「杜月笙与恒社」を除き、恒社を中心に据えたものではなく、その一部において恒社を扱った研究である。筆者は、これでは不十分であると考えており、杜月笙が設立した恒社の研究はもっと重要であろう。例えば、①杜月笙は黒社会だけでなく、表社会や政治の舞台にも進出していたが、その際に恒社の存在が大きな役割を果たしていること。②恒社は政治団体であり、上海をはじめ各地域の名士が社員として加入していたため、政治的な影響力が存在していた。③恒社が設立された時期は、何人もの黒社会の人物が新しく組織を設立しており、それぞれが表社会への進出を図っていた。その中でも恒社は最も成功を収めた組織の1つであり、恒社の活動に影響を受け、設立された同種の組織がいくつも存在していた（黄金栄の忠心社、朱学范の毅社など）。といったことが挙げられる。

そこで第3章においては、①恒社の設立過程、および設立するに至った背景とはどのようなものだったのか。②恒社がどのように発展していったのか、人数や勢力はどのように拡大していったのか。③恒社の役割、活動、上海をはじめ社会にどのような影響を及ぼしていたのか。④杜月笙が恒社によって手に入れた利益、権益はどのようなもので、どれだけの大きさであったのか。また、⑤恒社は杜月笙が香港、重慶に移動した際にも活動を続けており、⑥日中戦争後も上海にて低調ではあったが活動を続けていた。これらのことについて明らかにする。

第1節 恒社の成立とその目的

杜月笙はより大きな勢力を持つため、自身がトップとなる組織の必要性を感じていた。杜月笙は自身が黒社会にて大きな勢力を持つに至った理由として、青幫という組織の果たした役割、その重要さを理解していた。しかし、青幫という組織のみでは黒社会では大きな勢力を持つことはできるが、あくまで黒社会の秘密結社であるため表社会への進出には限度がある。そのため、表社会にてより大きな勢力を持つためにも、表社会向きの組織、それも杜月笙自身の直営の組織を設立しようと考えた。

人員は友人や門下が、杜月笙の自宅に多く集まってきており、特に問題なく集められた¹⁶⁰。仮に思ったように人員を集められなくとも、杜月笙自ら勧誘することも計画していた。計画

を着々と進め、1932年に杜月笙は恒社という政治団体を設立することにした。同年11月22日、「西愛威斯路」(Route Herve de Sieyes)にて恒社を設立するための会議を行っている¹⁶¹。この時はまだ法人などではなく、クラブ形式を採用して杜月笙の自宅で活動を行っていた。この時に行っていた活動は、主に杜月笙の趣味により賭博、そして京劇鑑賞などであった¹⁶²。その後の恒社の活動においても、このような活動が中心となっていたことから、杜月笙の趣味や趣向が色濃く反映された組織であることがわかる。つまり、杜月笙の好みのもので大勢の政治的な影響力を持つ名士で楽しみ、秘密裏に政治的な交渉を行い物事を問題なく動かす、といった上流階級の社交クラブであり、杜月笙主催で政治や経済の密談を行う場所を提供していたことになる。当然、大元である杜月笙の政治的な影響力は高まり、恒社はそういった意味で重要な組織となった¹⁶³。

そして翌1933年2月25日、「愛多亜路」(Avenue Eduard VII)の「息廬」にて開幕式を行い、正式に恒社が成立したことを宣告した。その時の社員は130人余りである。祝賀会にはフランス租界の総監が駆けつけている¹⁶⁴。恒社の本社地は杜月笙の自宅がある「華格臬路」(Wagner Rue、現在は寧海西路)の南側にあり、「馬浪路」(Rue Brenier de Montmorand、現在は馬当路)と「霞飛路」(Avenue Joffre、現在は淮海中路)の北側であった¹⁶⁵。つまり、杜月笙の自宅の裏側に恒社の本社地が存在していた¹⁶⁶。なお、組織の種類として政治団体を選択した理由は、陸京士¹⁶⁷や陳群¹⁶⁸をはじめとした友人の進言であったとされる。特に陸京士は恒社において、実務的に中心的な役割を果たすことになった。他には、杜月笙自身が政治に関心があり、政界に進出したかったことも挙げられる。経済団体の名目になかった理由として、杜月笙は既に中匯銀行を設立して董事長になっているなどして大きな勢力を築いており、組織に頼らずとも既にかかなりの地位を占めていることが挙げられる。また、お門違いということで政界にも進出することは難しくなる。そのため、杜月笙はあえて政治団体を掲げて恒社を設立したと考えられる。そして政治家、政府の職員、警察や軍の官僚、起業家などの上流階級の名士を集めた、表舞台に立てる組織を設立したかったのである(この場合の上流階級とは、貴族的な存在ではなく新興ブルジョワジーなどのことを指す。1930年代の上海における貴族は、ソ連から亡命してきた白系ロシア人の貴族がそのほとんどを占めている)。

なお、恒社は法律上法人として設立しており、注冊登記を行い法律的に法人登録して社会に公表した。そして、恒社に加入したものを社員と呼ぶ。また、後述するが恒社の趣旨や実際の活動内容を鑑みると、政治団体としての側面以上に、杜月笙がトップとなった秘密結社という側面が強い¹⁶⁹。ただし、恒社は法律的に問題のない合法的な組織であり、国民政府社会部の認可を得て、フランス租界当局の注冊登記を行っている。そのため、性質的には秘密結社のそれであるが、対外的には「公開結社」としてオープンに活動を行うことになった¹⁷⁰。そして、社員に対して会社法人のように給与を支払うのではなく、社員から会費を徴収しており、これが恒社の重要な活動資金となっていた。会費の金額は後述する恒社の社章に記されており、毎月2元か5元のどちらかとなっているが、実際には金額が上がる形で変容性が

あった。また、当然ではあるが杜月笙が得た利益を恒社の活動費にすることもあったため、組織としての予算や資金は豊富に存在していた。

杜月笙が上海にて大きな利益と地位を得ることこそ、恒社の一番の命題であった¹⁷¹。恒社に加入するための条件も厳格で、杜月笙の門弟をはじめ黒社会の人材の大多数は、恒社に加入できなかった。量より質を重視する方針であり、加入条件として具体的には①公務員などは科長以上。②軍人などは少将以上。③工業や商業に関する人は主任以上。④年齢は30歳以上。というもので、最後に杜月笙による審査が入る¹⁷²。また、杜月笙が加入してほしい人物を勧誘し、相手が了承すれば加入することも多かった。その他、青幫の加入儀式に比べて入社式は簡略なものになっており、二の足を踏む表社会の人物の、加入へのハードルを下げている、という点も挙げられる。社員にしたい表社会の人物の特徴を鑑みた際、伝統的な青幫組織の字輩制度では、人員が十分に集まらないことを理解していた。そのため、恒社はあくまでも門生制であり、現代的で洗練された組織として装うことが重要であった¹⁷³。後述する社章には、入会するためには恒社の社員の推薦が2人以上必要であるとしてあるが、杜月笙が実権を握っている組織であるため、直接勧誘した場合はその限りではないと考えられる¹⁷⁴。社員の特徴としては、前述したように高級クラブとしての存在感を出すため、管見の限り青幫などの黒社会の人物は極力少なくし、表社会で名の通った上海やその周辺都市の名士が中心となっている¹⁷⁵。青幫の構成員とは青幫を介して関係を維持しており、恒社は青幫との差別化を図り新たな人材を求めていた。

また、社員も上海人だけでなく、浙江、安徽、江蘇などからも集まってきており、各地の有力者を引き入れたことがわかる。杜月笙が香港や重慶に行った際には、その土地の有力者も引き入れている。それぞれの立場は政界、財界、警官などが多い。例を挙げると、上海市社会局恵工股主任である王剛、上海警察総隊第五中隊長である江声涛、上海華商電気公司発電廠に努めている李炳星などがおり、黒社会とは別物の、真っ当な肩書を持つ人物が中心となっている。ただし、中には商界、学界とのみ記されており、具体的な役職が伏せられている社員もいる。社員の職業は国民党の役員（特に上海に務めているもの）、方錫圭など上海市の役人、水祥雲など郵務工会など労働組合の委員長、鄭正秋など京劇や映画会の名優や、徐懋棠（中滙銀行総経理）など銀行の役員なども恒社の社員として迎えられていた¹⁷⁶。また、恒社は政治団体である以上、どのような思想であるかを問われるが、杜月笙自身が大別した場合はナショナリストの系統となり、一応は保守的な団体として体裁を保っていた。国民党員も朱学范、呉紹澍、辺定還など複数人が加入しており、共産党員は日中戦争後にならないと見受けられず、第三勢力の人物も章士釗¹⁷⁷など少数在籍していたのみであることからそのことが伺える¹⁷⁸。ただし、杜月笙は日本人との付き合いも多く、日中戦争時期においても徐采丞と連絡を取り日本軍と物資交換の取引を行っていた¹⁷⁹。杜月笙側の物資は亜鉛、アンチモン、スズ、アヘンなどであり、日本軍側は紗、綿花などの衣服に使う布地類であった。

¹⁸⁰。

恒社という組織に人物が続々と加入した理由について、一番大きな要因として杜月笙個

人の名前や影響力の大きさが挙げられる。杜月笙は黒社会の首領として大きな勢力を持っており、表社会にもその名前は大きく知られていた。また、表社会での経済活動では、基本的に黒社会の人間として青幫の構成員を連れて暴れたりするようなことはなく、あくまでも表社会のやり方の範囲内で活動していたことも影響があろう。当然、慈善活動においてはそのような黒社会のやり方は、資金の拠出を除き行っていない。そのため、杜月笙との関係性や利益の追求により、表社会の人物でも恒社へと入社するものが大勢いたのである。

恒社の由来としては、「自強不息如日月之有恒（自ら努め励ますことを怠らなければ、常に太陽や月のように存在するようなものである）」という典籍を踏まえて付けられたものである。つまり、恒社及び杜月笙の栄光が永遠に続くように、という意味が含まれている。また、恒社には英語名が存在しており、「Constant Club」という名前が付けられている。直訳すれば「永久倶楽部」つまり、この名前は恒社という漢字の意味に基づき直訳したものとなる¹⁸¹。フランス租界に設立したが、中国語名の外には英語名であった。これはおそらく、フランス租界に特化せずに共同租界を含めた（共同租界は英語表記である）展開を考えていたものと思われる。

恒社の趣旨としては「進徳修業 崇道尚義 互信互助 服務社会 効忠国家（徳を積んで業を修め、道を崇めて義を尊び、互いを信じ互いを助け、社会に対して服務して、国家に忠義を尽くす）」というものである。恒社を設立した杜月笙が青幫出身の人物であるからか、雰囲気としては現代的な営利団体のようなものではなく、中国古来の秘密結社からの影響が強い趣旨であるといえよう。また、「服務社会、効忠国家」の文面から、統治者にとって都合のいい政治団体としての側面も含まれている。

恒社の主要な存在として、社員大会および理事会が挙げられる。理事が何かを変更する場合は選挙が必要であるが、これは形式上のものであり、実際には杜月笙が全て事前に賛成する人選を行っている。そのため社員大会は形式的なものであり実権はなく、決まっているものを手筈通りに進めるだけの内部組織となっていた。恒社の社章や規定、理事会などの規則は、実際には杜月笙を中心に陸京士や万墨林¹⁸²、唐世昌らが決定しており、具体的な方針は杜月笙、あるいは陸京士が取り決めており、日常の庶務は万墨林が行っていた¹⁸³。陸京士も恒社の大会で、恒社は杜月笙個人のための組織であり、ただ1つの中心に杜月笙が存在し、恒社の社員は杜月笙の犬馬のように働くことが必須だと演説を行っていた¹⁸⁴。ただ、恒社の全てを杜月笙やその周辺だけで決めることは負担が大きなものとなる。そのため、理事会の下にある細かい組織や仕事は恒社の社員に任せていた。総務、秘書、会計、庶務、設計、娯楽、京劇、宴会、経済、旅行、交際、教育、体育、衛生、撮影、職の紹介といった活動である¹⁸⁵。非常に範囲の広い活動であるが、これは杜月笙に集まった人材が豊富であるからこそできたことである。そして、社交クラブとしての割合にも比重を占めており、大きな役割を果たしていたといえよう。このような活動は会報誌である『恒社月刊』にも掲載していた。これは名前の通り月刊の会報誌であったが、日中戦争時期には発刊停止、日中戦争後も不定期発行となった¹⁸⁶。ただし、安全上の問題などにより秘密とされた出来事、あるいは恒社に

において重要とみなされた出来事については非掲載であった。例えば、1933年に宋子文が世界経済会議に出席した後、上海に移動した際に暗殺計画が持ち上がっていた。そのため宋子文が杜月笙に連絡し、暗殺防止のため恒社の社員を動員したことなどが挙げられる。この時には杜月笙をはじめとした中心人物、あるいは関係者のみで情報を共有しており、一般の社員には問題を知らせていない¹⁸⁷。

社章は第一章から第六章まであり、名前は恒社とする、この組織は相互扶助を目的とするなどと定められている。カッコ内が意識となる。

恒社社章（恒社社章）

第一章 総綱（総則）

第一条 本社以連絡感情互相扶助為宗旨（訳、以下同じ 本社は感情をつらね相互扶助をすることを趣旨とする）。

第二条 本社定名恒社（本社の名前は恒社と定める）。

第三条 本社設総社于上海、如国内外地方有社員三十人以上、經呈由總社許可者、得設立分社（本社は上海に本社を設置し、国内外の地方で社員が30人以上となった場合、本社の許可を経由した者については、分社の設立ができる）。

第二章 社員（社員）

第四条 本社社員須經本社社員二人以上之介紹、填就志願書、經理事会之通過、填發社証（本社社員になるためには本社の社員の2人以上の紹介を得なければならず、志願書を書き入れ、理事会の通過をしてから、社員証を発行する）。

第五条 本社社員應負繳納社費暨遵守社章之必務（本社社員は社費を納め、社章を順守する義務を負う）。

第六条 本社社員有左（下）列情況之一者、得由理事会宣告出社（本社社員で下記のような状況へとなったものは、理事会から退会の宣告を得る）

甲、不納社費在二星期以上者（甲、社費を2週間以上納めなかった者）

乙、損杯本社全体名譽者（本社全体の名譽を損害した者）。

第三章 組織（組織）

第七条 本社設理事会、以理事十九人候補理事十一人組織之、為本社最高執行機關、其人選由社員大會推定之、任期二年、連選得連任、但不得過三次（本社は理事会を設置し、理事19人と候補理事（理事に欠員が出た場合に代わりに理事の職務を行う役割）11人での組織を持ち、本社の最高執行機関とし、その人選は社員大会によって推挙されるものとし、任期は2年、続けて選ばれた場合は続けて任命されるが、3期以上は任命されないものとする）。

第八条 理事会下設常務理事会、以常務理事九人組成之、在理事会停開期間代表理事会行使權力、其人選由理事会推定之（理事会の下に常務理事会を設置し、常務理事は9人で構成されるものとして、理事会の閉会中には代表理事会としての権力を行使で

き、その人選も理事会で推挙されるものとする)。

第九条 理事会的組織条例另訂之 (理事会の組織の条例はこれとは別に取り決める)。

第四章 会期 (会期)

第十条 本社社員大会每半年举行一次、分春秋兩季举行之、惟如有特別事故、或經社員三十人以上之請求、理事会得招集臨時社員大会 (本社社員の大会は半年に1回举行するものし、春と秋に分け両方で举行するが、ただし特別な事態が発生した場合や、あるいは社員30人以上の請求があれば、理事会は臨時の社員大会を招集する)。

第五章 経費 (経費)

第十一条 本社経費分特別、經常二種 (本社の経費は特別費、經常費の二種類に分けられる)。

甲、特別費。特別費之征集分下列二種 (甲、特別費について。特別費の徴収は下記の2種類に分けられる)

(1) 経社員大会議決者 (社員大会の議決を得たとき)

(2) 由社員及非社員自動捐助者 (社員および非社員が自発的に義援金を送るとき)。

乙、經常費。經常費分每月五元及二元二種、每半年征收一次、或按月付給、由社員自認、但均得享同等權利 (乙、經常費について。經常費は毎月5元および2元の2種類に分けられ、半年に1度徴収されるか、あるいは毎月支払うことで、社員となり、同等の權利を均等に享受する)。

第六章 附則 (補足)

第一二条 本社章如有未尽善処、得由理事五人以上或社員三十人以上之提議、經社員大会通過修改之 (本社章は善処を尽くしていない場合は、理事5人以上あるいは社員30人以上の提議を得ることによって、社員大会を通して変更できる)。

第十三条 本社章自社員大会通過日起發生効力 (本社章は社員大会の通過によりその日から効力の発生が起こる¹⁸⁸)。

この社章を見る限り、杜月笙は表社会でも活躍をするため、第四条にみられるように加入条件が厳格で、第十一条の社費の金額を見るに高級な存在感を持つ組織を作ろうとしていたことが伺える。表面上は第七、八、十条を見る限り、近代的な社章を持った組織のように見受けられる。もちろん実態は杜月笙個人のための組織であり、社章も建前の部分が多い。しかし、杜月笙の属している青幫と比べた場合は、非常に近代的で洗練された雰囲気をもっている。ここに前述したような、上海市社会局恵工股主任である王剛、上海警察総隊第五中隊長である江声涛、さらには国民党側のみならず第三勢力である章士釗など、表社会の名士を加入させようという意図を感じる。そして、自身が理事長となる組織において、上海をはじめとした上流階級の人物が多数在籍することにより、表社会と黒社会、両方の世界で杜月笙は権力や名声をより高めていこうとしていたことが読み取れる。

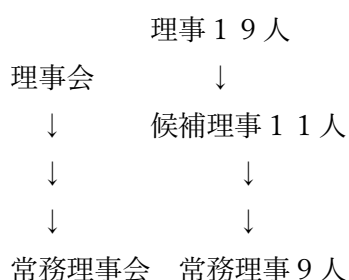
次に、この社章について一条ずつ詳細に見ていくと、第一条では青幫からの影響が相互扶助の目的も入れた秘密結社の雰囲気をうかがえる。この条文を第一条に持ってくるあたり、影響を色濃く受けていることがわかる。また、相互に連絡を取り合うとわざわざ記載されて

いることから、情報収集に非常に重きを置いたこともわかる。第二条は、恒社の名前を定めているが、前述した英語名は特に見受けられない。あくまで正式な名称は恒社のみなのであろう。第三条には、初めから上海以外の地域や、ひいては海外展開までも視野に入れていたことがわかる。そして、杜月笙自身が分社を管理するのではなく、あくまでも恒社社員が分社を設立して運営することを示唆している。

第四条は、実際には有名無実となっており、杜月笙が直接勧誘するか、あるいは認可が必要であった。しかし、この条文からは簡単には恒社には入れない、という意思表示を行っていると考えられる。第五条では、社費（第十一条にあるように毎月2元か5元のどちらか）を収めることが明記されており、社章を遵守することと同格に扱われている。別項にしないことも意外であるが、さらに通常の社費だけでなく、社員の財産に応じて別途費用を要求していた。金銭に対する執着の強さが理解できる。第六条には、退会処分の規定が書かれており社費を2週間納めなかった場合退会処分にするなど、期限が厳しく設定されていることがわかる。他に恒社の名誉を棄損した場合退会処分にする規定が書かれているのみであり、全体としては大まかな規定である。

第七条は理事の選び方であるが、実際は杜月笙と腹心で理事を決定しており、これもまた有名無実と化した条項であった。ただ、3期以上は任命されないと明言されているなど、表面上は洗練された民主的な組織として振る舞いたかったことが理解できる。第八条では、理事会の下に常務理事会を設置するとあり、理事会に閉会があることがわかる。第九条に関しては不明瞭な部分があり、理事会の規定を改定することがわざわざ明記されている。社章は全ての部分で改定される可能性があるため（後述するが理事会以外の社章の部分も改定が入っている）、九条において明記している。杜月笙が思い通りに組織を動かすため、わざわざ注記して改定しやすくした可能性がある。

なお、恒社の組織は以下のようにになっている。



第十条は、社員大会について規定されている。半年に1回定期的に開くこと、条件を満たせば臨時で開かれるとしている。前述したように、陸京士が杜月笙に尽くすよう演説するなど、恒社の方針を伝達する役割を担っていた。第十一条では、経費（社費含む）について、特別費と経常費双方の記載がなされている。全体的にこの社章は金銭に関して詳しく扱っているが、この条文もその1つであり経常費の集金方法まで記されている。5元と2元の2

種類あることについては、前述したように社員の財産に合わせて適用されたと考えられる。特別費は後述するが、義援金を募るチャリティー公演の費用など、緊急の出費の際に適用されたと考えられる。第十二条にて、社章の変更するための条件を、理事と社員でそれぞれ明示している。理事5人であれば、杜月笙の声掛けで素早く動員できるため、形式上は社章を貴ぶという形で役立てられる。第十三条には、社章を変更した際に、変更点がいつから適用されるか書かれている。大会を通過した当日から適用されるとあり、変更点をできる限り早く適用しかつた、ということが理解できる。

第2節 恒社の発展とその特色

恒社の社員人数であるが、1933年の正式な結成当初は「130人」余りの社員数であった。しかし、その後1年余りの1934年時点で「324人」に上っている。1936年には「520人」余りに上り、日中戦争前には「564人」にまで増加した。これは恒社本社の社員数であり、公開された社員のみ的人数である。1936年冬頃の恒社最盛期では、杜月笙の門下生が開いた分社や非公開の社員を含めた場合「1500人」を超えていた¹⁸⁹。結成当初は130人余りの社員であったため、5年で10倍以上の社員を迎え入れたことになる。全体の半数以上は商業界の人間であり、杜月笙は恒社をきっかけとして表社会、特に商業界に大きく深入りしようという考えがあったものと思われる。当時は恒社の社員は「8000人」、あるいは「1万人」を超えるといった流言も飛び交っていたが、実際にはどれだけ多く見積もったとしても「2000人」に満たない人数であった¹⁹⁰。恒社単体の場合最も人数が多い時でも、実際には人数を拡大していった日中戦争後に、非公表の社員を含めて約「1500人」であったといわれる¹⁹¹。ただし、1万人の社員が存在するという流言が飛び交ったということは、当時それだけの勢力や存在感が恒社には存在していたということでもある。恒社の目的である、上流階級の人物を集めた社交クラブで、杜月笙の影響力を大いに高めるといふ目的は無事に達成されており、成功を収めていたといつてよい。

1934年の段階では、恒社の社員324人の内、起業家をはじめとした経済界の人物が44パーセント、国民党員や警察官などの要人が約30パーセントを占めていた。他には、文化界からも恒社に参加しており、表社会での名士たちを集めていたことがわかる¹⁹²。そして、1937年の日中戦争前の段階では恒社の社員564人中402人の職業が掲載されており、経済界の人物が54パーセント、国民党員や公務員などが24パーセント、弁護士や医者、教師などが13パーセント、軍人が3パーセントとなっている。これらの恒社の社員の内、80パーセントは上海在住であり、5パーセントが南京在住、残り15パーセントが浙江省と江蘇省に在住していた¹⁹³。杜月笙の権力は一部分とはいえ、首都である南京にまで及んでいたのである。恒社の社員の内、経済界の人物が多い理由としては、経済界で大きな成功を収めていた杜月笙の勢力や影響力を利用しやすく、特にしがらみもなかったことが挙げられる。一方で軍人が少なかった理由として、不興とまではいかないものの蒋介石にとってマイナスのイメージを抱かれたくない、と考えるものが多かったことが挙げられる。

これは杜月笙と蔣介石が対立していたわけではなく、蔣介石は軍人が、自分以外の人物の門下生になることを嫌っていたためとされる。そのため、杜月笙や恒社に軍人が訪れることは多かったが、多くは個人的な交友関係であり恒社に入ることはなかった¹⁹⁴。

また、杜月笙は中でも重役に関して、各業界の連絡をするように頼んでいる。特に経済界の大物数十人に対しては、杜月笙の邸宅に頻繁に出入りしていた¹⁹⁵。ただし、その際に恒社で行う活動内容は、恒社内での飲食パーティー、賭博、アヘンの摂取（吸飲をはじめ、スープにして飲む、丸薬にして食べるといった方法も含む）、ダンスを舞う、中国の伝統劇を鑑賞するなどして遊び惚けるものであった。このような活動を大々的に行う祝賀会も結構な頻度で開催しており、1936年10月には第22回目の祝賀会が行われている。平均2か月に1回のペースで、複数日に及ぶ大規模なパーティーが開かれていた¹⁹⁶。つまり、穿った見方をすれば恒社は上海の上流階級の名士たちが、秘密裏にアヘンや賭博に興じ、京劇をはじめとした伝統劇を鑑賞して娯楽に耽る組織であった。このような外部に公表しにくい活動を行っており、黒社会の秘密結社の雰囲気を残している。実際に恒社社員の賭博仲間からは、賭博場としての恒社は好評であった。杜月笙邸宅と隣り合わせであるため警察も簡単には介入できず、かつ杜月笙自身も賭博好きであったため、毎晩のように賭博行為が行われていた。高級クラブとしての側面もあった上に、入場料も特に徴収していなかったため、非常に都合がよかったのである¹⁹⁷。当然、基本的に恒社の活動は外部に向けた活動、後述するチャリティー公演の協力、協賛などを除き外部に非公開とされていた。そのためか、恒社自体の資金額は管見の限り不明である。

杜月笙の恒社結成をきっかけに、青幫出身の人物が恒社に影響を受けた組織を相次いで設立しており、1935年5月に張仁奎の「仁社」、1936年夏頃に黄金榮の「忠信社（後に「榮社」に改名）」などが設立された。しかし、政治的な影響力や経済的な影響力を鑑みると、このような組織で一番の中心はやはり杜月笙の恒社であった¹⁹⁸。また、黄金榮の忠信社は、杜月笙の恒社の繁栄を快く思っていなかった。その一番の原因として、1936年初めに黄金榮の門下が杜月笙の門下に追い落とされる事態が発生したことが挙げられる。忠信社は、恒社内部における社員同士の対立を利用して、恒社の破壊工作を行うことも目的の1つとしていた。ただし、黄金榮の門下を追い落とすことを気に留めていたのか、杜月笙も警戒していた部分がありその試みは上手くはいかなかった¹⁹⁹。なお、忠信社には大世界の支配人である丁永昌や、映画界の重鎮である張善琨などがメンバーとして加わっている²⁰⁰。恒社との共通点として、上下関係の厳しい門下ではなく同じグループのメンバーという側面が強いということ、手続きを簡略化し組織のトップが気に入った人物を勧誘しやすくしている（手続きが面倒だと加入に二の足を踏む人が出る）、点が挙げられる。また、恒社も忠信社もメンバーを政界や財界の上流階級を中心として集めていた。黒社会とは異なり、表の世界では先進的かつ洗練された組織であり、上流階級のステータスといったイメージを作り上げることが大事であった²⁰¹。

しかし、そのような恒社の活動も、日中戦争時期に入るとある程度変化が起こる。日中戦

争時期における恒社社員の活動の1つとして、戴笠率いる軍統と深い関係のある蘇浙皖行動委員会別動隊の第2、第3支隊を陸京士、朱学范などの恒社の社員が率いており、支隊の下にある大隊、大隊の下にある中隊にも恒社社員が複数在籍して活動していた。隊員の中には学生、労働者が多数存在しており、恒社社員は接近している。これらの部隊は浦東に攻撃基地を設立し、日中戦争で中国側が勝利するまで名前を変えながらも活動をつづけていた²⁰²。この別動隊は戴笠も関わっていたためか、中級クラスの軍人が所属し軍官訓練班を設置して、短期コースではあったが軍統の入門用（初級者向け）訓練を隊員に行っていたとされる²⁰³。ただし、この別動隊はそもそもの武器が不足しており、訓練自体も全体としては乏しく、さらにはそもそもの軍隊経験のないものが多かった。そのため、日中戦争時期にずっと存在して活動していたものの、戦力としては多少相手にゆさぶりをかける程度のものであった。結局、国民党軍が上海から南京へと撤退したこともあり、1937年11月12日に上海は日本軍によって陥落した²⁰⁴。

恒社は杜月笙あつての組織であるため、杜月笙が香港へと避難した後は活動の中心が香港へと移っていった。恒社の社員も一部が上海に留まったものの、大部分は重慶、桂林、香港など上海以外の地域に分散した。ただし、毎年杜月笙の誕生日には恒社の社員が香港に集まり、杜月笙の祝賀を行っている²⁰⁵。また、活動の中心は香港であるが、あくまで本社は上海のままであり、香港の恒社は分社の扱いであった。場所は香港で2つ借りた杜月笙の住居のうち、九龍の「柯士甸道」(Austin Road) 110号の方である。もう1つの住居は「告羅士打大廈」(Gloucester Tower) 706号であり、こちらは個人的に客をもてなし対外的な連絡を取るなど、自宅としての役割が強い²⁰⁶。杜月笙が香港に移動した1937年当時、柯士甸道の方は海に面した閑静な住宅地であり、告羅士打大廈の方は香港で最大のホテルであった²⁰⁷。そのため、国民党や上海など各方面に連絡を取る際には告羅士打大廈で、身内で策を練る際には柯士甸道を選んだと考えられる。なお、杜月笙が香港にいる間、上海での恒社の本社は徐榮堂と汪曼雲の2人に運営を任せていた。ただし、この2人は汪精衛政権が成立した後は汪精衛政権側に付いており、日本の興亜院の上海トップであった坂田少佐と七十六号(ジェスフィールド76号、以下七十六号)と深い関わりがあった河野少佐と懇意の関係となりながらも杜月笙と連絡を取っていた²⁰⁸。それまで恒社で事務を請け負っていた万墨林は、杜月笙の邸宅の管理をはじめ、杜月笙が上海に不在の間杜月笙本人が上海に残した財産の管理や、上海の情報の連絡などを行っている²⁰⁹。

杜月笙は香港の名士たちを恒社の社員へと勧誘し始めた。当面は香港で生活する必要があったが、杜月笙は上海出身であり広東語を話す地域には行ったことがなかった。そのため広東語が話せず、香港人と接するときは通訳を付けて活動を行っていたと考えられる²¹⁰。もう1つの変化は、香港のイギリス当局が杜月笙に対し、違法行為をする可能性があるとして監視していたことである。当然、杜月笙もそれで行動を大きく自粛することはなく、香港の青幫と結託しアヘンの密貿易を行うなどしていた。しかし、地元ではなく、活動も通訳がほぼ必須となり、イギリス当局がマークしている、ということが重なり、上海にいた時ほどに

は自由に活動することはできなかった²¹¹。とはいえ、杜月笙は香港という地の利を生かし、重慶国民政府の指示のもと上海に働きかけ、汪精衛側の密約を暴露するなどフィクサーの役割を果たしている。日本軍に占拠された上海においても、万墨林など杜月笙の腹心をはじめ、数は少ないものの恒社の社員が存在していたため、杜月笙は連絡を取り合って指示を出していた。ただし、恒社の社員の中には杜月笙と決別し汪精衛側に寝返った、汪曼雲、張克昌といった人物もいた²¹²。なお、杜月笙は香港の黒社会勢力である、致公堂、三合会などとも連絡を取り合っていたが、特に親密な関係というわけではなかった。前述したように、イギリス当局にマークされているため、管見の限り現地の黒社会勢力と抗争を起こすことはなく、表面上はおとなしくしており、青幫と結託する方に重きを置いていた²¹³。

重慶に恒社の分社が設立されたのは1939年であり、陶希聖、高宗武が香港から重慶へと移動したのちに設立され、所在地は臨江路19号に置かれていた。ただし、活動が本格化したのは1941年、太平洋戦争が勃発する直前の11月16日に杜月笙が重慶へと移動してからのことである。杜月笙は重慶の名士たちを恒社の社員へと勧誘していた。正確な人数は不明であるが、人数は多く集まっており、各種機関の職員や工業や商業界、金融界や文化人などが恒社へと入社した。また、杜月笙のかねてからの友人も、同じく重慶へと移動していたため、恒社の社員も上海の頃からある程度引き継がれている²¹⁴。他、孔祥熙の部下である辺定遠なども入社しており、杜月笙と孔祥熙との関係は深いものとなっていた。ただし、この2人が恒社において大きな影響力を持っていたため、杜月笙の部下と孔祥熙の部下とで派閥ができてしまった。杜月笙はそういった状況を理解しており、むしろ自身の都合のいいように利用して組織を操っていたとされる²¹⁵。そのため、恒社の組織が機能不全に陥ったり、組織が分解するようなことはなかった。なお、重慶の恒社は中国東南地方の人物が多かったため、上海の舞台を見慣れていなかった。そういった状況もあり、恒社が主催した上海式の舞台は斬新で人気を博しており、重慶の名士を集めるのに一役買っていた²¹⁶。

ただし、重慶黒社会は青幫の勢力より袍哥（主に四川省で勢力を誇った黒社会の秘密結社で、哥老会の系統）の勢力の方が強く、香港のように青幫同士で協力し合う、利益を手に入れるといった活動は管見の限りほとんど見られなかった。また、杜月笙は喘息の持病があったのだが、重慶の高温多湿な気候が病状に合わず、体調不良になりがちで避暑地で過ごすことも多かった。そのため競争を避けたという側面もある²¹⁷。また、戴笠の協力もあり、重慶及びその周辺の黒社会の人物を集めて「人民行動委員会」という組織を作り、お互いに連絡を取り合っていた²¹⁸。1942年に杜月笙が成都で仕事をしている際にも、袍哥側が1000人以上の人間を集めて杜月笙を接待してもてなすこともあった²¹⁹。そのため、表面上は協力体制を敷き友好関係を築こうとしていたことがわかる。

しかし、恒社自体は重慶に拠点を移してから勢いを持っていたためか、1943年に恒社が青年軍のパレードを出迎えていた際に袍哥に襲撃されるといった事件をはじめ、表社会よりも黒社会側にライバル視されていたことが伺える。恒社側もこの事件に対し大ごとにはせず、杜月笙も喘息の持病で療養していたため特に動くことはなかった。そのため、戴

笠が事件を調査したが、犯人の逮捕までには至らなかった²²⁰。杜月笙は重慶に滞在していた時期、喘息のため夏場は重慶の南側にある汪山で療養していた。汪山は重慶の都市部に比べ冷涼な気候であり、避暑地として最適であった。ただし、汪山から重慶の都市部まで40キロメートル以上の距離があり、移動する際に時間がかかることが難点であった²²¹。そのような交通面での問題もあり、この事件にて杜月笙が消極的な対応を取ったと考えられる。

また、杜月笙が重慶に移動した時期に恒社を政党化しようという動きがあった。恒社の社員である章士釗は1940年代、第三勢力である民主派の政党が次々と乱立する中で恒社を政党にしようと提言している。しかし、恒社の社員の大多数は恒社を政党化させるために必要な要件の大多数を満たさないとして反対した。杜月笙自身も、やはり今の恒社では政党の要件を満たさないとして、あまり乗り気ではなかった²²²。結果として、恒社は政党になることはなく、あくまでも政治団体かつ高級クラブとしての地位に留まり続けた。

杜月笙は重慶にて地盤がなかったため、上海での交友関係を生かして新規に事業を立ち上げており、それが恒社の一番重要な活動資金源となっていた。その中には、日本軍と物資の取引を行うものも存在したが、そちらは第6章及び前掲「上海黒社会と日中戦争」を参照されたい²²³。これらの恒社での活動および事業活動は、1945年6月25日に杜月笙が蒋介石の指示により、重慶から貴陽へと移動するまで本格的に活動していた。なお、杜月笙が重慶に移動する前年から、上海の恒社は前述した2人に加え、1940年に杜月笙が蒋介石の命を受け、上海にて汪精衛政権の妨害工作を行うために成立させた「統一委員会」の委員が、恒社の管理を行っていた²²⁴。統一委員会を含む上海の国民党組織自体は、汪精衛側の破壊工作や、蒋介石側から汪精衛側に寝返るなどして瓦解することになった²²⁵。後に杜月笙が上海へと戻った際に、上海の恒社は大きく勢力を回復させる必要が生じており、本社地も新たに探す必要があった²²⁶。

第3節 恒社の衰退とその影響

日中戦争が中国の勝利で終わり、貴陽や芷江、淳安にて活動していた杜月笙は、杭州を経由して上海へと戻った。上海に到着したのは1945年9月3日のことである²²⁷。しかし、それと同時期に杜月笙の勢力も衰えを見せ始めており、恒社もまた勢いに陰りが見え始めた。理由としては、杜月笙が上海を離れている間に、上海黒社会にて勢力を蓄え伸ばした人物と競争にさらされたことや、戴笠もまた1946年には事故死してしまったこと、租界にいた外国人も租界を失い影響力、人数ともに減少したことなどが挙げられる。上記に加え、後ろ盾となっていた蒋介石が、青幫などの黒社会と距離を置き始めたことや杜月笙の影響力低下が原因で、杜月笙とも距離を置き始めたことが挙げられる。日中戦争時期に杜月笙は香港や重慶にて勢力の拡大を図り、それは成功したのだが、これらの都市は上海から距離があり直接的な影響力を持つことはなかった。ただし、上海にて恒社の影響力そのものが消滅したわけではなく、杜月笙も再起を図ろうと考えていた。その一環として、上海に恒社の本社を戻し、活動を再開することにした。

1945年10月には恒社の社員20人余りを集めて、恒社本社の住所をどこにするのかについて、座談会という形で議論を行っている。そして、恒社の社員である徐大統が経営している製紙業の会社にて、江西路に土地や建物の融通が利くビル物件があるため臨時の本社を置くことが決定した。そして1946年には戦後第一次恒社社員大会を開催した。この大会では、恒社の社員は汪精衛側や日本側に寝返ったものを除き、参加の通知が届いている。ただし、社員として除名することはなく、個別に連絡を取り合っていた²²⁸。この大会にて決定したことは、①恒社の本社所在地は「林森路」（現在は淮海中路）に新しくビルを建設すること。そのための資金として恒社の社員から集めた金の延べ棒72本分を用意した。②社員名簿を編纂し、社員434人を登記した。③恒社の選挙を行い、理事会と幹事会のメンバーを決定した。理事は14人、監事は6人で、常務理事は陸京士、唐瀆之、杜維藩（杜月笙の長男）、郭蘭馨の4人、常務監事は江肇銘が選出された。理事や監事の中には、軍統の人物が複数人含まれていた²²⁹。なお、新社屋用の土地は、社員から集めた金の延べ棒を元に、租界の外国人から2畝分の土地を買い上げた。その土地に3階建ての社屋を建設することにして、建物の内部には大会場、舞台、レストラン、ホテル、図書館などを備えた設計であった。

しかし、結局この新社屋は上海解放からの恒社の活動終焉まで、完成することはなかった。理由として、依頼を受けた社員が消極的でありあまり動いていなかったことが挙げられる²³⁰。そもそもの恒社の活動自体、全体として低調なものとなっており、恒社に訪れる人数も日中戦争前に比べて多くはなく、社員の士気や積極性も大幅に下がっていた。原因としては、杜月笙の勢力や影響力の低下や、杜月笙が喘息など病気がちで恒社の社員になかなか会えなかったことに加え、臨時の社屋が今1つ不便な立地であり、来社しにくく集まりにくいことが挙げられる。恒社の社員である顧嘉棠が代理で取り仕切ることも多かったが、杜月笙や恒社の下には、利害関係で動くものが数多く集まっていたためか、恒社に大きく関心を寄せる人物も少なくなっていた²³¹。

ただし、恒社の社員数自体は増加しており、1947年の時点で910人となっていた。また、国民党員や軍統、高級官僚や、一般企業でも部長や董事長などが恒社に入社することも増えている²³²。杜月笙が香港や重慶で設立した分社も含め、恒社の社員は中国全土18ヶ所の省や市に存在し、海外にも社員が存在した。前述したように、名前を非公開にしている社員も含めた場合、その数は約1500人にもものぼるという²³³。さらに、日中戦争終結後からは、基本的に国民党側に属していた恒社においても共産党員が加入し始めている。さらに、一度は共産党側から国民党側に属した朱学范などが、再び共産党側に属して反蒋介石の立場を明確にするなど、恒社の組織において変容が見られた²³⁴。なお、陸京士は恒社にて行われている賭博について、実は快く思っていなかった。そのため、前述した戦後の大会にて恒社で賭博を行うことを禁止にするよう主張していた。結果として、恒社の規則に賭博禁止の文言が追加され、賭博場として恒社を利用することはできなくなってしまった²³⁵。杜月笙がこのことを受け入れたことは意外であるが、恒社自体の活動も低調であったことなどから、

杜月笙自身も恒社への関心が薄れていった可能性がある。

杜月笙の勢力は衰え、恒社の活動も低調なものになったが、全く活動していなかったわけではない。例えば、国民党の官僚と共に、義援金を募るチャリティー活動を行っていた。東北難民救済協会のチャリティー公演にて、宋美齡が発起人となり、孔祥熙や杜月笙が免責を負った。杜月笙が恒社の社員を動員して、梅蘭芳やその弟子らが「四五花洞」を講演した。その後、孔祥熙も協力した恒社の社員を国際飯店によび大きな宴会を開き、大いに盛り上がったことから、上海に戻った後の恒社においても、杜月笙だけでなく恒社の社員も孔祥熙と関係を持っていたことがわかる。また、蘇北難民協会のチャリティー公演にて、江蘇省主席である王懋功らが発起人となり、恒社の協力のもと公演を行うことになった。杜月笙の四番目の妻である姚玉蘭が参加した「吊金龜」を講演し、大勢の人が募金を行っている²³⁶。

1946年4月28日に投票が行われた上海市参議員選挙にて、杜月笙が青幫をはじめとした影響力を行使して選挙戦を優位に進めた。この選挙は『申報』をはじめ上海の新聞を大いに賑わせるものであり、杜月笙や金廷蓀、万墨林など様々な候補者の記事が掲載されている。1946年4月28日の『申報』では「第一回市参議員 今日投票選挙」という大見出しで選挙の報道がなされており、各候補の名前と顔写真、経歴などが掲載されている²³⁷。そのように盛り上がった選挙であり、杜月笙らは非常に気合を入れて活動した。結果、杜月笙は上海市参議員選挙にて当選、さらには8月13日に行われた議長選出選挙においても、180票中116票を獲得し杜月笙は議長に当選した。また選挙に当選した30名余りの参議員が恒社の社員であったとされる²³⁸。例としてかつ金廷蓀や万墨林など杜月笙の腹心や呉紹澍や唐世昌などが、当選した立候補者に挙げられる²³⁹。しかし、蔣介石は自身の部下である潘公展を参議会議長にしたかったため、選挙戦中に杜月笙に辞退するように伝えていた。そのため、杜月笙は意気消沈して参議会議長を辞退することになった²⁴⁰。その後に行った投票にて、潘公展は議長に任命され、共産党が上海を解放するまで議長の役職を務めていた。

1949年3月に杜月笙は上海を離れ香港へと向かったが、この時に恒社は事実上の終焉を迎えた。活動自体が停滞していたことに加え、恒社の社員の大多数は上海に留まり、杜月笙と香港に同伴したものは少なかったのである。そのため、日中戦争時期後に恒社が拡大して発展を遂げていたのかどうかは、杜月笙の勢力に陰りが見られたことも含めて疑問が残る。実際、杜月笙が1949年に香港へと移動した後は、喘息が悪化していたこともあり、活動自体がかなり控えめなものとなっており、恒社の活動も行われていなかった。結果、杜月笙が1951年に香港で亡くなった後、理事長が不在となり組織は正式に解体した²⁴¹。もとより杜月笙が設立した、杜月笙のための組織という色合いが非常に強く、杜月笙が存在しないまま存続させる類のものではなかった。息子の杜維藩も次期理事長に内定していたが、恒社の理事長を引き継ぐことはなかった²⁴²。杜月笙の他の子供も、上海に留まって共産党側についている、海外に居住しており青幫とは関係なく生活している、という事情もあり勢力基盤を引き継ぐことはなかった。杜維藩も始めは上海に留まり、その後台湾で杜月笙の墓に

て墓守を行い暮らしていた²⁴³。その理由の1つとして、中国の黒社会は血縁によって代々引き継がれることは多くなかったことが挙げられる。事実、黄金栄の息子や張嘯林の息子も、管見の限り親の勢力を基盤にして黒社会で活動することはなかった。

また、青幫をはじめとした黒社会自体が、上海解放後は非常に弱体化していた。杜月笙を門下に収めていた黄金栄も、晩年は上海で妻に財産の多くを持ち逃げされ、共産党には大世界や新世界、共舞台などを接収されたため、非常に質素に暮らさざるを得なかった²⁴⁴。黄金栄ですら黒社会では活動せずに共産党側に従っていたことから、青幫をはじめとした黒社会の組織は非常に困難な立場に置かれていた。また上海解放後、国民党側の組織は一切の活動停止、解散を命令されている。1949年6月6日の布告から始まり、1951年2月21日に公布された「懲治反革命条例」の徹底的な施行を経て、1956年までには黒社会の住人を含む「反革命分子」のほとんどが消滅したとされる²⁴⁵。この中には社会の底辺層に位置する住民も含まれており、1950年だけでも6万3800人も収容されている。賭博場も1951年に全て閉鎖され、1953年までには娼婦を約7600人収容して娼婦の制度をほぼ廃止、アヘンの吸飲や売買も1952年までに3500人以上が逮捕、10万人の中毒者が監視されていた。これらの人物の大部分を帰郷させて（上海一都市で管理しきれないためか）、生産活動を行わせている²⁴⁶。このような事情もあり、無理に青幫の有力者が設立した組織を続ける意味はなく、陸京士など、最後まで残っていた恒社の社員も特に恒社や青幫といった組織にこだわることもなくなった。恒社の社員である朱学范の毅社、辺定遠の靖社など、恒社と同じような組織を分社として開設していたが、やはり恒社の解体や上海解放に伴いほとんどが活動を終了させている²⁴⁷。なお、杜月笙の葬儀は上海においても執り行われたが、懲治反革命条例の関係か、集合した青幫の構成員は逮捕されている²⁴⁸。上海においては、もはや恒社を存続させたくとも存続させられるような状況ではなくなっていた。なお、第7章で後述するが、上海を含めた中国全土や香港では青幫はほぼ消滅したが、台湾では青幫自体は消滅したもののその後継組織はいくつも存在しており、国共両党とも多少の関係性を保持している。ただし、後継組織のどれもが黒社会とはあまり関係のない非政府組織となっている。

おわりに

杜月笙は黒社会だけに留まるつもりはなく、表社会や政治の舞台にも大々的に進出する計画を立てていた。特に四・一二クーデター実行後はその傾向が顕著になり、恒社の設立もその一環として大きな意味を持っている。そうして上海黒社会の首領に留まらず、上海の表社会の首領としての地位を手に入れようと活動していた。恒社の存在は、そのような杜月笙の活動を大きく手助けするものとなった。第3章において、以下の結論が導き出せる。

第一に、杜月笙が恒社を設立した背景には、黒社会だけでなく表社会においてもトップクラスの大きな勢力を持つという目標があった。中匯銀行の董事長になり、申報の董事長にも就任したことをはじめ、多くの会社の重役に就任したことがその証左である。また、恒社と

いう組織を設立する際には、陸京士、陳群、万墨林といった側近たちの影響が大きかった。政治団体の名目を取ったのも、表社会において経済界だけでなく、政界にも進出しようと考えていたことが伺える。

第二に、恒社は日中戦争時期に入るまで順調に人員を増やしており、杜月笙という名前や杜月笙個人の影響力に興味を示して入社していた。また、上海以外にも近場の浙江省や江蘇省、首都の南京においても人材が集まっており、上海以外においてもある程度の影響を及ぼしていた。このことから、上海の恒社は日中戦争時期に入るまで非常に順調であったことがわかる。

第三に、恒社は杜月笙が表社会で大きな勢力を持つことを手助けしたが、具体的な実績そのものは不明瞭な部分が多い。さらに恒社の具体的な活動は、高級な社交クラブとして賭博や宴会などが多数を占めていたものの、集まった人員は政界や経済界の大物が多かった。そのため、上海やその周辺地域の政治家がお伺いを立てるため恒社に訪れており、政治的な影響力を持つに至った。

第四に、杜月笙は恒社を自分のための組織としており、半ば私物化していた。つまり、恒社あつての杜月笙ではなく、あくまでも杜月笙あつての恒社であった。そのため、恒社の影響力や権益はほぼそのまま杜月笙の影響力や権益、利益に追加されている。また、上海の名士として自身が主体となり、トップであり続ける組織を持つ、という実績を得た。

第五に、恒社は杜月笙の居住先が移るに従って、活動の本拠地も変わっていった。また、移動先でも勢力を持つに至り、香港では現地の青幫や経済界などから勧誘して社員にしており、重慶においては影響力を持った結果、袍哥による襲撃事件など、地元の勢力とのトラブルが発生して妨害行為を受けていた。しかしそれでも、現地において恒社の活動自体が困難になることはなく、ある程度は順調に勢力を作り上げたといえよう。

第六に、日中戦争で中国が勝利した後杜月笙は上海へと戻ったが、杜月笙の勢力に陰りが見られると同時に活動は低調となってしまう、恒社の社員の士気や積極性が低下していた。恒社の新社屋の建設も、依頼を受けた人物があまり積極的に行わず結局完成することはなかった。しかしそれでも、1946年の上海市参議員選挙で恒社の社員が30人以上当選しており、影響力が完全に消滅したわけではない、といったことが明らかになった。

最後に意義と限界であるが、意義として杜月笙の影響力や利益、権益といったものに関して、恒社という組織はプラスの方向に作用した。杜月笙にとって、恒社を設立したことによるマイナスの影響は特になく、かつ陸京士や万墨林などに多くを任せられた結果、恒社に組織運営で掛かりきりで疲弊することもなく、よい影響を受けた。また、杜月笙あつての恒社であり、杜月笙は恒社という組織がなければ何もできない、という状態には決してならなかった。そういった意味でも、恒社の存在はデメリットにならず、杜月笙にプラスの作用をもたらした。一方で限界としては、あくまでも恒社は杜月笙の活動や影響力や利益、権益を補佐する性質のものであった。そのため、日中戦争に中国が勝利した後、杜月笙の勢力に陰りが見えると恒社の活動も衰退し、1949年3月に香港へ移動した際、恒社は事実上消滅した。そ

の部分に限界となろう。

また、杜月笙自身の意義と限界だけでなく、社会的影響の意義と限界についても結論を述べたい。意義として、第一に、上海クラブのような租界の外国人が加入する社交クラブだけでなく、中国人主体の社交クラブにおいても、負けず劣らずの高級クラブができ上がったことである。これは経済面のみならず、文化面においてもイギリスやフランスなどの、租界の外国人と肩を並べることができた証左である。国力や貧富の格差もあり、中国人がなかなか追いつくことができなかったが、1930年代になりその差はかなり縮まったといえる。

第二に、一応は国民党側にそったナショナリストである杜月笙が、政治の舞台に大きな影響を与えたことである。これによって、蒋介石率いる国民党側の安定に一役買った。共産党の勢力を一時は大きく抑え込み、日本軍との戦いにも汪精衛側の秘密を暴き張嘯林や傅筱庵などの漢奸を暗殺するなど、フィクサーとして役割を果たした。

次に限界であるが、恒社はあえて政党への道を踏み出さず、あくまでの国民党側の政治団体に留まったことにより、国民党側の失墜に抗えなくなったことである。また、共産党側につくことができない以上、香港や台湾に活動拠点を移す必要があったが、香港では三合会などとの勢力争いに敗れ、台湾では青幫の影響力がほとんど存在しないことから、後世に残るような社会的な影響力もなく、消滅してしまった。この点に限界であろう。

第4章 杜月笙の慈善活動とその特色

—黄金栄、張嘯林らとの関係—

はじめに

杜月笙は上海黒社会の出身であり、三鑫公司でのアヘンの売買や賭博場の経営など黒社会での活動で頭角を現した、いわゆる大物マフィアとして有名である。また、黒社会とは別のまっとうな経済活動も大々的に行い、中淮銀行の董事長や『申報』の董事長をはじめ、各企業や団体の役員に就任しており、浙江財閥である虞洽卿や上海租界の富豪とも並び立つ存在であった。さらに、蔣介石の指示を承るフィクサーとしても活動し四・一二クーデターを引き起こし、日中戦争期の汪精衛側の密約を暴露させるなど、中国の政治にも大きく関わっている。他にも、孔祥熙や宋子良などといった四大家族との深い交友関係や、戴笠などの軍統とも密接な関係を築いており、これにより日本軍との取引などの権益を手に入れていた。しかし、杜月笙は自身が利益を得てそれで終わり、という人物ではなく、実は慈善家としての側面も持ち合わせていた。チャリティー公演の主催を行う、あるいは自ら出費して洪水などの被災者に対し寄付を行うなどといった慈善活動も積極的に行っていた。このような慈善活動を行うための資金源として、上記に挙げた黒社会での無頼活動や経済活動からまかなっている。つまり、杜月笙はまっとうな手段でない、いわゆる黒社会にて非合法な手段で稼いだ金を慈善活動というまっとうな方法で使う、という一見すれば非常に不可思議な行動を取っていたのである。ただ先に結論を述べれば、清末から中華民国時代の黒社会の人物の間では、黒社会の人物という肩書だけでなくいわゆる「表社会」で通用する慈善家としての肩書を得るために、慈善活動を行うということは珍しくなかった。杜月笙も例にもれず、上海における名士としての評判や肩書を手に入れるため、慈善活動を行っていたという側面は否めない。一方で、杜月笙の慈善活動は極めてまっとうな活動であると同時に、表社会へと進出する際に重要な役割を果たしたにも関わらず、杜月笙研究にて重要視されているとはいえない。そこで、第4章では杜月笙の慈善活動の具体的な内容、および杜月笙に与えた影響について明らかにする²⁴⁹。

次に先行研究であるが、杜月笙に関する先行研究自体は非常に数多くのものが存在している。しかし、杜月笙に関する慈善活動を中心に扱った論文は、残念ながら管見の限り存在しない。ただし、部分的に扱った論文はいくつか存在しており、①邵雍「杜月笙与上海抗日救亡運動」（『抗日戦争研究』2000年第2期、6月）は、杜月笙が行った抗日活動を中心に研究した論文である。第二次上海事変を中心に、戦災にあった難民、その中でも負傷した難民に対し臨時の病院を開いて受け入れる、といった記述が存在する。この論文では、平時の慈善活動は取り扱っていないものの、戦時の慈善活動に関しては論文の中心ではないが取り扱っている。他にも専門的な研究ではないが、杜月笙の慈善活動を中心に扱った記事が

複数存在する。②白華山「杜月笙与上海市地方協会」(『上海師範大学学报』第32卷第2期、2003年3月)では、杜月笙が上海租界で存在していた、上海市地方協会に対してどのように関わっていたのかを研究している。その中で、杜月笙らが慈善活動を行ったという記述をしている。ただし、あくまで論文の中心は杜月笙および上海市地方協会の政治、経済での活動や影響であり、慈善活動に関するものは一部分のみである。記事においては③刘雪芹「上海灘“三大亨”的慈善行為」(『世紀』2007年第3期、5月)は、3頁ほどの記事であり、杜月笙・黄金榮・張嘯林の3人が行った慈善活動に関して扱っている。学校を設立した、水害に対して義援金を寄付した、戦災による難民を救援した、貧困家庭を支援した、という内容を記している。頁数の都合上、個々の事例については浅く広くとなっているが、具体的な数字が複数取り上げている。④馬広志「民国“黒老大”的“慈善”」(『華夏時報』2012年4月9日)は、2頁の記事である。杜月笙の慈善活動を広範囲で取り上げており、1922年に発生した浙江省の水害で、被災者に対して義援金を送る所から、1937年8月13日からの第二次上海事変で発生した難民の救済までを記事にしている。数多くの事例や金額を挙げているが、細かい日付を書いておらずやや具体性に欠ける²⁵⁰。

これらの先行研究や記事を鑑みるに、杜月笙は長期間にわたり慈善活動を積極的に行っていたことが判明している。しかし、前述したように、慈善活動を中心とした論文は管見の限り存在せず、研究対象としてはあまり注目されていないと考えられる。杜月笙の政治的な活動や、黒社会における活動、経済的な活動に関する研究は進んでいるだけに、このことはやや意外であった。しかしながら、杜月笙が慈善活動を行ったことにより社会的な名声を高め、黒社会だけに留まらず、名士で固められている表社会にも進出しやすくなったことは間違いない。杜月笙が中国の歴史上重要な役割を果たしたということを鑑みても、これは非常に重要なことであろう。その上で、第4章にて明らかにすることとして、第一に杜月笙はなぜ慈善活動を積極的に行っていたのか、表社会の進出や名声以外に理由が存在するのか、その動機を詳細に明らかにする。第二に、杜月笙はどのような慈善活動を行い具体的にどれだけの金額、活動などを行っていたのかを明らかにする。第三に慈善活動を行う際の資金源は具体的にどのように調達していたのか、といったことを明らかにする。

第1節 平時における慈善活動

1920年代から40年代の上海において、慈善活動や社会福祉といった存在は、主に民間団体によって行われていた。理由としては、政治情勢が不安定で権力者が次々と変わっていったことから、行政の権力や影響力がさほど強力ではなく、福祉まで手が回らなかったことが挙げられる。捨て子を引き取り育てる育嬰堂や、遊民などを正業に就かせるための貧民習芸所、ホームレスを収容する新普育堂、行き倒れた人の埋葬を行う普善山荘など、前近代から存在する善堂を民間団体が運営していたのである。なお、杜月笙らが加入した青幫においても、青幫の構成員同士で相互扶助が義務付けられており、宿や食事を提供することがあった²⁵¹。

そのような時代背景もあり、杜月笙・黄金栄・張嘯林の3人は慈善活動に積極的であった。その中でも、杜月笙の慈善活動として取り上げられるものは、災害時の救済活動や戦時下の救済活動といった緊急時における慈善活動が多い。ただし、それ以外にも平時における慈善活動や救済活動も当然行っていた。学校を複数設立し、助成金を拠出したことも、杜月笙が行った慈善活動の内の1つである。杜月笙が学校の設立を積極的に行った理由として、1つは幼少期の杜月笙は貧困にあえいでおり、伝記類では半年ほどしか学校に行けなかったとされており、文字の読み書きが苦手であったことが挙げられる²⁵²。もう1つの理由は、黄金栄の部下である黄鈞培が設立した中法義務学校（1931年に金栄小学校に改名）において、黄金栄が理事長をしていたことである。のちに、杜月笙も董事としてこの学校の経営に関わっていることから、影響を与えていたと考えられる²⁵³。

杜月笙が設立した学校の1つに、（おそらく1931年頃に設立した）正始中学が挙げられる。フランス租界の善鐘路（Say Zoong Rue de）に設立され、杜月笙が董事長となり、杜月笙と交友の深い陳群が校長に就任していた²⁵⁴。毎年学校の経費を助成しており、1933年6月には洋2万元（洋とは銀貨のこと、以降銀貨と書く）もの金額を出している²⁵⁵。また、杜月笙が祖廟の落成式を終えた後、浦東高橋鎮にある祖廟の敷地内に、10万元を投じて浦東杜氏蔵書楼を設立した。それと同時に、学校も設立した²⁵⁶。この学校は教育を受けたくても受けられない子供たちのために設立したとあり、完全な免費、無償の学校であった²⁵⁷。その他、江蘇科技大学の前身である上海大公職業学校の設立に関して、杜月笙は設立のための資金を出していた²⁵⁸。このことから、杜月笙は学校の建設及び経営資金の提出という形で、教育に関する慈善活動を行っていたことがわかる。また、必要な資金においては大金を惜しまなかったことから、関心も高く熱心であったことが伺える。

また、杜月笙は自身の門弟である金廷蓀及び、黄金栄や張嘯林と共に寧波仏教孤児院に対して銀貨500元ずつ寄付した。1930年11月2日の『申報』にて広告が出されており、合計で2000元を寄付している²⁵⁹。杜月笙単独でも寧波仏教孤児院と四明孤児院に対し、それぞれ1000元の助成金を出しており、1931年7月25日の『申報』にも広告が出されている²⁶⁰。孤児院に何度も金銭的な援助を行った理由としては、杜月笙自身の生い立ちも深く影響していると考えられる。序章にて前述したが、杜月笙は幼少期に父親が亡くなり、母親も行方不明となり、叔父に育てられるもそりが合わず、14歳の頃には上海租界へ移住し1人暮らしをしており、その生活も非常に貧しいものであった。そのため、杜月笙が子供の環境改善に深い関心を示し、慈善活動を行った側面も大きかったと考えられる。

また、杜月笙は学校の他に病院も設立していた。1931年、杜月笙は門弟の金廷蓀と共に1万元以上を投じて浙江省に寧波市時疫医院と仁濟医院を設立した。また、1933年5月には杜月笙と虞洽卿らが協力して虹口平民時疫医院を設立している。当時これらの病院は重症患者を入院させ、費用は一切取らなかった。そして、重症患者でなくとも予防接種の費用は掛からず、患者に無償提供を行っていた²⁶¹。杜月笙は自身が設立に関わった病院で院長になったことが気に入ったのか、1931年の祖廟落成式の前後（主に6、7月中）の『申

報』にて、自身が院長を務める病院の宣伝を毎日のように行っていた。北西藏路（現在は西藏北路）に開設された急救時疫医院の広告内などに、大きく「院長 杜月笙」と掲載されている²⁶²。また、前述したように杜月笙は自身の祖廟に学校を併設したが、病院も同時に併設していた。この病院は、貧困層が治療を受けられる病院がない、という理由で作られた病院であり、やはり完全な無料、無償の病院であった²⁶³。その他、祖廟落成記念という名目で、杜月笙が院長としての立場で5000元を投じて薬を施しており、上海華隆中医医院院長である丁濟萬が広告で謹啓を出している²⁶⁴。つまり、杜月笙は医療関係の慈善活動にも大いに関心を持っており、積極的に慈善活動を行っていたことがわかる。その慈善活動の内容も、病院の設立から薬の費用を捻出するなど、多岐にわたっていた。また、『申報』などの広告を見る限り、杜月笙は院長という肩書を好んで使用していたことが伺える。

その他、第2章で前述したが杜月笙は祖廟落成式に合わせて、数多くの慈善活動を行っていたことがわかる。理由として、杜月笙の祖廟落成式は上海史上において非常に注目を集めた式典であり、それに合わせて慈善活動を行えば名声や人気は相乗効果で上がっていく、ということが大きい。また、杜月笙自身がいわゆる紳士的な名士、上海のドンを目指していたということも大いに関係している。杜月笙は人前では暑くても長袍を着ており、周りの人物や世間一般の評価に対して関心を払っていたことが伺える²⁶⁵。

さらに杜月笙は1918年以降、毎年夏になると伝染病予防のため衛生面を改善する活動を毎日のように行っていた。例として、「痧薬水」「行軍散」といった大量の医薬品を薬局で販売していた。特に、杜月笙の故郷である浦東高橋鎮では不定期に1軒1軒回り、これらの薬の無償提供を行っていた²⁶⁶。夏場に医薬品関係の慈善活動を行った理由として、夏は衛生的な問題からか病気にかかりやすいと考え、伝染病の流行を予防するためであった。そして毎年旧暦12月の冬になると木綿の衣類を販売し、故郷の浦東高橋鎮の貧困層には無償提供を行っていた。他にも、浦東高橋鎮に架かった石橋を23本修理し、港には観音堂を設立した²⁶⁷。杜月笙は特に何かの宗教を篤く信仰していたわけではなかったが、青幫は羅教（仏教系の民間信仰）をベースに設立された秘密結社であることも一因であると考えられる。ただし、後述する上海城隍廟の修繕に深くかかわるのだが、これは道教の廟であるため、仏教系だけに傾倒していたわけでない。その他、旧暦1日、15日には杜月笙の公館にて、200軒以上の人々が救済金として、若干の生活費を受け取りに来ていた²⁶⁸。その他、1926年には杜月笙や黄金栄らが上海乞丐收容所を設立した。つまり、杜月笙は医療関係の慈善活動において、病院のみにこだわっていたわけではなく、医薬品類や伝染病の予防にも力を入れていたことがわかる。病院にかかる余裕がない人間が大勢存在することを当然知っていたため、そこまで体調や症状が悪化する前に予防に努める必要がある、と考えて行動していたと推測される。

また、杜月笙以外にも黄金栄や張嘯林も慈善活動を行っており、『申報』などの新聞にて慈善活動を行ったという記事が存在する。1930年12月8日の『申報』にて、黄金栄は囚人に対し、特製の綿衣類100着を江蘇第二監獄へと送ったという記事が掲載されてい

た。特に家族のいない囚人や、寒さを凌ぐ衣類を持たない囚人に衣類を送った、という内容であった²⁶⁹。さらに同年12月17日の『申報』にて、黄金栄が再び衣類を江蘇第二監獄へと送った、という記事が掲載されている。これは、江蘇第二監獄では囚人が1700人近く収監されており、寒さを凌ぐ衣類が不足している。12月6日に綿衣類100着を送ったが、それだけでは足りなかったため、16日に追加で衣類を送った、という内容である。ただし、追加の衣類の枚数は記事内に存在せず、具体的な数は不明である²⁷⁰。このことから、黄金栄も慈善活動を行う対象を上海のみに絞らず、別の地域にも関心を示し慈善活動を行っていたことがわかる。黄金栄も杜月笙と同じく、上海だけに活動を留める気はなく、中国全土に名前を広める意思があったと考えられる。その一方で後述するが、黄金栄は慈善活動に関してやや金銭的な見返りを求めて行っている側面が強かった。しかし、囚人に衣類を送る活動で見返りを求めることは不可能であり、全ての活動で金銭的な見返りを求めていたわけではなかった。

1936年7月27日の『申報』にて、張嘯林は寰球学生会の会所を建設するための費用を集めたとあり、その額は合計で銀貨6万元を超えた、という記事がある。この記事では、元々寰球中国学生会総幹事である朱少屏が会所を新築するためにチャリティーを開き4万元を集めたが、それでは足りなかったため、それを聞きつけた張嘯林が杜月笙と共に発起人となり義捐金を募った結果、各省主席や中央各院、部、会、長らが協力したため2万元以上集まり、合計で6万元以上が集まった、という内容である。その中には王曉籟、虞洽卿、銭新之、呉開先、傅筱庵²⁷¹などがおり、6万元の保管委員会会議を開いた結果、銭新之が主席となり管理することになった²⁷²。記事内にて、張嘯林が特に熱心に活動していたとあり、張嘯林もまた慈善活動には熱心であったこと、そして学生とも関係を持ってことがわかる。

第2節 災害時における慈善活動

杜月笙の慈善活動の中で、災害時に行われた救済活動は1922年、浙江省で発生した水害から始まったとされる。杜月笙は上海で行われた募捐遊芝大会に参加し、銀貨300元を寄付して被災者の救済に充てていた。結構な巨額の大金であったためか、上海の名声に大きく寄与したという²⁷³。また、1924年には黄金栄は杜月笙・張嘯林や、経済界の富豪であった葉惠鈞・秦硯畦と連絡を取りを設立して、上海城隍廟（城隍神を祭祀する為の廟、道教の全一教）を再建し始めた²⁷⁴。この城隍廟は1922年から1924年にかけて、3度もの火災によって全焼してしまったため、再建する際に巨額の投資が必要となったのである。城隍廟の再建は1926年4月に施工され、1927年11月には完成した。費用は9万元におよび、黄金栄5万元、杜月笙1万元、張嘯林1万元を出資しており、一般にも寄付を募っていた²⁷⁵。なお、完成後に黄金栄を中心に功德を称える功德碑を設立し、黄金栄の門弟である程錫文に管理させたため、毎年数十万元の手数料（おそらく出店などのテナント料）が黄金栄に入ってきており、程錫文も大きな収入があったため、財を成し富豪となったという。これ以降、金銭的な見返りが見込めるためか、黄金栄は積極的に慈善活動を行うようになって

た²⁷⁶。慈善活動は善意での行為や社会的地位や名声を手にするだけでなく、時には金銭的な利益を手にするこゝもあつたのだ。

他にも、杜月笙は救援を求められれば上海やその周辺地域以外の人物とも面会し、上海にて義捐金を募るこゝもあつた。例として、1931年の陝西省で流行していた感染症における対策のため、朱慶瀾²⁷⁷は義捐金を集めるため上海に来ており、その際に杜月笙と張嘯林と面会していた。そして、杜月笙と張嘯林は朱慶瀾に協力することを誓い、華格臬路(wagner rue)にあつた私邸(杜月笙と張嘯林の自宅は隣り合つている)で9日に義捐金を募つている。100人以上が集まつており、杜月笙と張嘯林はそれぞれ5000元を出し、金廷蓀や傅筱庵らが1000元を出しており、合計で6万1020元の義捐金が集まつた²⁷⁸。

また、1931年に発生した蘇北の水害では、杜月笙・黄金榮・張嘯林の3人は義捐金を集めるために奔走し、黄金榮の64歳の誕生日記念祭に銀貨5万元以上集め、全額被災者に寄付をした²⁷⁹。『申報』の広告においても、杜月笙が祖廟落成記念の援助金として1200元を寄付した、という内容が見られる²⁸⁰。この1931年の水害は、7月中旬から9月にかけて、長江、黄河、珠江、松花江などの流域で大雨が降つたこゝで発生し、当時の中国における全人口の4分の1である、約1億人が被災した²⁸¹。各地の住居、建物が流され跡形もなくなり、衛生面の問題から感染症も流行し、人々の生活が重大な危機にさらされた。そのため、同年8月16日に国民政府水災救済委員会が設立され、宋子文が委員長と財務組主任を担当し、孔祥熙が連絡組主任、宋子橋が災区工作组主任、虞洽卿が運輸組主任をそれぞれ担当した。水災救済委員会は全国の慈善団体、あるいは独自に設立された救済委員会に義捐金を求め、全国の名士に委員になってくれるよう協力を要請した。これに杜月笙、張嘯林、王曉籟、熊希齡²⁸²らが委員になるために行動し、杜月笙は水災救済委員会に対し、3度にわたり洋1000元を寄付している²⁸³。

それ以外にも、杜月笙は江蘇省政府の募金活動にも参加しており、1931年7月30日の江蘇省賑務委員会にて王一亭が勸募主任となり、杜月笙は勸募委員(勸募は寄付を募る、募金をするといった意味)となつた。8月18日には、江蘇省賑務委員会の下で江蘇水災義賑会が設立され、杜月笙、張嘯林、王曉籟ら15人が常務委員となつた。この組織の支援内容は6種類あり、被災者用の収容所を開設すること、緊急の救済活動、児童の養育、医薬品の提供、死者の埋葬、職を失つた人への公共事業での仕事が挙げられる。さらに上海市民に対して結婚式の祝い金、飲食費用などの工面、あるいは穀物類の援助や衣類の寄付をするよう呼びかけた。委員に就任した後、杜月笙は募金活動を始めており、16人の個人投資家から3367元を寄付してもらい、自身も1000元を寄付し、合計で4367元を寄付した²⁸⁴。

また、杜月笙は政府が主催する救済活動以外にも、当然ながら民間の慈善団体の救済活動にも参加していた。1931年8月6日に、商業団体や慈善団体など上海各界が集まり上海籌募各省水災急賑会が成立し、許世英²⁸⁵が主席、王一亭が副主任、杜月笙、張嘯林、王曉籟、虞洽卿ら11人が常務委員となつた。急賑会が成立後、新聞各紙に常務委員及び全体主任の

名前で広告を出しており、その内容は難民を救うため金銭、麵粉、医薬品、衣服の寄付を募集している、というものであった。国民政府賑務委員会の協力もあり、8月17日には急賑会に対し500組もの寄付があり、各組1000元もの寄付を行っていた。政府機関の協力によって、杜月笙、張嘯林、王曉籟らは勸募組委員となっている²⁸⁶。杜月笙は委員になったあと、数々の寄付活動を行っていた。例として8月31日に、水災急賑会において全体執行委員会議が行われ、張嘯林が我々の不動産にて、大家の家賃収入を寄付金に充ててもらい、他の市民にも寄付を行ってもらおう雰囲気を作ろう、という提案をした際、杜月笙も同意した。そのため杜月笙は、自身が所有している不動産である月華坊（華徳路、Ward Roadにある）の、2か月分の収入である6600元を全額寄付した。そして、10月14日に水災急賑会内で勸募房租委員会が成立し、杜月笙、張嘯林、王曉籟、王一亭、朱子橋、許世英、虞洽卿らが特別委員に就任した²⁸⁷。

その他、杜月笙は喜喪（天寿を全うした人の葬儀）においても寄付を行っている。1931年9月に上海で袁礼敦²⁸⁸の父親が89歳で亡くなった時、杜月笙は張嘯林、王曉籟、虞洽卿らに呼び掛けて、葬儀の参列者からの香典を寧波旅滬同郷会に送付しており、合計で銀貨1万2000元が集まった²⁸⁹。

また、杜月笙は各種チャリティーも行っている。杜月笙、王一亭、王曉籟、許世英、朱子橋、張嘯林らと上海籌募各省水災急遊芸大会を開催し、9月11日から15日まで葉氏路にあった葉家花園で行った。この葉家花園は、上海競馬場と並ぶ競馬場である江湾競馬場を設立した、葉貽銓が所有する花園である。大会の敷地内では、義捐金は募集せず、代わりに各工場や商店が国産の日用品を援助して会場に用意し、専用の会計所で売買した金額を義援金に充てた。杜月笙と王曉籟は会計と監事を担当している²⁹⁰。さらに9月13日、杜月笙と張嘯林らは、自身が所有している逸園で茶会を開き、市長である張群²⁹¹をはじめ各界から数百人が来場した。この茶会で、競馬による賭博活動において、各競馬場から賞金を除いた掛け金を収めることに決定した。9月25日に発行された、慈善活動のための馬券は10元であり、それが10万票に上ったため100万元が集まった。この慈善活動の発起人は合計で5万票以上買っており、杜月笙は2000票を購入して2万元分を義援金として送っている。そして、100万元の掛け金の内、賞金として払い戻されたのは20万元に留まり、残りの80万元が利益となった。そこからさらに20万元を競馬場側の協力者の収入にして、残り60万元を義援金として送った。ただし、それだけだと赤字になるため、その分は杜月笙や張嘯林らが総董を務める中国賽馬会が負担していた。杜月笙らが購入した当たり馬券からも、合計5万元の義捐金を送り、中国賽馬会に所属している馬主からも1000元の義援金を寄付した²⁹²。

それ以外にも、杜月笙は張嘯林、王曉籟と共に14日から16日の3日間にかけて、黄金栄から大舞台を借りて公演を行い、収益の59500元全てを上海籌募各省水災急遊芸大会に送っている²⁹³。最終的に、上海籌募各省水災急賑会は1932年5月24日に活動を終息させたが、それまでに集まった義援金は261万1771元に上り、その内260万70

49元を義援金として寄付している。杜月笙個人の寄付金額は53万元に上り、全体の5分の1をも占めていた²⁹⁴。

1934年4月5日の『申報』にて、黄河の水害にて被災した河北、河南、山東の各省を杜月笙が支援した記事が掲載されている。内容は、杜月笙が被災した地域における農業の振興のため、義捐金を1000元送っている。また、北京路365号にある国華大樓の第6楼に、中国華洋義賑救災總會の駐滬事務所があり、そこで各界に義捐金を募った結果、13万元以上集まった。この義捐金は、主に山東省の荷澤、河北省の濮陽、東明、長垣、豫之、考城、蘭封、滑縣の農地振興のために使われており、それぞれ2万元の義捐金が送られた（蘭封のみ1万元）、というものである²⁹⁵。

一方で、1934年の年末には、長江や淮河流域、および華北で発生した干ばつによって、江蘇、浙江、安徽、湖南、湖北、広西、山東、河南の8省が被害を受けており、上海へと逃れた難民は数えきれないほどであった。杜月笙は、当時行政院副院長であり財政部長である孔祥熙をはじめ、許世英、王正廷、王震（杜月笙との関係や、1934年末という時期を鑑みるに、おそらく王一亭の本名の方であり、共産党の方の王震ではないと考えられる）と共に上海籌募各省干災義振会を設立し、杜月笙自ら組長（主任）に就任して救済活動を行った²⁹⁶。ただし、被災範囲が非常に広大であるため、杜月笙らが直接義捐金を渡すのではなく、上海市銀行公会に各省に義捐金を給付することになった。当初の目標は200万元であり、これを集めるためチャリティー公演を行うことにし、梅蘭芳ら京劇の俳優を呼んで上演することにした。黄金榮が所有している栄記大舞台で講演を行い、演目は「金山寺」「四郎探母」などであった。チケットは大洋（こちらが銀貨、以降銀貨と書く）で集め、1元のチケットが30枚、2元のチケットが24枚、5元のチケットが48枚、10元のチケットが24枚売れた。なお、このチケットは杜月笙自身や張嘯林らも購入しており、チケットの売上金額は銀貨600元となった。チケットの売上の多くが各銀行による義捐金であり、中国銀行が100元、交通銀行が100元、上海商業儲蓄銀行が40元、その他各銀行が36元分の寄付を行った²⁹⁷。この他、小学校から大学まで、ボーイスカウトにも寄付を募り（500人以上を動員して街頭募金を行った結果、1日で8000元以上集まった）、経済界から労働者まで寄付を募り、1軒1軒訪問して寄付を募った結果、チャリティー公演の分を合わせて200万元を集めることに成功した²⁹⁸。

そして、同年12月10日に上海籌募各省干災義振会から「孔祥熙杜月笙為籌款賑災攤銷刷券致銀行公会函」という発表があり、それによると被災地が悲惨な状態であったため困難な義捐金調達を急ぎ行ったが、特に上海籌募各省干災義振会主任である杜月笙先生が梅蘭芳らを集めて栄記大舞台（黄金榮が所有している京劇などを行う大舞台）にて3日間演劇を行い、巨額の義捐金を集めていた。貴会の熱心な慈善の心は、義勇であり、私どもが必要としていた計600元もの銀貨を頂き、幅広く売ることを祈っており、貴方がたにご出席頂いて観覧されることをお願いし、正当な娯楽の中普遍的に救済するという意思是、一挙兩得なものであり、貴方がたの功德は感無量でございます。そして、本会にて購入されたチケット

は既に立て替えており、返却するのは不都合であり、史上まれな災害に関して考えて頂くようお願いしており、チケットを数多く売る必要があり、今現在所有しておられるチケットも迅速に売ることを目指しておりこれを払い戻すことは、企業としては耐えられません。銀行公会宛、上海籌募各省干災義振會會長孔祥熙、副會長許世英、王正廷、王震とある²⁹⁹。このことから、企業や組織として大金を支出したところに対しては、当然の礼儀として謝辞を述べていたことがわかる。その一方で、銀行の連合に対して払い戻しなどのキャンセルはやめるように、と堂々と伝えている部分は大きな勢力や権力を持った人物だからこそできた行為であると理解できる。

杜月笙は日中戦争後も慈善活動や救済活動を行っていた。1946年に発生した蘇北の水災では、杜月笙は蘇北難民救済協会を組織した。上海ミスコンテストなどの手段を用いて20億元もの法幣を集めることにした。非常に高額な金額であるが、これは1940年代の中国でハイパーインフレが発生していたことと、国民党江蘇省党部主任である汪宝瑄との協議で決定したためである。この汪宝瑄はC・C団の陳立夫と親密であり、杜月笙としても陳立夫との関係を重視したという理由もあった³⁰⁰。その結果、汪宝瑄は杜月笙に感謝の意を表し、上海ミスコンテストにて1枚2000万元のチケットを購入した。各人チケットは2000万元分を購入したため、最終的に20億元以上の法幣が集まった。これらの義捐金は、生活に困っていた被災者に割り当てられている³⁰¹。1946年11月10日の『申報』には、上海市籌募委員會（蘇北難民救済協会での上海方面の義捐金集めを担当）の収入が20億2044万4957元、支出が20億2044万4957元であり、ちょうど同じ額になるよう使用していた。そして、上海市籌募委員會を通じて送られた蘇北難民救済協会への義援金が18億2234万5338元であり、残りは利息や必要経費で消費されている。また、蘇北難民救済協会の主任委員は杜月笙で、副主任が呉開先であった³⁰²。ここまで、杜月笙が集団で義捐金を送る場合、寄付を行った側に見返りを与えることが多数あったことがわかる。ボーイスカウトの街頭募金なども行っているが、決してそれだけではなく、チャリティー公演などを行い、寄付をした側（公演を見た人）にも何らかの見返りを与えることを重要視していたと考えられる。

杜月笙の慈善活動は集団で寄付を募る類のものであっても、杜月笙個人も多くの金額を寄付していたものがいくつも存在する。特に災害時の救済活動や戦時下の救済活動といった、緊急性の高いものに関してはこのような手段で義捐金を集めていた。そして、これらの緊急性が高い事案に対する救済活動にて、杜月笙自身の寄付の他に、仲間内を集めて大口の寄付を集め、一般市民や一般企業、銀行などからも寄付を募ることで、義捐金を確保していた。その際に委員会を立ち上げて、杜月笙だけではなく他の人物も集まった、いわゆる組織の力により大きな金額の義捐金を集めていたことがわかった。また、特に大きな金額の支援を募る場合は、チャリティー公演を開いてその収入を義援金に充てるなど、より大々的に活動を行っていたこともわかった。

第3節 戦災における慈善活動

杜月笙は上海を中心に、戦災にあった難民に対して救済活動、支援を行っていた。1924年に発生した第二次奉直戦争（江浙戦争）で江南地方一帯が戦火にまみれ、戦災にあった多くの難民が上海へと押し寄せたが、泊まる宿もなく路上生活を送っており生活は大変なものであった。そこで、杜月笙は各界に援助を行うよう呼び掛けて、自身もチャリティー公演を行い救済活動を行った。10元1枚でチケットを販売し、中でも梅蘭芳の公演は特に人気が高かったという。演劇の項目は「黄天霸単騎拜山」などである³⁰³。杜月笙が主催したチャリティー公演にて、度々梅蘭芳の名前を見かけるが、その理由として梅蘭芳が出演すると多くの観客が集まり義捐金を見込めることに加え、杜月笙が梅蘭芳の演技をおそらく気に入っていたということが挙げられる。

1932年1月28日に第一次上海事変が発生した。そのため、『申報』の董事長であった史量才は、同年1月31日に中国企業銀行集會にて上海市民地方維持会を設立した。会長は史量才で、王曉籟が副会長、杜月笙、張嘯林、虞洽卿らが理事に就任し、抗戦支援と救済活動を行う組織であった³⁰⁴。その中で杜月笙は抗日活動を行っており、その中でも注力したのが戦地救滬工作、いわゆる上海における救済活動であった。自身が創立した正始中学の敷地内に、上海市民地方維持会臨時第四医院を設立し、負傷兵275人を収容した。また、杜月笙夫人や孔祥熙夫人らが合同で上海市民地方維持会第一医院を建立し、負傷兵541人を収容した³⁰⁵。なお、上海市民地方維持会が支援した病院の総数は、臨時のものを含めて80ヶ所以上に上り、収容された負傷兵も7000人以上とされている。各病院の状況を調べ、医薬品や医療関係の品々を配布し、レスキュー隊を設置して前線の負傷兵を救出し、戦災を逃れた難民と共に後方に移送した。負傷兵はまず医療所で応急手当をされた後、重傷者は国民傷兵医院に、軽症者は一般の病院に移されている³⁰⁶。また、戦災による難民に対しては、上海市民地方維持会だけでも200ヶ所以上の収容所を設立し、5万人以上の難民を収容している。空き家を80ヶ所以上工面し、医務を行う人員を300人以上、教師を400人以上配員し、医薬品、日用品、食品を配給した。さらに冬場であったため、一般市民から合計1万着以上の衣類の寄付を募り、難民に配布している³⁰⁷。『申報』などにおいても、上海市民地方維持会の名義で援助を募集しており、杜月笙や張嘯林を含む会員名や協賛した中央銀行や中国銀行の名前も存在している³⁰⁸。

なお、同年2月14日と15日、18日には張嘯林夫人が負傷兵の慰問を行っている。14日と15日に張嘯林夫人が独自に海格路（Avenue Haig）にある紅十字会総医院及び西藏路と新閘路にある各分医院に慰問し、負傷兵1人1人に対して自費で銀貨2元の義捐金を送った³⁰⁹。また、張嘯林本人も13日、上海地方維持会として慰問を行っていた³¹⁰。そして、18日の午後に張嘯林夫人は馬斯南路（Rue Massenet）にある紅十字会第二医院を慰問し、負傷兵に銀貨2元、長官には銀貨4枚の義捐金を送り、医院には医薬品や衣類を援助している³¹¹。おそらくこちらも独自で、かつ自費で義捐金を援助したものと考えられる。なお、上海地方維持会は第一次上海事変収束後に上海地方協会と名前を変えており、会長が史量才、

副会長に杜月笙と銭新之が就任した。史量才が暗殺された後は、後任として杜月笙が会長に就任している³¹²。

このような救済活動を行った理由として特に大きなものは、杜月笙が上海出身であり、自らの地盤や勢力、利益や権益の大部分を上海に持っていたためである³¹³。また、杜月笙は基本的にナショナリストの傾向が存在していたことも、抗日活動に関して比較的強固に支持していたため、戦災に対して救済活動を積極的に行っていた理由の1つである。もっとも、武漢や重慶に移動した蒋介石に付き従わず香港へと移動したことからも、完全に国民党側についていたわけではなく、日本側が勝利した場合でも自身の権益を失わないよう立ち振る舞っていた面も存在する。そして、杜月笙夫人や張嘯林夫人らも救済活動を行っていたことから、黒社会の人物の夫人といえども、半ば公人としての立場を意識しており、かつ救済活動にも積極的に取り組んでいたことがわかる。なお、張嘯林は日中戦争において蒋介石率いる国民党側ではなく、日本側や傀儡政権側についていたが、第一次上海事変の際に杜月笙と共に救済活動を行っていたことから、1932年当時は日本側のみについていたわけではなかった。この段階での張嘯林は、日中双方を上手に立ち回り自身の利益を手に入れようと考え、活動を行っていたと推測される。

また、杜月笙が中心となって組織した浦東同郷会では、慈善活動によって人々の注目を集めていた。第一次上海事変の際に日本軍が侵攻してきた際、浦東同郷会では帰る家のない全ての浦東の人に援助を行うと発表した。そして、同郷会が設立した難民収容所にて、6ヶ所の炊き出し場所と、1万5540元の出資を行った³¹⁴。なお、このような救済活動と並行して、杜月笙は日本側に関する情報収集を行っており、銭新之、劉鴻生³¹⁵とは毎晩のように情報交換を行っており、史量才、王曉籟、黄炎培³¹⁶には毎週手に入れた情報の報告を行っていた。その結果、日本軍は短期間で上海を占領することに失敗し、本国から上海までは兵隊などの補給も難しい。よって、上海やその周辺に留まり続けることは不可能で、海からの大軍を黄浦江に上陸させることも不可能である、という情報を蒋介石や呉鉄城に伝えていた³¹⁷。

また、第一次上海事変の際に日本軍が上海を攻撃し、上海市は多くの被害を受けた。家は破壊され人も亡くなり、その被害は決して少ないものではなかった。その中でも特に、工場や商店などは大部分が破壊され、上海の労働者の失業率は80%に達した³¹⁸。被害が甚大なため、杜月笙は停戦後も上海にて救済活動を行っている。同年4月には、上海市戦区失業工人救済会に義捐金2000元を寄付し、5月には商務印書館職工被難善後会に白米50担（1担50キログラム）を寄付した。その結果、6月に杜月笙は中国紅十字会第一・第二時疫医院院長に推挙され就任し、防疫に着手し始めた³¹⁹。同月、杜月笙らが発起人となり、衛國將士遺族撫育金を設立し、杜月笙は常務委員に任ぜられた。これは、第一次上海事変にて亡くなった兵士の遺族に対し金銭的な支援を行う組織であった。また、8月には難民救済のため黄金栄・張嘯林らと共にチャリティー公演を行い、6万元を集めた³²⁰。なお、発起人は2000元のチケットを購入することになっていたため、杜月笙・黄金栄・張嘯林はそれぞれ2000元を出したことになる。

1937年7月22日、杜月笙や国民党上海市党部の働きによって、地方協会、市商会、市農会など500以上の団体をまとめるために、上海各界抗敵後援会を設立した。杜月笙は組織の中心である主席団成員の1人であり、杜月笙の門弟である陸京士も主席団成員であった（主席団成員は計9人）。この上海各界抗敵後援会の下で、上海市地方協会は活動を行い、杜月笙は戦災にあった難民の救済活動を行っていた。とはいえ、元々上海市地方協会には救済活動を行う部署は存在しない。上海市社会局の提案により、慈善団体連合救災会や中国紅十字会などと合同で、上海市救済委員会を設立して救済活動を行っていた³²¹。活動内容は主に戦火を逃れた難民の救済である。難民に対して炊き出しを行う場所を59ヶ所設立し、難民収容所は上海各界抗敵後援会傘下の組織によって合計で最大140ヶ所以上設立された³²²。また、上海市救済委員会によって医薬組を設立し、医薬組の専門医を置いて治療に当たった。その後、戦況が拡大するにつれ上海へと難民が多く押し寄せていったため、やむなく上海付近の都市である杭州、蘇州、嘉興、湖州などへ難民を送った³²³。

杜月笙は上海市地方協会を通じて、戦災によって失業した労働者の救済や、破壊された工場を国民党地区に移動させるといったことも行っていた。日中戦争が進むにつれて、多くの工場が日本軍によって破壊されたため、工場を休業せざるを得なくなり、それにより数十万の失業者が生まれた。工場を復活させ失業者に職を与えるため、上海市地方協会は遷廠委員会を設立し、上海の閘北一帯の工場を国民党地区に移動させることにした³²⁴。しかし、蔣介石率いる国民党は日本軍に対しある種の不抵抗政策を取っていたためか、当初これらの活動には消極的であった。兵器工場など、戦争に直接関係する工場を少数のみ国民党地区に移動させるにとどめ、多数を占める中小企業の民間工場には興味を示さなかった。そのため、これらの工場の経営者をはじめ、民族資本家は国民党の消極的な対応や、政策を実行する上海市地方協会に反対し始めた³²⁵。その結果1937年9月に行政院宛に榮宗敬ら32人の連名で政府の消極的な対応を批判し、安全な地域に工場を移動させるため、こちら側に助力するよう要請した。同年10月16日には杜月笙らが国民党軍事委員会に対し、国防に係わらない産業や小規模な工場を安全な地域に移動させるための費用を求め、軍事委員会にも政府に働きかけるよう要求した。その結果、上海市地方協会などの団体が動き始め、上海陥落までに148もの民間工場を国民党地区に移動させ、国民党地区の後方における工業発展に一定の成果を見せた³²⁶。

また、浦東同郷会は救助隊を結成し、12か所の難民収容所を設立した。この難民収容所は1939年3月まで活動を行っており、受け入れた難民の数は4186人にも上る³²⁷。

上海陥落後、杜月笙は香港へと移動したが、その際に中央賑濟委員会常務委員、中国紅十字会副会長の肩書を利用して、賑濟委員会第九区賑濟事務所と中国紅十字会総弁事処を設立し、密かに軍統の工作を手助けしていた³²⁸。なお、香港へと移動して後の杜月笙は、日中戦争が中国の勝利で終わり上海へと戻るまで救済活動は停滞していた。戦災による難民を救出することに関しては、香港や重慶へと留まっているため救済活動は困難であった。そのため、第6章で後述するが、慈善活動よりも政治的なフィクサー活動に重点を置くこととな

る。

おわりに

杜月笙の慈善活動は、主に上海租界にて行われていた。そして、上海の周辺地域を始め中国各地においてもある程度行われていた。黒社会の人物が上海の名士、上流階級に位置するためには慈善活動などを積極的に行う必要があり、杜月笙もそれにならって慈善活動を積極的に行っていた。

それを踏まえて判明したこととして、第一に、杜月笙がなぜ慈善活動を積極的に行っていたのか、その理由であるが、表社会で受け入れられるまっとうな肩書を手に入れるため、名声を手にするため慈善活動を積極的に行っていた側面は確かに存在した。杜月笙も積極的に慈善活動を行った結果、慈善家として上海の名士へと名前を連ねることとなった。同時に黒社会の問題のある存在、という肩書を表面上は触れられないよう取り消すことに成功した。もちろん黒社会の人物であることは周知の事実であるが、それを差し引いても上海の表社会に受け入れられ、かつ上海は当然のこと中国全土において名声を手に入れたのである。また、杜月笙は単純に名声を手に入れる、表社会へと進出するためだけに慈善活動を行ったわけではない。それだけにしては、あまりに数多くの慈善活動や救済活動を行っており、その規模も大きなものであり多額の寄付を行っているのだ。さらに、自身の出身地である上海浦東高橋鎮では、貧困者や貧困家庭には無償で薬品、毛布などを提供していたことから、地元への愛着や義侠心も持ち合わせていたことが伺える。肩書や名声、表社会に受け入れられるだけならば、ここまで慈善活動を行う必要はなく、杜月笙は自身のイメージを大切にしたい、いわゆる紳士的な上海のドンになろうとしていたと考えられる。また、本論文の慈善活動とは異なるため割愛したが、杜月笙は新聞記事などで自身を批判された場合、激しく反撃を行うこともあったことから、周りに対して自身に良いイメージを強く与えたかった側面も存在している。

第二に、杜月笙はどのような慈善活動を行っていたのかであるが、基本的に平時では貧困層を対象とした慈善活動を行っており、医薬品や衣類の販売などを毎年夏と冬に行っていたことがわかった。また、杜月笙の故郷である浦東高橋鎮では貧困層に対して無償提供を行っていたことからわかるように、地元に対してはよりよい慈善活動を行っていた。学ぶための場所がない子供や、孤児院にも寄付を行っていることから、慈善活動の基本である貧困問題を解決、または改善する、という面を重視していたのだ。災害時や戦災における救済活動に関しても、非常に積極的に活動を行っている。特に、水災や干ばつが発生した場合は救済委員会を立ち上げ、杜月笙個人だけで行動を完結させず、周りの人間や一般市民も巻き込んで寄付を募っていた。これは杜月笙自身の義侠心も存在しているが、他人と協力することでより大きな存在感を示し、人脈の広さや影響力の大きさを見せたかった、という部分もまた存在している。その結果、杜月笙個人で寄付を行った場合よりも、非常に高額の寄付を行えたことがわかる。

第三に杜月笙が慈善活動や救済活動を行う際の資金源であるが、平常時の慈善活動に関しては、資金源をどこから集めたのか詳細な記述が存在せず、チャリティー公演などの公に寄付を募る行動を取っていないことから、杜月笙が私財を投じて慈善活動を行っていたことがわかる。この私財は当然杜月笙の普段の経済活動、表社会でのまっとうな商業取引だけに留まらず、黒社会でのアヘンの売買や運搬、賭博場経営や娼館経営などといった活動も含まれていたと考えられるが、その場合表に出せない、また記録に残す必要が皆無であるため、詳細不明な部分は出てきてしまう。どちらにせよ、杜月笙が莫大な資金を保持しており、かつ得られる利益や収益が非常に大きなものであったからこそ、このような大々的な慈善活動を行えたことは事実である。また、大型の支援、災害時や戦災に対する救済活動に関しては、チャリティー公演を頻繁に行っており、王曉籟や虞洽卿など様々な人物や組織から大きく寄付を集める、といういわゆるファンドレイジングの手段を取っていた。もちろん、杜月笙個人も（平常時の慈善活動と同じく出所は不明であるが）大金を投じて寄付を行っている。

最後に、杜月笙は人前では名士であり紳士であろうとしていた。それが第4章で述べた慈善活動を積極的に行った理由の1つでもある。実際に杜月笙は、40度近い上海の真夏の猛暑に晒されたとしても、人前では長袍を身に着けていた³²⁹。例として、杜月笙がサッカーをしている写真が残っているが、周りの人物がサッカー用のユニフォーム（上半身はスーツの人物も存在している）を着用している中、杜月笙だけは長袍を着用してサッカーを行っていた³³⁰。

表1 杜月笙の寄付金額一覧（自費分）

1922年	浙江省の水害に対する募損遊芝大会	銀貨3000元
1926年(?)	上海城隍廟を再建するための邑廟董事会	1万元
1930年11月	寧波仏教孤児院	銀貨5000元
1931年3月	陝西省の感染症対策	5000元
1931年7月	寧波仏教孤児院、四明孤児院	各1000元
1931年7月	上海華隆中医医院	500元
1931年7月	蘇北の水害	1200元
1931年8月など	国民政府水災救済委員会	銀貨3000元(1回 1000元、計3回)
1931年8月?	江蘇水災義賑会	1000元
1931年9月	慈善活動のための馬券	2万元
1931年10月?	上海籌募各省水災急賑会	6600元
1931年(?)	浦東杜氏蔵書楼	10万元
1931年	寧波市時疫医院及び仁濟医院	計1万元以上
1932年4月	上海市戦区失業工人救済会	2000元
1932年8月	難民救済のチャリティー公演	2000元
1933年6月	正始中学	銀貨2万元
1934年4月	黄河の水害	1000元

史料・参考文献 刘雪芹「上海灘“三大亨”的慈善行為」『世紀』世紀雜誌社、2007年第3期、5月。馬広志「民国“黑老大”的“慈善”」『華夏時報』中国残疾人連合会、2012年4月9日。顧建娣「杜月笙救済1931年江淮水災」『档案春秋』2005年第7期、7月。莫愁「肯花錢的杜月笙——从档案史料看杜月笙的一次“善举”」『档案与史学』1996年第3期、6月。『申報』1930年11月2日。『申報』1931年7月9日。『申報』1931年7月25日。「杜月笙氏 熱心農振」『申報』1934年4月5日。

表2 杜月笙が深く関わった寄付金額一覧（集団、組織、義捐金の収集を含む）

1926年(?)	上海城隍廟を再建するための邑廟董事会	9万元	黄金荣中心、黄金荣5万元、張嘯林1万元など
1930年11月	寧波仏教孤児院	銀貨2000元	黄金荣500元、張嘯林500元、金廷蓀500元
1931年3月	陝西省の感染症対策	6万1020元	杜月笙と張嘯林が中心、張嘯林5000元、金廷蓀1000元、傅筱庵1000元など
1931年8月?	江蘇水災義賑会	4367元	個人投資家3367元
1931年9月	袁礼敦の父親の葬儀(寧波旅滬同郷会)	銀貨1万2000元	杜月笙中心
1931年9月	慈善活動のための馬券	100万元(うち義援金は60万元)	杜月笙、張嘯林が中心
1931年9月	上記の競馬場側の補填	5万元	各馬主1000元、杜月笙らの当たり馬券など
1931年9月	上海籌募各省水災急遊芸大会	59500元	杜月笙、張嘯林、王曉籟が中心。黄金荣が自身の大舞台を貸す
1931年10月?	上海籌募各省水災急賑会	50万元	許世英が中心、杜月笙は特別委員
1931年12月	黄金荣の64歳の誕生日記念祭(蘇北の水害)	銀貨5万元以上	杜月笙、黄金荣、張嘯林の3人が中心
1932年5月24日まで	上海籌募各省水災急賑会が集めた合計金額	261万1771元	杜月笙の義捐金が53万元
1932年8月	難民救済のチャリティー公演	6万元	杜月笙中心、黄金荣2000元、張嘯林2000元

1932年	浦東同郷会	1万5540元	杜月笙中心
1934年12月	上海籌募各省干災義振会	200万元	杜月笙中心、中国銀行銀貨100元、交通銀行銀貨100元、上海商業儲蓄銀行銀貨40元など
1936年7月	寰球学生会の会所	6万元以上	朱少屏のチャリティー及び張嘯林が中心となり義捐金を募る
1946年11月	蘇北難民救済協会	法幣20億2044万4957元	杜月笙中心、汪宝瑄法幣2000万元

史料・参考文献 刘雪芹「上海灘“三大亨”的慈善行為」『世紀』世紀雜誌社、2007年第3期、5月。馬広志「民国“黑老大”的“慈善”」『華夏時報』中国残疾人連合会、2012年4月9日。顧建娣「杜月笙救済1931年江淮水災」『档案春秋』2005年第7期、7月。莫愁「肯花錢的杜月笙——从档案史料看杜月笙的一次“善举”」『档案与史学』1996年第3期、6月。『申報』1930年11月2日。「張嘯林為 寰球学生会建会所 計洋六万余元」『申報』1936年7月27日。「上海市籌募委員会収支報告票」『申報』1946年11月10日。1934年孔祥熙杜月笙“籌款賑災”档案輯録。

第5章 杜月笙の「表」と「裏」の経済活動

—中滙銀行、三鑫公司など—

はじめに

杜月笙は政治的な活動や慈善活動だけでなく、経済活動も積極的に行っていた。経済活動によって手に入れた資金を元に、自身の勢力拡大を図っていた。この経済活動は、黒社会におけるアヘンの売買や運輸、賭博場の経営や娼館経営といった活動はもちろんのこと、いわゆる表社会の経済活動にも非常に重点を置いていた。このことによって、上海における杜月笙の影響力や勢力、権益が非常に大きなものとなり、上海三大亨と呼ばれた黄金栄、張嘯林を超える影響力を手にすることとなった。1930年代初頭から、日中戦争が始まり上海が陥落するまでの間、租界を含めた上海全体において、杜月笙はトップクラスの影響力や権益を持つ存在になったのである。その結果、前述した政治活動にもより大きな影響力を及ぼすようになり、その後の日中戦争に関していわゆるフィクサーの役割を果たすようになった。蒋介石や戴笠との関係も一層深まり、日中戦争時期においては上海のみならず、中国全体の政治情勢に影響を及ぼすようになっていった。このように、杜月笙の経済活動はその規模の大きさや影響力や権益の大きさのみならず、最終的に政治情勢にまで影響を及ぼすようになっていたため、経済活動の研究は非常に重要なものとなる。第5章では、杜月笙の経済活動について、表裏両方の面から明らかにする。

杜月笙の経済活動に関する先行研究は、管見の限り多数存在しており、杜月笙関係の研究の中でも最も多い分野となっている。表側の経済活動に関するものとして①胡雪蓮「杜月笙与中国通商銀行」(『中山大学研究生学刊(社会科学版)』第20卷第4期、1999年)では、1935年に杜月笙が中国通商銀行の董事長に就任し、その活動内容について研究を行っている。また、同じく上海で大きな影響力や権益を誇った傅筱庵との対比がなされている。杜月笙が蒋介石側につき、傅筱庵が軍閥の孫伝芳についたこと、そして傅筱庵が蒋介石と対立関係にあったことが、その後の勢力拡大に大きな影響を与えたとしている。②包樹芳「杜月笙与上海銀行家」(『華東師範大学学报(哲学社会科学版)』2010年第3期、5月)では、杜月笙が1920年代末に金融界へ進出を始めたと述べている。それまでは、杜月笙と上海の銀行家の間で相互不干渉が図られていたが、杜月笙が金融界に進出した後は相互利益の関係を結び始めた。国民党と銀行家の間の橋渡し役や、政府の代弁人としての役割を果たしたという。③邵常歳「杜月笙躋身上海工商界行徑探析(1928—1937)」(『德洲学院学报』第31卷第5期、2015年10月)では、杜月笙は当時利益が大きかった製粉工場や汽船の運航会社に進出していたことを取り上げている。そこで手に入れた利益を黒社会での勢力拡大や、政治関係を深めるために投入しており、その結果経済活動においてもより大きな利益を生み出すことができたという。ただし、杜月笙の経済活動は表裏合わせて多岐にわたっているが、製粉工場や汽船の運航会社以外の経済活動についてはほぼ取り上

げていない。杜月笙が製粉工場に進出した経緯と、手に入れた影響力をどのように使ったのかについて、重点を置いている。次に裏側の経済活動に関する先行研究、参考文献としては④郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』（河南人民出版社、1991年）では、1900年代から1950年代における上海黒社会の歴史を取り扱っており、特に杜月笙の黒社会における動向に関しては、日中戦争時期を除き比較的詳細に記している。あくまで上海黒社会に焦点を絞っているため、日中戦争時期の杜月笙の黒社会における動向は不明であるが、それ以外は重要な参考文献となっている。⑤蘇智良、陳両菲『近代上海黒社会研究』（浙江人民出版社、1991年）は、④と同じく上海黒社会について扱った参考文献であるが、こちらは青幫をはじめとした秘密結社のしきたりや伝統に重点を置いている。また、上海黒社会の歴史に関しても1840年代から1950年代初頭まで、幅広く扱っている。⑥蘇智良、姚霏「近代中国社会転型期的販毒巨擘——旧上海三鑫公司研究」（『上海師範大学学报（哲学社会科学版）』第34卷第1期、2005年1月）は、杜月笙、黄金榮、金廷蓀及び張嘯林が設立した三鑫公司に関する研究である。三鑫公司の設立年は不明点が多いのだが、ここでは1918年から1919年の間としてあり、一説にいわれる1924年前後に設立したという説を明確に否定している。また、アヘンの運搬をはじめとした三鑫公司の活動内容はもちろんのこと、三鑫公司の名前の由来や人事、利益の分配率に関しても扱っており、非常に充実した論文となっている。杜月笙の黒社会の活動に関する論文は珍しい。ただし、三鑫公司のアヘンに関する活動に対しやや感情的かつ主観的に悪であると語っており、若干善悪に囚われてしまい客観性に疑問が残ってしまった部分は残念である³³¹。

以上のことから杜月笙の経済活動については①表裏両方で利益を上げていたが、詳しく研究されているのは表側の方である。おそらく、表側の活動に関しては史料がよく残されており、研究が進めやすかったことが大きな要因であろう。②また、黒社会における杜月笙の活動は、史料を残しておく必要性がないためか、具体的な数字には乏しくなりがちである。しかし、回顧録や伝記などには記述は残されており、解明が全く不可能というわけではない。③つまるところ、いわゆる表社会での活動に関しては多岐にわたっているものの、全体像は乏しく具体的な活動やそれぞれの業界の関与の具合が見えてこない。また、黒社会での活動に関しても、有名なものは取り上げられるが、全体像は表側以上に不明瞭となっている。しかし、杜月笙が上海にて絶大な影響力や勢力、権益を持ったのも経済的な基盤があったからこそであり、この部分に不明瞭な部分が多いことは問題となろう。そのため、第5章では、これらの問題に関して、できる限り解明を進めていく。

第1節 杜月笙の経済活動の特徴

杜月笙の経済活動には、黒社会におけるものと、それとは別のまっとうな経済活動が存在する。まず初めにまっとうな経済活動の方を取り上げる。杜月笙は表向きの商人、事業家としては銀行業をはじめとして各業種にわたり活動を行っており、中滙銀行や『申報』など様々な企業や組織の役職に就いていた。ただし、その他の企業に関して実際に各職業の知識

や技術を持っていたわけではなく、あくまでも名義貸し、企業の後ろ盾となることが主な活動であった。

杜月笙と銀行を含めた金融業界とは、1920年代後半まで相互不干渉のスタンスを取っていた³³²。これは得意分野が大きく異なるため、下手に進出しても失敗する可能性の方が高く、金融業界が黒社会に進出すること自体、一般市民から非難の対象になりかねなかった。一方で、第1章で前述したように、四・一二クーデター後に杜月笙は蒋介石から陸軍少将などの地位を与えられており、これを機に杜月笙はいわゆる表社会への進出を大きく進めていった。そこで杜月笙は金融業界にも進出することを決めた。

その理由として、第一に杜月笙の友人で金融業界の大物である銭新之が、杜月笙に金融業界への投資を進めたことである。第二にフランス租界の賭博場の資本は元々、杜月笙らの賭博場を除き大部分を広東幫が投資していたが、その賭博場が相次ぎ閉鎖したため資本金は杜月笙に預けられていた。その資本金を使えば銀行創設ができると杜月笙が考えたためである。ただし、広東幫側は銀行創設の資金に充てることに賛成していなかったため杜月笙は2年間交渉を重ね、一部を現金で返却し、残りは中滙銀行の株式で返却した。第三に、杜月笙が金融業界で務める徐懋棠（大英銀行買弁）と朱如山（通滙信託銀行經理）、さらにフランス租界総領事から銀行創設のための投資を受けたことである。なお徐懋棠は、父親の遺産相続の際に争いが発生したが、杜月笙に自身が有利になるよう解決してもらい、杜月笙の門下となった人物である³³³。

杜月笙が1929年に中滙銀行を設立して董事長の座に収まってから、杜月笙は中滙銀行を皮切りに金融界に進出し始めた。上海銀行や中国銀行、交通銀行や中国通商銀行、浦東銀行といった銀行に対し、理事や董事に次々と就任した。これは杜月笙と銀行家との間で相互利益の関係を結び始めたためである³³⁴。例として、1931年に上海商業儲蓄銀行で取り付け騒ぎが発生した際、杜月笙は商業界に呼びかけて多額の融資を行っている。上海商業儲蓄銀行の経営者であった陳光甫は、銀行を救ってもらったと感謝し、杜月笙の中滙銀行に対して協力的になったとされる³³⁵。

国民党側も金融業界の人物としての杜月笙を重視していた。1935年11月に国民党政府が幣制改革を行い、それまでの銀本位制の銀元から管理通貨制度の不換紙幣へと変更した。国民党政府が開設した中央銀行、中国銀行、交通銀行（1936年2月に中国農民銀行も追加）のみが法廷貨幣を発行できるようになった。そして、これ以外の銀行が発行した貨幣は期限を設け使用中止となり、同額の法幣と交換することとなった。この改革前に、当時中央銀行総裁である孔祥熙と中国銀行董事長宋子文が杜月笙に情報をリークしており、政府の幣制改革に協力させている。杜月笙は旧紙幣と法幣を交換する交易所を中心に大きな利益を上げた。そして、傅筱庵が董事長を務める中国通商銀行など、国民党系以外の銀行に打撃を与え、取り付け騒ぎが発生した結果、傅筱庵は大連へと移動した。国民党側が事態の收拾を図るよう杜月笙に指示し、杜月笙は中国通商銀行の董事長となり、政府の代表となった。さらに、杜月笙は中国銀行及び交通銀行の董事に就任し、浦東銀行と国信銀行の董事

長にも就任し、上海市銀行公会の理事長となるなど、杜月笙は一挙に銀行業界のトップへと躍り出ることとなった³³⁶。また、杜月笙は1930年代において利益が大きかった製粉工場や汽船の運航会社にも進出していた。

杜月笙は新聞などの報道業界に対しても進出を始めた。杜月笙はまず1926年『新聞報』の編集者である唐世昌を門生に収めた。唐世昌の紹介により、汪松年、趙君豪、姚蘇鳳、余哲文、李超凡などの新聞編集者や新聞記者が何人も杜月笙の門生となった³³⁷。また、『申報』董事長である史量才は1932年頃より国民党や蔣介石に対する批判を強めていた。そのため蔣介石が戴笠に史量才を暗殺するよう命じた。1934年11月13日に史量才が暗殺され、その後任に杜月笙が『申報』の董事長となり、上海地方協会の会長にも就任することとなった（上海地方協会の副会長は銭新之、王曉籟の2人）³³⁸。その後、『新聞報』など他社の新聞に関しても常務理事などの役職を手に入れることとなった。

第2節 杜月笙の要職とその権限

杜月笙は、非常に多くの役職に就任しており、その分野も多岐にわたっている。以下、杜月笙が就任した役職の一部である。

1 銀行	中滙銀行董事長、上海市銀行公会理事、中国銀行董事、交通銀行董事、中国通商銀行董事長及び総経理、浦東銀行董事長、国信銀行董事長、亜東銀行董事長、上海証券交易所理事長
2 公職	行憲国民大会代表、上海市参議員
3 慈善団体	中国紅十字總會副会長、上海地方協会会長、上海南区救火連合会理事長、上海慈善団体連合会会長、浦東同郷会常務理事
4 教育	正始中学創協人、中華職業教育社董事、復旦大学校董、上海法学院校董
5 商工会	上海市商会常務監察、上海市工業会籌備主任、全国輪船業公会理事長、全国棉紡組業公会理事長、
6 報道	『申報』董事長、『商報』董事長、『新聞報』常務理事、『中央日報』常務理事
7 出版	世界書局代董事長、大東書局主席董事、東方經濟研究所理事長、中華書局董事
8 交通	上海市輪船公会理事長、招商局理事、民生実業公司董事長、上海市輪渡公司董事長、大達輪船公司董事長、大通輪船公司董事長、裕中輪船公司董事長、復興輪船公司董事長
9 紡績	榮豐紗産董事長、大豐紗産董事長、恒大紗産董事長、沙市紗産董事長、中国紡組公司董事長、華豐組布産董事長、利泰紡組公司董事長、西北毛紡組産董事長

10 食品	全国面粉業公会理事長、第四区面粉業公会理事長、華豊面粉産董事長、上海魚市場理事長、中華水産公司董事長、洽茂冷氣公司董事長、中国茶葉公司董事長、上海水果業公司董事長
11 製紙	華豊造紙産董事長、民豊造紙産董事長、雲豊造紙産董事
12 貿易	中華貿易公司董事長、通済貿易公司董事長、揚子貿易公司董事長、嘉陵貿易公司董事長
13 工業	大中華橡膠産董事長、新華玻璃産董事長、栄興化学工業社董事長、
14 電力	華商電気公司董事長及び総経理、亜浦耳電気産常務董事
15 その他産業	南洋兄弟烟草公司董事、香港中国国貨公司董事

参考文献 姚会元「杜月笙与江浙財団」『民国春秋』、1997年第2期、4月

これらの役職からわかる通り、当然だが杜月笙は役職に就いた事業について専門的な知識や技術を持ち合わせているわけではない。また、これらの事業に関して積極的に事業展開を行うといったことはせず、主に企業が問題に直面した時の後ろ盾として問題解決にあっていた。これは、自身が設立した中滙銀行などの銀行業においても同様であった。杜月笙自身が知識や技術を持ち積極的に事業展開したものは、黒社会での事業であるアヘン運搬を行う三鑫公司や賭博場である181号などであった。その他、第4章にて前述したように、緊急時の際に慈善団体の重要なポストに就く、または慈善団体を主導して立ち上げる、第3章の恒社を設立して董事長に就任するといった活動を行っており、企業の役職以外に非営利団体の役職にも数多く就任していた。さらに、第1章で扱ったの四・一二クーデター後に蒋介石から陸海空軍総司令部顧問や少将参議などの肩書を与えられ、第3章で述べた日中戦争後の上海参議会選挙に当選して議員の地位も手に入れた。それに加えて、フランス租界当局からも公董局臨時華董顧問や上海フランス租界納税華人会会長などの肩書を与えられるなど、公的な立場での役職をも手に入れており、経済界だけでも200以上の重役となったとされている³³⁹。慈善団体の役員や、公職の肩書を含めればその数は更に増えることとなる。

杜月笙は上記のように様々な業種の役職に就いていたが、その中でも特に多くの役職に就いたのは、銀行、慈善団体、交通、紡績、食品である。理由としては、銀行業は杜月笙の資金源となることはもちろん、問題が発生した場合の上海経済や社会に与える影響が大きかったことが挙げられる。慈善団体は杜月笙が慈善活動に熱心であったこと、義侠心はもちろん黒社会から表社会に進出する際に慈善家の肩書は名目上重要なものであったためである。食品は、投資額に対して利益率が高かったことが要因とされる³⁴⁰。交通、紡績に関してもおそらくであるが同様の理由であろう。

一方で、企業側が杜月笙に対してこれらの地位を用意した理由は、第4節で後述するが、杜月笙に労働紛争をはじめとした問題を解決してもらうためであった。杜月笙は門下

である陸京士や朱学範を通じて労働組合に大きな影響力を持っており、場合によっては労働者を集団で動員することができた。そのような状況下において、杜月笙の力無しでは労働紛争を解決することは難しかったため、各企業は杜月笙を役員などの地位を用意していたのである³⁴¹。その他銀行業においては第1節で述べたように、杜月笙が蒋介石率いる国民党と上海の金融界との橋渡しを行いながら蒋介石側の要望を実行し、さらには銀行側の後ろ盾となっていたことも大きい。

第3節 杜月笙の「黒社会」における活動

杜月笙の黒社会における活動として、まずは三鑫公司を取り上げる。三鑫公司（別名は三星公司。取り扱ったアヘンに押印した際の三星の字とマークから名前がとられた）前述したようにアヘンの売買、運搬を担うために1918年に設立された会社である³⁴²。業務としてアヘンの売買、運搬を独占して行っており、その利益の一部を租界当局に収めていた。一番の中心は杜月笙であり取締役となっているが、張嘯林も副取締役で大きく関わっていた。三鑫公司の名前の由来は、黄金栄の金、杜月笙の名である鏞の金偏、金廷蓀の金から取り、名前に金の文字を持つものが3人いるから三鑫公司、という名前になったようである³⁴³。三鑫公司の創設時は杜月笙が総経理に就任し、張嘯林と范回春は副経理に就任した。黄金栄は当時フランス租界警察の捕房であったため、職務に支障が出ることを鑑みて名前は出さなかった。フランス租界警察の動向を把握した上で、フランス租界各局に連絡を取るなど裏側で暗躍し、三鑫公司のアヘン運輸をスムーズにさせている。なお、実務を取り仕切っていたのは杜月笙であり、張嘯林は主に上海の租界や華界の各警察や、盧永祥や何豊林といった軍事勢力、上海以外の黒社会組織との交渉を担当していた。実際の経理は金廷蓀が行っており、役割に乖離が生じていたためか後に副経理の座に収まった³⁴⁴。なお、三鑫公司はフランス租界当局の直接の庇護の下に設立されており、杜月笙の身内の人物だけでなく、当時アヘン運搬や警護に当たっていた組織と共同（吸収する形ではある）で設立した、という側面もある。特に、アヘンの取り締まりが厳しくなっていた共同租界で活動していたアヘン業者は、三鑫公司の傘下に収まるが多かった³⁴⁵。

三鑫公司の本社地はフランス租界の法大馬路（Rue Du Consulat、現在は金陸東路196弄）にある惟祥里である。この場所は捕房である黄金栄にとって、警察の動向を把握しながらもアヘン運搬を行いやすかったために選ばれた（フランス租界警察の所在地から2キロメートルほどの距離である）。中は事業所と倉庫があり、ベトナム人の巡査が一日中警備に当たっている。また、正門が法大馬路に面しており、裏門が火輪磨坊街（Moulin, Rue de、現在は盛沢路53弄）に面している³⁴⁶。今現在は三鑫公司ではなく、また別のオフィスでもなく、下町の住宅地となっている。その他にも事業所が存在しており、自来水街宝成里2号（寧海東路90弄2号、現在は再編により消失）、格洛克路（Clarke, Rue、後に柳林路1号になるも1990年代に再編により消失）に事業所を設立し、アヘン用の大型倉庫も杜美路（Route Doumer、現在は東湖路）に設立していた³⁴⁷。

1910年代末期から1920年代における、上海租界当局のアヘンに対する状況として、共同租界ではアヘンの取り締まりは厳しくなっていた。一方で、フランス租界では財政難打開のためにアヘン売買を公認したため、極端にアヘン流通量が減少することはなかった³⁴⁸。さらに、フランス租界当局がアヘンで利益を得て財政を健全にするため、アヘンを安全に運搬する必要もあった。そのため、フランス租界警察に努める黒社会の頭目であった黄金栄に白羽の矢が立ったという側面もある³⁴⁹。また、青幫をはじめとした黒社会の秘密結社が大きな影響力を持っており、杜月笙や黄金栄といった黒社会の頭目が、租界内の経済や社会をある程度安定させる見返りとして、共同租界においても厳しさが増してきたとはいえアヘン売買がある程度は黙認されていた、という事情もあった³⁵⁰。

三鑫会社の収入源はアヘン運搬の保険料及びアヘンの売買を直接行うことであった。アヘン運搬の方は、基本的には一回の運送でアヘンの価格の10%（場合によってはそれ以上）の保険料を取り、目的地まで安全に運搬するというものである。1923年当時は毎月1000箱を取引しており、1箱2800オンス（79キログラム強ほど）のアヘンが入っていた。1オンスのアヘンで1元の価値があるため、毎月少なくとも225万円の取引が行われ、毎年3000万円の取引が行われている。これらのアヘンを運搬する際に保険料の10%以上を取り、さらに一部分を三鑫会社自ら売買していた³⁵¹。なお、万一運搬中のアヘンが損害を受けた場合は、三鑫会社が損害分を全額保証することになっていた。三鑫会社側に反発する黒社会勢力や、アヘンそのものに反発する警官によって、度々損害を受けることがあったが、その際は三鑫会社が全額保証を行っている³⁵²。

三鑫会社を取り扱うアヘンの種類として、高頭貨という長江上流の宜昌や漢口から運ばれたもの、北口貨という怡和や金利源碼頭で受け取ったもの、外洋貨というペルシャ産のアヘンで高橋東海灘にて受け取ったものの3種類が主に取り扱われている³⁵³。また、三鑫会社がアヘンを直接販売することもあり、これもまた大きな利益となった。数万のアヘン窟とアヘン販売業者に直接売買するほか、それらを包括してアヘンを売買する中華烟館といった組織にもアヘンを売買して利益を上げていた。その他、三鑫会社は軍閥と合作を行っており、例として1930年に奉天派の軍閥が軍事委員会北平分会を開催した際、東北地方で生産したアヘンを東北地方から上海まで輸送する際に、三鑫会社と提携した。毎年8回から10回ほどアヘンを東北地方から上海に運搬しており、その金額も年に200万円ほどのものになっていた。その他、孫傳芳は毎年の収入が1500万円とされていたが、その内三鑫会社との合作により得られて収入が400万円を占めていた³⁵⁴。このような軍閥と三鑫会社の利益の配分は、3対7から4対6の間であった³⁵⁵。これらの利益を鑑みた場合、三鑫会社の年間利益は5000万元から6000万元に上っている。内訳としては、三鑫会社に吸収されたアヘン商人がアヘンを運搬する際にも、三鑫会社に保険料を支払っており、これが毎月100万元以上に上っていた。また、上海以外のアヘン商人が上海までアヘンを売買する際も、三鑫会社に保険料を支払っていた。どこの港からフランス租界内に送るか、その距離によって料金が変わっており、太古及び招商局碼頭から

フランス租界までは1オンス0.13元。浦東、呉淞、楊樹浦及び虹口碼頭からフランス租界までは1オンス0.26元。これらの収益を合わせると年間で約1900万元となり、三鑫会社が自ら売買したアヘンの利益が約4000万元。これを合わせると、6000万元弱の利益となる³⁵⁶。なお、1916年の中国政府の収入が2.95億元であり、1925年には3.45億元であることを鑑みると、三鑫会社の収入が非常に大きなものであったことがわかる³⁵⁷。

三鑫会社の利益配分は、内外に広く行われていたが、内部で大きく利益を分配されたのは大三股である杜月笙、黄金榮、張嘯林である。毎年100万元ほどの利益を得ており、黄金榮の取り分が最も多かった。次に大きな利益を分配されたのは中六股である金廷蓀、范回春、沈杏山（かつて共同租界の黒社会の頭目であり、黄金榮とアヘン売買を巡り対立していたが敗れ、事実上の傘下となる）、顧嘉棠、徐采丞などである。次に大きな利益を得たのは小八股で、杜月笙、黄金榮、張嘯林の門下が就任していた³⁵⁸。三鑫会社のアヘンは杜月笙、黄金榮、張嘯林の門下が検査員を行っており、その数は100人以上に上る。この検査員は月収数十元から数百元とされる。さらにフランス租界内においては、フランス租界警察の巡捕もアヘン運搬の警護に当たっており、名簿上は1000人から2000人に及んでいた。そのための費用も毎年10万元から20万元ほど掛かっている。特に、フランス租界の外国人の商人や、フランス租界の軍隊にアヘン運搬を行う場合は、その警備はより強固なものになっていた³⁵⁹。ただし、人数があまりにも多いため本当に巡捕だけを名簿に記載していたかどうかは疑問に残る。しかし、巡捕自体は上司である捕房に動員されてアヘン運搬の警護活動をしており、捕房にはフランス租界当局に準ずるほどの利益の分配があったという³⁶⁰。捕房などの警官側には上記の10万元から20万元の費用とは別に、合計で毎月18万元の利益分配が行われており、1925年には、捕房の代表には毎月8万元の利益が送られていた³⁶¹。その他、三鑫会社はそれまで上海におけるアヘン運搬の業務や警備にあたっていた勢力を吸収して活動していた。これらの勢力は1918年の初期には10の組織が、1925年には21の組織が吸収されていた。これらの黒社会勢力とフランス租界警察が協力してアヘン運搬やその警護に当たっていたのである³⁶²。

この収益の一部をフランス租界当局に分配しており、そこからフランス本国の政府に支払われる収納金に宛がわれている。この収納金は1920年代では毎月70万銀元から80万銀元に上っていたが、三鑫会社から分配された資金が主要な部分を占めている。その他、フランス総領事には毎月30万元を手当金として、三鑫会社から給付されている³⁶³。これは、フランス総領事館や公董局にそれぞれ12万元を分配していたのだが、それよりも大きな金額である。さらに、欧州委員会には自ら売買したアヘン1箱（上記の2800オンス、79キロ強のアヘン入りの箱）につき250元を寄贈しており、年間4万箱を売買していたため1000万元を寄贈していた。その他、アヘンの小売店にもキャッシュバックで毎月500元を寄付していた³⁶⁴。

また、張嘯林は三鑫公司の事業を上海だけに留めておくのではなく、故郷である浙江省全体にまで広げることを考えていた。そこで張嘯林は張載陽、盧永祥の支持のもと、浙江省のアヘン市場に食い込んだ³⁶⁵。この会社は三鑫公司の分社として、浙江公司として名付けられ寧波、台州、温州などで大きな勢力を誇った。この地域も、従来は三鑫公司が勢力を誇っていたが浙江公司が担当するようになり、地域密着型になったためより効率的に利益が上げられるようになる。また、上海と浙江省との間でアヘンを介した旅行ツアーを作り、烏烟旅行団と呼ばれていた³⁶⁶。これらのアヘン売買が功を成したのか、1920年代後半には中国でのアヘン吸飲者数は8000万人に上り、世界最大のアヘン消費国となっていた。この状況に関して、三鑫公司は非常に大きな影響を及ぼしていたといえる³⁶⁷。

このようにして手に入れた三鑫公司の利益は、杜月笙や黄金栄、張嘯林の活動資金として、大きな役割を果たしている。特に杜月笙に対しては、フランス租界当局に巨大な収入をもたらしたということで、フランス租界当局からフランス租界商会総聯合会主席兼納税華人会觀察に任ぜられている³⁶⁸。張嘯林においても、上記の通り上海以外にもその影響力を大きく及ぼした。

つまるところ、杜月笙が三鑫公司に大きくかかわった理由としては、第一に自身の利益であり、大きく飛躍するためであった。上海中のアヘン流通を手中に収め、中国全土からのアヘン取引を大々的に手掛けたならば、上述したような非常に大きな金銭的利益が手に入る。杜月笙はこの機会を大いに利用して飛躍できると確信していたため、三鑫公司にて実質的な権限や運営を手中に収めたのである。第二に黄金栄を通じて、税収が欲しいフランス租界の庇護を得られたことがある。いくら利益が大きかったとしても、中華人民共和国成立後のような取り締まりが行われる、あるいはそこまででなくとも共同租界並みの取り締まりがあったなら、アヘンの運搬や売買にここまで大手を振って活動することは難しい。フランス租界当局からもお墨付きを貰ったことは、千載一遇の機会であると杜月笙は理解していたのだろう。第三に黒社会での名声が大きく高まることも理由の1つである。共同租界にてアヘン取引を行っていた沈杏山を押さえて部下にし、上海全域のアヘン取引を押さえたことは非常に勢いを感じられ、また勢力も大きなものであると理解できる。そのような三鑫公司を実質的に手中に収めることは、杜月笙が黒社会にてかなりの大物であると周りに認識させることができた。

次に181号という名前の賭博場について説明する。181号は正式名称を「富生」といい、福煦路（Avenue Foch、現在は延安中路）の181号にあったため181号という通称で呼ばれていた。1927年に設立された、60畝以上の面積に3階建ての建物で、三鑫公司の会員向けに作られた賭博場である³⁶⁹。共同租界とフランス租界のちょうど間の位置に存在しており、所在はフランス租界ではあるものの、入り口は共同租界の巨籟達路（Route Ratard、現在は巨鹿路）に面しており、裏口はフランス租界という風に分かれていた。そのため、もし何か問題があり警察に追われることになったとしてもすぐに逃げおおせることができた。租界の警察は、もう一方の租界には権限が及ばないため犯人を追

っていたとしても、もう一方の租界に逃げられてしまうともう追いかけることはできなかったのである³⁷⁰。元々は香港上海銀行の買弁である洞庭山富戸席の私邸で、フランス租界で最も大きな邸宅の1つである。建物の構造はイギリス式の建築であり、60畝以上の土地に大型の花園が存在する。これを張嘯林、杜月笙らが月々4000両の銀貨で借り受け、181号を開設したのである³⁷¹。1932年、第一次上海事変の影響により営業を中止しており、フランス租界およびフランス本国の政府の意向もあり閉鎖となった³⁷²。

なお、西爾臬著、川添恵子訳『中国マフィア伝【上海のゴッドファーザー】と呼ばれた男』など一部の伝記にて、信憑性の問題があるものの181号の詳細についてある程度語られている。それによると181号は、始めは前述したように三鑫会社の会員しか入れなかったが、後に三鑫会社の会員の家族が入れるようになり、最終的には誰でも入れるようになったとされる。そして、181号は元々が三鑫会社の会員のみ利用可能な存在であり、立地や土地の面積、豪勢で大掛かりな建造物の作りなど、費用が膨大に掛かっていることから単なる賭博場だけの存在ではなく、高級クラブとしての側面も存在していた。入場料のチケットが200元必要であり、さらに賭博に使う金はその都度必要であるため、基本的に客は賭博の自称名人か富豪、あるいは軍閥勢力や政治家などに限られていた。賭博の種類としてはルーレット、棒当て、麻雀、パイ、ポーカーの5種類が用意されており、掛け金のレートこそ不明であるが1日で何万元、何十万元の損失を出す客が何人もいたことから、非常に高額な掛け金が飛び交うような賭博が行われていたと考えられる。また、181号の中には賭博を行う場所以外にも中華と洋食のレストランが設立されていた。それだけでなくバーも設立されており、酒類も高級銘柄が提供され、たばこやアヘンも上質のものが用意されていた。レストランやバーなど、これらは全て無料のサービスであるばかりか、車やタクシーといった交通費もサービスとして181号側から提供されている（車は4元、タクシーは全額サービスされる）。さらには、客側が連れてきたボディガードといった使用人にも4元の食事代が支給されていた。その他、トルコ式浴槽も用意されており、181号内の空き部屋を使った宿泊サービスも行っていた。これだけのサービスを提供して、なお大きな利益が上がったとされており、客側が高額な掛け金を大量に投入していたことと、賭博場の中でも勝率はそれほど高い方ではなかったことが推測される。また、杜月笙や張嘯林は181号に存在するVIPルームにて、軍閥勢力や政治家といった人物を賓客としてサービスしていた。181号は賭博場として利益を上げるだけに留まらず、政界や軍界の人物と密接な関係を作るために役立つ重要な施設、という側面も存在した³⁷³。

杜月笙が賭博場にも大々的に進出した理由としては、第一に黒社会と賭博場との関係性が深く、杜月笙にとっても単純になじみ深いことに加え、杜月笙の趣味趣向として賭博好きであったことも要因であろう。一説には、杜月笙は叔父の家に住んでいたが幼少の時より賭博を行っており、家の金を盗み賭博を行ったため家を追い出され、その後15歳頃に住み込み先の青果店を追い出されたのも、賭博（他に窃盗も）の癖が治らなかったため

だといわれている³⁷⁴。第二に、杜月笙は表側に進出する前から、賭博場に公私問わず出入りしていたことが挙げられる。実際に杜月笙は、黄金栄の門弟になった後、黄金栄の所有するフランス租界の賭博場である公興倶楽部の管理を任されていた³⁷⁵。賭博場は当然経営側である胴元に利益が生まれ、基本的には運営費や人件費、建物の賃貸料を含めても店が黒字になるようにできている。この場合、杜月笙や黄金栄にとっても利益が上がるという理由も当然存在する。第三に、181号の場合、単に賭博場であるだけでなく、いわゆる上流階級の社交場としての側面も持たせたことが挙げられる。60畝の面積がある、181号の建築や庭園は非常に豪華なものであり、また誰でも参加できるわけではなく、三鑫会社の会員に限定されていた（後に撤廃されて誰でも参加できるようになったともいわれるが）。これにより、政界や財界、軍界といった上流階級との関係を築いた側面もある。

ただし、杜月笙も黒社会における活動において、全く失敗やミスがなかったわけではない。1931年、フランス租界総領事が2ヶ月の休暇を取りパリに帰った際、代理人が公務に当たっていた。杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人は総領事に手当金を支払っていたが、代理の人物は2ヶ月間だけの存在だろうと考えて手当金を支払わなかったのである。しかし、この判断は元々の総領事が帰国中に病死してしまい、代理人が新しい総領事に就任したことで裏目に出た。新しい総領事は手当金を自身に支払わなかったため、フランス租界内におけるアヘン売買、アヘン窟の営業を禁止した。杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人はフランス租界側とアヘン関係の営業復活を、手当金の再配布やフランス租界の財政におけるメリットを含め再三交渉したが妥結には至らなかった。杜月笙は時としてこのような失敗も起こしてしまったのである。なお、この失敗の挽回の機会はずぐに訪れている。当時上海市長であった呉鉄城が、第一次上海事変による上海市の財政難を打開するため、南市と閘北地区にてアヘン関係の営業を許可することにしたのである。結果的に、フランス租界で活動していたアヘン取引を南市や閘北地区に移し、事なきを得た³⁷⁶。このように、上海ではどこかで法に触れることがあっても、上海の別の地区では法に触れずに問題はない、ということがしばしば存在した。

第4節 杜月笙と労働紛争

杜月笙はただ経済的な利益を追求していただけではなく、影響力の大きさを行使することが多々あった。上海租界におけるストライキといった労働紛争の解決がその代表である。杜月笙は労働者や労働組合に多大な影響力を持ち合わせており、青幫をはじめとした秘密結社に加入している労働者は比較的低いとされる郵電系統で約20%、碼頭工人で70%以上に達したという。また、中華海員公会を支配していた楊虎、上海市総工会主任委員及び郵務公会の責任者であった陸京士は杜月笙と親密な関係があり、杜月笙の門弟としても存在していた³⁷⁷。そして杜月笙門弟の中で労働者に対して、おそらく一番大きな影響を保持していたのは朱学範であるとされる。1931年に朱学範は杜月笙門弟となり、翌1932年

には上海市总工会主席に任ぜられた。朱学範は杜月笙や陸京士と共に、共産党指導下にあった总工会を国民党側に引き寄せ改組を進めた。また、朱学範は陸京士と協力し、上海郵便局内で自身の門弟を作り、上海租界全体の主要な企業に対しても門弟を収容し、その数は100人以上に上るといふ。最終的に1935年、朱学範は門弟を集めて恒社の下部組織である毅社を組織した。杜月笙も各企業の重役となった上に、上海における労働組合や总工会、商業界は恒社の社員など杜月笙門弟の影響が強くなり、杜月笙は実質的に労働者組織や各企業に対し非常に強大な影響力を保持することとなった³⁷⁸。杜月笙はこのような状況下で、労働紛争の解決に乗り出し成功を収めたのである。

そして、四・一二クーデター以降の上海における労働紛争は、1927年が58件、1928年は118件、1929年は128件、1930年は87件、1931年は112件、1932年は82件、1933年は86件、1934年は73件、1935年は94件、1936年が110件となっている³⁷⁹。上海の労働者における共産党の影響力は、四・一二クーデター後も根強く残っていたが、1932年頃から衰え始めた³⁸⁰。それと入れ替わるように、四・一二クーデターの際に作り上げた中華共進会が合法組織としてそのまま残り、杜月笙の門弟が労働者に対する影響力を拡大していった³⁸¹。杜月笙は労働者における影響力を行使して、これらの労働紛争を複数解決していた。

杜月笙が労働紛争の解決に動いた理由として、第一に杜月笙自身の利益に係わるためである。上海に基盤を持つ杜月笙は、上海で発生した労働紛争の影響を大きく受けるため、労働者や労働組合を自身の影響下に置くことで問題を解決しやすくして安定させようとしていた。また、杜月笙は中国人側の経済界だけでなく、共同租界の西洋人にも影響力を及ぼしており、その下で働く労働者を動かせると都合がよかった側面もある。名誉的な意味合いから考えた場合でも、労働紛争を解決に導けたならば良い方向に働く。第二に蒋介石も四・一二クーデター以前のような、労働者側の反乱やストライキを警戒していたためである。中国の都市の中で最も経済規模が大きい上海にて問題が発生した場合、資本家の利益はもちろん政府の税収にも悪影響を及ぼす可能性があった。そのため、杜月笙は労働紛争の解決に力を入れたのである。

また、資本家側からも1927年7月5日に蒋介石側に対して、上海の安定に関して政府の保証を求めていた。労働紛争の解決は資本家側からも難しく苦勞するものであったが、これを杜月笙が解決できた場合、政府側からも杜月笙の利用価値が高まる³⁸²。第三に上海の資本家の利益にも関わっており、杜月笙が解決すれば恩を売ったことになる。杜月笙が多くの役職に就任した理由の1つとして、資本家が労働紛争などの問題を抱えた際に、杜月笙に後ろ盾となってもらい解決してもらうため、ということがあった。杜月笙としても、数々の役職に就くことは、いわゆる表社会に進出して大きな影響力を持つための大きな足掛かりとなった³⁸³。杜月笙とそれ以外の大きな勢力とは、相互利用や相互利益の関係になることが多かったが、国民党などの政界と並んで、表側の経済界の大物に関してはその代表例となるであろう。

おわりに

第5章にて判明したこととして、杜月笙は経済界においても大きな影響力や勢力を手に入れていたことがわかった。また、黒社会においても利益のために勢力を伸ばしており、表裏両方で利益を追求していたことがわかる。

第一に、杜月笙が表側の経済活動に関して熱心に取り組んだ理由としては、上海の名士としてふさわしい立ち振る舞いを考えた際、黒社会の活動のみでは内心で後ろ指を指されることや、黒社会の活動以外においても大きな利益を見込める営利活動を行いたかったことが挙げられる。黒社会でのトップクラスの影響力や勢力だけでは満足できず、表社会にも進出して経済界や政界にも進出して自身の勢力を上げたかった側面もある。そのためか、助言があったこともあり恒社は名目上政治団体の肩書を採用しており、各企業や団体の董事長や理事長といった肩書も積極的に手に入れていた。いくつもの肩書に就くことができた理由としては、企業側が杜月笙に後ろ盾になってもらい便宜を図りやすくしたかったことと、報道関係などでは特にそうなのだが、蒋介石側の意向を反映させるために国民党が便宜を図ったことも挙げられる。杜月笙自身にも後ろ盾が存在していたことにより、各企業の役職に就けた側面もあった。

第二に、杜月笙の黒社会での活動は、やはり経済的な利益の追求や大きな利権が魅力的だったため行っていたことが挙げられる。杜月笙自身、黄金栄の付き人になるまでは食うや食わずの生活を送っており、自身が生き残るためには（当時の社会情勢もあり）手段を選ぶ余裕がなかったことも、黒社会の活動を熱心に打ち込んだ理由の1つであった。ただし、杜月笙自身の子供には黒社会の活動に邁進させることはなく、表社会にてまっとうな職業に就かせていたことから、生い立ち故に黒社会の活動を行なわざるを得なかった、という側面もあった。ただし、一説には幼年期から賭博を行い、表社会で成功してからも黒社会と縁を切らずにむしろ大々的に関係を結んでおり、黒社会の頭目であり上海三大亨として存在していたことから、杜月笙自身は黒社会での活動自体は好んで行っていたと考えられる。

第三に、杜月笙は黒社会での活動と、いわゆる表社会での活動を縦横無尽に駆け巡ったことがわかった。黒社会で手に入れた勢力や影響力が表社会にも影響力を与え、表社会で手に入れた勢力もまた黒社会での影響力を高める手助けとなっていた。特に自身の門弟となった青幫の構成員を数多く動員できることは、杜月笙が表社会にも影響や勢力を持つ大きな要因の1つとなった。表社会にも労働者や浮浪者に対して影響力を持ち動員できるようになったことで（青幫をはじめ幫会に加入するものが多かったが）、杜月笙が租界の外国人を含む上海の各階層や銀行業など様々な業種に大きな影響力を及ぼせるようになった。表裏両方に勢力や影響力を持ったことにより、互いに大きな影響を与えており、それぞれプラスの作用として働いていたのである。これは杜月笙が元々も黒社会出身の人物だからこそなしえたことであり、この部分が杜月笙の大きな特色の1つとなるであろう。

第6章 杜月笙及び「上海黒社会」と日中戦争

はじめに

杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人は上海租界で非常に大きな勢力を持っていた。表社会では上海の名士であり、銀行や工場などで役職を勤め、商業活動や慈善事業を行っている。裏社会（中国において裏社会は黒社会と呼ばれる、以後黒社会と呼ぶ）では秘密結社の大ボスとして、アヘンの売買やアヘン窟の元締め、娼館や賭博場の経営、それらの利権をめぐって殺人を含む争いを行っていた。特に杜月笙は、労働組合や物乞い、警察などにもその権力は及んでおり、実質的な「上海のドン」として君臨していた。この3人は俗に「上海三大亨」と呼ばれ、当時の上海市民からも上海租界における黒社会の大ボスとして認知されていた。それぞれ義兄弟の契りを交わしており、基本的に仲は良好であった。だが、第二次上海事変を境に日本側につくのか国民党側につくのかで、それぞれの立場が大きく変わり、今まで良好だった互いの関係も徐々に敵味方の関係へと変容していく。第6章は日中戦争時期における杜月笙、黄金栄、張嘯林の行動を主に日本軍、国民党側、汪精衛側との関係を中心に解明する³⁸⁴。

そして、第6章は汪精衛並びに杜月笙、黄金栄、張嘯林に節をわけて記述する。まず、第1節では杜月笙を取り扱う。杜月笙は日中戦争期を中心に様々な軍事関係の取引を行っていた。蒋介石率いる国民党³⁸⁵だけでなく、汪精衛政権や日本軍³⁸⁶とも取引を行っており、主に経済面における自身の利益を非常に重視していたことがうかがえる。杜月笙の取引は大きく分けて①国民党との取引、②杜月笙と汪精衛政権、または日本軍との取引に分けられる。なお、③杜月笙と共産党との取引は、軍事的な取引こそ行われず、共産党そのものとは関係は希薄であったが、個々の共産党員とは一定の関係を築いていた。杜月笙は国民党側について人間であるが、それは自身の利益や国民党の勢力を鑑みた結果として、国民党側についてという部分が非常に大きい。自身の思想に基づいて動いた形跡は見られず、国民党や蒋介石の思想に特別傾倒していたわけでは決していない。

一方で、利益のためとはいえ完全に汪精衛政権側や日本側につくことはなく、公に蒋介石側についており、いくつもの指示を受け行動していた。このことから、杜月笙は一応ではあるものの、国民党にそったナショナリストの傾向も存在していた。そして、自身に利益があると考えれば、汪精衛政権側や日本軍とも取引を行う人物であった。杜月笙は重慶に滞在しているとき、戴笠や孔祥熙といった存在を味方につけ、裏で密かに日本軍とも物資の取引を行っていた。その取引により大きな利益を上げており、互いの陣営に与える影響や、パイプ役としての存在感も無視できないものであった。ただし、杜月笙のこのような取引は、全体としては国民党との取引が中心であった。汪精衛政権や日本軍との取引はたまに行われているが、頻繁なものではない。なお、維新政府との関係性は密約の暴露に係わるなど存在してはいたが、どこまで大きなものであったのかは不明。

第2節では、日中戦争時期における黄金栄の動向や活動について取り上げる。黄金栄は、日中戦争時期においても上海へと留まっており、杜月笙のように別の地域に移動することはなかった。その理由としては、高齢のため隠居生活を送っていたことと、人生のほとんどを上海で過ごしていたため今更他の地域に移住したくない、政治的な面倒事に巻き込まれずに穏やかに老後を過ごしたいと考えていたためであろう。実際に、1949年の共産党による上海解放後も、黄金栄は上海に留まり続けていることから、上海の統治する勢力が何であろうと上海に留まっていたと考えられる。この部分は、政治的な物事の渦中で各勢力と関係を持ち、相互利用しながら利益を得て影響力を保持した杜月笙とは異なる部分である。

そのためか、黄金栄は傀儡政権に従わず逆らわずの態度を示し、距離やバランスを取って傀儡政権側と関係を築いていた。黄金栄自身が直接傀儡政権側の役職に就任することにはなかったが、黄金栄の部下は役職に就任した人物もいた、という具合である。また、共産党員を匿う、傀儡政権側と重慶国民党側双方にそれぞれの地下組織の情報を流していた³⁸⁷。黄金栄はいわゆる灰色漢奸とも呼ばれていたが、日中戦争時期において最後までどの勢力にも大きく傾くことはなかった。

第3節では日中戦争時期における張嘯林の活動と暗殺について取り扱う。張嘯林は日中戦争時期の上海にていわゆる3大ボスの1人として非常に大きな影響力を持っており、かつ日本軍や汪精衛側と密接な結びつきが存在した。そのため、漢奸として国民党の指示を受けた杜月笙に暗殺された。また、杜月笙は実行犯の役割を担い、暗殺を計画し、暗殺者を送り込んだ。しかし、当の本人は重慶に移動後重慶国民政府を支持しながらも、自らの利益のため日本軍とも綿花など日本側での不足物資の取引を重ねている。これは杜月笙の特徴的な部分であり、非常に興味深い。もっとも、張嘯林も杜月笙も黒社会の人間であり、根本的には自身の利益にそって動く人物であるため、このことに違和感はない。

張嘯林の黒社会活動において重要な点として、前述した当時の上海の状況を表す文化史、社会史、政治史から見て、上海黒社会の動向、上海の経済活動の実態にあるといえる。そして張嘯林暗殺事件の本質は、上海にいた各有力者たちの今後の身の振り方、その中の複数人の末路への影響、張嘯林という「上海のドン」の死にあったといえよう。日本軍や汪精衛政権にとって、張嘯林という上海にて大きな影響力や経済基盤を持ち、かつ自分たちに協力的な存在を失ったことは痛手であった。そこで、張嘯林が亡くなったことで国民党に対し報復行為を活発化させることとなる。

日中戦争時期に関連する先行研究について、まず杜月笙の軍事関係に関する論文で、四・一二クーデターに関する論文や第一次上海事変に関する論文は存在する。しかし、香港および重慶にいた時期を扱った論文は少数のみとなっており、比較してしまうと扱いはやや悪いといわざるを得ない。また、日中戦争時期の黄金栄に関して詳細に扱った論文は管見の限り存在せず、主に黒社会における参考文献にその活動が記されている。さらに、日中戦争時期における張嘯林に関して詳細に扱った論文は、黄金栄と同じように管見の限りでは存在せず、黒社会に関する参考文献や、伝記類にてその活動が記されていた。①章君毅『杜月笙

傳』(中国大百科全書出版社、2011年、復刻版)では、主に杜月笙の生涯について記している。目次から内容を把握することが難しく、該当する年代の記述を探すことが難しいが、杜月笙に関することは詳しい。一応黄金栄や張嘯林の記述も少ないが存在する。日中戦争時期に関しては、杜月笙の活躍を大きく扱っているが、政治勢力との関係性は扱いが少なく、存在が希薄である。また、張嘯林の暗殺事件に関してはある程度の尺を割いている。②朱華、蘇智良「杜月笙其人」(『歴史研究』1988年第2期、4月)では、杜月笙が国民党側につきながらも日本側の動向を意識して行動していたことがうかがえるが、全体としてやや駆け足であり、個々の状況について深掘りしていない。具体的な杜月笙と日本軍との関係について、日本海軍軍令部長永野修身との日中合弁の銀行設立の話や、重慶滞在時期に日本軍と取引を行ったことが半頁ほど記している。③馬場毅「日本の中国侵略と秘密結社」小林一美編『秘密社会と国家』(勁草書房、1995年)では、日中戦争時期の上海で存在した傀儡政権を扱っており、黄金栄と張嘯林が日本占領下の、主に上海における利潤追求活動を記している。日本軍は勢力拡大および支配を盤石なものにするため、この2人を利用しようとしており、当初は2人とも応じていた。その後国民党側から、日本側についた部下を漢奸として暗殺されるという形で警告されたため、1937年には日本軍との交際を自粛していた。1938年になると秘密裏に関係を深めていき、弟子を日本側や汪精衛側の役職、例えば軍事委員会や公安局、漕河涇維持会、日本側のもと立ち上げた新亜和平促進会に就かせて利益を得るようになった。特に張嘯林は1939年に入ると公然と日本軍と繋がりを持った。④邵雍「杜月笙与上海抗日救亡運動」(『抗日戦争研究』2000年第2期、6月)では、日中戦争期における杜月笙の行動について、上海から香港、重慶に滞在した時期について取り扱っている。主に杜月笙の抗日活動を中心に取り上げており、その部分は非常に詳しい反面、維新政府や汪精衛政権など傀儡政権や日本軍との関係性についてはあまり追及していない。1941年に腹心である万墨林や呉開先が日本軍に逮捕された際、交渉して釈放したことや1943年に日本軍と物資交換の取引を行ったこと、上海における汪精衛政権側との暗殺合戦の解決など、扱いは1頁分に留まる。以上をまとめると、明らかにされている点は日中戦争時期における杜月笙、黄金栄、張嘯林の利益追求活動である。他方、この3人と日本側、国民党側、汪精衛側との関係性が十分に明らかにされているとはいえない³⁸⁸。

したがって先行研究を整理すると、①概要という点においては、杜月笙の香港への移動し抗日活動するもそれを前面に押し出すことなく行動し、黄金栄が上海へと留まり各勢力に多少の力を貸す、張嘯林は日本側と大々的に関係を持ち暗殺されるなど、学術的に解明されたところは部分的に存在する。しかし、本論文で扱う杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人の関係、及び日本側や国民党側、汪精衛側との関係をメインテーマとして扱った論文は見受けられなかった。②概説や伝記などで、ある程度概要は説明されているが、史料的な裏付けが乏しく、その詳細や信ぴょう性は乏しい。金スキャンダルの起きた年が文献によって1943年、あるいは1945年と異なる。張嘯林の暗殺の経緯が一部の文献には書かれていない。③こうした研究状況の問題点は具体的な史料の乏しさ、概要以外の詳細が不明瞭な部分が存在す

る、といった部分が指摘できる。そこで第6章では日中戦争時期において杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人が傀儡政権、日本軍、国民党とどのような関係を築いたのか、もしくは築けなかったのか、できる限り詳細かつ具体的に分析していく。

そして、これらの先行研究の成果により、杜月笙の軍事関係の取引は国民党を中心にある程度解明が進んでおり、傀儡政権側や日本側も少しずつであるが明らかになってきている。しかし、この研究に関する問題点として第一に、共産党側との関係および取引について存在しない場合が多く、あったとしても断片的なものである。これでは杜月笙と共産党員との関係はほぼ存在していないように見えてしまう。第二に、取引の詳細についても全ての勢力の取引において具体的な数字に乏しく、曖昧な情報も多い。そのため、日中戦争期を中心とした杜月笙の軍事的な取引の全容が見えないという問題が出てくる。第三に、杜月笙は日中戦争期において、いわゆるフィクサーとして大きな役割を果たしており、蒋介石率いる国民党、傀儡政権や日本軍を結ぶパイプ役としての側面もあった。にもかかわらず、日中戦争期における杜月笙の取引の全容がわからないことは、日中戦争の動向の一部がわからないということであり、大きな問題となろう。そこで第1節では、主に日中戦争期における杜月笙の軍事関係の取引を中心に、①杜月笙と蒋介石率いる国民党との取引及び関係性、②傀儡政権、日本軍との取引及び関係性、③そして共産党との取引や関係性、この3点についてどのような取引があったのか、またどのような繋がりが存在したのか、その関係性を第1節で明らかにする。

次に、日中戦争時期における黄金栄の研究に関しては、隠居生活を送っていたこともあり表舞台にはあまり姿を見せず活動しなかったためか、この時期の黄金栄を中心に扱った論文は管見の限り見受けられない。実際、『申報』などの当時の新聞報道においても、黄金栄の記事はほとんど見受けられない。しかし、論文においても、杜月笙に関する研究の中で、杜月笙に関係する部分や杜月笙との比較対象としては度々見受けられる。つまり、黄金栄は傀儡政権側にも国民党側にも大きく活動することはなく、隠居生活を送りながら密かに活動することが中心であったため、単独で論文にすることが難しかったと考えられる。そのため、日中戦争時期における黄金栄に関しては回顧録や伝記類、黒社会の活動を記した著作が中心となる。第2節では、日中戦争時期における黄金栄の活動やその動向を明らかにするが、前述した回顧録や伝記類、黒社会に関する著作を使い明らかにする。

そして、日中戦時期における張嘯林の研究の特徴を簡潔に言えば、同じく上海三大亨である杜月笙に比べ、張嘯林の研究は不足している。また、当張嘯林の暗殺事件については『申報』などで取り扱われているものの、黒社会での活動及び普段の経済活動などは『申報』含め当時の新聞にはほぼ掲載がなく、史料は少ない。『申報』を含め、当時の新聞報道の限界が露呈している。しかし繰り返すが、張嘯林の影響力や活動内容は重要なものである。そのような事情も含め、このテーマについて研究する価値や意義が存在する。つまるところ、①張嘯林に関しては、一般誌での文書が多く、学術論文の数は少ない。伝記の形をとったものが中心となっている。②これらの伝記は、それぞれ記述内容がある程度異なる。異なってい

る部分として、主に内容の詳細さ、細部の違い、日時の違いなどが挙げられる。また、前述の通り新聞史料が少ないという問題があるが、この問題を放置するべきではなく、新聞史料からも研究する価値がある。それに加え、当時の上海の状況を表す文化史、社会史、政治史から見て、上海黒社会の動向、上海の経済活動の実態、汪精衛政権側と国民党側の特務の暗殺活動など、このテーマについて研究する価値は高い。そのため、本論文で明らかにすることは汪精衛政権下の上海にて張嘯林が行った活動、特に軍事取引の活動や、張嘯林の暗殺事件の詳細及び暗殺事件に関する『申報』の報道に対する問題点である。『申報』に關した矛盾点や不明瞭な点を指摘しつつも、『申報』も使用してこれらの実態を第3節にて解明する。

第1節 日中戦争時期における杜月笙の軍事取引

1. 上海での軍事取引—蒋介石率いる国民党との関連—

杜月笙は、日中戦争期以前から既に軍事的な取引を行っていた。その中でも特に大きなものとして、第1章で取り上げた四・一二クーデターが挙げられる。なお、第1章で述べたように杜月笙は四・一二クーデター以前より、国民党側と共産党側双方ともに関係を築いており、その関係性も特に不和がないものであった。国民党側と関係が良好だった理由として、杜月笙の師である黄金栄が、上海に移動していた蒋介石を自身の門下に収めたことが大きい。そして、杜月笙と蒋介石の関係が深まったのは、蒋介石が北伐を成功させ、上海へと舞い戻ってきた四・一二クーデター直前の頃からである。この2人の関係であるが、蒋介石は杜月笙の影響力を利用し、杜月笙も蒋介石の後ろ盾を得て自身の権益を拡大するなど相互利益の関係であった。

一方で共産党側と関係が良好だった理由として、杜月笙と関係が深かった汪寿華の名前が挙げられる。汪寿華は共産党員であり、杜月笙とは、1925年に発生した五・三〇事件の際に知り合い意気投合した。汪寿華は五・三〇事件の際に指導者として活動した1人であり、上海总工会の委員長や学生連合会の代表を務めていた。そして事件後に杜月笙の門下となっている³⁸⁹。つまり初期の中国共産党における実力者で有力者であり、杜月笙が汪寿華と関係が深かったことは、すなわち当時の共産党側との関係も良好であったといえよう。

しかし、四・一二クーデターにより、1927年4月11日深夜に杜月笙は共産党員である汪寿華を暗殺した。翌12日には四・一二クーデターの実行犯となり、多数の共産党員を弾圧した。この功績により、杜月笙は蒋介石から海陸空軍総司令部顧問、国民革命軍総司令部少将参議といった肩書を与えられた。しかし、確かに軍人としての肩書を与えられたのだが、あくまでも肩書であり、日中戦争期になっても特に軍人として活動していたわけではない。軍人ではなくフィクサーとして蒋介石の指示で動き、かつ傀儡政権側や日本側とのパイプも持ち合わせた存在であった。

その後、日中戦争開始までの杜月笙と国民党側との関係であるが、基本的に良好な関係を

築いていた。とはいえ、戦時ではなく平時であるためか管見の限り、蒋介石の指示は存在していない。杜月笙は上海の政治に関わることはあっても、国民政府の中央の政治には特に介入していない。第4章で前述したが、自身が立ち上げた政治組織である恒社にて、上海や南京の有力者を集め、上海の政治家に挨拶をさせる（杜月笙や青幫、恒社の社員や組織の力が必要な時に訪れる）程度に留まっている。杜月笙は主に政治よりも自身の利益に直結しやすい経済、商業活動の方を優先していた。ただし、1931年に満州事変（九一八事変）が発生した際には、国民党側の組織である上海市抗日救国会に参加し、翌1932年1月には上海市国難救済会が成立しその大会で理事に当選している³⁹⁰。また、杜月笙の門弟には陸京士などCC団系と、戴笠など藍衣社系が両方とも存在していた³⁹¹。杜月笙が汪精衛政権側との関係を築く際、主に周仏海（CC団の一員であった）を中心としていたことの遠因であろう。

一方で共産党との関係においては、直接の関係は持たなかった。しかし、間接的な関係は持っており、例として1929年に杜月笙が共産党員である楊度³⁹²を賓客として招き、洋式の部屋を宛がう他、月5000元を渡していた。ただし、このことは公然の秘密という状態であった³⁹³。そのため、杜月笙が共産党との関係を完全に断ったわけではなく、一応は関係を築いていたことを示している。また、共産党側も杜月笙を完全に敵視はしておらず、特に不利益を被らせることはしなかった。そして国民党側も、杜月笙が共産党員を門下にしたことをおそらく知ってはいたが、杜月笙に対する利用価値を鑑みたためか特にとがめることはなかった。

また、日本軍だけでなく日本の外務省も杜月笙の動向を気にかけていた。管見の限り、最初の事例として1932年3月29日、外務省の「上海事件」に関する外交史料で杜月笙の動向を確認、情報を収集していた。内容は、①日本軍の特務である南部は黄金栄の右腕である唐沛生から話を聞いた。日中の停戦交渉が決裂した場合、杜月笙はふるさとである高橋鎮で便衣兵を3、4000人ほど集め日本軍の後方を攪乱させる。その部隊の訓練および指揮の適任者として、杜月笙は唐沛生を指名し依頼したが、唐沛生は黄金栄と相談した結果その依頼を断った。そのため、杜月笙は自身の部下である鄭光軍と王鎮川に便衣兵の訓練や指揮を命じ、3月26日自身の祖廟に墓参りという名目で高橋鎮を訪れた。②もっとも、（おそらく南部と同じ特務である）山本英次が杜月笙の顧問である章士釗に話を聞いたところ、便衣兵の部隊の存在を否定し、単に大名行列のように墓参りを行っただけだと聞かされた。そのため便衣兵の集団が存在するかどうか、真偽のほどは不明である。なお、南部の立場もあるためこの情報は部外秘にする、というものであった³⁹⁴。つまり、日本軍の特務はこの時既に杜月笙と接触を始めていたことがわかる。管見の限り、外務省による情報収集は1939年頃まで続いていたが、それ以降は外務省ではなく日本軍が杜月笙の情報を収集していた。なお、杜月笙が便衣兵の部隊を組織していたかどうかであるが、管見の限り他の史料、参考文献にはそのような存在が確認されておらず、日本軍に攪乱を行った記述も存在しないため、存在していないと考えられる。

そして1937年に盧溝橋事件が起き、日中戦争が始まってから、上海も戦火に巻き込ま

れた。そして上海戦の際に、杜月笙は戴笠らと協力して青幫の人物を結集して戦闘にあたらせた。戴笠などが率いる正規軍を援護する、ゲリラ戦用の集団である。しかし、これは正式な国民革命軍ではなく、あくまで青幫の構成員であり軍隊経験のないものが多かったため、戦果もほとんど上がらなかった³⁹⁵。ただし、杜月笙は軍隊を所有していないにも拘わらず、青幫の人物を即時に結集させ軍事行動を起こしていた、という事実は興味深い。さらに、戴笠率いる軍統と深い関係のある、蘇浙皖行動委員会別動隊の第2、第3支隊を率いていたのは杜月笙の門弟であり、かつ杜月笙が設立した恒社の社員である陸京士、朱学範であった。また、支隊の下にある大隊、大隊の下にある中隊にも恒社社員が複数在籍していた。隊員の中には青幫の構成員や恒社社員以外にも労働者が多数存在しており、恒社社員は彼らと接近している³⁹⁶。これらの部隊は浦東に攻撃基地を設立して活動しており、1938年に忠義救国軍と改名するなどして、日中戦争で中国側が勝利するまでその活動が続いていた³⁹⁷。なお、杜月笙自身は蒋介石から、海陸空軍総司令部顧問、国民革命軍総司令部少将参議といった肩書を与えられていたが、軍人として上記の組織を編成し活動していたわけではなく、あくまで青幫の人物としてこれらの活動を行っていた。これに関しては黄金榮、張嘯林も同様である。ただし、各方面から傀儡政権側、日本軍にゆさぶりをかけるという重要な役割を果たしたといえよう。結局、国民党軍が上海から南京へと撤退したこともあり、1937年1月12日に上海は日本軍によって陥落した。

そして、上海が陥落する直前に杜月笙は香港へと移動した。つまり、蒋介石に付き添い南京や武漢には移動しなかったのである。さらに、香港が日本軍によって陥落するまで、蒋介石のいる重慶まで移動しなかった。この理由として、あまりに蒋介石率いる国民党側に寄り添いすぎると、日本側には国民党に加担したと思われる。その場合、もし日本側が勝利した場合に自身の立場が危うくなると考えていたためである。とはいえ、杜月笙は日本側の役職に就くことはなく、香港で国民党への義援金を募るなど、国民党に非協力的だと思われるよう行動していた。杜月笙としては日本と中国、どちらが勝っても自身の立ち位置が保証され、自身の勢力や権益を温存できるようにしたかった、と考えられる。後述するが、自身の利益になると考えたら傀儡政権側とも関係を持ち、日本軍とも取引を行うなど、杜月笙は蒋介石率いる国民党側のナショナリストではあるものの、思想だけで動く純粋なナショナリストではなく、リアリストの傾向が強く非常に興味深い。

また、日中戦争期は第二次国共合作が行われており、1937年に杜月笙らが杜月笙の公館で行った上海抗敵後援会主席団会議にて、共産党員である潘漢年が参加していた。内容は、潘漢年がガスマスク1000個分を八路軍に無償援助するというものであった。かつ、その中で潘漢年は共産党員が抗日のため活動する際に、青幫などの黒社会勢力は邪魔をしないように呼びかけている³⁹⁸。実際に、青幫などの構成員が抗日を語って金銭を集め私腹を肥やすことはあったが、特に共産党員だからという理由で、その活動を妨害した話は管見の限り聞かない。

2. 香港での軍事取引—重慶国民政府と日本傀儡政権との関連—

杜月笙は1937年に上海から香港へと移動した。その際杜月笙は、日本が勝利した場合も考慮して「抗日」とは唱えず、戦争被害者を救援するという形で活動している。そのために、杜月笙は「中国紅十字会」副会長、「中央賑濟委員会」常務委員に就任した³⁹⁹。そして1938年以降、杜月笙は周仏海と何度も接触しており、杜月笙が上海を訪れることもあれば、周仏海が香港を訪れることもあった。杜月笙はあくまでも基本的には蒋介石側の人間であったが、傀儡政権側や日本側とも接触し、関係を築いていた。『周仏海日記』によれば周仏海は日本との和平運動を進めるよう蒋介石に頼むため、杜月笙と年に数回程度の連絡を取っていた。1939年12月30日の日記には、うまくいけば杜月笙は汪精衛側に寝返るのではないかと期待を寄せていたことが書かれている⁴⁰⁰。また、間接的ではあるが、杜月笙の腹心である徐采丞は、杜月笙が香港に移動した後も命により上海へ留まり、日本の興亜院⁴⁰¹の人物と関係を築いていた。興亜院の中には日本陸軍、海軍、憲兵隊及び特務機関の重要人物が存在しており、彼らと杜月笙は互いに利用しようと考えていたところがある。杜月笙は上海での影響力が非常に大きく、かつ蒋介石とも関係は当時良好であった。興亜院としては、上海を無事に汪精衛政権に統治させ、また蒋介石率いる国民党とも接触して降伏を引き出すために、杜月笙の力が必要であると考えていた。そのためにあえて徐采丞を接近させ、背後にいる杜月笙を籠絡しようとしていた⁴⁰²。

また、1938年12月の外務省の内部資料にて、杜月笙に関する工作活動を記している。内容は、上海総領事館の副領事であった岩田が香港滞在中、杜月笙の伝記の編纂を依頼されている陳彬蘇に話を聞いたところ杜月笙は蒋介石より35万ドルの資金を得て、香港の要人に月1000ドルから2000ドルの生活費を渡していた。これらの要人は、外務省が日本の陣営に引き込むために工作を行っていた李思浩（1000ドル）、章士釗（2000ドル）などが複数人含まれており、この生活費が日本側の引き込み工作を阻害している、というものであった。また、日本陸軍は杜月笙を日本側に引き込むため工作を行っている。そのため、日本陸軍は杜月笙とかねてより親交のあった実業家である山下亀三郎や、その代表支配人である渡瀬に杜月笙を日本側に引き込むよう工作を依頼したが、その工作の成果は上がらなかった。なお、影佐禎昭大佐が岩田副領事に対し、既にこの工作に10万円を支出していると語っている、というものである⁴⁰³。このことから、日本側は複数のルートで杜月笙に関する情報を収集しており、接点も持ち合わせていたことがわかる。

杜月笙もどのように立ち振る舞うか完全には決めかねており、1939年1月に杜月笙は汪精衛側が行っている日本との和平交渉を妥当だと評価し、蒋介石も共産党や抗戦強硬派の反乱を警戒して長期抗戦を余儀なくされている、と語っている⁴⁰⁴。また、もし汪精衛側が巧妙に事を運ぶならば蒋介石とも手を結び、日本側との和平交渉を軌道に乗せられるとも語っている。これは、杜月笙が重慶を訪れ政府の要人、友人らと会見した後、香港へと帰宅したのだが、その際に行われたインタビューの発言である。このように、杜月笙は基本的には国民党側につき抗日活動を行うことも多かったが、必ずしもそれ一辺倒ではなく、汪精

衛側や日本側にもある程度関係を築く考えもあったことがわかる。

この時期の杜月笙の活動として、「上海統一委員会」の事実上のトップとして活動していたことが挙げられる。1937年から39年にかけて、上海では蒋介石側の国民党関係の組織が乱立していた。これらは統一されたものではなく、それぞれが各自で行動を取っており系統立った指揮も存在しなかった。この状況を改善するため、杜月笙の門徒である呉開先は蒋介石に提言し、蒋介石はこれらの組織の統一指導機関として「上海統一委員会」を設立した。上海統一委員会の常務委員は杜月笙を含め戴笠、呉開先、蔣伯誠、呉紹澍（杜月笙の門弟）の5人であり、全員杜月笙と親しい間柄にあった⁴⁰⁵。ここで杜月笙が出てきた理由として、上海における杜月笙の影響力はまだ存在しており、それを利用して重慶から上海にある蒋介石側の国民党組織をある程度コントロールするためと考えられる。そのため、杜月笙は香港に滞在しながらも上海に存在する重慶国民政府側の組織をまとめることとなった。上海に残った経済界の人物の中で、杜月笙並みの影響力を持ち合わせていたのは虞洽卿（1940年に重慶に移動）や張嘯林などであり、彼らに対抗するためこの活動を行った面もある。また、1939年には青幫と紅幫が提携して「人民動員委員会」を組織したが、ここにも杜月笙は幹部として名前を連ねている。この組織の詳細は不明であるが、主に抗日活動を行う組織であった⁴⁰⁶。

また、杜月笙と汪精衛側との関係で一番大きなものの1つとしては、1940年1月、杜月笙の手によって高宗武⁴⁰⁷と陶希聖⁴⁰⁸を汪精衛側から国民党側へと寝返らせたことである。この2人は維新政権にて、高宗武が教育部長、陶希聖が外交部次長であったが、その地位に不満を持っていた。また、自分たち以前に上海にいた人物が実利や実権を占めており、自身にはあまり利益が巡ってこなかったことも不満の1つであった⁴⁰⁹。それを日本の特務と関係を持つ徐承丞⁴¹⁰から聞きつけた杜月笙は、蒋介石に詳細を伝え、この2人を寝返らせるため協力を要請した。そして、杜月笙の組織である恒社の社員に、2人を上海から脱出させるように指示した。高宗武と陶希聖が持ち込んだ機密情報は、汪精衛側と日本側の密約である「日支新関係調整要綱」であった⁴¹¹。内容は、同じく日本側の傀儡政権であった維新政府の後継として中央政府を作り大部分の人物は続投することや、日本中国満州の3国で治安の安寧を維持することなどが挙げられる。持ち込んだ機密情報は、1940年1月21日の『香港大公報』⁴¹²にて大々的に報道され、高宗武と陶希聖は杜月笙から4万ドルの賞金を貰った⁴¹³。他の新聞は『香港大公報』を追随する形となり、例えば『申報』（1940年1月22日）に「汪精衛興日方、所訂協定内容」という見出しで、高宗武と陶希聖が香港にて今後成立させる汪精衛政権の機密情報を暴露したと報道している⁴¹⁴。また、『東方雜誌』⁴¹⁵においても総第655号（37巻第4期、1940年2月16日刊行）にてこの密約に関する記事が投稿され、日支新関係調整要綱の全条文や高宗武と陶希聖が密約を暴露したこと、「日本獨霸東亞陰謀的鐵證」というタイトルで日本人の顧問を採用することなど密約の詳細を14ページにわたって紹介する特集が組まれていた⁴¹⁶。なお、杜月笙の名前は『申報』、『東方雜誌』に出ていない。杜月笙はこの密約暴露に一役買っていたが、名前を出して汪精

衛側にマークされることを避けたのであろう。

なお、汪精衛政権（南京国民政府）が成立したのは1940年3月30日である。日本側から再三、政権発足の延期を要請され、当初予定の3月27日から3日遅れる形で政権が発足した⁴¹⁷。同日、汪精衛政権の「国民政府政綱」と「中央政治委員会組織条例」が制定されている。これらは具体的な法律や規則を定めたものではなく、規則の大元となる方向性を示すものであった。「国民政府政綱」では友好な方針で和平交渉を行い、中国主権の行政で独立をうたっており、対外的なアピールという側面が強い⁴¹⁸。「中央政治委員会組織条例」では、中央政治委員会は全国の政治機関の中で最高の指導機関であるとしており、立法の原則や軍事や外交の体系を行うなどと書かれている。委員会委員の任期は1年である。条例だけあり「国民政府政綱」よりも細かいルールを定めた点で具体性がある⁴¹⁹。

さらに、1940年8月14日に杜月笙は、汪精衛政権や日本軍と深い関係のあった張嘯林を暗殺した。杜月笙と張嘯林は「上海三大亨」と呼ばれ（もう1人は黄金栄）、かつては非常に仲がよかったのだが、日中戦争を機に関係が悪化し、仲違いをすることとなった。蒋介石の命を受けた戴笠の指示により、杜月笙は部下を派遣して暗殺を執行した。1940年初頭の暗殺計画、1940年8月14日、3度目の暗殺計画にてついに張嘯林を暗殺した⁴²⁰。

そして、張嘯林の暗殺後に暗殺合戦とも呼べる状況が上海に発生した。当時の上海市の市長であり汪精衛政権側の人物である傅筱庵⁴²¹もまた暗殺された。その上、汪精衛政権側の銀行である中国儲蓄銀行に、沈黙ら⁴²²重慶国民政府側の特務機関が襲撃するという暗殺事件が発生している。その報復として汪精衛政権側の人物である李士群⁴²³が率いる、七十六号⁴²⁴という組織が報復を行っている。李士群の配下である呉世宝⁴²⁵が、重慶国民政府側の銀行である江蘇農民銀行の職員寮、中国銀行の職員寮を襲撃した⁴²⁶。そのような暗殺合戦が行われた結果、1940年に杜月笙の腹心である万墨林と黄国棟⁴²⁷が、相次いで七十六号に逮捕された。逮捕された理由は即座に暗殺することではなく、この2人の持つ情報を洗いざらい供述させるか、身柄を確保したため杜月笙側との交渉や取引に利用しようとしたためであった。そこで杜月笙は、汪精衛政権のナンバー2で日本軍とも密接な関わりを持つ周仏海⁴²⁸と連絡を取り合うことにした。周仏海も万墨林らを釈放すること自体はさほど問題はないと考えたのか、杜月笙に送った書簡では、特務による相互の暗殺合戦の停止を提案している⁴²⁹。そして、杜月笙は万墨林と黄国棟の解放を確認した後、実行犯の中心であった呉世宝を香港まで呼び出し、暗殺合戦の停止を要求した。杜月笙の利用価値を考えた呉世宝は、わざわざ香港まで移動して杜月笙に会いに行き交渉することとなった。そして呉世宝が杜月笙の要求を受け入れたため、上海における暗殺合戦は停止することになった⁴³⁰。なお、万墨林と黄国棟（合計2回）は1941年には日本憲兵によって逮捕されており、この時も杜月笙や徐采丞が救出に尽力した⁴³¹。

ただし、南京国民政府が発足した当初、汪精衛は実質的にはナンバー1の立場であったが、肩書は主席主任であり形式上はナンバー2の地位であった。そのため実質的なナンバー2の立場も周仏海となっている。肩書としての主席は林森であるが、彼は南京国民政府には参

加しなかった⁴³²。汪精衛が正式に主任となったのは1940年11月29日からである⁴³³。翌日30日に、日本側から汪精衛政権として承認された。基本的には日本側の傀儡政権であり、杜月笙は蒋介石との兼ね合いと香港や重慶に移動していたことから、表面上は友好的な態度を示すことがあったものの、実際にはほぼ協力せず敵対していた。黄金栄は多少接近したものの、過度に肩入れすると後々面倒なことになると考え、利益面で上澄みをすくい上げつつ離れずの態度をとっていた。張嘯林は元々日本人と関係が深かったこともあり、日本軍のために不足物資を調達するなど積極的に関係を持ち、大いに利益を上げることになる。ただし、張嘯林は1940年8月14日に暗殺されたため、関係した期間は短い。張嘯林と傀儡政権側の関係について、汪精衛政権が成立する前の維新政府の方が期間としては長い。汪精衛政権は、1944年に汪精衛が名古屋で亡くなった後も存続したが、日中戦争にて中国が勝利したため1945年8月16日に解散宣言を出している⁴³⁴。

このように杜月笙は香港という地の利を生かし、重慶国民政府の指示のもと上海に働きかけ、フィクサーの役割を果たしている。日本軍に占拠された上海においても、万墨林など杜月笙の腹心をはじめ、数は少ないものの恒社の社員などが存在していたため、杜月笙は連絡を取り合って指示を出していた。ただし、恒社の社員の中には杜月笙と決別し汪精衛側に寝返った、汪曼雲、張克昌といった人物もいた。恒社は杜月笙がトップに立ち、組織の力を大きく手にするための組織であるが、これらの人物は杜月笙の門下になった証である書状を杜月笙に送り返して決別しており、決して協力的ではなかった⁴³⁵。つまり、杜月笙の影響力は大きなものであったが、必ずしも絶対的なものではなかった。

3. 重慶での軍事取引—重慶国民政府、日本軍、汪精衛政権との関連—

1941年に太平洋戦争が始まり、日本軍が香港にも進出すると、杜月笙は日本軍が香港を陥落させ占領する前に重慶へと移動した⁴³⁶。また、第3章で前述したように、恒社を通じて現地の経済界の大物を恒社に入社してもらい、関係を深めて勢力の拡大を図った。さらに、重慶黒社会では青幫よりも袍哥の勢力の方が強かったため、袍哥勢力とも表面上は友好関係を築いていた。その他、重慶に入ってから杜月笙は戴笠とより深く関係を保つようになった。元々杜月笙と戴笠の仲は良好であり、戴笠は杜月笙の門弟であった。だが、重慶が蒋介石率いる国民党の臨時首都であったため、杜月笙も国民党の特務であり要人となっていた戴笠と、より深く手を結ぶことが得策であると考えていた。戴笠も杜月笙の活動を邪魔するようなことは一切しておらず、その部分は非常に配慮していたことが伺える。例としては、1943年頃より戴笠率いる軍統が、日本占領下の上海にて活動を行う際の費用が不足したため、杜月笙に事態の解決を依頼した。その際、杜月笙は上海通商銀行から軍統の活動資金を門弟を使い入手しており、その額は法幣900万元に上っている⁴³⁷。

その一方で、杜月笙は重慶へと移動したため、上海で築き上げた権力を行使することが難しくなっていた。地理的な関係で上海と連絡の取りやすい香港とは違い、重慶では距離の問題で上海とはなかなか連絡が取りにくく、杜月笙にとっても上海での地盤は大いに頼れる

ものではなかった。もちろん重慶に移動した後も、杜月笙は名士や実業家として振る舞うことはできた。しかし杜月笙にも面子の問題があり、既に勢力を築いている存在、特に上海から移動してきた人物の利益や権益を横取りしようとする、あるいは無理に割って入り上前をはねるといった行動は問題があると考えた。例えば、日中戦争時期の重慶では綿花が不足していたため、衣服の不足や、綿花の高騰が起こっていた。それに対応して虞洽卿、宋子良⁴³⁸らがビルマ—雲南ルートを抑えて買い付けや貿易を行っていた⁴³⁹。これを妨害、横取りするのは面子上問題がある上に、そのために競争するにしても後発で不利である。そのような状況を鑑みた結果、杜月笙としても戴笠と一緒に、新たに重慶で勢力を拡大し、新たに利益を上げられるルートを探すことになったのである。その一環として、詳しくは後述するが杜月笙は通済公司を設立し、日本軍と取引を交わした。重慶においても、杜月笙は勢力を拡大しようと意気揚々であったことが伺える。

ただし、この時期の杜月笙は黒社会で活動することは少ない。理由として、重慶を拠点とする秘密結社である袍哥が大きな勢力を築いていたからである。彼らを抑えて青幫側が大きな勢力を築くことは難しいと感じていた。また、重慶の高温多湿な気候は杜月笙の持病である喘息を悪化させており、比較的高地にある別荘に引きこもりがちであったことも、この時期に黒社会での活動が少ない要因の1つである⁴⁴⁰。基本的に「表社会」で商業活動を行うことが多く、また蒋介石や孔祥熙の指示を取り付けた政治経済活動を行うこともあった。また、孔祥熙の部下の辺定遠なども恒社に入社した。これは、杜月笙と孔祥熙との関係は上海にいた頃から良好であったが、より深いものとなっていたことを表している。ただし、肝心の蒋介石との関係はこの時期を境に徐々に冷えていった。杜月笙が地理的に上海から切り離され、上海租界も1943年に完全消滅しており、上海にいた全盛期と比べ影響力や権益が落ちていたことが原因であった⁴⁴¹。

そのためか、1944年に刊行された谷水眞澄『重慶論』では、杜月笙は虞洽卿と並び浙江財閥の中核分子として財界の支配層を形成しているが、孔祥熙と宋子文の統制下にある、とされている。欧米に留学するなどして欧米諸国と政治的経済的に深い結びつきを持った人物の一派を欧米派と呼んでおり、欧米派は重慶の支配層である宋家一門を頂点とし、浙江財閥の財力を基盤とした集団だとしている。欧米派には多数の人物が羅列されているが、杜月笙は数ある人物の中の1人としてしか扱われておらず、中心としては扱われていない⁴⁴²。つまるところ、杜月笙は1930年代の上海租界にいた頃に比べ、重慶に滞在していた時期からその勢力や影響力は衰え始めていた可能性がある。

さらに、杜月笙は1943年から1944年にかけて、少なくとも3回は日本軍とも大きく取引を行い、大きな利益を上げていた⁴⁴³。取引として、杜月笙は日本軍に対し、日本軍や日本占領区の住民に必要な物資を物々交換で行う貿易を行っていた。杜月笙は、上海に滞在していた徐采丞を通じて、日本の占領地で綿花を手に入れられないかと打診した。衣服の素材としての綿花が不足しており、衣類はもとより綿花も大幅に値上がりしていたのである。当時重慶にいた人物で綿花を大量に仕入れたものはおらず、うまく綿花を手に入れられ

ば大きな利益になると考えたのである。そして、徐采丞が日本側（徐采丞と関係を持っていた特務機関である松機関）に確認したところ、取引の許可が出たため取引を始めることができた⁴⁴⁴。当然日本は敵国となるため、取引するためには正当化するための大義名分が必要になる。その大義名分は、蒋介石は日本が陥落させた地域の物資を重慶などに輸送して高騰していた綿花などの物価の安定を図る、というものであった⁴⁴⁵。また、日中戦争時期における中国の内陸部は、沿岸部と比べ経済発展が遅れており、蒋介石率いる国民党が重慶を首都として戦時体制を構築するためには、沿岸部から資源や物資を調達する必要があった。特に上海は、日中戦争時期においても中国経済の中心地であり、外国との関係も深く存在したため調達先として重要であった。そのため、重慶国民政府としても、重慶をはじめとした内陸部と上海との間で物資の輸送ルートをより多く確保する必要があった⁴⁴⁶。このような理由もあり、重慶国民政府は杜月笙と日本軍との取引を許可したと考えられる。なお、日本軍としては、日本本国からの救援物資が期待できず、かつ戦略物資である亜鉛、錫、アンチモンなどの不足が深刻であったため、現地調達することが非常に大きな急務であった。取引においても、上海と重慶、互いの物価を安定させる策として徐采丞が考えていた⁴⁴⁷。また、杜月笙との関係を足掛かりに重慶政府とチャンネルを作り、和平交渉を進めるきっかけにしたかった、という意図がある。既に日中戦争は泥沼の状況に陥っており、太平洋戦争も始まっていたため早期終結をもくろんでいた節もある。なお、杜月笙はブラシの原料に使う猪鬃（豚の首や背に生えている剛毛）や、さらに重慶などで生産されたアヘンなども送り出し、大きな利益を上げている⁴⁴⁸。つまり、杜月笙と日本側は互いに不足している物資や嗜好品を交換し、互いに利益を上げたのである。

方法としては、重慶国民政府側の財政部戦時物資管理局が1942年に建議し、綿花などの物価の安定を図ることを決めた。それを受けて、杜月笙が1943年に設立した通済公司（資本金は1億2000元）と、杜月笙の部下である徐采丞が経理を行う民華公司（資本金は中央儲備銀行が発行した紙幣3億円）とで物資交換の取引を行っている。なお、この民華公司は徐采丞と日本軍の特務が連携し、周仏海の支持を取り付けて成立させた組織である⁴⁴⁹。約定日になると徐采丞の民華公司が日本軍の護衛を連れて杭州周辺の町である淳安まで綿花を運び、杜月笙が経営する通済公司が日本軍の必要としている物資を運んでいる⁴⁵⁰。さらに、重慶国民政府側の人員と汪精衛政権や日本軍の人員と交流が行われており、互いの情報を交換していた⁴⁵¹。周仏海も大きく関わっており、『周仏海日記』1943年8月27日には、日本軍の川本大佐が来て、会社を設立し重慶国民政府側と物資交換を行い、和平を促進させたい。重慶国民政府側は孔祥熙、銭新之、杜月笙が責任者となり、汪精衛政権側は杜月笙の部下である徐采丞を経理として、周仏海が背後から取り仕切るというものだがどうだろうか、と話があったためそれを了承した、と日記をつけている⁴⁵²。周仏海は大きく関わっており、重慶国民政府側の軍統に対し、日本が陥落させた地区における活動費用を捻出し、軍統が行った印章の偽証を黙認、さらには戴笠に必要な物資の販売を行っている⁴⁵³。

また、日本軍は1939年に香港で創刊された最も有名な国民党系の新聞である『国民日

報』（1949年に『香港時報』に改名）や⁴⁵⁴、1938年に安徽省で創刊された国民党系の新聞である『前線日報』などの新聞を切り抜きで保管していた⁴⁵⁵。前述したような特務からの聞き込み調査以外に、新聞からも杜月笙の情報を収集していた。これは杜月笙が重慶に移動してからも変わっておらず、また中国国内で流れていたラジオ放送（華文放送など）を日本語訳で要点をまとめたものをいくつも所有していた。内容は、杜月笙が四川に訪れたなど、動向に関するものである⁴⁵⁶。その他、日本側は杜月笙に対して、財界の人物という認識よりも青幫や黒社会の頭目として認識していた可能性が高い。例として、1942年に刊行された殿木圭一『上海』では、杜月笙に対して財界の顔役というより青幫の大物として知られている、とある⁴⁵⁷。杜月笙の活動は多岐に渡るが、おそらく最も知られた肩書としては、青幫及び黒社会の大物としての立場であったと推測される。

また、杜月笙と共産党との関係であるが、重慶に滞在していた時期には表面上共産党そのものに関わることはなかった。重慶国民政府の本拠地で共産党の勢力や人物がほとんどいなかったこと、日中戦争時期の末期には日本の敗戦がほぼ確定していたため、戦後どちらが勢力を伸ばし主導権を握るか、という状態に移行しており国共合作がだんだんと形骸化しつつあったことが関係していると思われる。共産党員と本格的に関係を築き始めるのは日中戦争期が終わった後、上海へと戻ってからのことである。

なお、杜月笙自身はあまり大きく関わっていなかったが、戴笠が中心となり軍統（藍衣社の後継）とアメリカ軍との合作が行われていた。1945年に前述した忠義救国軍のアメリカ式装備の配布や訓練の成果を見るため、上海や南京方面の視察が行われ、それに杜月笙も参加していた⁴⁵⁸。間接的ではあるがアメリカ軍とも関係があったと考えられる。

第2節 日中戦争時期における黄金栄

日中戦争時期の黄金栄は、傀儡政権側と国民党側とのバランスを保ちつつ力を温存していた。黄金栄は既に高齢であり（1937年当時で71歳）、上海から他地域に移住することが難しかった。実際、黄金栄の友人である虞洽卿は上海から重慶へと移動したが、1945年4月に上海に戻ることなく重慶で病死した。事業のためビルマー雲南ルートを頻繁に通行し、疲労が溜まり老体にこたえたことも病気になった原因の1つであろう。

つまるところ黄金栄は、日中戦争時期にどの勢力にも本気で力を貸すことはなかった。ただし、上海にいる関係で傀儡政権側に対し何人もの部下を役職につけている。のみならず、黄金栄自身も国民党側を含めた各勢力とも秘密裏に交渉を重ねていた。この繋がりを通じて各陣営の情報を仕入れており、1940年8月以降は地下工作として国民党側に情報の一部を渡していた。黄金栄は国民党第三戦区の司令長官である顧祝同に連絡し、秘密裏に駐沪連絡協事処の連絡係に任命されていた⁴⁵⁹。ただし、この役職を除けば、黄金栄本人は役職に就くことはなかった。

一方で、傀儡政権側や日本軍、国民党側の両陣営から利益を得られるとの考えも持っており、誘いそのものを邪険に断ることはなかった。そのためか、日中戦争時期の黄金栄にはど

ちらかといえば「漢奸」であった、というイメージで語られることがある。また、日中戦争時期の国民党特務も、黄金栄や張嘯林に対して「漢奸」のイメージを強く持っていた⁴⁶⁰。なお、傀儡政権側に部下を役職に就けることも時には失敗している。例として、1938年に黄金栄は日本側の誘いに応じて、弟子の楊正心を漕河涇維持会長に就けたが、国民党特務に暗殺されてしまった⁴⁶¹。当然、国民党側も黄金栄が絡んでいることを知っていたため、黄金栄ら「上海の名士」に日本側に協力しないよう警告を発している。そのような状況においても、日本側の特務機関が黄金栄を味方に引き入れるため、1938年には毎月5000元の現金を送り、1939年にはヘロインや生アヘンを送るようになった。これにより上海の無頼の多くは、日本軍に協力すれば利益になると知り、日本軍に情報を提供し始めた。黄金栄も1938年夏には日本軍と、日本側の傀儡政権を支持し日本側の息のかかった組織に部下を就けさせ、アヘンを売り日本軍の軍資金にするという協定を結んでいる⁴⁶²。

その他、汪精衛や周仏海など汪精衛政権側の重鎮が黄金栄に上海市市長に就任して欲しいと要請するといった活動も見られる。また、日本軍の軍人や駐在員（『杜月笙傳』などでは佐藤や小林といった名前が見られるが、なぜかフルネームが書かれていない）など日本側の人物、上海に残り日本側で活動していた張嘯林も度々黄金栄のもとを訪れて維持会会長などの自陣営の役職へと就任を要請し、共同事業を持ちかけるといった活動を行っていた。これらの活動に関して、黄金栄は気持ちはありがたいとしながらも、病気を装って断っていた。しかし、日本側も何とか味方に引き入れるために、特務である藤曲が黄金栄宅に駐在し、黄金栄の安全を保障するとした（実際は監視目的でもある）⁴⁶³。

黄金栄は、日中戦争時期には基本的に自宅に閉じこもり、不必要な外出をひかえていた。既に隠居生活に入っていたともいわれ、活動自体が減少していた。特に1940年頃は、野外で特務機関が暗殺合戦を繰り返しているため、不必要な外出は避けていた。また「大世界」や「大舞台」、「栄記共舞台」（現在の共舞台）などから収入があり、部下からの上納金もあるため生活には困らなかった。黄金栄はこれらの劇場や娯楽場の経営に専念していた⁴⁶⁴。他方で、汪精衛政権側にも距離を測りながらも取り入り、汪精衛政権成立時に祝賀をし、汪精衛の誕生日には毎年贈り物をした。1943年、汪精衛政権下で陳群が江蘇省庁党部主任に就任した際、大勢の部下を引き連れて祝いに行った。その後、黄金栄と陳群は手を組み、江蘇省の政権機関の多くに黄金栄の弟子が役職に就いている。例えば、呉県県長沈靖華、江陰県県長韋長鎮、松江県県長楊子傑、無錫県保安隊長周阿福などが挙げられよう⁴⁶⁵。そのため、基本的には隠居生活を送っていたとはいえ、各陣営の間でバランスを取りながら活動していた。いわば杜月笙はその立場を抗日に置いていたのに対し、黄金栄は汪精衛政権ともバランスをとるという興味深い多面的活動をしていたといえる。つまり、黄金栄は「灰色漢奸」と呼ばれるほど漢奸的な行動は取っておらず、上海に留まり穏やかに過ごすことを最優先にして行動を取っていたのである。その結果、各陣営から距離やバランスを取り中立に近い立場で行動したのである。

第3節 日中戦争時期における張嘯林

1. 張嘯林の日中戦争時期の行動

1937年に起こった第二次上海事変後も上海に留まり、傀儡政権側や日本軍と関係を深めていき、張嘯林は全盛期を迎えた。杜月笙、黄金栄と異なり、張嘯林は日中戦争時期には国民党側には一切付かず、日本軍側と公然と関係を深めていった。ただし、張嘯林自身と日本側とは日中戦争時期以前より関係があったものの、本格化するのは日中戦争が始まって以降のことである。実際、前述した第一次上海事変の際に、張嘯林は杜月笙らと共に救済活動を行っており、この時点では日本側についての形跡は見られない。

ただし、第二次上海事変の時には既に日本側につき上海に留まろうとしていた。上海において流通の関係からかアヘンが一時途絶えてしまい、アヘンの価格が非常に高騰した際、張嘯林は上海から脱出する素振りは見せず腹心である兪葉封と共に、アヘンの流通を抑えることでアヘン価格を更に高騰させ、大きな利益を得た⁴⁶⁶。日本占領下の上海においては、国民党や共産党及び杜月笙などに師事する青幫の構成員も大勢存在したが、張嘯林などに師事し上海へ留まり、傀儡政権側や日本側につく青幫の構成員も大勢存在した。そのため、日本側も青幫勢力の利用をもくろみ、懐柔策を取った⁴⁶⁷。

1939年、張嘯林は日本の特務機関のもと「新亜和平促進会」（別称「新アジア平和促進会」）を設立しており、日本軍と軍需物資の取引を行っていた⁴⁶⁸。日本軍特務機関長土肥原賢二⁴⁶⁹とも交渉を重ね、日本軍に軍需物資の調達を行っていた⁴⁷⁰。軍需物資として扱ったものは石炭、米、綿花などであるが、これらを大量に集め供給したため、市場でこれら物資の高騰を引き起こしている⁴⁷¹。中国国内だけでなく、ベトナムからも石炭を買い付け全中国に売りさばくという広域性を持つと同時に、米を調達するため（民衆か地主、あるいは米屋からか）白米を取り上げている⁴⁷²。日本側や維新政府側と関係を深め、その功績が認められた結果1939年に、日本側の占領地である浙江省の省長に任命された⁴⁷³。張嘯林は浙江省の出身であり、浙江省の青幫と深い関係や勢力を築いていた。他にも張嘯林は、日本軍と相談し、アヘンの統制販売、運搬を行う宏救善堂（維新政府が収益源確保のため組織した）の成立に加わり江蘇省、浙江省の両方でアヘン売買および運搬などの流通網を支配した⁴⁷⁴。しかし、1940年8月14日に張嘯林は、部下である林懷部⁴⁷⁵に暗殺される。享年63歳⁴⁷⁶であり、この暗殺事件や葬儀の様子は『申報』などの新聞にて大々的に報じられた⁴⁷⁷。

なお、前述したように杜月笙も日本軍と取引を重ねていたが、国民党側の許可を取り重慶の物資不足を解消するという名目を得たため、特に問題とはならなかった。葬儀には汪精衛が参加しており、張嘯林と非常に関係の深い黄金栄や、上海の商工業でトップの座を手に入れた虞洽卿も参加している⁴⁷⁸。

なお、1940年8月分の『申報』にて、張嘯林と青幫、維新政府や汪精衛政権、日本軍との関係を指摘した記事は一切見られない。そのため、張嘯林と傀儡政権側、日本軍との関係について肯定的か否定的かは判別しかねる部分が存在する。ただし、張嘯林暗殺事件につ

いて『申報』は犯人に対し極悪人だとして非常に批判的であり、張嘯林に対しては悪人ではなく純粋に上海の名士であり大物であると称賛する記事となっている⁴⁷⁹。

杜月笙は、自身の腹心である陳黙（特務機関の人間であるため偽名の可能性がある）を上海へと送り込み、合計3回暗殺を試みて3回目で成功させた⁴⁸⁰。1回目の暗殺未遂事件は1940年1月15日の舞台で行われた。このとき張嘯林は舞台におらず難を逃れたが、張嘯林の腹心である俞葉封⁴⁸¹は舞台に居合わせており、陳黙による銃撃で亡くなっている。経緯としてはまず腹心である俞葉封が、女優である新艷秋主演の「玉堂春・起解」の新舞台を見に行こう、と張嘯林を誘っていた。しかし張嘯林が来る前に、おそらく張嘯林が来ていると思い込んでいたのであろう陳黙が銃を乱射してしまい、張嘯林の暗殺に失敗している。張嘯林が舞台にいなかった理由は、1本の電話がかかってきたことである。電話の内容は、日本新業貿易株式会社の会長との用事が入り、舞台を見に行けなかったことが原因である⁴⁸²。2回目の暗殺未遂事件はそれから4か月後、詳しい日時は不明だが、午後車に乗っている最中、交差点の赤信号で止まった際に銃撃された。この時は、赤信号を無視して運転手がアクセル全開で逃げ切り、窓ガラスこそ粉々に割れたが張嘯林は無事であった。このとき張嘯林は後部座席に乗っており、銃弾も後部座席めがけて飛んできた⁴⁸³。この事件以来、張嘯林は遊びに行くなどの用事で外出することはなくなり、自宅を日本憲兵に守らせ、外出時にも護衛を6人から十数人、多い時には20人以上も付けている⁴⁸⁴。

3回目の暗殺事件は、張嘯林の長男の乳母の息子である林懷部によって引き起こされた。8月14日に、林懷部が張嘯林を暗殺した。その手口として、まずは仕事を終え運転手と一緒に車で張嘯林の邸宅に帰った。そしてわざと運転手と揉め事を起こし、大声で喚き散らして邸宅にいる張嘯林を外におびき出す。その際に拳銃で張嘯林を打ち抜く、というものであった。その後、林懷部は漢奸を殺した人間だと叫び、門番である劉徳元に取り押さえられ、フランス租界の警察（ベトナム人巡捕）によって捕まった⁴⁸⁵。林懷部が漢奸を殺した人間だと叫んだ理由として、自分が張嘯林を暗殺したことを周りにアピールする目的や、快く思っていなかった張嘯林を暗殺し、精神的に興奮状態にあったものと思われる。また、暗殺をスムーズに行うために陳黙が林懷部以外の人間も買収しており、林懷部もそのことを陳黙から聞かされていたため、買収されたものに自分は仲間だとアピールする目的もあった可能性がある。

2. 『申報』に見る張嘯林の暗殺事件報道と暗殺事件の影響

『申報』を重点的に取り上げる意義と理由として、当時の上海で発行された最大手の一流紙であることが挙げられる。これらのテーマは前述したごとく、張嘯林の暗殺事件は記事の掲載が多いものの、黒社会の活動の記事は存在しない。そのため、『申報』における張嘯林の暗殺事件および、その当時の『申報』に対する報道姿勢や問題点、限界点を記述する。

まず、張嘯林の暗殺事件にて『申報』では「14日に亡くなったため、16日に葬儀を行う」という内容の訃報の広告を、1940年8月14日に出している。ただし、張嘯林が暗

殺されたのは8月14日の午後1時45分から2時の間である（ただし、情報が多少錯綜したのか、暗殺時間は記事ごとに少しずつ異なる）。それにも関わらず、14日の朝に発行された『申報』に訃報の広告が出されており、疑問が残る⁴⁸⁶。当然、張嘯林暗殺の記事は8月15日の『申報』から掲載されている。また15日の『申報』には、14日に掲載された訃報の広告がなぜか存在せず、翌日16日の『申報』にて訃報の広告が改めて掲載されており、違和感が残る。このように日付が合わない、広告が飛んでしまった可能性としては、戦時中であるため何らかの事情で新聞の発行が1日遅れたということが考えられる。ただし、上海という都会でそのようなことが起こるかどうかは疑問であり、推測の域を出ない。しかし、発行が1日遅れたならば、14日付の『申報』は15日発行となるため、14日に暗殺された張嘯林の訃報の広告を出すことが可能となる。14日付の『申報』と同日に発行された、15日の『申報』に広告がないことにも、同日に発行された新聞に同じ広告を掲載する必要がないと考えたためであろう。

15日の『申報』には、第3面の見出しの上海部分に「張嘯林昨遭其保鏢槍殺」とある⁴⁸⁷。そして記事によれば、張嘯林が午後1時45分に銃で暗殺されたこと、プロフィールにて張嘯林は杭州人で64歳であることや（ただし辞典や伝記などでは、張嘯林は1877年生まれであり、享年63歳となっている。一方『申報』では、張嘯林は1876年生まれの享年64歳となっている）、自宅は華格臬路（Wagner, Rue）214号であること、自宅の2階の窓から撃たれたことが記事となっており、顔写真が大きく掲載されていた⁴⁸⁸。詳しく見ると、犯人である林懷部が山東人で25歳であること、運転手である王文亮は南京人で張嘯林の下で20年以上働いており、その人物と口論を起こしたこと、林懷部は子供の時から血気盛んで口論が絶えない人物であったことが記されている⁴⁸⁹。また、小見出しで林懷部に対して、主人を殺した悪人であると書かれており、給与や扱いの待遇に不満があり犯行に及んだと記事にある⁴⁹⁰。なお、『申報』ではこの記事や、後の記事においても陳黙が林懷部を買収したこと、杜月笙が張嘯林の暗殺指示を出したことは記事にされていない。当然、暗殺を実行する前に蔣介石の判断を待っていたことや、許可が出てから暗殺を実行したことも書かれていない。おそらく、陳黙は今後の漢奸暗殺や諜報活動に支障が出ないように、自分たちの存在を伏せることを林懷部に指示したと思われる。なお、フランス租界の警察に通報しようとした、門番の呉建臣という人物がいたが、彼は張嘯林暗殺直後に林懷部に頭部を撃たれ暗殺されている。林懷部は陳黙の指示により、フランス租界の警察に自首する手筈になっていたため、日本憲兵に通報されると思われ暗殺された可能性がある。状況証拠となるが、林懷部は呉建臣を殺害した理由について、一切語らなかったとしている⁴⁹¹。なお、自首する手筈であった林懷部は、呉建臣と同じ門番である劉徳元に取り押さえられ、フランス租界の警察に引き渡されている。

他の記事には、張嘯林の家族や友好関係にあった虞洽卿、范回春、袁仰安、余祥琴など10人以上の人物が、組織治預委員会の代表として葬儀に参加するとある⁴⁹²。葬儀の日付と時刻も記されており、記事には16日の午後3時と書かれている。15日の最後の小見出しに

は当時の張嘯林の役職が書かれており、記載されているだけでも、フランス租界公董局華董、フランス租界納税華人会主席、前招商局董事、交通銀行董事、中滙銀行董事、通商銀行董事、女子銀行董事、霖記木行董事、長城唱片公司董事、華商証券交易所理事、利泰紗廠董事長、国信銀行常務董事、市連会副委員長、弘毅中学校董などの役職に就任していた⁴⁹³。張嘯林としては、銀行の頭取などは金銭的な自由が非常に大きいという理由も、就任した理由の1つである。

16日の『申報』には再び訃報の広告があり、張嘯林の遺体を洗浄し防腐液を使ったこと、張嘯林の自宅近くにある、海格路通りの中国殯儀館で葬儀を行うことを告知している。記事の方にも午後2時から張嘯林の自宅を葬儀の列が出発し、近くの葬儀会館で3時から葬式を行うとある⁴⁹⁴。ただ、記事の方では殯儀館で葬儀を行うと書いてあるが、どこの殯儀館なのかは見出しに載っておらず、記事の最後に小さく中国殯儀館と書かれているのみで、記事を読んでも場所がわかりにくい。また、黄金栄、蔡宏生、楊順銓、馬長生、盧学溥、范回春、周信芳をはじめとした上海の有力者を含む500人から600人ほどが、葬儀に参加表明を記している⁴⁹⁵。なお、16日の訃報の広告には、14日の広告と比較して、海格路の中国殯儀館で葬儀を行うなど場所の追加がなされていたが、肝心の実施時間が書かれておらず不備が見受けられる。実際の時間を書くとなんか集まりすぎてパニックが起これると考えたのか、あるいは忙しい中で起こしたミスであると思われる。

17日の『申報』では葬式の模様の記事で伝えており、張嘯林の影響力が伺える。また、千人以上が葬儀に参加しており、その中には黄金栄や虞洽卿、蔡宏生、閻蘭亭、馮炳南、李士浩、袁履登、林康候、潘子欣、潘序倫、嚴春堂、甘月松、実夢銜、謝葆生といった、生前から交友関係のある上海の大物がこぞって葬儀に参加している⁴⁹⁶。また、外国人からもフランス租界総領事である奥仁、前公共租界総董である樊克令、フランス警務總監である発佩爾などの人物が参加している。送られた花束も500束から600束以上あり、自動車なども混み合っているなど盛況であったことがわかる⁴⁹⁷。つまり、これらの人物が大勢参加したことは、張嘯林という人物が黒社会だけでなく、政財界の表舞台においても大きな存在であったことを示している。他には犯人が日本憲兵に捕まらず、フランス租界の警察に捕まったことを批判した記事が掲載されている。

そして18日の『申報』では、犯人である林懷部についての犯行方法、動機に関する記述が改めて大々的に報道されている⁴⁹⁸。ただし、張嘯林を暗殺した実行犯である、林懷部の名前が『申報』に見出しに出るのは8月18日からである⁴⁹⁹。林懷部は、前述のとおり張嘯林を暗殺した後、漢奸を殺したと大声で宣言している。事件の目撃者も何人もおり、当然それだけ目立てば即日逮捕され、事件の翌日である8月15日には名前も手口も記事になるであろう。張嘯林が暗殺されたというニュースと同時に、犯人の名前を大きく出てきても違和感はなく、むしろマスメディアとしてはそのほうが自然であろう。実際、実行犯である林懷部の名前や犯行手順は何度も記事となっている。しかし、初めて張嘯林暗殺の記事が出てから、林懷部の名前が大見出しに掲載されるのに4日も掛かったことは疑問である。事件を

大々的に報じており、犯人である林懷部に対しても批判的であることから、名前を意図的に目立たなくする理由もない。可能性としては、単なる偶然と当時の状況が原因であると考えられる。1940年当時の『申報』は1日12面しかなく、杜月笙が祖廟を開いた1931年時の20面などと比べ大幅に面数が減っている。当然、1日に扱える記事の数は限られ、1つ1つの記事に割けるスペースも限られてくる。また、『申報』は上海を中核としているが、全国でのニュースと比べ上海で起きたニュースの取り扱いが相対的に少ない。そのため、張嘯林が暗殺されたことを大見出しで伝え、次に犯人の名前や犯行手順を細かく書き、その後葬儀の内容を大見出しの記事にして伝えるという構成をとった⁵⁰⁰。この時点で犯人である林懷部の名前は、記事の見出しには出てきていない。そして8月18日によく大見出しで犯人である林懷部の名前を出したと考えている。また、記事の雰囲気として、記者たちは犯人に対する興味より張嘯林が暗殺されたことそのものに興味が集中している状態であった。結果、犯人の名前が見出しに載ることが遅くなったと考えられる。

そして9月1日の『申報』にて犯人である林懷部の正式な起訴が決まった、という記事が掲載され、2人の目撃者の証言が名前入りで報道された⁵⁰¹。ただ、なぜか『申報』の記事に起訴決定の日付が存在せず、起訴された正式な日付は不明である。章君毅『杜月笙傳』、司馬烈人『張嘯林秘伝』などの伝記に至っては、起訴されたこと自体が記述されていない。わかることは、起訴の決定及び正式な起訴自体は、暗殺事件の発生した8月中に行われたということである。この時点で具体的に詳細を伝えないという問題が『申報』には存在するが、起訴が決まったという記事が掲載されたのはその日1日のみであり、その後この裁判に関する記事は一切存在しない、という問題も存在する。なお、郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』によれば、事件後林懷部は普通刑事犯として牢獄に入っており、日中戦争終結後に軍統から2万元の報奨金を受け取り釈放された⁵⁰²、とある。つまり、林懷部は国民党の軍統の息がかかっていたことが裏付けられたことになる。

その後、張嘯林に関する記事はほぼ存在していない。日中戦争終結までに記事となったものとして、張嘯林の遺産分割が揉め裁判沙汰になった、という内容の記事が1942年10月19日に1日だけ見られる。その日の『申報』に掲載された内容は、張嘯林が亡くなった後財産を家族が管理しきれないという理由から虞洽卿、黄金榮が一時的に財産を預かっていた。その財産を返そうとした際に、張嘯林の遺族側が揉めて、長子が原告となり裁判が起る。裁判になった財産は主に住宅及び不動産で「200万元」の価値があったが、それを張嘯林の遺族8人が複雑に分け合った。記事において、遺族が要求する数字を和算しても合計は一致しておらず、裁判の決着もついていない⁵⁰³。なお、この財産については住宅及び不動産以外の具体的な財産は一切説明がなく、その金額も合計で「200万元」としか書かれていない⁵⁰⁴。当然表に出せない財産もあったと考えられるが、『申報』にてそういった財産は報道されていない。

1942年頃になると、『申報』も太平洋戦争の開戦に伴い共同租界も日本軍に占領され、さらに日中戦争も決着がつかず泥沼化したことにより、原材料不足に陥ったためか1日8

面に減っていた。そのため、上海のローカルニュースを載せるスペースが取れないという事情もある。しかしそのことを鑑みても、張嘯林の遺産相続の記事は扱いが小さいといわざるを得ない⁵⁰⁵。それに加え、『申報』にてこの日以外に張嘯林の遺産相続の裁判に関する記事はなく、その後の推移や結果がどうなったのかは残念ながら不明である。張嘯林も杜月笙と同じように、複数の夫人と多くの子供がいたこと、遺産も多く残したこと、暗殺であったことから遺言書が存在しないことを鑑みれば、遺産相続争いが発生してしまったことは致し方ない部分が存在する。

そのほかにも『申報』に関する疑問点はある。張嘯林は、前述したように暗殺事件の前に過去2回暗殺されかけたが、そのことは『申報』で記事に出てこない。実際に張嘯林が暗殺された際には、連日記事として取り上げており、この扱いの差には違和感がある。また、『申報』の索引を見る限り、張嘯林についての記事は少ないことが明らかとなっている。これは原材料不足に陥り、『申報』1日当たりの面数が減り続けていったことが原因の1つであろう。1940年当時、既に始まっていたインフレも手伝い新聞を発行できない日もあったと考えられる。上記の状況により不備が生じやすくなっており、記事の情報に不可解な部分があったと考えられる。それでも律儀に毎日の日付を刻んで、二日分の新聞を発行したことは、どのような状況であろうとも『申報』を発行し続けようという、『申報』側の意思が伺える。

なお、『申報』の記事にこそ掲載がなかったものの、張嘯林が暗殺された当時からこれは藍衣社の仕業であろうと推測がなされていた。例として、谷水眞澄『重慶論』日本青年外交協会、1944年では、張嘯林暗殺に関して藍衣社、特に戴笠が事件に関連しているといわれている、という内容が存在した。谷水眞澄はこの著書の出版当時毎日新聞社東亜部副部長であり、前役職は毎日新聞社上海支局長という報道機関で勤務している人物であることから、上海における暗殺事件に藍衣社が関わっていることは、中国に関わる報道関係の人物には周知の事実であったことがわかる⁵⁰⁶。

他に、『申報』には報道されていないことが『杜月笙傳』などいくつかの文献で見られる。当然報道されたことが全てではなく、当事者やその周辺人物しか知りえないことは数多く存在していたことが伺える。結果論として、張嘯林が再び杜月笙より大きな勢力を持つことが最後までかなわなかった(杜月笙は張嘯林よりも後に台頭してきており、かつては張嘯林のほうが大きな勢力を持っていた)。しかし、張嘯林の勢力も決して無視できないものであったからこそ、蔣介石は戴笠を通じて杜月笙に暗殺の指示を出したのであり、張嘯林が暗殺された際も連日新聞記事で取り扱われたのである。そして、張嘯林暗殺後に発生した上海における暗殺合戦となったことから、張嘯林が大物として扱われていたことが伺える。

おわりに

以上のように日中戦争時期における杜月笙、黄金榮、張嘯林の利益追求活動や、日本側、国民党側、維新政府や汪精衛政権など傀儡政権側との関係を取り上げた。そこでわかったことは、第一に杜月笙、黄金榮、張嘯林は長年義兄弟となるほどの協力関係を築いており、上

海三大亨と呼ばれるほど上海租界で大きな勢力を持っていたが、第二次上海事変以降それぞれ活動の方向性が大きく異なっていたことである。杜月笙は日本側とも取引に応じながら、基本的には国民党側で抗日活動を行ったといえよう。それに対して黄金栄は傀儡政権側の役職に部下を就けたが、それに対抗する国民党側にも情報を裏で流している。張嘯林は日本側と親密な関係を築き、利益追求に熱心であったため、最後は杜月笙により暗殺された。これは杜月笙が本質的には抗日であったことの傍証となる。この3人は互いに出会ってから当初、互いの権益を犯すようなことはせず（それぞれの部下まで絡むようなところは別として）、ある程度互いを尊重していた。一方で、根本は黒社会の人間であるため、政治家や軍人以上に金銭的な利益や勢力拡大、自尊心からくる社会的名誉や黒社会での権威のために動いていた。そのため、張嘯林が国民党側ではなく日本側に傾いた理由も、日本側が優勢である、との錯覚が存在したことは否めない。ここで重要なことは、杜月笙や黄金栄も、仮に日本側が勝利した場合でも、上海の名士として、上海黒社会のボスとしての権益や勢力が維持できるよう動いていたことであろう。そのため、蒋介石に追従して重慶には行かず、日本側に表立った協力もしないという動きを取ったのである。つまり、いずれが勝利しても自らの基盤安定という形で自分も「勝利」できるように仕組んだ巧妙な戦略といえよう。

第二に、杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人とも、日本軍と取引関係があった。そして杜月笙と黄金栄は、国民党側とも関係があった。張嘯林に関して、国民党や蒋介石は自身に利益をよこさず、その上協力ばかり要請するため嫌っていた。日中戦争が終結した後、自身の上海での立場を考えた際に、どちらが勝利しても大丈夫という安全パイを打たず、本質的に蒋介石が嫌いという自身の感情を優先させた。嫌いな理由としては、例えば四・一クーデターなどで蒋介石に協力したにも関わらず、国民党の要職を希望していた張嘯林の三男の就職先の面倒を見なかったことなどが挙げられる。換言すれば、杜月笙は国民党側と協力することで、秘密裏に日本軍と互いに不足している物資を交換取引していたため特にデメリットはなかったが、張嘯林は日本軍と大手を振って関係を持ち、日本軍と戦争状態にあった国民党側を裏切った形となり暗殺までされた。それに対して、黄金栄は汪精衛政権、日本軍、国民党と上手くバランスを取って関係を持ち続けていた。

第三に、日中戦争時期の杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人を取り上げたことにより、日中戦争時期に勢力を持っていた人物がどのようにして利益や権益を確保していたか、またどのようにして自身の勢力を伸ばしたのか明らかになった。つまり自身の政治的思想によって動いた部分だけではなく、いかにして戦争で利益を挙げるか、自身の金銭的利益や黒社会での権威付けや勢力の拡大といった、利益にそって動いていた部分も多大に存在した。このことから、戦争による義憤などには翻弄されず、むしろ戦争を利用して自身の金銭的、社会的名誉や権威といった利益につなげようとする行動や思考がしばしば見受けられる。その結果、張嘯林の暗殺や金スキャンダルでの金価格の乱高下など、日中戦争に影響を与える出来事が続々と発生した。

なお、杜月笙は上海から脱出し、黄金栄は既に隠居生活を送っている、張嘯林は暗殺されたため、上海黒社会トップの3人が表舞台で活動していない状態となった。そのため、誰が黒社会トップになりまとめ上げるのかという競争が繰り広げられた。しかし、誰も代わりとなるものはおらず、日中戦争の終結後に杜月笙が上海へと戻ってきたことで収まりがつくことになる⁵⁰⁷。ただし、上海に戻った後の杜月笙は落ち目となり、30年代の全盛期ほどの勢力は持たず各方面からライバルの追撃を受けることとなった。

また、杜月笙が関係を持ったものについて述べる。第一に杜月笙が一番関わりを持ったのは、蒋介石率いる国民党であった。そのため、杜月笙の軍事関係の取引は、国民党側のフィクサーとして蒋介石の指示を受け抗戦、暗殺などの活動を中心に行っていたことがわかった。蒋介石側としては、上海に大きな地盤を持ち、青幫を大きく動かせる杜月笙を抑えることで、傀儡政権の支配下にある上海に大きな影響を与え、かつ青幫を間接的に動員することができた。

第二に国民党以外の勢力とも、自身の利益があれば密かに取引を行い、周仏海など汪精衛政権側の人物の要求も聞くことがあった。つまり、中国側が負けた場合は傀儡政権側やその大元である日本側に寝返り、自身の勢力を維持できるように立振る舞っていたのである。周仏海などと関係を持ち、少なくとも汪精衛側からは杜月笙がこちらに寝返るのではないかと期待されるような関係性であったこともわかった。

第三に、日本軍とも上海に留まった腹心の徐采丞などを通じた関係を持ち、重慶からの物資交換取引などを行っていたことがわかる。日本側としては、杜月笙が蒋介石率いる国民党側との架け橋になることを期待されていた。

第四に共産党側に関しては、管見の限り直接の物資の提供、取引などは見られない。杜月笙自体が基本的には国民党側についており、四・一二クーデターのこともあったためか、共産党側とはどこか距離があったように見える。日中戦争期の段階では、共産党が国民党に取って代わり政権を築くことなど想像していなかった（蒋介石側や日本側、上海に存在した傀儡政権側ほどは重要視していなかった）ことも、国民党側ほど距離を詰めていなかった要因の1つであろう。しかし、関係そのものは垣間見えており、杜月笙公館で共産党員が抗日活動のための演説を行い、青幫などにも妨害をしないよう呼び掛けるといったことはあった。共産党員側も、杜月笙を利用して影響力の拡大を考えていた。

つまり、杜月笙は基本的には国民党寄りのナショナリストであるが、非常に政治的な思想に熱心であったわけではない。そのため、日中戦争期を中心に国民党側についていたが、傀儡政権側や日本側とも寝返るほどではないが関係は存在した。共産党そのものとは関係は見られないものの、共産党員とは個別に関わりを持っていた。本論文で執筆してあるが、決して国民党側のみについていたわけではない。また、杜月笙にとって租界の外国人は、互いに利用し合うことによって自身の影響力や権益を拡大できる存在であった。当然、租界の外国人という括りであるため、欧米人だけではなく日本人を含め関係を持っていた。その関係性を持って国民党側と関わった部分もあり、権益や影響力が更なる権益や影響力を呼んで

いた、といえよう。日中戦争期においても、その関係が断絶しなかったことは非常に興味深い。このように、ある程度の柔軟性を備えており、かつ大きな勢力を築いていたからこそ、周仏海など汪精衛側や日本側、共産党側も杜月笙を利用しようと近づいたと考えられる。

なお、日中戦争以降からは、戴笠が亡くなったことや蒋介石との関係が悪化したことから、国民党と以前ほどの親密さがなくなっている。一方で、共産党に対しては香港へと移動するまで直接の関係は持たなかったが、杜月笙が設立した恒社において、共産党員が次々と加入し始めている。恒社の社員は、日中戦争期までは国民党側の人物や第三勢力の人物がそのほとんどを占めていた。さらに、恒社社員である朱学範などは一度共産党側から国民党側になったが、日中戦争後は再び共産党側に属して反蒋介石の立場を明確にするなど、恒社の組織において変容が見られた⁵⁰⁸。また、租界が消滅したことにより、日本を含む租界の外国人の勢力が大幅に減少したことで、杜月笙と外国人との接点も大幅に減少した。戦犯とされた汪精衛政権側の人物に対しても、特に減刑や助命に関する活動は行っておらず、関係もほぼ途切れている。ただ、汪精衛政権側についていた人物でも、恒社の社員に留まる者もいたが、世間体もあつてか恒社の大会に呼ばれないなど、やや扱いが悪くなっている。最終的に、1949年に杜月笙は国共ともに深入りするのをやめ、政治の世界に対し大きく身を引き香港へと移住した。

第7章 杜月笙と日中戦争後における動向

はじめに

杜月笙は日中戦争時期以降、上海に戻り活動していた。しかし、1930年代のような全盛期の勢力を取り戻すには至らず、ある程度の勢力の回復に留まっていた。そして、国共内戦にて共産党が優位に立ち、1949年に上海が解放される寸前に香港へと移動した。そして1951年に亡くなるまで香港に滞在し続けていた。第7章では、日中戦争時期以降の杜月笙の活動や、一部黄金栄の活動について取り上げる。活動内容としては、杜月笙の各勢力に対する取引や、杜月笙が香港に移動した後の晩年の経済活動や生活、上海解放後も上海に留まり続け、質素に暮らしていた黄金栄の晩年の動向を扱う。

先行研究であるが、日中戦争後に関しては杜月笙の勢力が全盛期に比べ衰えていたことから、そこを中心に据えた論文は管見の限り存在しない。しかし、部分的とはいえ取り扱った論文は存在しており、①朱華、蘇智良「杜月笙其人」(『歴史研究』1988年第2期、4月)では、抗戦勝利後、つまり日中戦争後の杜月笙の動向について取り上げている。国民党の特務であるCC団との抗争を何度も行うこととなり、国民党から国共内戦の義捐金を強要されるなど、杜月笙と国民党との関係が徐々に冷えていき悪化していったとある。個々の事例を淡々と並べた印象であるが、事例の数は複数存在している。②郭緒印「蒋介石対幫会的利用与控制」(『学術月刊』1988年12期、12月)では、蒋介石と青幫をはじめとした幫会との関係を記している。1927年から1937年までは積極的に幫会と関係を持ち利用していたが、日中戦争時期に入ると幫会の活動を疎ましく思うようになり、戴笠や杜月笙に幫会を監視させるようになった。日中戦争後は幫会が独自に政党を作り上げることを恐れ、組織を解散させるなど距離を取るようになった、とある。やや文章量は少ないが、日中戦争後の幫会との関係性を、杜月笙を含めて扱っている。また、この時期の杜月笙に関するものでは、晩年ということもあって回顧録も複数存在しており、例として③杜順安口述、王豊整理「是門生？ 是夜壺？ ——祖父杜月笙与蒋介石的恩恩怨怨」(『文史博覽』2009年11期、11月)では、杜月笙の孫にあたる杜順安が、杜月笙に関する当時の記憶を語っており、その中に日中戦争後の杜月笙の動向も語っている。杜月笙が台湾でなく香港へと移動した理由について、蒋介石の息子の蔣経国が杜月笙の息子の杜維屏を逮捕したこと、上海市参議会選挙にて杜月笙が議長に当選したにもかかわらず、圧力をかけ当選直後に辞退させたことなどを挙げている。ただし、杜月笙の墓は台湾にあり、家族にも生前台湾へ行くように告げていた。当人の記憶から話しているため、どうしても回顧録の限界は出てくるが、杜月笙の晩年の動向を知る文献として興味深い⁵⁰⁹。

以上のことから、日中戦争後の時期における杜月笙の研究は少なく、残念ながらあまり重要視されているとはいえない。しかし、杜月笙は上海に戻った後、全盛期ほどではないにせよ、蒋介石側から警戒されるほどには上海での勢力を取り戻していた。当然、当時の上海における影響力は決して無視できるものではなく、また香港へと移動した後も何らかの影響

を各地に与えたものと考えられる。そのため、第7章では、杜月笙の晩年の動向についてどのような活動を行い、どのような影響を与えていたのかについて取り扱う。

第1節 日中戦争勝利後における杜月笙の活動

日中戦争期が終わった後の杜月笙は、管見の限り、国共内戦の時ににおいて軍事関係の取引に手を出すことはなかった。しかし、国民党及び共産党との関係は続いていた。汪精衛政権や日本軍との関係は敗戦したこともあり、ほとんどの関係性が消えている。汪精衛は1944年に名古屋で亡くなり、後を継いだ周仏海も日中戦争の終結に伴い蒋介石側に身柄を拘束されている。周仏海は杜月笙だけでなく、戴笠とも関係を築いていたが、その関係は互いに利用し合うものであり、裁判で減刑されたものの1948年に獄中死してしまい関係が途切れてしまった。最後に残った関係としては、恒社の社員にかつて汪精衛政権側についた人物が存在しており、戦後も引き続き恒社の社員として活動していた、というものであった。

戦後の中国では、共産党側の勢力が増大していたが、当然上海においても再び増大し、恒社にも共産党員が次々と加入していた。共産党側としても、杜月笙の影響力は全盛期ほどではないとはいえ、依然として大きいため距離を探りながらも関係性を築こうとしていたのである⁵¹⁰。杜月笙としても、共産党の勢力が日に日に大きくなり、蒋介石との関係も冷えていったためか、ある程度の物資協力は行うようになった。また、俳優であり共産党員でもある金山を、共産党側の要請で自身の門徒に加入させており、かつ開山門徒弟という門徒の中でも最も地位の高い待遇においた⁵¹¹。杜月笙としても、四・一二クーデターの時とは状況が異なる、共産党の影響力がかなり大きくなっている、ということを感じ取っていたのであろう。ただし、第3章でも述べた通り、日中戦争後の恒社は活動が低調になっており、社員数が大幅に増加した、共産党員が次々と加入して相互に影響を持ったとはいえ、恒社の全盛期ほどの影響力を保持できたわけではない。

杜月笙は上海における金融業界や工業、商業界に改めて進出するために、各業種の各企業の重役に就任し始めた。董事長や理事長など、70以上の役職に就任したとされる。その中には当然、日中戦争以前の上海において就任していた役職がいくつも含まれていると考えられる。また、後ろ盾の1つとなっていた租界の外国人勢力を復活させるため、1948年末に潘公展と共にアメリカ大使と面会し、租界における万国商団に類似した組織を作る計画を立てた。アメリカ側も前向きであったため、杜月笙は「上海各界自救救国連合会」や「自衛保安団」を成立させ、アメリカ海軍陸戦隊が上海に駐在するのを待っていたとされる⁵¹²。ただし、翌1949年に共産党が上海解放を行い、杜月笙も香港へと移動したためこの計画は頓挫している。期間が半年ほどしかなく、設立した各組織も立ち消えとなった。

また、杜月笙が上海へと戻ってきた際に、汪精衛政権下の上海で勢力を蓄えて、杜月笙の立場を奪い取って代わろうとする人物が何人も現れ始めた。そのため、杜月笙はそういった人物の相手をするようになった。ただし、杜月笙も一応は勢力をある程度は盛り返してはおり、絶対的な勢力や影響力とまでは行かないものの、上海において大きな勢力を築くことに

は成功している。

1947年8月30日、杜月笙は自身が60歳（還暦）となった記念に誕生日祝いとして式典を開催した⁵¹³。蒋介石との関係は悪化していたものの、蒋介石は扁額を贈り、養子であり次男としていた蔣緯国を派遣して祝賀している⁵¹⁴。この誕生日会は7月の間から祝寿委員会籌備処を組織して準備しており、陸京士、徐采丞、顧嘉棠、范紹増らが参加していた。各方面に挨拶や参加状を送っており、上海以外で杜月笙を知る人物や、杜月笙の門弟にも参加を呼び掛けている。また、中国各地の京劇役者にも公演の依頼を行い、宣伝や進行の段取りなどの連絡を行っていた。その結果、誕生日会前日には各方面から祝賀が送られてきており、杜月笙の耳にも毎時間要人の名前や礼品の名目が知らされるほどであった。蒋介石からは、嘉樂宜年という四字の扁額が送られたが、もし蒋介石が杜月笙に対し何も送らなかった場合は陳布雷が代わりに何か執筆した扁額などを送る予定であった、と范紹増は語っている⁵¹⁵。その他、銭大鈞が最も早く杜月笙に祝いの品を送っており、次いで邵力子夫人、その次に宋子文らが礼品を送っている。宋子文は乾隆帝時代の竹の根っこを掘って作った寿桃と佛手（武夷正岩茶という中国の高級茶）を送るなど、全体としては中国の骨董品が礼品として送られていた。また、誕生日会には蒋介石からの代表として蔣緯国の他、呉鼎昌、宣鉄吾、宋子文、呉国楨など約9000人が参加した⁵¹⁶。

なお、準備を担当していた1人である范紹増が語るには、杜月笙の60歳記念の誕生日会にて最も忙しかったのは、全国各地から公演しに来た京劇役者のスケジュール調整であったという。誕生日会当日（2日間行われていた）にも演目が行われていた。さらに、第4章でも前述したが、誕生日記念として開催されたチャリティー公演も、9月3日から7日までの5日間開催される予定であったが、スケジュール調整やその交渉の結果、さらに5日間延長したため、合計で10日間チャリティー公演が行われた。チケットのランクは5つにわかれており、20万元からスタートし、最高で50万元であった。なお、ハイパーインフレにより米1石が当時30万元以上したため（集めた金額を義捐金として送る際には1石50万元以上に跳ね上がっている）、チケットの代金も高額なものになっている。合計で20億元以上の売り上げがあり、純粋な義捐金を含めると30億元以上に上ったという⁵¹⁷。杜月笙の勢力が衰えていたことから、祖廟の落成式ほどは大々的ではなかったものの、日中戦争以降の上海における式典では規模の大きなものとなった。

1948年には、杜月笙の息子であり上海証券交易所のブローカーである杜維屏が、投機取引によって市場を攪乱させたとして蔣経国に拘束された⁵¹⁸。蔣経国が杜維屏を逮捕しようと考えたきっかけは、黄金栄の息子の妻である李志清が原因であったという。1948年に蔣経国が黄金栄宅を訪問した際、李志清が接待したが、その際に蔣経国が上海交易所の状況を李志清に尋ねていた。その理由は、蔣経国が上海交易所にて不正な投機が行われていると疑っており、それを摘発するためであった。李志清は、上海交易所が杜月笙の免責の下、その息子の杜維屏が管理しており、經紀人である自身の夫の上前を撥ねて不法投機を行っていると言っていた⁵¹⁹。もう1つの理由としては、蔣経国は1948年8月には上海区経

済督遵副専員の役職に就いていたことである。黄振世が偶然、杜月笙が門弟を動員して株の不法投機を行っているとの噂を耳にしており、そのことを蔣経国に伝えていた。しかし、蔣経国が派遣した呉紹澍はこの杜月笙の話を知っていたため、特に大きな問題とならず、杜月笙が逮捕されることはなかった⁵²⁰。ただし、杜維屏が逮捕された遠因の1つとなった可能性はある。上記のような出来事が重なり、杜維屏は蔣経国によって逮捕された。しかし、杜月笙が釈放に尽力したため、杜維屏は罪に問われることなく釈放されている。ただし、杜月笙の全盛期では考えられない出来事でもあり（全盛期ならばそもそもこのような事態は発生しない）、杜月笙の勢力や影響力が徐々に下落していったことを感じさせる出来事であった。

黄金栄は日中戦争後において、既に隠居生活を送っていたものの、完全に勢力拡大を諦めていたわけではなかった。そのため黄金栄は自身の組織であった「忠信社」の後続組織を立ち上げようと考え、1946年2月23日に「栄社」という組織を立ち上げた⁵²¹。ただし、栄社が正式に成立大会を開催したのは1945年11月の間だとされ、杜月笙、楊虎、王曉籟などが祝いに駆けつけている。そして、栄社は忠信社と、基本的な活動は共通している。栄社は日中戦争時期に活動停止した忠信社を、名前を変えて再び立ち上げた、といった立ち位置の組織である。黄金栄が栄社を立ち上げたきっかけとしては、杜月笙の恒社が上海にて活動を再開し、人員の拡充を図ったことと、楊虎が組織した興中学会（旧名興中社）や洪門である鄭子良の俠義社がそれぞれ1万人を超える社員数を誇っていたことが挙げられる。そのため、黄振世と邱子嘉と建議し、組織を設立した。場所は嵩山路振声里で、元々はフランス租界公董局の買弁である趙振声の住宅であった⁵²²。

栄社の社長は黄金栄で、常務理事が邱子嘉、黄振世、陳培徳、杭石君、丁永昌、理事が姚松如、呉玉蓀、龔天健、陳福康、魯錦臣など15人、監事が莫士爵、楊春華、張志清、陳菊生、張錦寿である。活動は不定期に集まり晩さん会などを開いたものの、既に活動が停滞していた恒社以上に活動は不活発であり、黄金栄の腹心である黄振世の「振社」の方がむしろ活発であった。そのため、栄社と振社、そして黄振世の門弟である周一星が組織した「星社」の3つを合併したらどうかという議論もされたが、黄金栄が賛同しなかったため立ち消えとなった⁵²³。結果として栄社が不発に終わった理由は、同様の組織に比べ活動が不活発であり、また黄金栄自体が高齢により日中戦争時期に引き続き隠居気味の生活を送っていたことが原因であろう。

第2節 国共内戦における杜月笙・黄金栄の活動

国共内戦に関しては、杜月笙、黄金栄共に深く関わっていたわけではない。杜月笙は蔣介石をはじめ、国民党との関係悪化や共産党とも再び関係を深めていたことがその要因の1つである。黄金栄は栄社を立ち上げる、蔣介石とも懇意にしていた、という行動は取っていたものの、基本的には日中戦争時期と同じく高齢のため隠居生活の比率が高く、政治的には杜月笙ほど積極的ではなかったことが要因の1つである。

1946年6月に、蒋介石が共産党地区への侵攻を開始して第二次国共内戦が激化した
が、その際に杜月笙は18の商業同業公会及び6つの工業同業公会の名義を連ね、蒋介石の
内戦に呼応している。また、国民を動員するため「人民動員委員会」を改変して「中国新社会
事業建設協会」を設立し、杜月笙がその常務理事に就任している⁵²⁴。しかし、実態として
この組織がどれだけの働きをしたのか、その詳細は語られておらず不明である。一方で、日
中戦争以降の杜月笙は管見の限り国民党側に対して積極的に働きかけを行うことが少なく
なっており、あまり積極的に活動した形跡は見られない。

また、1947年に共産党員である潘漢年と杜月笙が、一度香港に行った際に秘密会談を
行っている。内容は杜月笙が、上海における共産党の接收を保証し、黒社会の人物を使って
かき乱す行動を取らないかわりに、共産党が黒社会に対して寛大な処置を取る、というもの
であった⁵²⁵。1947年段階では国共どちらが勝利するか、まだはっきりとはしていないは
ずである。しかし、そもそも杜月笙は国共内戦に対してさほど国民党側に協力しておらず、
どちら側についた方が自身の利益になるか、第1章で述べた四・一二クーデター以前のよう
に考えていた可能性がある。また、前年1946年に戴笠が亡くなったことや、蒋介石との
関係が悪化したことから、国民党とは日中戦争期までの親密さがなくなっていたことも、こ
の行動を取った要因の1つである。国民党的ナショナリストの側面は確かに存在しながら
も、一方で自身の利益に関して非常に重きを置いていたのも、黒社会の頭目であり中国の要
人である杜月笙の特色といえよう。

これらの状況から、杜月笙は日中戦争以降、国共内戦においても特別大きな動向を見せる
ことはなかった。少なくとも日中戦争時期におけるほどの活動はなく、蒋介石率いる国民党
側の指示や意向を汲んで行動することもなかった。蒋介石や国民党側にとっても、杜月笙と
の関係が冷えていた上、影響力や勢力が低下していた杜月笙に大きな協力を依頼する気が
なかったと考えられる。第3章で前述したように、杜月笙は蒋介石から上海市長には任命さ
れず、上海市参議会選挙にて議長に任命されるも、蒋介石の意向により辞退させられている。
さらに後述するが、蒋介石が台湾へと移動した後、台湾の新聞である『台北大報』にて杜月
笙を批判する記事が堂々と掲載されていたことから、杜月笙側に自身の味方になっても
らおうとする雰囲気は感じられない。蒋介石側が杜月笙に対する冷たい態度を変えたのは、
1951年に杜月笙が亡くなった後のことである。

1948年に蔣経国が上海を訪れた際、杜月笙と黄金栄が宴会を準備して招待した。そし
て、蔣経国は杜月笙、黄金栄に対して国共内戦で国民党側の支援を要請していた。ただし、
国共内戦にて国民党側が敗戦を重ねて状況が悪化していたためか、杜月笙は内心ではあま
り積極的には支援して関わりを持つつもりはなかったようである。また、黄金栄も同様であ
り、後述する楊虎などの工作の影響もあり積極的に支援するつもりはなかった。ただし、同
席していた黄金栄の腹心であった黄振世は蔣経国に同調して接近し、自身の組織である「振
社」を使って支援すると答えている。ただし、黄金栄に説得され、結局黄振世も蔣経国に積
極的に協力することはなかった⁵²⁶。

1949年初頭には、毛沢東や周恩来も杜月笙を利用しようとする工作が進められていた。例として、国共内戦により1949年初めに秦皇島から上海に輸送する石炭が送れなくなっていたが、その際に杜月笙は共産党に対して、上海の麵粉と秦皇島の石炭を交換しようとして建議している。ここで杜月笙が出てきた理由として、杜月笙は汽船による海運業や麵粉業界に依然として勢力を持っており、中国海事建設協会主任委員と全国麵粉公会理事長の役職に就任していた。そのため、汽船の海運業の窮地を脱するために麵粉を交換条件に持ちだせたのである。結果として同年2月23日、毛沢東と周恩来が杜月笙に返電し、杜月笙の建議に同意した上、さらに周恩来は杜月笙に対し取引や合作を持ちかけている。内容は、上海の治安維持を行い、上海各業界を南方に移したり破壊したりすることなく保護し、人民解放軍に接収させたならば、共産党は杜月笙と合作できる、というものであった⁵²⁷。杜月笙は麵粉と石炭の交換は行ったものの、共産党による上海解放直前に香港に移動したため、合作は行っていない。ただし、国民党側の破壊活動にも特に参加しておらず、香港に移動した後も反共活動を行わないとしたため、共産党側の顔を立てながらも誘いには乗っていない。

1947年11月1日、黄金栄は自身の80歳（傘寿）となった記念に誕生日祝いとして式典を開催した。黄金栄の誕生日には毎年門弟やそのまた門弟が3000人以上参加しており、黄金栄は少なくとも1人100元、多ければ1000元の祝い金を門弟から受け取っている。第2章で前述した黄家花園の建造費も、全て門弟や経済界からの祝い金合計350万銀元で建設したとされている⁵²⁸。この時期には国民党も戦局が悪くなっていたことを理由に、黄金栄は大々的に誕生会をすることを止めようと考えた。しかし周りの支持によって、80歳記念の誕生会を大々的かつ盛大に開くことにした。杜月笙と楊虎が主催し（黄振世によれば楊虎は総招待であり、招待に関する責任者であったとされる⁵²⁹）、黄振世が総務、魯錦臣と程錫文が賓客を接待していた。そして、11月1日の誕生会当日には、蔣介石の次男である蔣緯国、当時上海市長であった呉国楨、社会局長に就任した呉開先や孔祥熙、王曉籟などが祝いに駆けつけていた。さらに、李濟深（1948年に中国国民党革命委員会を設立し、これは後に中国共産党の衛星政党となった）が黄金栄を祝いに駆けつけて老大哥と敬った後、四・一二クーデター後頃より蔣介石と対立し始めた楊虎も加わり3人で密談を交わしたという。内容の詳細は不明であるが、蔣介石批判の内容であり李濟深が一度香港に逃亡する、という内容であった。おそらく、この時期には既に楊虎と李濟深による反蔣介石や共産党との提携に関する工作が行われていたと考えられる⁵³⁰。なお、誕生会の開催場所は黄金栄宅ではなく、玉佛寺で開催しており大規模な宴席を用意して、杜月笙の60歳記念の誕生日に劣らぬほどの盛況を見せたという⁵³¹。最後に、黄金栄、李濟深、王曉籟、程錫文の4人が玉佛寺で参拝を行っており、ただ挨拶に来ただけではないことから、ある程度以上の関係の深さが伺える⁵³²。

なお、蔣介石は3日ほど遅れたものの陳布雷を通じて連絡を入れ、翌日5日に黄金栄宅に誕生日祝いに伺うと伝えた。5日、国共内戦が既に始まっていた上に国民党も敗走を重ねつつあったにも拘わらず、蔣介石は黄金栄宅に直々に駆けつけ、黄金栄の誕生日を祝っていた。

黄金栄も自ら蒋介石を出迎えており、陶雪生に自衛団5、600人を派遣させ警護体制を敷き、蒋介石のために宴席を準備していた⁵³³。つまり、1947年段階では黄金栄は蒋介石を見限ろうとは考えておらず、かといって反蒋介石側の人間をないがしろにすることもなかった。どちらにつくかはっきりとは示さず、バランスを取って上手に立ち回り利益を得る考えであった。

第3節 中華人民共和国成立後における杜月笙・黄金栄の活動

杜月笙は国共内戦にて、1947年頃より国民党が劣勢となり共産党が優勢となった後、共産党が上海を占領して上海解放を行う可能性があると考えていた。そして、1949年に入り共産党の軍隊である人民解放軍が上海に迫りつつあったため、1949年4月27日に上海を出発し、香港へと移動した⁵³⁴。蒋介石は杜月笙と一緒に台湾へ移動するよう勧めており、毛沢東や周恩来は上海に留まり共産党側について協力するよう要請していた。また、黄炎培や張瀾も杜月笙に対し上海に留まってほしいと伝えていた⁵³⁵。しかし、杜月笙は家族を何人か連れ、また万墨林や朱徳文など20名ほどと共にオランダ商船を借りて香港に移住した。息子の杜維藩や部下の陸京士は台湾へと逃れている⁵³⁶。杜月笙が台湾には移動せず香港へと移動した理由として、蒋介石の息子の蔣経国が杜月笙の三男である杜維屏を株の不法投機で逮捕したこと、杜月笙を上海市長に指名しなかった上に、上海市参議員選挙にて杜月笙が議長に当選したにもかかわらず、圧力をかけ当選直後に辞退させたことなどが挙げられる⁵³⁷。さらに、『台北大報』の社説などで、杜月笙に対して上海の金融や物資を操る政治のゴミ、経済のイナゴといった誹謗中傷を受けていたことも、杜月笙が生前台湾へと移動しなかった理由の1つである。なお、香港では堅尼地城（Kennedy Town）にある堅尼地台18号（Kennedy Terrace）で生活しており、形状もマンションであったため上海の戸建ての自宅に比べると小さかった⁵³⁸。香港での生活費は、上海にあった杜月笙の邸宅を売却して賄っており、アメリカ人に売却したところ45万ドルであったという⁵³⁹。

また、上海解放後に共産党側の人物と接触があり、中華人民共和国が改編した中国銀行董事会に参加している⁵⁴⁰。その他、上海に留まっていた杜月笙の息子である杜約翰が、上海市副市長であった潘漢年の指示で杜月笙の下を訪れ、共産党側に寝返って上海へ戻ってくれないか、という伝達を行っている。ただし、基本的には杜月笙の体調が芳しくなく（おそらく長年に渡るアヘン吸飲の害や、持病の喘息が悪化したことによる）、呼吸困難や両足の一時的な麻痺などで病院に緊急搬送されるときもあったため、杜月笙は潘漢年に礼をいい反共活動を行わないとしたものの、上海に行くこと自体は病気を理由に断っている。また、第4夫人である姚玉蘭も香港に来ていたが体が病弱であったため、この2人の世話は第5夫人である孟小冬が行っていた⁵⁴¹。その他、章士釗や杜維藩も杜月笙が上海に戻るよう働きかけたが、杜月笙はその働きかけには応じなかった。その代わり、蒋介石に従って台湾に行くことはなく、上海に在留している自身の門弟に対しても、政府の法令に遵守するよう伝える、と答えている⁵⁴²。

そして、1949年の同時期より、杜月笙は国民党側に肩入れしてつくことを止めた。理由としては、国民党側の勢力が大きく減衰し関係も悪化したことと、共産党側は勢力を大きく増大させ、最終的に国共内戦でも勝利したことである。その一方で、杜月笙は共産党側を邪険に扱い敵対関係を復活させることこそなかったものの、国民党から共産党へ大きく寝返ることも行わなかった。その理由は、杜月笙が大きな資金源としていたアヘン、売春、賭博及び、経済界にて多数の役職に就任して自由に活動することと、財産の接収を国民党以上に行う共産党とは相性が非常に悪かったためである。また、社会主義的な政治姿勢から、1920年代から1930年代ほどではないものの上海へと戻っていた外国人や、外国人や富裕層の中国人が大切にす資本主義とも相容れなかった。共産党員と個別に関係を築き利益を得ることはともかく、共産党そのものが支配権や政権を確立した場合、杜月笙の利益や権益に関してはプラスにならず、むしろマイナスであった。そのため、杜月笙は政治の世界に対して大きく身を引き、香港へと移住したのである。

また、前述のように、香港へと渡った頃から体調が優れず、政治の世界だけでなく、経済活動や黒社会の活動も消極的となり、隠居生活を送っていた。その後、毛沢東率いる共産党からの誘いはあったが、杜月笙は香港に留まり表面上の関係にとどめ、深入りすることはなかった。前述の通り、相手からの要請があれば返答を返す、文書を送るといった行動に留めており、自ら積極的に利権に食い込むことはなかった。ただし、杜月笙の門弟である陸京士や朱学範など、引き続き政治の世界に留まり活躍したものも多くいた。また、恒社の会員は台湾に渡った者も多く、その後台湾の国民党政府にて立法委員、国民大会代表などに当選し、国民党の統治に協力していた⁵⁴³。

例として、杜月笙に関する人物約300人が台湾に移動した後、青幫を名乗り活動を行っていた⁵⁴⁴。その中の一派が1992年に中華安清協会（2017年に中華安清総会に改名）という青幫の分派組織を成立させている。この中華安清総会は黒社会の秘密結社としての性格が幾分薄くなっており、合法的に存在する非営利団体となっている⁵⁴⁵。また2018年5月12日に、中華安清総会の長老であり青幫でいう「悟」世代の崔介忱が108歳の誕生日会を開いた際に、国民党名誉首席である連戦（1996年に第9代中華民国副総裁、2000年に国民党主席）が自筆の祝賀を送っているなど、現在においても青幫系の組織と国民党との関係は途切れず存続している⁵⁴⁶。また、中国側で活動している、中華安清総会総顧問である蔡江濤がこの誕生日会に、上海の青幫関係の人物を20人以上引き連れ参加していた⁵⁴⁷。蔡江濤は中国共産党の衛星政党であり李済深が設立した中国国民党革命委員会の党員でもあり、国民党系や青幫系の関係を活かして共産党側の統一戦線工作に従事していることから、2021年現在においても青幫の分派組織が国共両党に一定の関係と影響を保持しているといえよう⁵⁴⁸。この中華安清総会以外にも青幫に関係する組織は台湾に現存しており、中華正義社、中華安親会、中華安清公益事業協会、中華安清巖社、台湾大中華家庭關懷協会などが存在している⁵⁴⁹。これらの組織は青幫そのものではないが、青幫が弱体化後に分裂して成立した、後継の組織である。

話を戻し1951年、神経衰弱や心臓病などにより杜月笙は死期を悟ったのか、亡くなる数か月前に第5夫人となる孟小冬と結婚式を挙げている⁵⁵⁰。1951年7月には脳卒中を起こした後遺症により、手足が麻痺しており、8月7日に遺言を残して不動産、債券、現金などといった遺産の分配を行っている。そして、8月10日には昏睡状態に入った⁵⁵¹。なお、杜月笙の遺産は25万ドルほどであり、その多くは杜月笙と結婚した孟小冬が相続し、残りを各夫人やその子女に分けている⁵⁵²。8月16日に杜月笙が亡くなった後葬儀を行い、遺体は蒋介石により台湾へ運ばれ、台北の基隆に葬られた。その後は息子の杜維藩が墓守を行い、現在でも杜月笙の墓地が存在している⁵⁵³。また、第3章で前述したように、共産党は上海解放後、特に1951年以降黒社会に対して弾圧とも呼べる取り締まりを行っている。そのため、杜月笙の葬儀は上海においても行われたが、その際に集まった青幫の構成員は逮捕されたという。

黄金栄は上海解放後も上海へと留まり、共産党側につくことになった。その際に、日中戦争時期に共産党員を密かに匿ったことをアピールし、上海解放後に400名に及ぶ幫会の頭目の名前が綴られたリストを共産党に差し出している⁵⁵⁴。また、楊虎や共産党の工作により、黄金栄は香港や台湾に移動せずに上海に留まることを決めたという。そして、国民党の財産の報告を行い、部下にも国民党側の破壊工作には加担せず、共産党側の援護を行い部下自身の逃げ道を作っておくよう指示を出している。さらに、黄家花園に飾っていた蒋介石に貫った「文行忠信」の扁額を破壊しており、共産党側に対し国民党側には付かないことを表明した⁵⁵⁵。最終的に共産党側は黄金栄が所有していた大世界の接収や、黄金栄にその大世界の前を掃除させる、共産党の人民政府が発行した5万元の公債を買わされる、という処罰がなされた⁵⁵⁶。なお、当時の黄金栄は財産をほぼ所有しておらず、そのための資金を杜月笙に頼み込み工面していた。財産を所有していなかった理由としては、黄金栄の息子の妻である李志清が、黄金栄の財産を貴金属類に変えて香港へと移動し、その後台湾へと移動した上、黄金栄に財産を渡さなかったためである⁵⁵⁷。

そして、1951年5月20日の『文匯報』にて、黄金栄は「黄金栄自白書」を掲載し自己批判を行っている。当然、自らの意思というよりも共産党側にそうさせられた出来事である⁵⁵⁸。元々上海解放後から浮浪者などは厳しく収容し、帰郷させるなどの措置を取っていたが、黒社会の幫会の人物に対しては寛容であった。しかし、1951年2月21日に公布した「懲治反革命条例」より、共産党が黒社会に対して寛容な措置を取ることを辞め、厳しく取り締まる方向に転換しており、黄金栄も黒社会の人物として活動することはほとんどなかった⁵⁵⁹。

1952年には、黄金栄が江北の黒社会のドンである顧竹軒と面会しており、面会することとなった理由は1920年代後半にまで遡る。かつて顧竹軒の部下である唐嘉鵬を、黄金栄が部下として引き抜いた。そして、黄金栄が所有する大世界の経理に、唐嘉鵬を就任させた。しかし、顧竹軒が部下に指示を出し、経理に就任した唐嘉鵬を暗殺した。報復として、黄金栄は警察のコネを使って捜査を行い（黄金栄の部下が就任していた）、実行犯である顧

竹軒の部下を逮捕させ、さらには顧竹軒もろとも失脚させた。黄金栄としては報復とはいえやり過ぎたと考えたのか、顧竹軒側は特に要求していなかったが、顧竹軒に謝罪して和解している⁵⁶⁰。黄金栄の晩年は、黄金栄自身の高齢に加え共産党の取り締まりが厳しかったこともあり、黒社会から事実上足を洗った状態であったことが伺える。1953年に黄金栄は、上海市軍事管制委員会に2回目の自白書を提出した。その後しばらくして病気により高熱を出し、そのまま治ることはなく86歳で亡くなった⁵⁶¹。

杜月笙、黄金栄共に晩年は勢力が大きく衰えた理由として、影響力や勢力、権益の基盤となった黒社会や国民党もまた大きく弱体化していたことが挙げられる。青幫や紅幫は1950年代には消滅し、国民党も1949年に台湾へと敗走しており、本土への光復もかなわなかった。外国人勢力も日中戦争や租界消滅で打撃を受けた上、上海解放によってそのほとんどが海外に脱出した。つまり、自身の地位や権益を保証し支える勢力がことごとく上海から消滅したことが挙げられる。さらに、表社会の経済も共産党に接収されており、黄金栄の財産も大世界の支配人の地位などを含め大量に接収されていた。杜月笙も上海に存在していた自身の財産を整理して処分した後に香港に移動していた。上記の状況により、杜月笙のように香港に移動したとしても、黄金栄のように上海に留まったとしても勢力を維持することは不可能であった。

おわりに

第7章にて判明したこととして、杜月笙は日中戦争後、上海へと戻ってきたが勢力が衰えてきており、1930年代の全盛期ほどの勢力を回復できなかったことが挙げられる。上海には8年近く離れていたものの、それでも影響力は残しており、香港や重慶においても勢力拡大や利益追求の活動は行っていた。しかしそれでも全盛期の勢力を上海で取り戻せなかった。その理由として第一に、蒋介石率いる国民党が杜月笙と距離を取り始めたことにある。上海租界の消滅により、杜月笙は後ろ盾の1つとなっていた外国人の影響力を大きく失い、蒋介石側にとって利用価値が減少していたのである。また、1946年に杜月笙の門弟であり蜜月な関係であった戴笠が飛行機事故によって亡くなったこともあり、杜月笙と国民党のパイプが弱まったこともマイナスの影響を与えている。結果、杜月笙は蒋介石から冷遇され関係が冷えていき、杜月笙が狙ったとされる上海市長の役職や、実際に狙っていた上海市参議会議長の役職も蒋介石の意向により就任することができなかった。

第二に、上海をはじめ日中戦争後の中国経済が物資の不足などによって極度のハイパーインフレに見舞われており、さらに上海の産業も、国民党側の接収や物資の不足を補うためのアメリカ製品の大量流通も加わり壊滅状態に陥っていたことが挙げられる。そもそもの経済基盤が非常に脆弱になってしまったことにより、杜月笙が得られる利益や行使できる影響力も限られたものになっていたのである。また、この時期に杜月笙が上海に居住していた期間はおよそ4年であり、1910年代から1930年代までの間、長年かけて築き上げてきた杜月笙の全盛期の勢力を取り戻すには時間が足りなかった、という事情もある。

第三に、杜月笙が上海を離れている間に、上海で影響力や権益を伸ばしていた人物との競争に晒されることとなった。汪精衛政権側についていた人物の財産は接収されたものの、中立を保った勢力や杜月笙をライバル視していた人物と競争関係に突入していった。そのため、杜月笙の影響も依然大きかったものの、相対的には落ちてしまっており、1930年代の全盛期ほどには勢力が及ばなかったのである。これも前述の通り約4年間しか時間がなく、ライバルを押さえて再び安定させる猶予がなかった部分も存在する。

その他、杜月笙及び黄金栄の晩年について、意義と限界を述べる。杜月笙の晩年、香港での滞在中は喘息や脳卒中などで健康を害していたこと、基盤であった上海を離れたこと、香港において青幫の勢力が衰えており香港の秘密結社との競争に敗れつつあったこと、国民党との関係がほとんど途絶えてしまったことにより、勢力を伸ばすことはできなかった。元々の貯えを切り崩して生活している側面もあり、利益や権益を手に入れるどころかむしろ赤字となっていた。日中戦争時期での香港滞在時は、国民党との関係が良好で密接な関係があったことや、健康面でも大きな問題が存在せず勢力的に活動できたことなどがあり、さほど勢力を落とさずに活動できていたが、それと比較すると杜月笙の晩年は完全に落ち目となっている。

また、黄金栄の晩年に関しても、黒社会における活動をほぼ停止させ、質素に暮らしている。そして、黄金栄は高齢のため隠居生活を送っており、さらに共産党側による上海解放や財産の接収により、黄金栄の資産も大きく減少している。共産党政府が発行した公債5万元を購入するために、自前の財産では足りずに杜月笙に工面してもらったことを鑑みるに、既に全盛期の暮らしを送ること自体が不可能であったことがわかる。黒社会の取り締まりも厳しくなり、活動が困難になっていたため、利益の追求もまた困難になっていた。黄金栄が晩年質素に暮らしていた理由はこのようなものである。

終章

終章では、杜月笙の意義と限界及び、本論文で解明したこと及び今後の展望課題について述べる。まず意義であるが、第一に清朝末期以降、特に上海においては従来のエリート層や富裕層でなくとも、本人の才覚と運次第で社会的に成功を取めることができるようになった。そして、その中でも杜月笙は特に大きな成功を取めた人物の1人となった。本論文で述べたように、杜月笙の出生は平凡であり、養育環境は貧困であった上、文字の読み書きにも苦勞する状況であった。しかし、そのような状況におかれた人物においても、社会的経済的に大成功を取め、上海全体に大きな影響を与えたことは杜月笙の意義といていい。結果的に、杜月笙の子供も学校に通い、イギリスに海外留学を行ったものもいたことから、杜月笙自身の幼少期とは全く異なっていることがわかる⁵⁶²。

第二に、杜月笙は黒社会での活動で大きな成果を取めた後、いわゆる表社会の経済界や政界にも進出して大きな成果を取めたことである。杜月笙が表側にも受け入れられ成功を取めたことは、経済的には保守的ではなく才覚や判断力、行動力があつたといえよう。杜月笙と同じく上海三大亨である黄金栄や張嘯林は、杜月笙に比べ経済的にはやや保守的であり、杜月笙ほどには政界や経済界へ積極的には進出しておらず、基本的に銀行界や報道会社には関わろうとしなかった。この点を鑑みても、杜月笙の先見の明と、より大きな影響力や権益を手に入れるためにはどこをpushさなければいいのか、そのことを非常によく理解していたことがわかる。ただし、これは清朝末期から中華民国期にかけての、ある種社会情勢が不安定で混乱していた部分があつたからこそなしたことである。2021年現在の中国においては、反黒社会運動や汚職摘発が盛んなこともあり、杜月笙のように黒社会で成功を取めた後に政界に進出することはほぼ不可能であり、経済界においても進出して成功を取めることは難しい。

第三に、杜月笙はその勢力や影響力の大きさから、上海における各階層や各業界、ひいては中国全体や日本側、租界の外国人勢力に至るまで一目置かれ、杜月笙を自分たちの陣営に引き込もうと干渉を行っていたことである。それだけ杜月笙に利用価値があつたということであるが、杜月笙の方も各陣営や各勢力を秤にかけており、利用価値を考えていた。つまり、互いに利用価値があると考えて関係を持っていたのである。この結果、杜月笙は蒋介石や戴笠、孔祥熙といった国民党の要人と関係を持ち、中国の政局に関わりや影響を持ち、時には共産党側や日本側、汪精衛政権側の動向にも影響を与えたのである。その影響力は確かに存在し、上海を中心とした中国の動向や政局に関わっていたことから、中国近代史を詳細に掘り下げた際、杜月笙という存在を無視することはできない。

次に限界としては、第一に杜月笙はあくまで後ろ盾を擁して絶大な勢力や影響力を保持していた側面が大きく、後ろ盾が弱体化した際は一緒に勢力や影響力が弱体化したことである。租界の外国人や、国民党、中でも蒋介石や戴笠は杜月笙の後ろ盾として特に大きなものであつたが、日中戦争によって租界が消滅し外国人が大幅に減少したことや、蒋介石との

関係悪化、戴笠の事故死などで後ろ盾を失ったことにより、杜月笙の勢力や影響力は大幅に減少したのである。黄金栄などの黒社会の同業者を除き、後ろ盾となった人物の代わりに杜月笙が台頭することはなく、晩年の状況を鑑みても杜月笙単独では国民党や特務機関の限界で勢力を伸ばしていくことは難しかったと考えられる。

第二に、杜月笙は社会情勢の時流を読み、機会を手にして自身の利益とすることには非常に長けていた。一方で、あくまで時流に沿って動くことはあっても自身で時流そのものを大きく変える、全体の趨勢をひっくり返すということは基本的に見られない。与えられた状況や環境の中で、最大限の利益を追求して手に入れることはできたが、与えられた状況そのものを主導権を握ってひっくり返す、ゲームチェンジャーのような活躍は見られなかったのである。それに近い活躍としては、蒋介石率いる国民党側の指示によって四・一二クーデターの実行犯として活動する（ただしこれも尖兵としての補助的な役割が強い）、日中戦争時期における上海での暗殺合戦の停止であろうか。

第三に、杜月笙の勢力や権益を自身の子供や門弟など、次世代にあまり多くは引き継がせることができずに一過性の勢力に留まってしまった点が強いことである。長期にわたり安定した勢力は築けなかった点においては、決して失敗とはいえないが杜月笙の限界を感じてしまう部分ではある。同時代の経済界ではジャーディン・マセソン商会、政界では国民党や共産党などが長期に勢力を保有していたため、かつての恒社の社員が台湾で活動するなど杜月笙の勢力が完全に消滅したわけではないものの、やはり限界が見えてくる。杜月笙の子供も生活は裕福ではあったが、あくまで一般人として上海や台湾で生活しており、政界や経済界において特に勢力や影響力を保持しているというわけではない。

それを踏まえて本論文で解明したこととして、従来の論文にてほとんど扱われず、重点を置いて論じられることのなかった事柄を複数解明した。第一に従来の論文にて一部を除き希薄であった、杜月笙の黒社会における具体的な活動を明らかにした。アヘン運搬を中心としたアヘン取引企業である三鑫公司における活動や、高級な賭博場で社交クラブとしての機能も備えた181号での活動内容などを解明している。また、杜月笙が黄金栄宅に住み込む前の活動や、杜月笙が結成した小股八党における活動も一部明らかにした。その他、杜月笙が現役の頃から、日本側は杜月笙を黒社会の頭目として認識していたことも明らかにしており、上海における重要人物の1人として重要視していたことも明らかとなった。

第二に日中戦争時期において、杜月笙と汪精衛政権及びその背後にいた日本軍との関係にも焦点を当て、敵対関係以外の関係及び取引などの行動を明らかにした。従来の研究では杜月笙の抗日活動には重点を置いて研究されていたが、その枠には当てはまらない部分については研究が遅れていた。本論文では日中戦争時期における杜月笙の活動について、日本軍との物資取引を行ったことや新聞のインタビューにて汪精衛側を評価したこと、周仏海と何度も連絡を取り合い汪精衛側に寝返る可能性があることと期待されていたなどの、抗日活動以外の活動も複数解明した。当然、その活動は相手側の動向にも影響を与えており、杜月笙の利用価値やその魅力に関して評価できるものである。

第三に既存の論文にてほぼ扱いのない、杜月笙の晩年の動向に関してもその焦点を当てた。そして、晩年の杜月笙は国民党側から距離を置かれた一方で、共産党側から度々杜月笙に連絡が入っており、深入りこそしないものの連絡を取り合い一定の関係を築き、そして相互利益や相互利用の関係となったことを解明した。四・一二クーデターにて杜月笙が実行犯として共産党員を弾圧したことは研究されていたが、その後の杜月笙と共産党との関係はあまり研究されておらず、ここに本論文の特色の1つが存在している。杜月笙の門弟が台湾へと移動して、その末裔が現代台湾における青幫系の組織にも影響を与えており、国民党及び共産党との関係も一部明らかにされつつあるが、これはいうまでもなく杜月笙の関係した人物によって脈々と受け継がれていったものであろう。

その他にも、本論文で明らかにしたこととして、第1章では四・一二クーデターにおける『申報』の報道に関して、実行犯である杜月笙、黄金栄、張嘯林がどのように報道されていたかを明らかにした。また、『申報』の四・一二クーデターに関する広告の変遷についても明らかにした。第2章では杜月笙の祖廟の落成式について、『申報』がどのように報道していたのか、参加者の具体的な隊列や演目などを明らかにした。また、杜月笙が祖廟をどのように使用していたかについて明らかにした。第3章では、実態が不透明な部分が多数存在する恒社について、その活動内容の実態や政治的な関係を明らかにした。また、恒社社員の動向や影響力が及んだ部分やその規模や明らかにした。第4章では、部分的な研究が中心であった杜月笙の慈善活動について、寄付金額などできる限り具体的な数字を伴いながら、行った慈善活動をできる限り網羅してその詳細な活動内容を明らかにした。第5章では、杜月笙の経済活動について、表側と裏側の両方から実態に迫り、特に史料が乏しく研究が進んでいない裏側の黒社会における活動について、その代表例となるアヘンと賭博関係の詳細を明らかにした。第6章では、日中戦争時期における杜月笙、黄金栄、張嘯林の活動について、『申報』や各種伝記類を使用しできる限り具体的に迫った。そして、杜月笙が抗日活動だけでなく、各勢力と関係や取引を行い利潤を挙げていることや、黄金栄も灰色漢奸と呼ばれながらも実際は漢奸と呼ばれるような活動は基本的に控えていたこと、張嘯林が暗殺された際の『申報』の報道姿勢やその問題点も明らかにした。第7章では、やはり研究が進んでいない杜月笙及び黄金栄の晩年について、その動向は多岐に渡っている事、そしてできる限りその詳細に迫り明らかにした。また、晩年の政治的な動向について、国民党側だけでなく共産党側とも関係を持っていたことも明らかにした。

一方で、本論文の今後の展望及び課題として、杜月笙の活動に関して具体的な数字が不明瞭なものが数多く存在している。例として、アヘンの運搬や売買といった取引の詳細やその収益、所有した賭博場における収益や賭博の種類、掛金の平均レートなどが挙げられる。このような黒社会の活動は史料として具体的には残っておらず、実態の解明に時間が掛かってしまう。この点は今後の課題である。その他、『杜月笙傳』や『杜月笙正伝』といった伝記類は杜月笙研究に使用されることが多いが、その伝記ごとに詳細が異なる部分が存在している。そのためある程度は割引いて考える必要があるが、史料だけではわからない部分に

関して比較的信憑性が高いと思われるものを引用している。信憑性に関する観点としては、引用が記載されていることと、物語的な会話文が存在しないことを観点としている。

最後に杜月笙の歴史的な位置づけ、役割、意味などの考察を行う。①杜月笙の位置づけとして黒社会の出自であり、ほぼ無学であった。儒学中心の伝統的な知識人層や、豪商や地主など代々の富裕層とは根本的に異なる。しかし、杜月笙は清朝末期から中華民国にかけて、政治や社会の混乱、上海で顕著だった近代化などの時代を利用し、一代にて表裏両方で大きな勢力を築いた。上海の経済や社会にて租界の外国人を含め、最も影響力を持つ人物の1人となったばかりでなく、上海、率いては中国全土の政治活動に携わり、外国からも一目置かれる存在となった。②杜月笙の役割としては、この影響力を行使して上海の労働紛争を解決し、貧困層に対し慈善活動による生活保障を行っていた。行政の手が回らない状況で、社会の安定化を図っていたといえる。一方でアヘン取引や賭博場経営などで黒社会の頭目として活動し、青幫をはじめとした黒社会の勢力拡大を行った。結果として上海は魔都と呼ばれ、世界各国の大都市の中でも特に治安の悪い犯罪都市として名前を轟かせることとなった。③杜月笙における重要な意味の1つに、四・一二クーデターや日中戦争時期にて蒋介石の指示を受け活動し、中国全体の情勢に影響を与えるフィクサーとなったことが挙げられる。また、国民党に留まらず中国各地の軍閥、日本や日本傀儡政権、共産党員に対し、杜月笙はその影響力の大きさにより相互利用、相互利益の関係を築いていた。このような関係も、中国全体の情勢に影響を与えていたといえよう。

要するに杜月笙は、上海という都市において、上海租界において、蒋介石率いる国民党側にとってなくてはならない人物であった。杜月笙なくして上海という地域をコントロールすることはできず、上海を支配下に置きコントロールしたい各陣営、国民党、共産党、軍閥勢力、租界の外国人、日本傀儡政権や日本軍といった存在にとって、杜月笙は自陣に引き入れ利用する価値や魅力のある人物であった。杜月笙もそのことをよく理解し、相手を利用することでより大きな権益や勢力、影響力を手にすることができた。そしてその結果、杜月笙はより利用価値や存在感が高まっていき、最終的には中国全体の政治情勢を動かすまでに大きな存在となったといえよう。そのため、杜月笙の研究を行うことは、中国近現代史において重要なことであると断言できる。

¹ 杜月笙（1888—1951）は当時の上海の外れにある浦東高橋鎮出身。杜月笙の原名は月生であり、後に名を鏞と改め、号も月笙と付けた。命名したのは章太炎である。青幫に加入しアヘンの売買や賭博場で巨額の利益を上げたことから、中国を含め黒社会の人物で頭目、というイメージが一般的に強い。四・一二クーデターの際に活躍が認められ、蔣介石から海陸空総司令部顧問、国民政府軍事委員会少将参議に任命され、フランス租界当局からも公董局臨時華董顧問に任命される。だが、病院や学校を作る、慈善事業にも積極的に活動するなど慈善家としての一面を持つ。黄金栄や張嘯林に比べ、政財界の大物や外国人との付き合いに積極的であり、1929年中滙銀行を開設し董事長に就任して買収、董事長や理事を務めるなどした結果、1931年の祖廟の落成式を行った時期の前後から、上海の黒社会における、俗にいう3大ボスとされる黄金栄、張嘯林と比べてもより大きな勢力を持つようになり、その勢力は上海の黒社会にて過去最大規模のものとなっていた。日中戦争時期の1937年から香港へと逃亡しており、香港で勢力を拡大するとともに、国民党のフィクサーとして蔣介石や戴笠の指示を受け、自身の配下に対し上海にいる漢奸など（と見なした者）の暗殺指示を出していた。この活動は1941年、太平洋戦争が始まり香港が日本占領下になるまで続いた。なお、杜月笙の各種伝記類によれば、学校へは半年ほどしか通っておらず、文字の読み書きは苦手としている。20歳頃青幫へと加入し、「悟」の字輩となる。そして黄金栄夫人である林圭成に取り入って気に入られ、出世していったとされる（古廩忠夫「杜月笙」、山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、1995年、168—170頁。「杜月笙」、徐友春主編『民国人物大辞典』華北人民出版社、1991年、237頁など）。

² 黄金栄（1868—1953）は江蘇省蘇州の出身。字は錦鏞、乳名は和尚であるが、基本的には金栄の名前で呼ばれている。杜月笙や張嘯林と共に俗にいう3大ボスとして知られており、彼ら2人の親分でもあった。6歳前後に親子で上海へと移住する。フランス租界の刑事として活動する傍ら、黒社会の親分としても活動しアヘンの売買で巨額の富を手に入れる。黄金栄は杜月笙、張嘯林にとっても師となっている。そして義兄弟の契りも結んでいる。また、蔣介石を弟子として師弟関係を結んでおり、戴笠に対しても蔣介石によろしく頼む、といった紹介状を用意しており間接的に親分肌を見せている。警官時代はあばたの金栄という名で通っていた。江蘇省の蘇州で生まれたが、上海生まれだと紹介されることも多い。1892年にはフランス租界の巡査となり、刑事の座を手に入れる。そして同時に、青幫の構成員であり、青幫の中でもかつては最大の勢力を誇っていた。自らははじめは「空子」、後に「通」の字輩を持つ青幫の構成員であった。1927年の四・一二クーデターの際に功績が蔣介石に認められ、国民革命軍総司令部少将参議の地位を手に入れる。1930年代頃より、隠居して悠々自適の老後を送りたいと考えており、黄家花園という黄家の廟を広げた個人庭園を作っていた。日中戦争時期は、既に高齢のため上海を脱出せずに留まることを選択しており、なおかつ傀儡政権側や日本軍、重慶国民政府にも従わず逆らわずの対応を取っ

ていた。黄金栄を利用しようとするものは後を絶たず、部下を傀儡政権側の役職に就任させたりもしたが、黄金栄は最後まで誰にも本気で力を貸すことはなかった。上海解放後は質素に暮らしていたという（「黄金栄」、徐友春主編、前掲辞典、1114頁。「黄金栄」、陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』浙江古籍出版社、1993年、804—805頁など）。

³ 張嘯林（1877—1940）黄金栄、杜月笙と共に俗にいう3大ボスとして上海の黒社会に大きな影響力を持っていた。原名を小林、幼少期の名前は阿虎、後に改名し張寅とも名乗っている。嘯林という名は号である。浙江省慈谿県の出身であり、子供の頃は私塾に通っている。張嘯林が20歳の時、兄である張大林と共に仕事を求め、母親と共に杭州の拱宸橋という町に移住した。杭州武備学校という警察学校に入学。そこで張嘯林は、後に浙江省の知事となる張載陽、張嘯林と同じ慈谿県出身の李休堂などと親しくなり、浙江省で勢力を持つ何豊林などの軍閥や役人との人間関係が作られた。卒業後は杭州府衛門領班（杭州の役人が就く役職の1つ）に配属され李休堂の部下となる。そして1912年、張嘯林は上海に35歳の時に移住した。張嘯林は上海の黒社会にて地盤を固めるため青幫に加入しており、「大」の字輩を持つ樊瑾成の配下となり、自身は「通」の字輩を手に入れた。やがてアヘンの運搬と販売の権利を巡り、杜月笙や黄金栄をバックに持つ金廷蓀と対立するも和解した。そうして勢力を拡大した張嘯林は、杜月笙、黄金栄と共に「上海三大亨」と呼ばれることとなる。1920年には、杜月笙が董事長を務める三鑫会社に副董事長となった。1927年の四・一二クーデターで、張嘯林は杜月笙、黄金栄と共に活躍した。その功績を蔣介石から称えられ、張嘯林は海陸空軍総司令部顧問、国民革命軍総司令部少将参議、行政院参議などの地位を与えられる。同年、上海フランス租界納税華人会会長にも就任した。1932年には上海華商紗布交易所監事に就任している。1937年に起こった第二次上海事変後も上海に留まり、傀儡政権側や日本軍と経済的に手を組み張嘯林は全盛期を迎える。1939年に浙江省の省長に任命された。最後は1940年8月14日に暗殺される。享年63歳。

（「張嘯林」、徐友春主編、前掲辞典、979頁。「張嘯林」、陳玉堂編著、前掲辞典、470頁。司馬烈人『張嘯林秘伝』中国文史出版社、2004年、6頁など）。

⁴ 蔣介石（1887—1975）は浙江省生まれ。国民政府主席。黄金栄門下で最も大きな勢力を持った人物。ただし門下の証である証文は1927年3月に、手土産として返されている。北伐軍のトップとして上海に凱旋した際に一応、面子を返すということで四・一二クーデターの計画段階で黄金栄との舎弟関係は解消された。しかし、蔣介石の方はあまりそう思っておらず、国共内戦中においてすら、黄金栄の80歳記念の誕生日祝いに遅れたとはいえ直に顔を出して祝っている。日中戦争時期は国民党での事実上のトップであり、重慶を首都として潜伏し、各地の国民党軍や協力者に指示を出していた。なお、黄金栄や杜月笙とは基本的に良好な関係を築いていたが（杜月笙とは最後喧嘩別れに終わったが）、張嘯林とは折り合いが悪く、互いに協力関係を築くことも利用関係になることも少なかった（家近亮子

「蒋介石」、山田辰雄編、前掲辞典、330-340頁。「蒋介石」、徐友春主編、前掲辞典、1371-1372頁など。

⁵ 戴笠(1897-1946)は本名が春風、字は雨農、学名が微蘭、仮名は漢肯など、様々な名を持つ浙江省江山県出身の軍人、特務。3歳下の弟がいる。1922年には江山県保安郷学務委員。1926年、杜月笙と対面した。そして旅費を杜月笙に出してもらい、黄金栄の紹介状を持ち同年黄埔軍官学校騎兵科に入学した。そのような経緯があるため、戴笠は杜月笙の舎弟であり弟分であり、義兄弟の契りを結んでいる。力行社、藍衣社、張嘯林が暗殺された当時は軍統などの特務機関を率いており、主な任務は参謀、暗殺であった。そのため、1940年、杜月笙に対し、暗殺役のフィクサーを頼み事として依頼し、相談しに来ていた。1946年、飛行機事故により亡くなる(菊池一隆「戴笠」、山田辰雄編、前掲辞典、127-129頁。「戴笠」、徐友春主編、前掲辞典、1597頁など)。

⁶ 郷波「黄金栄事略」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、131頁。

⁷ 黄振世口述、何国涛整理「我所知道的黄金栄」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、169頁。

⁸ 渡辺惇「フランス租界・大世界界限 暗黒街の記憶を訪ねて」『月刊しにか』2000年7月号、大修館書店、32頁。

⁹ 日本上海史研究会編『上海人物誌』東方書店、1997年、117頁。

¹⁰ 朱釗良、許維之「張嘯林の一生」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、343頁。

¹¹ 石君「上海三大亨の勾結和闘争」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、351頁。

¹² 俞雲九「我所知道的張嘯林」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、348頁。

¹³ 「張嘯林」、徐友春主編、前掲辞典、979頁。

¹⁴ 日本上海史研究会編、前掲書、118頁。

¹⁵ 程錫文口述、楊展成整理「我当黄金栄管家的見聞」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、155-156頁。

¹⁶ 同上、157頁。

¹⁷ 日本上海史研究会編、前掲書、117頁。

¹⁸ 郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』河南人民出版社、1991年、12頁。

¹⁹ 章君毅『杜月笙傳』中国大百科全書出版社、2011年、3-7頁。徐鏄成『杜月笙正伝』浙江人民出版社、1982年、11頁など。

²⁰ 章君毅、前掲書、9-13頁。徐鏄成、前掲書、11頁など。

²¹ 酒井忠夫『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』国書刊行会、1997年、3

22—323頁。

²² 同上、320—322頁。

²³ 日本上海史研究会編、前掲書、117頁。

²⁴ 同上、122頁。

²⁵ 徐鏄成、前掲書、11頁。

²⁶ 「張嘯林為 寰球学生会建会所 計洋六万余元」『申報』1936年7月27日など。

²⁷ 司馬烈人『張嘯林秘伝』中国文史出版社、2004年など。

²⁸ 郭緒印主編、前掲書、27頁。

²⁹ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』324頁。

³⁰ 村松祐次「青幫」平凡社編『アジア歴史事典』第5巻、平凡社、1960年、371—372頁。

³¹ 孫江『近代中国の革命と秘密結社—中国革命の社会史的研究（1895～1955）』汲古書院、2007年、196—197頁。

³² 蘇智良、陳兩菲『近代上海黒社会研究』浙江人民出版社、1991年、119頁。

³³ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』289頁。

³⁴ 渡辺惇「青幫運河生活者集団の大流」、『歴史読本』臨時創刊、昭和63年3月増刊号、1988年3月、153頁。

³⁵ 郭緒印主編、前掲書、225頁、230頁。

³⁶ 末光高義『支那の秘密結社と慈善結社』滿洲評論社、1932年、12—13頁。

³⁷ 同上。

³⁸ ほかに、青幫の構成員は青幫以外の者を助けてはいけない、破ったものは厳罰に処すという規則が存在するが、当然厳格に守られていない。宗教結社の側面も存在するが、原理原則を尊ぶ原理主義者が存在したかは組織の方向性として疑わしい。

³⁹ 渡辺惇、前掲記事「フランス租界・大世界界限 暗黒街の記憶を訪ねて」33頁。

⁴⁰ 安田峰俊『現代中国の秘密結社 マフィア、政党、カルトの興亡史』中央公論社、2021年、52頁。

⁴¹ 渡辺惇「上海の青幫 魔都上海の演出家たち」『月刊しにか』1995年9月号、大修館書店、43—44頁。

⁴² 高橋孝助、古厩忠夫『上海史 巨大都市の形成と人々の営み』東方書店、1995年、上海史年表12頁、13頁、32頁、33頁、35頁。

⁴³ 同上、上海史年表12頁、13頁、21頁—27頁、30頁、31頁、33頁—35頁。

⁴⁴ 同上、上海史年表21頁、23頁—26頁、28頁—30頁、33頁—35頁。同上、220頁、223頁、232頁。酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』364頁。水町誠司「上海における杜月笙と祖廟」『文研会紀要』第27

号、2016年、3月。

⁴⁵ 高橋孝助、古厩忠夫、前掲書、上海史年表21－24頁。

⁴⁶ 同上、上海史年表24－27頁。

⁴⁷ その他先行研究として、①Brian G.Martin「青幫和国民党政権：杜月笙対上海政治的作用（1927－1937）」（『歴史研究』1992年第5期、10月）では、青幫と国民党、特に杜月笙と国民党との関係を重点的に扱っている。四・一二クーデター以前において、青幫を勢力に引き入れるため国共両党の両方が重視し、杜月笙・黄金榮・張嘯林の3人と面会をしたとある。杜月笙をはじめ青幫側が国民党側についた大きな原因の1つとして、アヘンの売買による利益がきちんと保証されるかを重要な争点としている。ただし、アヘンの売買による利益を優先したとされる根拠が乏しく、重要な要素ではあったが最も優先されたことかどうかの疑問は残る。

その他、四・一二クーデターと時期が異なるが興味深い論文としては、②邵雍「杜月笙与上海抗日救亡運動」（『抗日戦争研究』第2期、2000年6月）では第一次上海事変から終戦までの杜月笙の活動を研究している。杜月笙は抗日活動に熱心と評価し、また中国紅十字会の副会長などに杜月笙の関わった組織名やその役職、第二次上海事変の際に杜月笙が個人で1万元以上もの軍事物資を張発奎に輸送したことを記載している。③顧建娣「杜月笙的救済行為淺議（1927－1936）——以《申報》為中心」『中国社会科学院近代史所青年學術論壇2004年卷』（社科文献出版社、2005年版、6月）では、1927年から1936年にかけての杜月笙の救済活動を扱っており、1922年後半に、浙江省の水害で救済活動を始めた。この時に300元大洋を寄付したことをはじめ、具体的な寄付金額や綿の服の上下セット3000着といった支援物資、一部分ではあるが被災した人数などを記している。一方で、多額の寄付金をどこから捻出したのかといえば、賭博場の経営や娼館に対する「みかじめ料」で手に入れた、としている。

これらは遺憾ながら問題として、①杜月笙と四・一二クーデターとの関係を扱った論文では断片的であり、包括的に研究された論文は少ない。そのため、四・一二クーデター時期の杜月笙の動向について、全体像が不明である。②杜月笙は国共両党から誘いを受け、結果的に国民党側についた。この理由を明確に示した論文は少なく、その理由もやや説得力に欠けている。③杜月笙が四・一二クーデターにて、具体的にどのようにして共産党側を弾圧したのかが不明のまま残されている。

⁴⁸ 章君毅、前掲書、276－278頁。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 虞洽卿（1867－1945）は浙江省寧波生まれで（厳密には浙江省の鎮海県出身で、現在は寧波と合併して市となっている）、上海在住の中国人の中でも1、2を争う大富豪で、上海や浙江省にある財閥の総称である浙江財閥の頭目である実業家。名は和徳、字が洽卿で

あり、どちらの名前も『申報』などで見かける。ただし、どちらかといえば虞洽卿という名前の方を多く見かける。元々は銀行系の買弁として活動をしていたが、他の買弁仲間と手を組み多数の事業を起こす。四・一二クーデター後は蒋介石を経済的に大きく支援した。かつて蒋介石を部下として雇っていた関係からか、国民党に資金援助をよく行っていた。1931年には上海にやって来て50周年の祝いの準備を進めており、7月11日に開催されることとなる。彼の勢力、商売の背景には外国人と軍閥といった、大口相手の商売が基本であった。また、成金趣味が少なからずあったようで、指には大きなダイヤの指輪を嵌めている。日中戦争時期は黄金栄同様高齡のため上海へと留まり、傀儡政権側にも日本軍にも蒋介石率いる国民党にも従わず逆らわずの態度を貫いてきた。しかし、次第に汪精衛政権や日本軍の干渉に抗うことへ限界を感じ、銃弾を送られるなど国民党の脅迫行為もあり1941年頃に重慶へと移動した。なお、重慶でも「三民運輸公司」という会社を設立し、フォードの大型トラックを買い入れ、ビルマ＝雲南ルートを自由に行き来し、政府高官や大富豪のための贅沢品を買い入れ巨大な利益を上げていた晩年は重慶で生活し、1945年に亡くなる（「虞洽卿」、徐友春主編、前掲辞典、1286頁。『申報』1931年7月11日、12日）。

⁵¹ 程錫文口述、楊展成整理、前掲書、157頁。

⁵² 汪寿華（1901—1927）は浙江省出身である。上海総工会の宣伝部長や委員長などを務め、学生連合会の代表であった。1920年に社会主義青年団に加入し、翌1921年には中国共産党に加入した。五・三〇事件にて学生連合会の代表として抗議活動を行い、この時に杜月笙と友人関係となる。1927年3月、共産党による上海での3回目の武装蜂起にて中心的な役割を果たした1人であり、武装蜂起後に設立した臨時政府の委員となり、上海総工会の委員長となった。しかし、四・一二クーデターの前夜に杜月笙により暗殺される（「汪寿華」、徐友春主編、前掲辞典、419頁。「汪寿華」、陳玉堂編著、前掲辞典、401頁）。

⁵³ 李長慶「論杜月笙在“四・一二”政変前後的政治投機性」『中外企業家』22号、2011年11月。

⁵⁴ 徐鑄成、前掲書、41頁。

⁵⁵ 同上。

⁵⁶ 同上、47—48頁。

⁵⁷ 蘇智良「上海流氓勢力与“四・一二”政変」『近代史研究』1988年第2期、4月。

⁵⁸ 章君毅、前掲書、279—280頁。

⁵⁹ Brian G.Martin「青幫和国民党政権：杜月笙对上海政治的作用（1927—1937）」『歴史研究』1992年第5期、10月。

⁶⁰ 程錫文口述、楊展成整理、前掲書、157頁。

⁶¹ 章君毅、前掲書、281頁。

⁶² 蘇智良、前掲論文。

- ⁶³ 顧建娣、林齊模「杜月笙和上海工運」『安慶師範學院學報』第21卷第1期、2002年1月。
- ⁶⁴ 李長慶、前掲論文。
- ⁶⁵ 章君毅、前掲書、272頁。
- ⁶⁶ 楊威『杜月笙外伝』育幼出版、1968年、77頁。
- ⁶⁷ 榎本泰子『上海』中央公論新社、2009年、139頁。
- ⁶⁸ 郭緒印主編、前掲書、179頁。
- ⁶⁹ 顧建娣・林齊模、前掲論文。
- ⁷⁰ 郭緒印主編、前掲書、179頁。
- ⁷¹ 顧建娣・林齊模、前掲論文。
- ⁷² 中華共進会とは杜月笙らが四・一二クーデターを実行するために設立した武装組織である。上海中の青幫の構成員を集めて組織し、共産党側の武装ピケ隊と戦った。かつて孫文が設立した「中華国民共進会」という政治組織から名前を拝借している。
- ⁷³ 范紹増口述、沈酔整理「關於杜月笙」中国人民政治協商會議上海市委員会文史資料工作委員會編、上海人民出版社、1986年、213頁。
- ⁷⁴ 蘇智良、前掲論文。
- ⁷⁵ 郭緒印主編、前掲書、181頁。范紹増口述、沈酔整理、前掲書、213頁。
- ⁷⁶ 范紹増口述、沈酔整理、前掲書、213頁。
- ⁷⁷ 『申報』1927年4月13日以降より見られる。
- ⁷⁸ 榎本泰子、前掲書、248—249頁。
- ⁷⁹ 『申報』は1872年4月30日、イギリス人貿易商メージャーが上海で創刊した日刊新聞である。上海を代表する新聞で発行部数も多く、1949年5月の廃刊まで77年間発行され、中国の近現代史研究にとって貴重な史料となっている。清仏戦争などで特派員を派遣し詳細を伝えるなど、情報収集能力に長けていた。なお、満州事変後から1934年までは、比較的蔣介石に対し批判的な性格を帯びていたが、1934年に董事長であった史量才が暗殺されたのち、杜月笙が董事長に就任し蔣介石寄りの新聞となる。ただし杜月笙が香港に逃亡した際に董事長はアメリカ人のオーナーへと変わっている。一応、太平洋戦争開始後に日本軍から発行停止の命令があったものの、約1週間で組織を改編し復刊を遂げた（平和彦「申報」、平凡社編、前掲辞典、78頁。古廐忠夫「杜月笙」、山田辰雄編、前掲辞典、168—170頁）。
- ⁸⁰ 「黄金榮等通電之応声」『申報』1927年4月16日。
- ⁸¹ 「黄金榮等警告工人書」『申報』1927年4月17日。
- ⁸² 「黄金榮等真電応声之継起」『申報』1927年4月17日。
- ⁸³ 同上。
- ⁸⁴ 「黄金榮等真電之応声」『申報』1927年4月18日。

- 85 「黄金栄等真電之応声」『申報』1927年4月20日。
- 86 同上。
- 87 「久有黄金栄等通電之応声」『申報』1927年4月21日。
- 88 「黄金栄等真電応声之継起」『申報』1927年4月22日。
- 89 同上。
- 90 楊威、前掲書、140頁。
- 91 『申報』1927年4月13日など。
- 92 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』344頁。
- 93 郭緒印主編、前掲書、182頁。
- 94 「張嘯林」、徐友春主編、前掲辞典、979頁。
- 95 李長慶、前掲論文。
- 96 汪精衛（1883—1944）は広東省山水県生まれ、本名が兆銘、号が精衛である。本論文は全て汪精衛で統一してある。5歳の頃から私塾に通い読書ができていた。1903年日本に留学し、法政速成科に入学、1905年には中国同盟会に加入した。おそらく孫文の革命思想に触れたことが原因である。1910年王載澧を爆殺しようとした罪で逮捕され、終身刑を言い渡される。しかし、翌年の武昌蜂起で脱獄、楊度らと共に国事共済会を設立。その後1913年、上海にて袁世凱に対する二次革命が失敗するとフランスに出国。1915年、雲南省で起きた護国戦争で一時帰国し、袁世凱が亡くなると再びフランスに戻った。日中戦争時期は、蔣介石の独裁体制になっていることに反発し、汪精衛政権を樹立、日本軍と手を組んで蔣介石を打倒しようとするが叶わず、1944年に治療のため名古屋へ赴くも亡くなる。（「汪精衛」、徐友春主編、前掲辞典、420頁。）
- 97 小谷一郎「四・一二クーデター前後における第3期創造社同人の動向」『漢文学会会報』40号、1982年6月。
- 98 その他参考文献として、①章君毅著『杜月笙傳』（中国大百科全書出版社、2011年）では日本の『毎日新聞』でも落成式について取り上げたとする記述があり、杜月笙の落成式は海外でも報道していたことがわかる。②中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』（上海人民出版社、1986年）にも范紹増口述、沈醉整理「関于杜月笙」をはじめ、祖廟の落成式について、口述者が当時見聞きしたことが書かれている。祖廟の構造、儀仗遊行の編成、来場者が10万人にも及んだという話、落成式にかかった費用が100万銀元を超えたという話を収録している。落成式から50年以上経過しているため記憶錯誤の部分も存在すると思われるが、当時を知る人のインタビューとしては興味深い。
- 99 「杜祠落成典禮」『申報』1931年6月8日。
- 100 adminSEO「上海杜家祠堂」宗祠網、<http://www.100citang.cn/citang/672>、2020年12月21日閲覧。

- 101 任春『上海私人会館筆記』上海錦綉文章出版社、2010年、45頁。
- 102 渡辺惇「【上海地下世界図説】」『月刊しにか』1995年9月号、大修館書店、58頁。
- 103 章君毅、前掲書、573頁。
- 104 同上、574－575頁。
- 105 渡辺惇、前掲記事「【上海地下世界図説】」59頁。
- 106 章君毅、前掲書、572－573頁。
- 107 章太炎（章炳麟）（1868－1936）は浙江省杭州市の生まれ。章炳麟が本名で、太炎は号である。国学の大御所であり興中会、華興会、光復会といった清末の革命団体の大物であった。杜月笙とは1926年、章太炎の姪の1人が告訴された際杜月笙に助けを求めて以来、付き合いがある。政界を離れており実権がないため章太炎は杜月笙に頼んだ（河田悌一「章炳麟」、山田辰雄編、前掲辞典、865頁）。
- 108 君来访书画苑「杜月笙的字画,让你意想不到」、2020年10月9日更新、
<https://www.163.com/dy/article/FOGDMR6O0521BOGU.html>、
2021年5月2日閲覧。
- 109 章君毅、前掲書、2頁。
- 110 郭緒印主編、前掲書、207頁。
- 111 張学良（1901－2001）は遼寧省出身の軍人、政治家で、父親は張作霖。西安事件で失脚するまでは国民党のナンバー2であり、1931年当時も蔣介石に次ぐ勢力を持っていた（西村成雄「張学良」、山田辰雄編、前掲辞典、1149頁）。
- 112 孔祥熙（1881－1967）は、大富豪であり政治家、妻は宋靄齡であり、四大家族の一員。自称孔子の75代目の子孫であるが、単に名字が同じなだけであり、本家でも分家でもない。婚姻関係により、宋子文と蔣介石が義理の弟になっている。日中戦争時期は重慶政府にて、財務部長を務めており、私服を肥やすことに大きな比重を置いていた。1944年に不正を糾弾され財務部長を免職（石川照子「孔祥熙」、山田辰雄編、前掲辞典、375－376頁）。
- 113 パンチェンエルデニはパンチェン・ラマ10世とは別人である（そもそもパンチェン・ラマ10世は1938年生まれである）。
- 114 坂西利太郎は坂西利八郎と間違われることがあるが、坂西利八郎は主に北京方面で活躍しており、上海とは特に関わりがない上、1931年当時は日本で貴族院議員をしていたため全くの別人である。
- 115 「杜祠紀盛」『申報』1931年5月29日。
- 116 「販委會贈送杜祠扁額」『申報』1931年6月4日。
- 117 「預誌 杜祠落成典禮」『申報』1931年6月8日。
- 118 「招待之方法」『申報』同上。
- 119 「職務之分任」『申報』1931年6月8日。

- 120 「儀式之路山」『申報』同上。
- 121 「軍警之保護」『申報』同上。
- 122 王正廷（1882—1961）は浙江省出身の外交官、広東軍及び国民党の政治家。字は儒堂。幼い頃に洗礼を受け、クリスチャンとなる。1905年日本留学、中華キリスト教青年協会分会を成立させ、総幹事となる。その後同盟会に参加。1907年、アメリカのミシガン大学で法律を学ぶ。1917年、広東軍政府の非常国会副議長。1926年、北伐で蔣介石と馮玉祥の合作を促進。1928年、外交部長に就任するも、1931年に学生デモに襲われ辞任。1936年、駐米大使。中国におけるクリスチャンとして有名であり、外交面で活躍した（笠原十九司「王正廷」、山田辰雄編、前掲辞典、861頁。「王正廷」、徐友春主編、前掲辞典、43頁。「王正廷」、陳玉堂編著、前掲辞典、29頁）。
- 123 「外王之代表」『申報』1931年6月8日。
- 124 「杜祠 儀仗今晨遊行」『申報』1931年6月9日。
- 125 「儀仗行列概況」『申報』同上。
- 126 「蔣主席之祝辭」『申報』1931年6月9日。
- 127 「九日堂會劇目」『申報』同上。
- 128 梅蘭芳（1894—1961）は、北京出身の京劇俳優。女形の男優として知られる。
- 129 王曉籟（1886—1967）は浙江省出身の実業家、国民党の政治家。名は孝賚、号は曉来。1907年、光復会に参加。1910年、閩北商団を創設し、閩北商場と閩北工程局を設立。1913年以降、上海商業銀行董事、上海閩北商会会長、上海租界納稅華人会主席などに就任。1927年、上海臨時市政委員会主席委員、南京国民政府江蘇兼上海財政委員会常務委員、財政部特稅処副処長。1930年、上海市商会理事長、全国商会連合会理事長。1931年（満州事変後）、抗日会常務委員。1938年、中央振濟委員会常務、紅十字会救護隊。主に経済界で大きな成功を収め、政界においても財政にて大いに参与した（「王曉籟」、王曉籟徐友春主編、前掲辞典、103頁。「王孝賚」、陳玉堂編著、前掲辞典、36頁）。
- 130 「杜祠觀光記」『申報』1931年6月10日。
- 131 「儀仗遊行」『申報』同上。不鮮明な写真であるが黒山の人だかりができている写真が確認される。
- 132 「碼頭盛況」『申報』同上。汽車だけでなく浦東に渡るための船も休みなく動いていた。
- 133 「高橋景象」『申報』同上。
- 134 「杜祠一瞥」『申報』同上。
- 135 「奉主入祠」『申報』同上。
- 136 「紀念郵戳」『申報』同上。
- 137 「主席致賀」『申報』同上。
- 138 「各界賀電」『申報』同上。

- 139 「今日演目」『申報』同上。
- 140 「清晨之家祭」『申報』1931年6月11日。
- 141 「各界之道賀」『申報』同上。
- 142 「各方之賀電」『申報』同上。
- 143 「今日之演目」『申報』同上。10日だけ開始時刻が書かれている。
- 144 陸鏡清「杜祠送主儀仗遊行紀盛」『申報』同上。
- 145 『時報』1931年6月8日、9日、10日、11日より。
- 146 「杜祠落成禮預誌 明天先送神主及儀仗 浦東一時要鬨動」『時報』1931年6月8日。『時報』側には小見出しはない。
- 147 錢新之（1885－1958）は浙江省出身の実業家。名は永銘、字は新之。1903年、日本の神戸高等商業学校に留学。1910年、南京高等商業学校の教員となる。1912年工商総長、農工商部会計課長。1917年、上海で中華職業教育社を設立し、交通銀行上海分公副經理となる（1922年総理就任）。1920年上海銀行公会会長。1928年、国民政府建設委員会委員、中央銀行理事会理事、浙江省政府委員。1931年上海地方維持会理事、1934年副会長。1937年以降、杜月笙らと上海市各界抗敵後援会を設立。上海陥落後、杜月笙らと共に香港へ移動。商業を学んだため、主に経済界で活動した。特に銀行業において多大な業績を得た（「錢新之」、徐友春主編、前掲辞典、1532頁。「錢新之」、陳玉堂編著、前掲辞典、733頁）。
- 148 「最後一日盛況」『申報』1931年6月12日。
- 149 「各方統至賀電」『申報』同上。
- 150 「辦事処之結果」『申報』同上。今回の落成式にて杜月笙は、虞洽卿に役職の仕事を手伝ってもらっていた。より結束を深めたというのもその辺に由来するものだと考えられる。
- 151 『時報』は1931年当時、1日分が8頁の新聞であり、『申報』の半分以下の頁数である。
- 152 『時報』1931年6月12日から6月17日までの間、広告が掲載されていた。
- 153 鑄華「杜祠堂會写真」『申報』1931年6月16日。
- 154 『申報』1931年6月12日、13日、14日、15日、16日より。
- 155 顧建娣「杜月笙的救濟行為淺議（1927－1936）——以《申報》為中心」『中国社会科学院近代史所青年學術論壇2004年卷』社科文献出版社、2005年版、6月。
- 156 王一亭（1867－1938）は江蘇省出身の実業家、国民党の政治家。名は震、字は一亭。1906年、上海預備立憲公会会董、1907年日清汽船株式会社分社の買弁。その後、日商大阪郵船株式会社買弁、三井洋行上海製造絹絲社社長などとなる。1909年、滬南商務總會総理、上海商務總會議董。1910年、同盟会に参加、上海分会の機関財務科科長となり、『民立報』を創刊。その後、上海軍政府交通部部長に任ぜられる。1915年、中国商業儲蓄銀行董事、1917年董事長。1927年、国民政府中央救託準備金保管委員

会委員長、国民政府賑務委員会常務委員。日本とも関わりが深く、経済界にて大きな活躍をする。その関係で政界にも携わった（「王一亭」、徐友春主編、前掲辞典、34頁。「王震」、陳玉堂編著、前掲辞典、56頁）。

¹⁵⁷ 西爾臬著、川添恵子訳、『中国マフィア伝【上海のゴッドファーザー】と呼ばれた男』イースト・プレス、1999年、300頁。

¹⁵⁸ 渡辺惇、前掲記事「【上海地下世界図説】」58頁。

¹⁵⁹ 恒社を主題として扱った先行研究は管見の限り存在しないが、恒社の存在に多少触れている研究は存在している。既に「はじめに」で取り上げているが、ここでもう少し詳細に触れておきたい。①『旧上海的幫会』には范紹増口述、沈醉整理「関于杜月笙」を収録しており、こちらも回顧録ではあるが、恒社に関して多少触れている。当時の恒社の伝聞や恒社の人員などについて、噂の真偽を語っている。②岩間一弘「1946年の上海市参議員選挙と「漢奸」告発運動」（『千葉商大紀要』第49巻、2011年9月）では、1946年の上海市参議員選挙にて杜月笙が青幫をはじめとした影響力を行使して最多の票を集め、かつ30名余りの議員が恒社の社員であった、と記載している。また、議長の投票においても杜月笙が最多の票を手に入れたことを記している。ただし、恒社自体がどのような影響力を持っていたのかを記しておらず、具体的な行動に関しては曖昧である。

しかしこれらの先行研究には僭越ながら、①恒社を中心に扱った著述は、回顧録のみであり先行研究は存在しない。そのため、どうしても恒社の影響力が不透明に見えること。恒社にどれだけの影響力や存在意義があったのか、不明な部分が出てくること。②杜月笙個人の活動と、恒社としての活動が曖昧な部分が出てきていること。恒社自体が杜月笙のための組織であったが、恒社の動向がわからない限り、恒社という組織の意義を見出せなくなる。③恒社の成立当初から加入儀式、運営の実態は詳細に記されている。しかし、肝心の具体的な活動について、具体例が少なく、詳細が不明瞭な部分が多い。といった問題が存在する。したがって、本論文ではこれらの状況を解明することを目指す。

¹⁶⁰ 章君毅、前掲書、658—659頁。

¹⁶¹ 郭緒印主編、前掲書、226頁。

¹⁶² 郭蘭馨「杜月笙与恒社」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、305頁。

¹⁶³ 蘇智良、陳両菲、前掲書、97頁。

¹⁶⁴ 郭緒印主編、前掲書、227頁。

¹⁶⁵ 郭蘭馨、前掲書、309頁。

¹⁶⁶ なお、勘違いされがちであるが、杜月笙の邸宅として有名な「東湖賓館」は自宅ではなく、杜月笙一家は一度も居住していない。これは1934年に金廷蓀がお礼として杜月笙に贈答したものであり、杜月笙は晩年アメリカ総領事館に売却している。

¹⁶⁷ 陸京士（1907—1983）は江蘇省出身の国民党员。上海郵政局で局員を務め、1

925年に国民党へ加入、上海総工会で工作活動を行う。1934年には上海総工会の常務委員や国民党の上海市党部の常務委員となる。杜月笙の門弟であり、杜月笙の伝記である『杜月笙伝』にも挨拶の紀文を載せている（「陸京士」、徐友春主編、前掲辞典、989頁）。

¹⁶⁸ 陳群（1890—1945）は福建省出身の政治家、国民党員、軍人。日本の明治大学、東洋大学でそれぞれ法学士、文学士の単位を取得する。当初は蒋介石率いる北伐軍や国民政府に従事していた。蒋介石の指示により、杜月笙らと四・一二クーデターを起こし、杜月笙と親しくなる。その後、第26軍政治主任や、政務次長を務めている。日中戦争時期に入ると汪精衛側となり、内政部部長や軍事委員会委員となる。1943年江蘇省党部主任に就任する。その際は黄金栄も祝賀に駆けつけており、黄金栄とも関係を持っていた。1945年8月17日に自殺（「陳群」、徐友春主編、前掲辞典、1002—1003頁。）。

¹⁶⁹ 范紹増口述、沈醉整理、前掲書、221頁。

¹⁷⁰ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』346頁。

¹⁷¹ Brian G.Martin、前掲論文。

¹⁷² 郭緒印主編、前掲書、227頁。

¹⁷³ 徐鑄成、前掲書、85頁。

¹⁷⁴ 郭蘭馨、前掲書、300頁。

¹⁷⁵ 中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編、前掲書、369—382頁。

¹⁷⁶ 同上。

¹⁷⁷ 章士釗（1881—1973）は湖南省出身の小説家、政治家、学者。はじめ南京を中心に活動しており、日本やイギリスの大学に渡り勉学に励むこともあった。1916年以降は、北京にて北京大学教授、国会議員などの役職に就いていた。九・一八事変後は上海に赴き、上海法学院の院長を務める。日中戦争時期には重慶に身を置き、参政員であった（「章士釗」、徐友春主編、前掲辞典、863頁。「章士釗」、陳玉堂編著、前掲辞典、841頁）。

¹⁷⁸ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』347頁、355頁。郭蘭馨、前掲書、310—312頁。

¹⁷⁹ 郭蘭馨、前掲書、314頁。

¹⁸⁰ 徐鑄成、前掲書、131頁。

¹⁸¹ 郭緒印主編、前掲書、227頁。

¹⁸² 万墨林（1898—1979）は上海出身で杜月笙の腹心。執事の役割を果たしている。万墨林本人も高い地位を手に入れており、上海米業公会理事長、上海臨時参議会参議員などを務めている。杜月笙の弟子であり戴笠と1、2を争う腹心であった。杜月笙が上海に不在の間、留守を任されており上海にて情報提供、財産管理などを行っている。杜月笙と連絡を取って上海の情勢を伝えている。黄金栄とも交流があり、杜月笙の活動を伝えていた。1948年には国民大会の代表にも選ばれた。1949年には杜月笙と香港には同行せず、台湾へと渡っていった（「万墨林」、南京図書館編『中国近現代人物像伝』上海古籍出版社、）2

- 0 1 1 年、2 2 頁)。
- 183 郭緒印主編、前掲書、2 2 9 頁。
- 184 Brian G.Martin、前掲論文。
- 185 郭緒印主編、前掲書、2 2 7 頁。
- 186 郭蘭馨、前掲書、3 0 8 頁。
- 187 同上。
- 188 中国人民政治協商會議上海市委員会文史資料工作委員會編、前掲書、3 6 7—3 6 8 頁。
- 189 郭緒印主編、前掲書、2 2 9 頁。
- 190 范紹增口述、沈醉整理、前掲書、2 2 1 頁。
- 191 郭蘭馨、前掲書、3 1 9 頁。
- 192 日本上海史研究会編、前掲書、1 2 3 頁。
- 193 Brian G.Martin、前掲論文。
- 194 范紹增口述、沈醉整理、前掲書、2 2 1 頁。
- 195 郭蘭馨、前掲書、3 0 5 頁。
- 196 郭緒印主編、前掲書、2 2 8—2 2 9 頁。
- 197 章君毅、前掲書、6 6 0 頁。
- 198 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』3 4 6 頁。
- 199 Brian G.Martin、前掲論文。
- 200 郭緒印主編、前掲書、2 3 1 頁。
- 201 郭緒印主編、前掲書、2 2 5 頁。日本上海史研究会編、前掲書、1 2 3 頁。
- 202 章君毅、前掲書、7 7 4 頁。
- 203 徐鏄成、前掲書、1 0 0 頁。
- 204 郭蘭馨、前掲書、3 0 9 頁。
- 205 同上、3 1 1 頁。
- 206 同上、3 0 9 頁。
- 207 徐鏄成、前掲書、1 0 5 頁。
- 208 傅湘源『青幫大亨——黄金榮、杜月笙、張嘯林外伝』中国文史出版社、1 9 8 7 年、3 3 5 頁。
- 209 章君毅、前掲書、7 7 7—7 7 8 頁。
- 210 同上、7 8 0 頁。
- 211 郭蘭馨、前掲書、3 1 1 頁。
- 212 同上、3 0 9—3 1 1 頁。
- 213 同上、3 1 1 頁。
- 214 章君毅、前掲書、8 7 4 頁。
- 215 郭蘭馨、前掲書、3 1 2 頁。

- 216 同上。
- 217 同上、312－313頁。
- 218 郭蘭馨、前掲書、312頁。
- 219 章君毅、前掲書、877頁。
- 220 郭蘭馨、前掲書、312頁。
- 221 徐鑄成、前掲書、122頁。
- 222 郭蘭馨、前掲書、320頁。
- 223 水町誠司、「上海黒社会と日中戦争——杜月笙・黄金榮・張嘯林との関係を巡って——」
『文研会紀要』第29号、2018年3月。
- 224 傅湘源、前掲書、336頁。
- 225 高橋孝助、古厩忠夫、前掲書、216頁。
- 226 郭蘭馨、前掲書、317頁。
- 227 同上、315頁。
- 228 同上、317頁。
- 229 郭緒印主編、前掲書、314－315頁。
- 230 郭蘭馨、前掲書、318頁。
- 231 同上、317頁。
- 232 郭緒印主編、前掲書、321頁。
- 233 郭蘭馨、前掲書、319頁。
- 234 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』363頁。
- 235 章君毅、前掲書、660頁。
- 236 郭蘭馨、前掲書、319－320頁。
- 237 「第一回市参議員 今日投票選挙」『申報』1946年4月28日。
- 238 岩間一弘「1946年の上海市参議員選挙と「漢奸」告発運動」『千葉商大紀要』第49
卷、2011年9月。
- 239 「第一回当選 市参議員簡歴」『申報』1946年8月13日。
- 240 郭緒印主編、前掲書、319－320頁。
- 241 郭蘭馨、前掲書、319頁。
- 242 同上、318頁。
- 243 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』357頁。
- 244 黄振世口述、何国涛整理、前掲書、193頁。
- 245 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』364－365頁。
- 246 蘇智良、陳両菲、前掲書、113－114頁。
- 247 郭蘭馨、前掲書、319頁。
- 248 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』366頁。

²⁴⁹ なお、本論文では主に平時での貧困層に対する活動を慈善活動と称し、自然災害による被災者や戦災などの難民に対する、突発的な緊急時の活動を救済活動と称する。

²⁵⁰ そのほかの先行研究、記事としては①莫愁「肯花錢的杜月笙——从档案史料看杜月笙的一次“善举”」（『档案与史学』1996年第3期、6月）は、2頁ほどの記事であり、1934年末に中国の西北地域を中心に発生した大干ばつに対し、杜月笙がチャリティー公演を主催して600元太洋（銀貨）を集め、また友人知人らと寄付団体を立ち上げ200万元を集めた、としている。ただし、あくまで杜月笙がこの大干ばつの際にどう行動したのかを振り返る記事であり、その他の慈善活動に関する内容は存在しない。②顧建娣「杜月笙救済1931年江淮水災」（『档案春秋』2005年第7期、7月）は、2頁の記事である。1931年7月中旬から9月にかけての大雨により、中国各地で発生した水害に関して杜月笙が慈善活動を行ったという内容である。この水害に焦点を絞っており、時系列などを含め細かく記している。ただし当然、他の慈善活動や救済活動に関するものは存在していない。③劉椿「“一・二八”抗戰中的史量才与上海地方維持会」（『鐘山風雨』2005年第04期、8月）は、史量才の動向及び上海市民地方維持会を中心に扱った3頁の記事である。上海地方維持会の活動の範疇ではあるが、杜月笙の救済活動の動向も取り上げている。ただし、あくまで組織としての救済活動であり、杜月笙がどこまで具体的に関わったのかについては不明な点が多い。

²⁵¹ 高橋孝助、古厩忠夫、前掲書、156－161頁。

²⁵² 日本上海史研究会編、前掲書、122頁。

²⁵³ 刘雪芹「上海灘“三大亨”的慈善行為」『世紀』世紀雜誌社、2007年第3期、5月。

²⁵⁴ 同上。

²⁵⁵ 馬広志「民国“黑老大”的“慈善”」『華夏時報』中国残疾人連合会、2012年4月9日。

²⁵⁶ 刘雪芹、前掲記事。

²⁵⁷ 「杜祠付設医院及学校」『申報』1931年7月15日。

²⁵⁸ 「标题：大公职业学校校门」上海年華、<http://memory.library.sh.cn/node/31721>、2020年10月18日閲覧。

²⁵⁹ 『申報』1930年11月2日。

²⁶⁰ 『申報』1931年7月25日。

²⁶¹ 馬広志、前掲記事。

²⁶² 『申報』1931年7月12日など。

²⁶³ 「杜祠付設医院及学校」『申報』1931年7月15日。

²⁶⁴ 『申報』1931年7月25日。

²⁶⁵ 日本上海史研究会、前掲書、122頁。渡辺惇、前掲記事「上海地下世界図説」51頁など。

²⁶⁶ 刘雪芹、前掲記事。

- 267 同上。
- 268 同上。
- 269 「黄金栄君澤被獄囚」『申報』1930年12月9日。
- 270 「黄金栄又施囚衣」『申報』1930年12月17日。
- 271 傅筱庵（1872－1940）は、浙江省出身の国民党及び維新政府、汪精衛政権の政治家、実業家。1892年上海浦東英商耶松船廠に入社、夜間学校で英文を習う。1909年、招商局所属華興保險公司総経理。1911年、滬軍都督府財政部総参議、招商局と漢治萍公司及び中国通商銀行の董事となり、上海総商会議董となる。1916年、虞洽卿らと設立した祥大源五金号総総理となる。1926年、上海総商会会長。1931年、中国通商銀行総経理、英商耶松船廠董事。1939年、維新政府の下で上海特別市市長となり、1940年暗殺される。上海租界在住の中国人の中で、商業的に最も成功した人物の1人であった（「傅筱庵」、徐友春主編、前掲辞典、1162頁。「傅筱庵」、陳玉堂編著、前掲辞典、888頁。）。
- 272 「張嘯林為 寰球学生会建会所 計洋六万余元」『申報』1936年7月27日。
- 273 馬広志、前掲記事。
- 274 上海城隍廟は、老城隍廟ともいい、上海の有名な観光地である。上海で最も古い商業地区の1つであり、様々な店が並んでいる。現代においても大きな観光地であり、各店舗が商業を営んでいる。
- 275 刘雪芹、前掲記事。
- 276 同上。
- 277 朱慶瀾（1874－1941）は浙江省（出身は山東省）の軍人、奉天派の政治家、慈善家。1911年成都陸軍第三十三混成協協統となり、四川大漢四川独立軍政府副都督となった。1912年黒竜江督署参謀長、陸軍中將。1914年、陸軍上將、黒竜江將軍。1916年、広東省省長、1917年護法運動参加。上海に居を構え、1925年に政界や軍隊から下野し、慈善活動を行うようになる。1929年、国民政府賑災委員会常務委員、1930年賑務委員会常務委員、東北賑務委員会委員長。1931年、国難会議会員、国民政府黄河水利委員会委員長。1936年、賑務委員会委員長、1938年賑濟委員会常務委員。前半生は軍人として、後半生は慈善家として名を馳せ、その生涯を送った（「朱慶瀾」、徐友春主編、前掲辞典、206頁。「朱慶瀾」、陳玉堂編著、前掲辞典、152頁）。
- 278 「張嘯林杜月笙前晚 歡迎朱慶瀾」『申報』1931年3月11日。
- 279 刘雪芹、前掲記事。
- 280 『申報』1931年7月9日。
- 281 顧建娣「杜月笙救濟1931年江淮水災」『档案春秋』2005年第7期、7月。
- 282 熊希齡（1867－1937）は湖南省出身の実業家、国民党の政治家。字は秉三。1898年、北京で変法活動に参加。1900年日本留学。1906年奉天財政局と農工商局

の総弁となる。1911年、東三省総督に任ぜられるも、辛亥革命後に辞職し、その後江蘇都督府財政司司長となる。1912年、北京政府財政部総長。1913年、国務総理と財政総長を兼任。1918年、湖南義振会創設。1920年、北京に創設した香山慈幼院の院長となり、天津紅十字会名誉会董、水災籌振委員会会長。1928年、国民政府振款委員会委員、1932年、世界紅十字会中華總會会長。主に財政にて重職を担当し、後半生は慈善家として最高級の地位を得た（「熊希齡」、徐友春主編、前掲辞典、1353頁。「熊希齡」、陳玉堂編著、前掲辞典、947頁）。

²⁸³ 顧建娣、前掲記事。

²⁸⁴ 同上。

²⁸⁵ 許世英（1873－1964）は安徽省出身の国民党の政治家。号は雋人、字は静仁。1910年、アメリカに派遣され、イギリス、ドイツ、フランスなどを巡る。1911年帰国、1912年に司法総長となる。1917年中意合弁華意銀行総裁。1921年安徽省長に任ぜられるも辞任。1930年に全国災害救済委員会会長、1931年国民政府賑務委員会会長、1932年国難会議委員、1935年中央救災準備金保管委員会委員長。1936年駐日大使になるも、1937年日中戦争開始により帰国。1938年から44年の間、香港に駐在し賑務委員会を改編した全国救恤委員会を主催。政界では主に外交官として各国を巡り、慈善家としても積極的に活動していた（小林武「許世英」、山田辰雄編、前掲辞典、973頁。「許世英」、徐友春主編、前掲辞典、833頁。「許世英」、陳玉堂編著、前掲辞典、228頁）。

²⁸⁶ 顧建娣、前掲記事。

²⁸⁷ 同上。

²⁸⁸ 袁履敦（1879－1954）は浙江省出身の実業家、教育者、政治家。字は履登、中国語圏ではこちらの名前の方が有名。1905年上海聖約翰大学卒業後、寧波の斐迪中学教務長と協会牧師、益智中学と浙江第四中学の英語教員となる。辛亥革命後、寧波軍政府分府外交次長、交通次長。1917年以降、科發藥房や茂昌洋行の買弁となる。1920年、上海寧紹輪船公司総経理、上海国民銀行董事。1925年、上海各界馬路商会総連合会会長、上海公共租界華人納税会副理事長、工部局華顧問及び華董。1936年、菸葉公司華人經理。青年期は学校教育に携わり、後に上海経済界の重鎮となり活動した（「袁履登」、徐友春主編、前掲辞典、655頁。「袁履登」、陳玉堂編著、前掲辞典、710頁）。

²⁸⁹ 顧建娣、前掲記事。

²⁹⁰ 同上。

²⁹¹ 張群（1889－1990）は四川省出身の国民党の政治家、軍人。字は岳軍。1908年日本の振武学校に留学、同盟会に加入。1911年帰国し上海革命戦役に参加。1913年、日本に再び留学、日本陸軍士官学校を卒業。1919年、中国全権代表としてパリ講和会議に参加。1926年国民革命軍総司令部総参議となり、北伐に参加。1928年、上

海同済大学校長。1929年上海特別市長（1932年辞職）、1931年国民会議代表、国民党中央政治委員会委員、1933年湖北省政府主任。1935年外交部長となるも、1937年辞職。同年、軍事委員会秘書長。日本に2度留学するなど関係が深く、政界、軍界において大きな地位を占めた（井尻秀憲「張群」、山田辰雄編、前掲辞典、1136頁。「張群」、徐友春主編、前掲辞典、893頁。「張群」、陳玉堂編著、前掲辞典、476頁）。

292 顧建娣、前掲記事。

293 同上。

294 同上。

295 「杜月笙氏 熱心農振」『申報』1934年4月5日。

296 莫愁「肯花錢的杜月笙——从档案史料看杜月笙的一次“善举”」『档案与史学』1996年第3期、6月。

297 同上。

298 同上。

299 1934年孔祥熙杜月笙“籌款賑災”档案輯録。

300 刘雪芹、前掲記事。

301 同上。

302 「上海市籌募委員会収支報告票」『申報』1946年11月10日。

303 馬広志、前掲記事。

304 劉椿「“一・二八”抗戦中の史量才与上海地方維持会」『鐘山風雨』2005年第04期、8月。

305 邵雍「杜月笙与上海抗日救亡運動」『抗日戦争研究』2000年第2期、6月。

306 劉椿、前掲記事。

307 同上。

308 『申報』1932年2月19日。

309 「張嘯林夫人慰勞傷兵」『申報』1932年2月16日。

310 「地方維持会慰勞傷兵」『申報』同日。

311 「張嘯林夫人至医院慰勞」『申報』1932年2月19日。

312 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』342頁。

313 邵雍、前掲論文。

314 刘雪芹、前掲記事。

315 劉鴻生（1888—1956）は浙江省出身の実業家。1920年、蘇州で鴻生火柴有限公司を設立。朱葆三らと共同で上海水泥公司、上海章華毛麻紡績公司などの企業を設立、経営。1929年、中国国貨銀行の觀察人となり、全国火柴同業連合会を設立し主任となる。1931年、国民政府全国財政委員会委員、1932年、商局輪船公司常務董事と總經理を兼任。1933年、国民政府全国經濟委員会委員、農村復興委員会委員。經濟界で活動し、

数々の委員を担当した（「劉鴻生」、徐友春主編、前掲辞典、1457頁。「劉鴻生」、陳玉堂編著、前掲辞典、206頁）。

³¹⁶ 黄炎培（1878－1965）は江蘇省出身の教育者、政治家。号は任之、筆名は抱一。1901年、上海で中国教育会を設立。1903年、勤学所総董、江蘇学務総会評議員。1905年、同盟会に加入。1914年、江蘇省教育会副会長。1917年、中華職業教育社の臨時幹事となり、上海に職業学校を設立。1919年、月刊誌『新教育』創刊。1924年、青島大学董事、中華教育文化基金会董事会董事。1925年太平洋国民会議中国籌備会副主任、1927年上海申報館設計部部长。1932年、上海地方協会秘書長。1938年、国民参政会参政員、駐会委員。教育者として教育界に携わり、中国における教育の発展に大いに参与した（「黄炎培」、徐友春主編、前掲辞典、1114頁。「黄炎培」、陳玉堂編著、前掲辞典、805頁）。

³¹⁷ 劉椿、前掲記事。

³¹⁸ 邵雍、前掲論文。

³¹⁹ 同上。

³²⁰ 同上。

³²¹ 白華山「杜月笙与上海市地方協会」『上海師範大学学报』第32卷第2期、2003年3月。

³²² 同上。

³²³ 同上。

³²⁴ 同上。

³²⁵ 同上。

³²⁶ 同上。

³²⁷ 刘雪芹、前掲記事。

³²⁸ 邵雍、前掲論文。

³²⁹ 日本上海史研究会、前掲書、122頁。

³³⁰ 渡辺惇、前掲記事「上海地下世界図説」51頁。

³³¹ その他先行研究及び参考文献としては、①劉才賦「杜月笙調解工潮探析」（『東南文化』1993年第5期、10月）では、1927年から1937年にかけて、上海で発生したストライキなどの労働者の紛争に関して、杜月笙がどのように関わり、どのようにして解決したのかを研究している。上海は中国経済の中心であり、杜月笙や蔣介石の利益に直結するためか、杜月笙は積極的に調停に乗り出して問題を解決していた。②周良材「現代幫会与海派戯曲」（『上海芸術家』1994年第2期、4月）では、黒社会と京劇との関係性について述べている。黒社会の人物が積極的に京劇を主催し京劇の役者を呼び寄せていたこと、特に杜月笙や張嘯林は積極的に京劇やその役者に関わっていたとしており、中でも黄金榮は榮紀大舞台や大世界、黄金大戲院など数々の劇場を所有していた。③劉才賦、林雲網「杜月笙与

上海資産階級」(『南京理工大学学报(哲学社会科学版)』第9卷第1期、1996年2月)では、杜月笙が上海のブルジョワジーの中でどのような地位と勢力であったか、またどのような関わりを築いていたのかを扱っている。^④姚会元「杜月笙与江浙財団」(『民国春秋』1997年第2期、4月)では、杜月笙と浙江財閥との関係性及び、杜月笙が就任した役職について記載している。特に、杜月笙の役職に関しては詳細である。ただし、就任した年月日は不明瞭であり、おそらく1935年前後の役職であろうこと以外の時期は不明である。^⑤顧建娣、林齐模「杜月笙和上海工運」(『安慶師範大学学报(社会科学版)』第21卷第1期、2002年1月)では、杜月笙と上海の労働者との関係性について、1925年の五・三〇事件にまで遡り扱っている。四・一二クーデターで共産党員に弾圧を加えた後は、労働者に対して武力的に弾圧を行うことはなく、利用して操る方向にシフトしていったとあり、杜月笙が労働者の各階層や職業に影響力が及んだことが理解できる。^⑥路鵬程「1920—30年代的上海報人与幫会」(『國際新聞界』2015年第4期、4月)では、1920年代から1930年代にかけて、杜月笙をはじめとした青幫の構成員が徐々に報道界に侵食していく様子を記述している。杜月笙が『申報』の董事長に収まり、杜月笙や黄金榮の部下も『申報』や『新聞報』などの新聞社に籍を置いていたという。

³³² 劉才賦、林雲網「杜月笙与上海資産階級」『南京理工大学学报(哲学社会科学版)』第9卷第1期、1996年2月。

³³³ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』337—338頁。

³³⁴ 包樹芳「杜月笙与上海銀行家」『華東師範大学学报(哲学社会科学版)』2010年第3期、5月。

³³⁵ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』338頁。

³³⁶ 同上、339—340頁。

³³⁷ 同上、337頁。

³³⁸ 同上、344頁。

³³⁹ 渡辺惇、前掲記事「上海の青幫 魔都上海の演出家たち」47頁。

³⁴⁰ 邵常歳「杜月笙躋身上海工商界行徑探析(1928—1937)」『徳洲学院学报』第31卷第5期、2015年10月。

³⁴¹ 古厩忠夫、前掲記事、33頁。

³⁴² 蘇智良、姚霏「近代中国社会轉型期的販毒巨擘——旧上海三鑫公司研究」『上海師範大学学报(哲学社会科学版)』第34卷第1期、2005年1月。

³⁴³ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』325頁。

³⁴⁴ 蘇智良、姚霏、前掲論文。

³⁴⁵ 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』324頁。

³⁴⁶ 蘇智良、姚霏、前掲論文。

³⁴⁷ 同上。

- 348 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』324頁。
- 349 日本上海史研究会編、前掲書、117—118頁。
- 350 劉才賦「杜月笙調解工潮探析」『東南文化』1993年第5期、10月。
- 351 蘇智良、姚霏、前掲論文。
- 352 同上。
- 353 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』325頁。
- 354 蘇智良、姚霏、前掲論文。
- 355 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』326頁。
- 356 蘇智良、姚霏、前掲論文。
- 357 同上。
- 358 同上。
- 359 同上。
- 360 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』324頁。
- 361 蘇智良、姚霏、前掲論文。
- 362 同上。
- 363 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』326頁。
- 364 蘇智良、姚霏、前掲論文。
- 365 司馬烈人、前掲書、178頁。
- 366 同上。
- 367 蘇智良、姚霏、前掲論文。
- 368 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』326頁。
- 369 章君毅、前掲書、384—385頁。はっきりとは年月日を書いていないが、四・一二クーデターを起こした後の4月から該当する記述があるため、1927年とした。
- 370 蘇智良、陳両菲、前掲書、210—211頁。
- 371 章君毅、前掲書、384頁。
- 372 郭緒印主編、前掲書、114頁。
- 373 西爾臬著、川添恵子訳、前掲書、270—272頁。
- 374 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』320頁。
- 375 日本上海史研究会編、前掲書、117頁。
- 376 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』349—350頁。
- 377 同上、331頁。
- 378 同上、347—348頁。
- 379 劉才賦「杜月笙調解工潮探析」、前掲論文。
- 380 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』331頁。
- 381 顧建娣、林齊模、前掲論文。

- 382 劉才賦「杜月笙調解工潮探析」、前掲論文。
- 383 姚会元「杜月笙与江浙財团」『民国春秋』、1997年第2期、4月。
- 384 水町誠司「第二次上海事変における張嘯林暗殺事件——『申報』の報道からの分析——」『文研会紀要』第28号、2017年3月。
- 385 本論文では、蔣介石率いる国民党と書いた場合は蔣介石が中心となった国民党を指し、重慶国民政府と書いた場合は重慶を臨時首都とした時期の蔣介石が率いる国民党として取り扱う。
- 386 本論文では、日本軍と書いた場合は日本軍のみを指し、日本側と書いた場合は外務省などを含めた日本側の存在として取り扱う。
- 387 郭緒印主編、251—252頁。日本上海史研究会編、125頁。
- 388 その他の先行研究、参考文献に関しては、①中国人民政治協商會議上海市委員会文史資料工作委員會編『旧上海的幫会』（上海人民出版社、1986年）に収録された、郭蘭馨「杜月笙与恒社」では、杜月笙本人との関係だけでなく、杜月笙が設立した組織である恒社の社員と、国民党などとの関係を記している。あくまで恒社の社員に関するものであり、杜月笙が直接かかわった事例ではないが、間接的な関係性がうかがえる。②陳兩菲『近代上海黒社会研究』（浙江人民出版社、1991年）では、上海における黒社会について、幫会の規律やしきたり、生活面を含めた活動内容、誕生から滅亡までの歴史を記述している。日中戦争時期の扱いは少ないが、張嘯林の日本との関係を含めた利益追求活動を扱っている。また、日中戦争後の1948年における娼館の数、娼婦の人数、アヘンの消費量を記している。新会東里だけでも1948年時点で151件の娼館、587人の娼婦がいたという。同時期のアヘン吸飲者は10万人以上、天潼路157号だけでも135箱のアヘンが押収された。③白希編著『黄金榮全伝』（中国国際広播出版社、2003年）では、著者が黄金榮の生涯について執筆している。日中戦争時期の記述は黄金榮を中心に存在し、裏で日本側や国民党側に情報を提供するといった黄金榮の活動を記している。他の文献だと黄金榮は隠居して表舞台から引退した、といったことしか書かれていないため、重要な文献となる。④司馬烈人『張嘯林秘伝』（中国文史出版社、2004年）では、張嘯林の生涯に対してその是非を問うことなく細かく記している。ただし、晩年である日中戦争時期の扱いは少なく、駆け足での説明となっている。国民党側と敵対していたことや、日本側と関係が深かったという記述がある（批判的ではなく、どちらかといえば肯定的な感じを受ける）。ただし、暗殺で命を狙われている状態でも、日本軍と付き合いを重ねている描写の存在などは存在しており、この点においても重要である。⑤馮錦榮「許地山（1893—1941）與世界宗教史研究—以許氏舊藏書中有關摩尼教研究文獻為中心—」（『東アジア文化交渉研究』第3号、2010年3月）にて、中国の宗教結社の1つである紅卍字会の香港分館にて新会館落成慶典の際に、杜月笙が来賓として招かれた、という内容が存在する。他には、日中戦争以前の上海にて、蔣介石は杜月笙、黄金榮、張嘯林を中心とした青幫と手を組み反動政治を行ったと批判する内容が

見られる。日中戦争後は、上海市議会選挙にて青幫の力を借り当選したものの、蔣介石から辞退するよう圧力をかけられたため就任してすぐに辞退した、という内容が見られた。

389 李長慶、前掲論文。

390 邵雍、前掲論文。

391 Brian G.Martin、前掲論文。

392 楊度（1875－1931）は湖南省の政治家で共産黨員。

393 蘇智良、陳麗菲、前掲書、108頁。

394 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02030257700、満洲事変（支那兵ノ満鉄柳条溝爆破ニ因ル日、支軍衝突関係）／各国ノ態度／支那ノ部 第三卷、9 昭和7年3月16日から昭和7年4月4日（A-1-1-0-21_3_1_003）「第五七三号」（外務省外交史料館）。

395 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』350頁。

396 郭蘭馨、前掲書、309頁。

397 徐鏄成、前掲書、95頁。章君毅、前掲書、774頁。

398 蘇智良、陳麗菲、前掲書、109頁。

399 章君毅、前掲書、788－789頁。

400 周仏海著、蔡徳金編、村田忠禧翻訳『周仏海日記』みすず書房、1992年、138頁。

401 興亜院とは、中国の占領地の政務などを指揮するために、日本で1938年に組織された国家機関である。1942年に統合改編され大東亜省となった。

402 郭緒印、前掲書、275頁。

403 JACAR: B02031726300、支那事変ニ際シ支那新政府樹立関係一件／支那中央政權樹立問題（臨時維新政府合流問題連合委員会関係、呉佩孚運動及反共、反蔣救国民衆運動）第一卷、6 昭和13年12月10日から昭和13年12月22日（A-6-1-1-8_3_001）（外務省外交史料館）。

404 JACAR:J20011882600、「汪が蔣を巧妙に抱込めば共同で日本との和平実現か 杜月笙香港に帰り語る」1939年1月17日、日米新聞社、Hoover Institution Archives, <https://hojishinbun.hoover.org/?a=d&d=jan19390117-01.1.3&e=-----en-10--1--img----->

405 郭緒印主編、前掲書、276－277頁。

406 酒井忠夫『中国民衆と秘密結社』吉川弘文館、1992年、156頁。

407 高宗武（1905－1994）は、汪精衛側についたもののそのポストが微妙なものであったため、汪精衛側と日本との密約を暴露した人物の1人。汪精衛側についており、日本の情報を収集し、汪精衛と日本との日汪協議を成立させた。しかし1940年には汪精衛を裏切り密約を暴露、同年1月のうちにアメリカへと渡った（家近亮子「高宗武」、山田辰雄編、前掲辞典、221－222頁）。

408 陶希聖（1899－1988）は、汪精衛側についたもののそのポストが微妙なもので

あったため、汪精衛側と日本との密約を暴露した人物の1人。1939年1月から香港に滞在し、同年8月に上海に行く。密約を暴露した後、香港が日本軍によって陥落するまで、杜月笙の保護のもと生活。1942年2月重慶に入り、『中央日報』の総主筆に任じられる（嵯峨隆「陶希聖」、山田辰雄編、前掲辞典、791－792頁）。

409 徐鑄成、前掲書、109頁。

410 徐采丞（生没年不明）は、傀儡政権側の人間であり、日本軍とも重要な繋がりが存在していた。また、杜月笙や黄金栄とも繋がりが存在し、多方面に顔の訊く人物である。

411 文献によって名称が違い、単なる「密約」から「売国条約」まで多岐にわたる。

412 『香港大公報』は日刊新聞で、1902年に天津で創刊された。発行当初は改良主義の新聞であった。後に国民党政学系に属しており、天津、上海、漢口、重慶、香港、桂林、北京などで発行された。1938年から1941年までの香港版は北京版と同系列（平和彦「大公報」、平凡社編、前掲辞典、6巻、29頁）。

413 小林英夫、林道生、『日中戦争史論』御茶の水書房、2005年、144頁。

414 「汪精衛興日方、所訂協定内容」『申報』1940年1月22日。

415 『東方雑誌』は、商務印書館より1904年から発行された雑誌である。始めは月刊で、後に隔週（半月刊）で発行されており、日中戦争時期では隔週で発行されている。論説や政府発表の記事を掲載している雑誌であった。

416 「日本獨霸東亜陰謀的鐵證」『東方雑誌』総第655号、1940年2月。

417 小林英夫、林道生、前掲書、149－150頁。

418 日本帝国主義侵華档案資料選編『汪偽政権』中華書局、2004年、758頁。

419 同上、758－760頁。

420 郭緒印主編、前掲書、281－282頁。

421 傅筱庵（1872－1940）は、汪精衛政権下における上海市長であった。汪精衛政権側についており、重慶政府とは敵対している。

422 沈黙（生没年不明）は杜月笙の腹心。人名事典に彼の名前はなく、詳細は不明。ただし、張嘯林の暗殺という大役を任されたことから、暗殺が主な仕事であったと考えられる。特務機関の職員で、沈黙という名前も偽名である可能性が高い。

423 李士群（1905－1943）は、浙江省遂昌県出身の政治家、軍人。1920年代初めに上海に来る。そこで美術専科学校に通い、上海大学へと行き、ソ連へと留学している。七十六号のトップの1人である。蔣介石が北伐を開始した後、中国共産党へと加入。表で新聞記者をやりながら裏で工作活動をしており、1932年に逮捕される。日中戦争開始後は日本側や維新政府、汪精衛政権側につき、七十六号のトップとして暗殺活動などを行い江蘇省長など様々な役職に就くも、1943年日本の特高に毒殺される。享年38歳（「李士群」、徐友春主編、前掲辞典、253頁）。

424 七十六号（ジェスフィールド76号）は、維新政府が組織した暗殺部隊である。汪精衛

政権成立後に正式名称が中国国民党執行委員会特工總指揮部とされ、通称が七十六号となっている。1939年9月、日本軍のもと維新政府が特務機関として設立した。基本的には暗殺や襲撃が主な活動であり、1945年8月、日本降伏まで活動を続けていた。当初のトップは李士群であり、1940年3月汪精衛政権が成立した後は丁黙邨がトップとなっている（「特工総部」、章紹嗣主編『中国抗日戦争大辞典』武漢出版社、1995年、416頁）。

⁴²⁵ 呉世宝（生没年不明）は、七十六号に所属している人物で、上海における暗殺合戦の中心人物の1人であった。立場上は李士群の配下であり、実行役のリーダー格であった。最終的に、香港にいる杜月笙に招待され密会し、暗殺合戦の停止の実行に踏み切った。この密会自体は李士群などの上司には内密に行われている。

⁴²⁶ 郭緒印主編、前掲書、285—286頁。

⁴²⁷ 黄国棟（生没年不明）は、杜月笙の腹心の1人。万墨林同様、杜月笙が上海に不在の間留守を任されており、情報提供などを行っている。

⁴²⁸ 周仏海（1897—1948）は、汪精衛政権の腹心である。政治家としての活動は、初期の頃は中国共産党寄りであり、後に国民党の宣伝部秘書となる。その後、汪精衛派となるものの蒋介石派に寝返り、汪精衛が南京で政権を作るとを知ると汪精衛側に再び寝返る。実質的には汪精衛政権にてナンバー2の地位にいたとされる。

⁴²⁹ 周仏海著、蔡徳金編、村田忠禧翻訳前掲書、287頁。

⁴³⁰ 朱華、蘇智良「杜月笙其人」『歴史研究』1988年第2期、4月。

⁴³¹ 黄国棟口述、羅體泉整理「杜門話旧」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、260—261頁。

⁴³² 林森（1868—1943）は、改革派の政治家であり、中国同盟会からの古参の人物。日中戦争時期は汪精衛政権（南京国民政府）の主席を任命されていたが、林森自身は拒絶していた。1932年から1943年に亡くなるまで、蒋介石側の国民政府主席であった。1943年、重慶にて亡くなる（塩出浩和「林盛」、山田辰雄編、前掲辞典、478—479頁）。

⁴³³ 安井三吉「日本帝国主義とカイライ政権」、野沢豊、田中正俊編『講座中国近現代史』第6巻、東京大学出版会、1978年、170頁。

⁴³⁴ 小林英夫、林道生、前掲書、319頁。

⁴³⁵ 郭蘭馨、前掲書、309—311頁。

⁴³⁶ 古厩忠夫「杜月笙」山田辰雄編、前掲辞典、168頁。

⁴³⁷ 郭旭「杜月笙与戴笠及軍統的關係」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、331頁。

⁴³⁸ 宋子良（1899—1983）は、国民党政権で大きな権勢を誇った宋一族の1人。宋家三姉妹や宋子文の弟である。数多くの役職に就いており、上海浚保局局長、中国建設銀行公司董事兼總經理、『大晩報』『時事新報』の董事などの役職に就いていた。特に銀行系の董

事に就任しており、本業は銀行家。日中戦争時期には重慶で虞洽卿と手を組みビルマ―雲南ルートで贅沢品を仕入れて売りさばいている（「宋子良」、徐友春主編、前掲辞典、440頁）。

⁴³⁹ビルマ・ルートは、広義にはビルマ―雲南―四川を結ぶ内陸交通網であり、狭義にはビルマ―雲南を結ぶ交通ルートである。後漢にはその存在が示唆されており、元代に完成した。日中戦争時期のビルマ・ルートは、援蒋ルートとして存在しており、ラングーン―ラシオー畹町―保山の間を結んでいる（藤沢義美「ビルマ・ルート」、平凡社編、前掲辞典、8巻、54頁）。

⁴⁴⁰ 郭蘭馨、前掲書、312―313頁。

⁴⁴¹ 朱華、蘇智良、前掲論文。

⁴⁴² 谷水眞澄『重慶論』日本青年外交協会、1944年、204―205頁。

⁴⁴³ 徐鑄成、前掲書、139頁。

⁴⁴⁴ 徐鑄成、前掲書、130―131頁。

⁴⁴⁵ 邵雍、前掲論文。

⁴⁴⁶ 今井就稔「経済史の視点からみた戦時上海のグレーゾーン」堀井弘一郎、本田隆文編『戦時上海グレーゾーン』勉誠出版、2017年、90頁。

⁴⁴⁷ 郭蘭馨、前掲書、314頁。

⁴⁴⁸ 徐鑄成、前掲書、131頁。

⁴⁴⁹ 同上。

⁴⁵⁰ 郭蘭馨、前掲書、314頁。

⁴⁵¹ 徐鑄成、前掲書、139頁。

⁴⁵² 周仏海著、蔡徳金編、村田忠禧翻訳、597頁。

⁴⁵³ 徐鑄成、前掲書、139頁。

⁴⁵⁴ JARAC: C13050093800、重慶側資料第五一号 「社会」日華文資料合訂本（社会運動）昭和一七年迄、「中国紅十字会召開理監事大会」国民日報 昭和16年2月16日（防衛省防衛研究所）。

⁴⁵⁵ JARAC: C13050258000、重慶側資料第一四五号 金融（西北）昭和一八年、「杜月笙西安に到着」前線日報 昭和17年11月13日（防衛省防衛研究所）。

⁴⁵⁶ JARAC: C13050253100、重慶側資料第一四一号 「西北経済」日華文資料合訂本（一般建設、合作、其他）昭和一七年一〇月、「杜月笙西北へ」華文放送 昭和17年11月4日（防衛省防衛研究所）。

⁴⁵⁷ 殿木圭一『上海』岩波書店、1942年、143頁。

⁴⁵⁸ 郭旭、前掲書、327頁。

⁴⁵⁹ 程錫文口述、楊展成整理、前掲書、162―163頁。白希編著『黄金栄全伝』中国国際広播出版社、2003年、710―711頁。

⁴⁶⁰ 馬場毅「日本の中国侵略と秘密結社」、小林一美編『秘密社会と国家』勁草書房、199

5年、138頁。

461 同上。

462 同上。

463 程錫文口述、楊展成整理、前掲書、161頁。

464 同上、163頁。

465 馬場毅、前掲論文、138頁。

466 洪荊山「アヘンの中国流入と上海の吸飲状況」、山田豪一編著『オールド上海阿片事情』亜紀書房、1995年、101頁。

467 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』351頁。

468 「張嘯林」徐友春主編、前掲辞典、979頁。

469 土肥原賢二（1883—1948）は、日本陸軍の軍人である。陸軍大将であり、陸士16期、陸大24期。何度も中国に出張しており中国の情報に精通し、関東軍司令部の奉天特務機関長として知られている。満州国建国のため溥儀を説得するなどしているが、当然他にも中国人と関係を持ち、張嘯林もその1人であった（上田浄「土肥原賢二」、原剛、安岡昭男編『日本陸海軍事典』1997年）。

470 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』353頁。

471 蘇智良、陳両菲、前掲書、100頁。

472 馬場毅、前掲論文、139頁。

473 「張嘯林」、徐友春主編、前掲辞典、979頁。

474 同上。

475 林懷部（生没年不明）は張嘯林の護衛であり張嘯林を暗殺した実行犯。彼もまた人名事典に記載されていない。しかし、司馬烈人『張嘯林秘伝』などいくつかの伝記には簡単な説明がなされており、張嘯林の長男の乳母の息子である。張嘯林は彼の銃の腕前を気に入り護衛として雇っていたが、林懷部は張嘯林に対し、権益や権力獲得の手段に不満があり、かつ張嘯林の横暴さに嫌気がさしていた。そのことを陳黙に見抜かれ買収され、張嘯林を暗殺することになる。

476 「張嘯林」、徐友春主編、前掲辞典、979頁。

477 「張嘯林遭槍殺」『申報』1940年8月15日、水町誠司、前掲論文「第二次上海事変における張嘯林暗殺事件——『申報』の報道からの分析——」など。

478 「張嘯林昨舉殯」『申報』1940年8月17日。

479 「兇犯林懷部鞠訊記」『申報』1940年8月18日。「捕房正式起訴」『申報』1940年9月1日など。

480 沈黙（生没年不明）は杜月笙の腹心。人名事典に名前はなく、詳細は不明。ただし、張嘯林の暗殺という大役を任されたことから、暗殺が主な仕事であったと考えられる。特務機関の職員で、陳黙という名前も偽名である可能性がある。

- 481 兪葉封（生没年不明）は張嘯林の腹心。人名事典に名前はなく、詳細不明。兪葉封とも呼ばれ、アヘン取引などで活躍していた。活動内容については司馬烈人『張嘯林秘伝』などいくつかの伝記に記載があり、「新アジア平和促進会」の委員で、張嘯林の代わりに日本軍に綿花を援助する業務に就いていた。また女優である新艶秋の愛人でもあった。かつて杭州と上海の間でアヘン流通を取り仕切っていた（章君毅『杜月笙伝』、中国大百科全書出版社、2011年、117頁。洪荊山「アヘンの中国流入と上海の吸飲状況」、山田豪一編著、前掲書、101頁）。
- 482 瑩秋編著、前掲書、378頁。
- 483 司馬烈人『張嘯林秘伝』中国文史出版社、2004年、522頁。
- 484 章君毅、前掲書、834頁。
- 485 郭緒印主編、前掲書、282頁。
- 486 『申報』1940年8月14日の広告より。
- 487 『申報』1940年8月15日。
- 488 「張嘯林遭槍殺」『申報』1940年8月15日。
- 489 同上。
- 490 同上。
- 491 同上。
- 492 同上。
- 493 『申報』1940年8月15日。
- 494 「今日午後成殮」『申報』1940年8月16日。葬儀の時間や場所に関してあいまいな部分が存在するが、おそらく張嘯林の自宅を葬儀の行列が出るのが午後2時、葬儀場で葬儀を行うのが午後3時となっている。
- 495 「今日午後成殮」『申報』1940年8月16日。
- 496 「張嘯林昨舉殯」『申報』1940年8月17日。
- 497 同上。
- 498 「兇犯林懷部鞠訊記」『申報』1940年8月18日。
- 499 同上。
- 500 「今日午後成殮」『申報』1940年8月16日、「張嘯林昨舉殯」『申報』1940年8月17日。
- 501 「捕房正式起訴」『申報』1940年9月1日。
- 502 郭緒印主編、前掲書、1991年、282頁。
- 503 「遺産涉訟」『申報』1942年10月19日。
- 504 同上。
- 505 同上。
- 506 谷水眞澄、前掲書、126頁。

- 507 蘇智良、陳兩菲、前掲書、103頁。
- 508 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』363頁。
- 509 その他先行研究及び参考文献としては、①黄国棟口述、羅醴泉整理「杜門話旧」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員會『旧上海的幫会』（上海人民出版社、1986年）では、杜月笙の門弟になった黄国棟が杜月笙について語った回顧録であり、年齢的なものもあってか日中戦争後の杜月笙の動向について語っている。杜月笙は日中戦争後上海にて、女優である姚玉蘭と孟小冬と共に暮らしていたことや、杜月笙の自宅には自信を含め最低4人以上の使用人がいたことを語っている。やはり杜月笙の日中戦争後の動向や晩年においては、全体としては、論文よりも回顧録、伝記類にて多く見受けられる。
- ②陸茂清「上海三大亨的最終結局」（『文史精華』2004年第2期、2月）では、張嘯林、杜月笙、黄金栄の順番で晩年の動向を取り上げている。張嘯林は1940年に上海にて銃で暗殺され、杜月笙は1951年に香港で神経衰弱と喘息によって亡くなり、黄金栄は1953年に上海にて病気で亡くなったとしている。日中戦争時期、蔣介石は杜月笙、黄金栄、張嘯林の3人に香港に行くよう指示したが、それに従ったのは杜月笙だけであったとしており、武漢や重慶に移動するよう指示したわけではない、としていることは興味深い。
- ③趙光、胡根喜「黄金栄向顧竹軒懺悔」（『文史春秋』2004年06期、6月）では、1952年に黄金栄が江北の黒社会のドンである顧竹軒と面会したことを扱っている。この2人はかつて、顧竹軒の部下である唐嘉鵬を黄金栄が引き抜き、その後黄金栄が所有する大世界の経理に唐嘉鵬が就任するも、顧竹軒が部下に指示を出し暗殺、黄金栄は警察のコネを使い捜査してその部下を逮捕させ、顧竹軒もろとも失脚させた。ここでついに和解したという内容である。杜月笙は直接関係ないものの、黄金栄の晩年は黒社会から事実上足を洗った状態であったことが伺える。
- 510 呉正芳「在革命工作中運用幫会關係の片段資料」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員會編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年、27頁。
- 511 蘇智良、陳麗菲、前掲書、109頁。
- 512 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』356頁。
- 513 范紹増口述、沈醉整理、前掲書、221頁。
- 514 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』356頁。
- 515 范紹増口述、沈醉整理、前掲書、226—227頁。
- 516 同上、227頁。
- 517 同上、228頁。
- 518 黄国棟口述、羅醴泉整理、前掲書、264頁。
- 519 程錫文口述、楊展成整理、前掲書、165頁。
- 520 黄振世口述、何国涛整理、前掲書、192頁。
- 521 郷波、前掲書、136頁。

- 522 黃振世口述、何國濤整理、前揭書、191頁。
- 523 同上、191－192頁。
- 524 酒井忠夫、前揭書『酒井忠夫著作集四—中國幫會史の研究 青幫編』356頁。
- 525 蘇智良、陳麗菲、前揭書、110頁。
- 526 程錫文口述、楊展成整理、前揭書、164－165頁。
- 527 酒井忠夫、前揭書『酒井忠夫著作集四—中國幫會史の研究 青幫編』358頁。
- 528 程錫文口述、楊展成整理、前揭書、158－159頁。
- 529 黃振世口述、何國濤整理、前揭書、192頁。
- 530 程錫文口述、楊展成整理、前揭書、159頁。
- 531 黃振世口述、何國濤整理、前揭書、192頁。
- 532 程錫文口述、楊展成整理、前揭書、159頁。
- 533 程錫文口述、楊展成整理、前揭書、159－160頁。
- 534 郭緒印主編、前揭書、360頁。
- 535 日本上海史研究会編、前揭書、125頁。
- 536 酒井忠夫、前揭書『酒井忠夫著作集四—中國幫會史の研究 青幫編』356－357頁。
- 537 杜順安口述、王豐整理「是門生？ 是夜壺？ ——祖父杜月笙與蔣介石的恩恩怨怨」『文史博覽』2009年11期、11月。
- 538 郭緒印主編、前揭書、360頁。
- 539 范紹增口述、沈醉整理、前揭書、246頁。
- 540 徐鑄成、前揭書、170頁。
- 541 陸茂清「上海三大亨的最終結局」『文史精華』2004年第2期、2月。
- 542 酒井忠夫、前揭書『酒井忠夫著作集四—中國幫會史の研究 青幫編』365頁。
- 543 蘇智良、陳麗菲、前揭書、111頁。
- 544 安田峰俊、前揭書、56頁。
- 545 「關於我們」中華安清總會、
<http://www.chineseqingmen.org/%e9%97%9c%e6%96%bc%e6%88%91%e5%80%91/>、2021年5月2日閱覽。
- 546 邱中岳「百歲青幫「老爺子」過壽誕 前副總統連戰送上賀匾祝壽」ETtoday新聞雲、2018年5月12日更新、<https://www.ettoday.net/news/20180512/1168429.htm>、2021年5月2日閱覽。
- 547 孫曜樟「大老108歲壽宴 兩岸青幫齊祝賀」旺報-中時新聞網、2018年5月13日更新、
<https://www.chinatimes.com/newspapers/20180513000114-260309?chdtv>、2021年5月2日閱覽。
- 548 安田峰俊、前揭書、57頁。

- 549 孫曜樟、前掲記事、2021年5月2日閲覧。
- 550 郭緒印主編、前掲書、360—361頁。
- 551 陸茂清、前掲記事。
- 552 范紹增口述、沈醉整理、前掲書、246—247頁。
- 553 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』357頁。
- 554 日本上海史研究会編、前掲書、125頁。
- 555 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』361—362頁。
- 556 同上。
- 557 程錫文口述、楊展成整理、前掲書、165—166頁。
- 558 蘇智良、陳兩菲、前掲書、114頁。
- 559 酒井忠夫、前掲書『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』364頁。
- 560 趙光、胡根喜「黄金荣向顧竹軒懺悔」『文史春秋』2004年06期、2004年6月。
- 561 黄振世口述、何国涛整理、前掲書、194頁。
- 562 章君毅、前掲書、780—781頁。

史料・研究書・論文・その他参考文献

1. 史料（回顧録含む）

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02030257700、満洲事変（支那兵ノ満鉄柳条溝爆破ニ因ル日、支軍衝突関係）／各国ノ態度／支那ノ部 第三卷、9 昭和7年3月16日から昭和7年4月4日（A-1-1-0-21_3_1_003）「第五七三号」（外務省外交史料館）。

JACAR: B02031726300、支那事変ニ際シ支那新政府樹立関係一件／支那中央政權樹立問題（臨時維新政府合流問題連合委員会関係、呉佩孚運動及反共、反蔣救国民衆運動）第一卷、6 昭和13年12月10日から昭和13年12月22日（A-6-1-1-8_3_001）（外務省外交史料館）。

JACAR: J20011882600、「汪が蔣を巧妙に抱込めば共同で日本との和平実現か 杜月笙香港に帰り語る」1939年1月17日、日米新聞社、Hoover Institution Archives, <https://hojishinbun.hoover.org/?a=d&d=jan19390117-01.1.3&e=-----en-10--1--img----->

JARAC: C13050093800、重慶側資料第五一号 「社会」日華文資料合訂本（社会運動）昭和一七年迄、「中国紅十字会召開理監事大会」国民日報 昭和16年2月16日（防衛省防衛研究所）。

JARAC: C13050258000、重慶側資料第一四五号 金融（西北）昭和一八年、「杜月笙西安に到着」前線日報 昭和17年11月13日（防衛省防衛研究所）。

JARAC: C13050253100、重慶側資料第一四一号 「西北経済」日華文資料合訂本（一般建設、合作、其他）昭和一七年一〇月、「杜月笙西北へ」華文放送 昭和17年11月4日（防衛省防衛研究所）。

『申報』影印本

『時報』マイクロフィルム版

中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委員会編『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年。

周仏海著、蔡徳金編、村田忠禧翻訳『周仏海日記』みすず書房、1992年。

日本帝国主義侵華档案資料選編『汪偽政権』中華書局、2004年。

杜順安口述、王豊整理「是門生？ 是夜壺？ ——祖父杜月笙与蔣介石的恩恩怨怨」『文史博覧』2009年第11期、2009年11月。

2. 研究書（伝記類含む）

酒井忠夫『中国民衆と秘密結社』吉川弘文館、1992年。

高橋孝助、古厩忠夫『上海史 巨大都市の形成と人々の営み』東方書店、1995年。

日本上海史研究会編『上海人物誌』東方書店、1997年。

酒井忠夫『酒井忠夫著作集四—中国幫会史の研究 青幫編』国書刊行会、1997年。

小林英夫、林道生『日中戦争史論』御茶の水書房、2005年。

孫江『近代中国の革命と秘密結社—中国革命の社会史的研究（1895～1955）』汲古書院、2007年。

今井就稔「経済史の視点からみた戦時上海のグレーゾーン」堀井弘一郎、本田隆文編『戦時上海グレーゾーン』勉誠出版、2017年。

楊威『杜月笙外伝』育幼出版、1968年。

徐鏄成『杜月笙正伝』浙江人民出版社、1982年。

梅臻、韶善『海上聞人杜月笙』河南人民出版社、1987年。

傅湘源『青幫大亨——黄金荣、杜月笙、張嘯林外伝』中国文史出版社、1987年。

郭緒印主編『旧上海黒社会秘史』河南人民出版社、1991年。

蘇智良、陳両菲『近代上海黒社会研究』浙江人民出版社、1991年。

白希編著『黄金栄全伝』中国国際広播出版社、2003年。

章君毅『杜月笙傳』中国大百科全書出版社、2011年。

3. 論文

小谷一郎「四・一二クーデター前後における第3期創造社同人の動向」『漢文学会会報』40号、1982年6月。

馬場毅「日本の中国侵略と秘密結社」、小林一美編『秘密社会と国家』勁草書房、1995年。

岩間一弘「1946年の上海市参議員選挙と「漢奸」告発運動」『千葉商大紀要』第49巻、2011年9月。

蘇智良「上海流氓勢力与“四一二”政变」『近代史研究』1988年第2期、1988年4月。

朱華、蘇智良「杜月笙其人」『歴史研究』1988年第2期、1988年4月。

郭緒印「蒋介石对幫会的利用与控制」『学術月刊』1988年第12期、1988年12月。

Brian G.Martin「青幫和国民党政権：杜月笙对上海政治的作用（1927—1937）」『歴史研究』1992年第5期、1992年10月。

劉才賦「杜月笙調解工潮探析」『東南文化』1993年第5期、1993年10月。

劉才賦、林雲網「杜月笙与上海資産階級」『南京理工大学学報（哲学社会科学版）』第9卷第1期、1996年2月。

胡雪蓮「杜月笙与中国通商銀行」『中山大学研究生学刊（社会科学版）』第20卷第4期、1999年（刊行月不明）。

邵雍「杜月笙与上海抗日救亡運動」『抗日戦争研究』2000年第2期、2000年6月。

顧建娣・林齊模「杜月笙和上海工運」『安慶師範學院學報』第21卷第1期、2002年1月。

白華山「杜月笙與上海市地方協會」『上海師範大學學報』第32卷第2期、2003年3月。

顧建娣「杜月笙的救濟行為淺議（1927—1936）——以《申報》為中心」『中國社會科學院近代史所青年學術論壇2004年卷』社科文獻出版社，2005年版、2005年6月。

蘇智良、姚霏「近代中國社會轉型期的販毒巨擘——舊上海三鑫公司研究」『上海師範大學學報（哲學社會科學版）』第34卷第1期、2005年1月。

馮錦榮「許地山（1893—1941）與世界宗教史研究——以許氏舊藏書中有關摩尼教研究文獻為中心」『東アジア文化交渉研究』第3号、2010年3月。

包樹芳「杜月笙與上海銀行家」『華東師範大學學報（哲學社會科學版）』2010年第3期、2010年5月。

李長慶「論杜月笙在“四·一二”政變前後的政治投機性」『中外企業家』22号、2011年1月。

路鵬程「1920—30年代的上海報人與幫會」『國際新聞界』2015年第4期、2015年4月。

邵常歲「杜月笙躋身上海工商界行徑探析（1928—1937）」『德州學院學報』第31卷第5期、2015年10月。

4. その他参考文献（記事、概説書など）

殿木圭一『上海』岩波書店、1942年。

谷水眞澄『重慶論』日本青年外交協会、1944年。

渡辺惇「青幫運河生活者集團の大流」『歴史読本臨時創刊、昭和63年3月増刊号』1988年3月。

洪荊山「アヘンの中国流入と上海の吸飲状況」、山田豪一編著『オールド上海阿片事情』亜紀書房、1995年。

古厩忠夫「[小辞典]中華秘密結社案内」『月刊しにか』1995年9月号、大修館書店、1995年9月。

渡辺惇「上海の青幫 魔都上海の演出家たち」『月刊しにか』1995年9月号、大修館書店、1995年9月。

渡辺惇「【上海地下世界図説】」『月刊しにか』1995年9月号、大修館書店、1995年9月。

渡辺惇「フランス租界・大世界界限 暗黒街の記憶を訪ねて」『月刊しにか』2000年7月号、大修館書店、2000年7月。

榎本泰子『上海』中央公論新社、2009年。

安田峰俊『現代中国の秘密結社 マフィア、政党、カルトの興亡史』中央公論社、2021年。

周良材「現代幫会与海派戯曲」『上海芸術家』1994年第2期、1994年4月。

莫愁「肯花錢的杜月笙——从档案史料看杜月笙的一次“善举”」『档案与史学』1996年第3期、1996年6月。

姚会元「杜月笙与江浙財团」『民国春秋』1997年第2期、1997年4月。

趙光、胡根喜「黄金荣向顧竹軒懺悔」『文史春秋』2004年第6期、2004年6月。

陸茂清「上海三大亨的最終結局」『文史精華』2004年第2期、2004年2月。

顧建娣「杜月笙救濟1931年江淮水災」『档案春秋』2005年第7期、2005年7月。

劉椿「“一・二八”抗戰中的史量才与上海地方維持会」『鐘山風雨』2005年第04期、2005年8月。

刘雪芹「上海灘“三大亨”的慈善行為」『世紀』世紀雜誌社、2007年第3期、2007年5月。

任春『上海私人會館筆記』上海錦綉文章出版社、2010年。

馬広志「民国“黑老大”的“慈善”」『華夏時報』中国残疾人連合会、2012年4月9日。